EVA友の会

第壱号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

EVA友の会とは

さて。「EVA友の会」である。これは何かというと、要するに「新世紀エヴァンゲリオン」について考えたり、遊んだりしながら、いろいろと盛り上げてしまおうというシロモノなのである。

この「EVA友の会」には、スポンサーのスターチャイルド様や、ガイナックス様のチェックがあまり入らないのである。有り難いことである。いろいろとアヤシイことやイケナイことが、できそうなんである。

さしあたって、鶴巻和哉副監督に連載をお願いした。声優の方にもコメントをいただいた。それから業界の「エヴァ」に濃い方々に原稿を依頼した。珍しい資料も掲載している。

まあ、いろいろと変化をつけながらやっていきたいと思う。読者諸君の原稿も依頼したいと思う。イラストや感想もいいが、一番よいのは「論文」である。あなたの書いた「エヴァンゲリオン論」を、スターチャイルド「EVA論文係」まで送っていただきたい。ものすごく面白いものは掲載する（載った人には、何か粗品をあげるぞ）。

それでは、はじめよう。

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

解説を依頼されたのでしゃしゃり出ましたヨロシク

パッ

ごあんないミヌマンガかき

さて、この作品を買われた方、そう貴方は日本の映像文化の残された芽・アニメの新世紀創造にリアルタイムでエントリーフィーを払って参加された一人として是非大いに自慢なさってください！

貴方は価値ある物に身銭を切るセンスと気概を持った方です

よッ 粋だね 粋人だね

てやんでェ えゔぁのためなら詰め腹も斬ってやろーじゃねーかィ

日本じゃショービズみたいな形のない物に金を出す思想はまだ完全に徹底してませんもんネ

「エヴァ」の内容は一見エキセントリックですがその実はやるべき事をキチンとやっている作品です

現在のTVアニメは変化球的即興的作品いわば枝葉（良く言えば「果実」）が多くなって「幹」が無くなっちゃった状態 だからこそキチリ本物が現れた時にパッと見れ判りにくいかも知れないけど

果実は甘くておいしーが♡

私もスキよ

子供も楽しめれば大人の観賞にも耐える演出力！

何よりも息をもつかせず繰り出される魅力に満ちたハッタリ いや 言葉 謎の数々!!

「親切」ではないから中間のティーン層は面食うかも知れないけどネ

補完計画 A.T.フィールド 神経系 エヴァって何!? 使徒 ADAM 口先で説明しない「友情」 14歳

こーゆーネタはそれを吟味し制作者と対等の立場で受け返す"洒落の分かる人々"とのキャッチボールが無ければ成り立つことではありません 真に大切な作品を支える

成熟した ファン層 それが貴方です！

やったぁ

うわぁん うわーん

こーゆー事を胸はって言える作品が出てくれてホントにホントにホントに嬉しい

嬉しいんだぞ ホントに

泣いてますか世間の床オ

はい そこまで

あんたら誰？

使徒子ちゃんでーす

エヴァ子でーす

これから壱話 弐話の解説をするわねー

ムサいおマニアにほせくと画面がどんどんショボくなるから

エ…エヴァという作品の解説がこんなんでいいのかっ

おやくそく

では はい スタート

ぼくゲンドウ 48歳 息子を決戦兵器に乗せる男

キャーッ シンジ――っ エヴァに乗るのよーッ

動くわけありませんわッ たまりませんわッ

勝ったな

はっはっは

いーかげんにしてください

な…何 いまの

以上が壱話 弐話の内容でーす

25歳未満の人にはちょーっと分かりにくかったかな

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

「第壱話 使徒、襲来」の巻

●「デテールが細かく、情報量が多いが、それをいちいち説明せずに、物語を展開させていく」というスタイルは、この第壱話でも顕著。大変にスピード感のある仕上がりになっている。

●第壱話の映像で、まず、目をひくのはモニター等の処理であり、ガイナックス作品は「その手のマニア」をうならせてきたが、本作ではさらに、それが研ぎ済まされたものになっている。モニターに映しだされた地図の美しさもさることながら、主モニターの映像が、ゲンドウの眼鏡に映りこんでいるのも、なんともそそられる。

【一瞬、画面がモザイク状になる】

【綺麗な透過光の処理】

●使徒の「顔らしきもの」がふたつになった直後、使徒がテレビカメラを積んだヘリを破壊したカット（本LDではチャプター8の直前）。1コマだけ、モニターがモザイク状になる。芸が細かい。

●初登場した時のミサトは、サングラスにイヤリングをつけているが、Bパートでは、彼女はイヤリングを外して、いつものピアスにつけかえてる。ネルフ本部内に入る時に、お仕事モードの服装に変えたのだろう。その時に、シンジは胸にIDカードをつけたと思われる。

●ゲンドウが「その為のネルフです」と言うCUT、彼の背後に伊吹、青葉、日向のオペレーター3人組がちゃんと、いる。

【ゲンドウの背後にオペレーター三人組】

【90年代流行のアニメ表現】

●自動ドアが開いて、ミサトの前にリツコが現れたカット。画面に、黄色いギザギザマークが出現する。これは某美少女アニメで演出家の幾原邦彦が開発した、90年代流行のアニメ表現である。同様の表現は第伍話にも登場する。

●第壱話の最大の見所は何といっても初号機の発進シーンである。ロボットアニメ史上屈指の出来である。その中でも、発進シーンの中でも、特に注目したいのが初号機が打ち出されるCUT。1コマ、1コマの処理が実に美しい。コマ送りのしがいのあるCUTである。

【コマ送りをしたいカット】

「第弐話 見知らぬ、天井」の巻

●人物描写、構図など、相当に「濃い」仕上がりのエピソードである。トリッキーな構図も多い。

副監督日記……鶴巻和哉

『天使の価値を問うな』

子供のころ宇宙人と話すと言うのが夢の一つで、「図解UFO入門」とかいうインチキ本に載っていた、「毎晩一定の方向へ向けて懐中電灯を点滅させるファーストコンタクト法」を2日ほどやってみた。

さすがに、これはないいな。と気づいてからは「大型葉巻型円盤が羽田空港あたりに着陸して、総理大臣が出迎える生中継をテレビで見る」というう少し社会性のある空想に変わった。いきなりやって来るのは失礼だから事前に一言あるだろう、というのは今にして思えば間抜けな話だけれど宇宙人は進んだ文明をもっているんだから失礼なことはしないと子供の僕は思っていたわけだ。

その後少しひねくれてきた僕は悪意を持った宇宙人のことも考えなくてはいけなくなる。人知れずさらわれたり、ある日突然侵略されることに恐怖し、なによりも両親や友人が知らぬ間に宇宙人といれかわっているかもしれないという空想（というより妄想だな）は強烈で、僕をさらにひねくれ者にしてゆくのだった。

宇宙人が、わざわざ地球まで来るとしたらその目的は何だろう。征服？ 略奪？ それとも保護や観察だろうか。でもこれじゃあ考え方があまりにも人間的すぎる。彼らはどこかかなたの星の生態系で発生し進化してきたのだから、地球の生物と同じような考え方をするとは限らない。コミュニケーションひとつにしたって言葉を使うだけがその方法じゃない。互いに争ったり、無視したり、一方的に相手を食べてしまったり、そういうことでしかコミュニケーション出来ない宇宙人もいるかもしれない。

もともと目的なんていう考えのない生き物なのかもしれない。

相手が圧倒的に異質だという先入観から誤解することもあるだろう。逆にあまり感情移入しすぎて失敗することもあるかもしれない。

そういう意味ではコミュニケーションしようとするとき、相手が未知の生命体であろうと、あなたの隣人であろうと他者であることに変わりはないのだ。

CASTから一声

緒方恵美の巻

エヴァ …… 本当に本当にスゴイ作品だと思いいます。参加できて幸せです。

とりあえず……

逃げちゃ、ダメだ。

… GO!!

今日の珍品

「セントラルドグマの地図」

Nerv 本部
セントラルドグマ B20

本編で使われて色々な資料を紹介するのが、このコーナーの趣旨である。今回とりあげたのは、第壱話Bパートの最初で、ミサトがもっていた「セントラルドグマ」の地図。ガイナックススタッフが、コンピュータで作成したものだ。よくみると、わりと大雑把な作りである。

えゔぁ川柳

ゲンドウの 後ろで嘆く 冬月かな ■ ゲンドウの そばに冬月 そっとより ■ やせシンジ 負けるなミサト ここにあり ■ 気をつけよう 使徒襲来とミサトカレー ■ 父親に 呼ばれて来たら パイロット ■ 暴れるな コードはさほど 長くない ■ エビスさま いつのまにやら エビチュさま ■ 冷蔵庫 中身はビールと ペンギンだ ■ 逃げちゃ駄目 さあ繰り返せ 呪文のように ■ 国連軍 今日もネルフの 露払い ■ 究極の 決戦兵器は 目つきが悪い ■ 公務員 犯罪しても 公務員 ■ 科学者の 目尻の下に 泣きボクロ ■ チルドレン なぜ一人なのに チルドレン ■ 兵装ビル デカいぞ伸びるぞ 壊れるぞ

声優博士のちょっちチェック

小川びい

〈第壱話〉

●Aパート

【CUT8】アナウンス（男）「本日12時30分、東海地方を中心とした～」

冒頭からいきなり流れる、冷静なアナウンスは西村知道によるもの。『トップをねらえ！』の副長役で、ガイナックスファンにはおなじみの声優だ。CUT60に出てくる軍人A（画面一番奥で「総力戦だ」といっている人）も彼。ちなみに同カットで、手前の興奮している軍人Bを宇垣秀成が、真ん中の軍人Cを中博史がそれぞれ演じている。

【CUT16】TELの声（女）「特別非常事態宣言発令の為～」

無機質な声が楽しい。林原めぐみの演技がひかる。林原めぐみというのは……説明不要だろう（笑）。

【CUT32】女A「正体不明の移動物体は～」青葉「目標を映像で確認～」

女Aというのは、画面でははっきりと確認できないが、オペレーターらしい。平松晶子が声を担当した。こうした名もない役に「逮捕しちゃうぞ」の美幸などヒロインも多い彼女をキャスティングするところがみごと。彼女の演技に、アフレコに立ち会った「月刊少年エース」の井上伸一郎編集長が「うまいね」と思わずもらしたという。Bパート CUT169の「セントラル・ドグマの閉鎖通路は、現状を維持。B―26ブロックは、順次開放して下さい」やCUT190の「繰り返す。総員、第一種戦闘配置」というアナウンスも彼女が演じている。男の声はオペレーター3人組のうちのひとり、青葉の初登場セリフである。

【CUT33】冬月「…15年ぶりだな」碇「ああ、間違いない」

いきなりアヤシサ大爆発の2人。冬月コウゾウ役の清川元夢は、『ナディア』のガーゴイルなどを務めた、「庵野組」の役者のひとり。特撮マニアには青スジ仮面で有名だろう。碇ゲンドウ役の立木文彦は、『アイアンリーガー』のゴールドフットや、『童夢くん』の柳下記者など、ひと癖もふた癖もありそうな男くさい男を演じると天下一品の声優。この2人を揃えるキャスティングの濃さに注目したい。

【CUT39】パイロット「目標に全弾命中」

これが配役表にあるパイロットである。演じているのは長嶝高士。

【CUT83】女B「衝撃波きます」

演じているのは長沢美樹だが、オペレータ3人組のひとり伊吹とは別の女性らしい。

【CUT108】「―そうですか」

ミサトに突っ込まれて、ムッとするシンジ。息づかいの表現で、ちょっぴり怒った様を表現した緒方の演技に注目。『幽★遊★白書』蔵馬で、繊細な少年役に新しい息吹をもたらした彼女らしい、実にナチュラルな芝居だ。

【CUT133】女（録音の声）「ゲートが、閉まります。御注意下さい。発車、いたします。この列車は、C―22特別列車です。本線は、G―33番駅への直通となります。途中駅は、全て通過します。御注意下さい」

今回注目の演技はこれ。TELの声同様、林原めぐみによるもの。「G―33、番駅の」という妙な区切りとアクセントが録音であることを示している。実に秀逸な演技だ。特にスタッフから指示があったとも思えないので、彼女自身の解釈によるものではないだろうか。

●Bパート

【CUT173】所内アナウンス「技術局一課、E計画担当の～」

このデパートの呼びだしふうのアナウンスも林原めぐみによるもの。アナウンスに耳を澄ませるのもガイナ作品のひとつの楽しみ方だ。

【CUT187】ミサト「かっわいげのない所とかね」

「かっわいげのない」という独特の節回しは、いかにも『セーラームーン』や『サイバーフォーミュラ』で弾けた女の子を演じてきた三石琴乃らしい演技だ。……と思いきや、なんと、アフレコ台本にすでに「かっわいげのない～」と書いてある。なかなかあなどれない。

【CUT191】リツコ「あら失礼ね。『0』ではなくってよ」

このセリフ、山口由里子のオネエサマ声が非常に色っぽい。山口由里子はレギュラーはリツコ役が初めて。『トップ』での佐久間レイや白石文子、『ナディア』での井上喜久子に連なるオネエサマ声の系譜のひとり。オネエサマ声は庵野監督の好みなのだろう。

【CUT197】シンジ「顔…巨大ロボット」

シンジくんの声が、悶絶するほどかわいい。それまでワリと冷静な声をだしていただけに、グッとそそられる声だ（笑）。が、CUT224では一転、「無理だよそんなの…。見たことも聞いたこともないのに出来るわけないよ！」と悲痛な叫びをあげる。同一人物が出しているとは思えないほどの演技の幅で、さすが緒方恵美と感嘆！

【CUT249】レイ「はい」

1話で、林原演じるレイのセリフはこれぐらい。ほかはすべて息遣いや悲鳴である。

【CUT280】「エヴァが動いた!!」「どういうことだ!?」「右腕の拘束具を引きちぎっています」

これは作業員B、C、Dのセリフ。順番に子安武人、長嶝高士、宇垣秀成によるもの。CUT295の「冷却終了」「右腕の再固定終了」「ケイジ内、全てドッキング位置」というのはその作業員とは別の人物らしい。こちらは、キャスト表では男A、B、Cと表記されている役で、順に中博史、長嶝高士、宇垣秀成が演じている。

〈第弐話〉

●Aパート

【CUT213】アナウンス（女）「損傷0．8、1．7……」

CAST表にあるアナウンス（女）というのは、これのこと。声は宮村優子。リツコたちのセリフがかぶっており、聞きとりにくい。こうした場面外のセリフともつかない音を細かくつけているのが、『エヴァ』のひとつの特徴になっている。

【CUT12】委員A「使徒再来か」～

怪しい人物たちが集まって会議をしている場面。最初に見下ろしているカットで、緑が委員A（長嶝高士）、黄色が委員B（清川元夢）、赤が委員C（鈴木勝美）、青が委員D（子安武人）である。それぞれいい味をだしているが、特に清川元夢の怪演がグー。

【委員Dと委員B】

【委員Aと委員C】

【CUT17】ニュースアナウンス 女A（12ch）「昨日の特別非常事態宣言に関しての政府発表が今朝、第2新東京市の首相官邸にて行なわれました」男A（4ch）「今回の事件には、我々自の関与は認められていないとし、これを否定しました」女B（8ch）「在日国連軍の出撃は、法の範囲内であると主張し」男B（1&BS7ch）「異星人の襲撃ではないか？との質問に対して、『マンガではない』と一笑にふされ」

ミサトたちがTVを見ている場面に登場するアナウンサーたちである。括弧の中の数字はチャンネル。女Aを宮村優子、男Aを鈴木勝美、女Bを林原めぐみ、そして男Bを長嶝高士がそれぞれ演じている。右のセリフが用意されていたが、実際の画面では途中で切られて、聞き取れないセリフもある。

【CUT31】碇「人間には、時間がないのだ」

碇のセリフは今回ここまでしかない。あとは画面に出てきても一切無言。アヤシイ演技があまり聞けず、残念。

【CUT58・59】病院アナウンス 女A「第一内科の鵜飼先生、鵜飼先生。至急、第一外科の東先生まで御連絡下さい」女B「B事件の医療会議は予定通りに行なわれます。担当者は第2会議室へ集まって下さい」

第一脳神経外科のロビーで、シンジが待っているところへミサトがあらわれる場面に流れていたアナウンスのこと。女Aは宮村、女Bは林原のセリフ。

【CUT69B】士官「そうだ、彼の個室は～」

CAST表にある士官とはこれのこと。演じているのは長嶝高士。

【CUT73】リツコ「あたりまえじゃないの～」

シンジと同居するとミサトが言い出す場面。電話の向こうからリツコがミサトに小言をいっている。このセリフ、台本には指示がなく、アフレコ現場で即興でつくられたもの。

【国連軍人Aは、西村知道が演じた】

【CUT78・79】主婦A「やはり、引っ越されますの」主婦B「ええ、まさか本当にここが戦場になるなんて～」

主婦Aは宮村、主婦Bは林原が演じている。2人とも所帯じみた感じをだそうとしていて、非常に楽しめる。2話最大の聞き所といえよう（笑）。

●Bパート

【CUT120】シンジ「あの～あっちの冷蔵庫は？」

「あの～」というセリフは、いかにも緒方恵美らしい、自然な感じが出た演技。

【CUT123】「ぷはぁ～ッ」

台本ではこう書いてある。が、画面では、文字では表現できないセリフになっていた。いかにも三石琴乃らしい……いや、彼女しか出せない特殊な声がとても魅力的。

【CUT144】ペンペン「プルルル」

声は……ひみつ、だとか。ちなみに2話に出演している鈴木勝美は、「NINKU」でペンギン役をやっている。が、どうやら彼が演じたわけではないらしい。

【CUT244】女オペレーター「活動維持に問題発生!!」

これも、みやむー……こと、宮村優子の声。CUT258の、女オペレーター「エヴァ再起動」も彼女。今回、彼女は大活躍。みやむーファンは全て聞き取るよう努力すべし（笑）。

※文章中、敬称は略させていただいた。

ガイナさん

エヴァのひみつの巻 水玉螢之丞

コミック版の作者&キャラデザイン担当、貞本義行さん。

仕事机の上には――

ツクダホビー製のミサト&レイが。しかもコレ、貞本せんせい自らの塗装！ も頼なんかカンペキ…って あたりまえだ。

その上アニメカラーを使ってあるから、

も、ばっちり色指定どおりですわ コレが

広報担当 てんちょさん

なるほど～……でもぉ～

筆ムラがすごいからよりっては マネしちゃダメだよ、約束だッ

以上、現場から水玉がお伝えしました。

誰に言うてはりまんねな

ひそ

あ ホントだ

「エヴァ」のコミックス1巻は、初版と3刷以降で表紙&カラーページにビミョーな変更があるぞッ。

見てみれッ。

【童箱の隅――続き――】

●第弐話の話のポイントは「視線」である。この話では、基本的に人物が視線を合わせないで会話している。会議のシーンではゲンドウは顔を伏せているし、何度も会話をするミサトとリツコも、一度も視線を合わせていない。まともに視線をあわせて会話をするのは、シンジとミサトだけである。人物が視線をあわせないという描写を積み重ね、最後の最後にシンジと初号機の中身の視線があうという構成なのである。それでは、初号機の中身の視線にシンジは何をみたのか？ というのがポイント。

【トリッキーな構図のひとつ】

●冒頭の戦闘シーンで、使徒に腕をひっぱられる初号機。かなり伸縮自在な素材でできていることがわかる。

●「やっぱ、クーラーは人類の至宝。まさに科学の勝利ね」というミサトのセリフを聞いてクスリと笑った人は、立派なガイナックス作品マニア。そう、同様のセリフが「ふしぎの海のナディア」の第4話にあるのである。余程、庵野監督は冷房が好きなのだろう。

【これも実にトリッキー】

●ミサトとリツコが乗ったトレーラーには、「UN（＝The United Nations）」の印が。これは国連のものなのである。この前のシーンで彼女達が使っていたテントにも「UN」の文字が。ちなみに、このトレーラーは回収した初号機の頭を運んでいる。

●乳ユレ。それはガイナックスが発明した、アニメSFXのひとつであり、同社の伝統芸でもある。そのルーツはガイナックスのスタッフが多く参加したアマチュアフィルム「DAICON Ⅳ オープニングアニメ」までさかのぼる。この第弐話でも「だめよ、好き嫌いしちゃ！」と言うCUTで、ミサトの乳が見事に揺れている。

【揺れる乳】

●（画面上で）裸のシンジの股間を隠していたビールの缶をどけると、その向こうに、ひとまわり小さいツマヨウジ入れ（笑）があって、そのビンが彼の股間を隠す、というのは映像作品ならではの凝ったギャグ。

【ツマヨウジの瓶でも隠れる股間】

がんばれEVAくん

作／むっちりむうにい

やります

僕が乗ります！

ああッ エヴァがずっこけたぁ!!

どんくさい子ねッ

すごいわ あの子!! 完全にエヴァとシンクロしてる!!

【第壱回（きり）】

アルバム「NEON GENESIS EVANGELION」ガイド …みたいなもの

お世話になっております（唐突）。ここでちょっぴりお手元の「NEON～」について解説させて戴きます。まず目に付くのがアルバムタイトル。普通スタチャのCDは、アニメの作品名＋アルバムのシリーズ名＋数字というのがパターンですが、エヴァに限ってはそんな常識も通用しません。作品の英語タイトルがそのままアルバムタイトルというのはチーフプロデューサーのO月のアイディア。渋い。しかし店頭では探しにくいかも。ただでさえCD屋さんによって「新世紀」でサ行、「エヴァンゲリオン」でア行と、入れられる場所にバラ付きがある。今回は「ネオン～」でナ行に入れられているかもしれないし、洋楽と勘違いした店のオヤジによってNのところに入れられて、誰にも発見されずに背が色あせてしまう危険性もありますので、まだお持ちでないお友達にはすぐに教えてあげて下さい。

次に、英語タイトルのBGMが目を引きますが、この収録BGMの種類、及びそのタイトルと収録順の決定は庵野秀明監督の手によります。実はBGMというものは、作られた時点で一般のインストゥルメンタル曲のように、タイトルが付けられているということはありません。普段はオーダー表のMナンバーによって呼称されています。オーダー表とはBGMを作成する際に、監督（プロデューサーが加わる場合も）と音響監督の話し合いのうえ、曲の使用目的やイメージをまとめて表にして作曲家に依頼するためのもの。エヴァンゲリオンの第1回録音分に関していえば、ジャンル別に次のように分類されています。

A．テーマ別（レイのテーマ、使徒のテーマなど）
B．感情・心理描写（孤独、恐怖、友情など）
C．情景描写（さわやかな朝、透きとおる夜明けなど）
D．ブリッジ（場面転換などに使われる短い曲）
E．行動（作戦開始、エヴァ出撃など）
F．その他（次回予告など）

しかしCDに収録する際は、E－6などの記号だけではあまりにも味気無いし、JASRACに曲を登録する際にも混乱を招いてしまう。そこでCD用にBGMにタイトルを付けるのですが、大体はライターの方に頼むか、担当ディレクターが考えるものでして、監督の手によって名付けられるのは貴重なことです。上記のジャンル別記号と照らし合わせつつ、このアルバムをご堪能戴ければ幸いであります。

【意味のない追記】それにしてもストイックで渋いアルバムです。これが3，4年前の暴走時代のスタチャのCDでしたら、古典的ロボットまんがの"はじまりのうた"「すすめせいぎのエヴァンゲリオン」、10番まで歌ってやっと顔だけ書ける「エヴァンゲリオンえかきうた」、夏に発売するならば「エヴァンゲリ音頭」といったあたりがうっかり収録されていたことでしょう。

NEON GENESIS EVANGELION

編集後記

●第壱号から、メタメタなスケジュールである。やあ、まいった。まいった。●それにしても「エヴァ」の周辺は濃い。作品自体も濃いがスタッフも濃い。「エヴア」のファンも濃い人が多いようだ。そんな濃さに負けないようにがんばらなくては。●最近のアニメ関係のビジネスは、ものすごい。活況を呈しているといっていいだろう。だが、（特に雑誌出版の）質については、かなりお寒い状況であるともいえる。砂漠になる前に水を蒔きたい。（黒）

●本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会 第弐号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

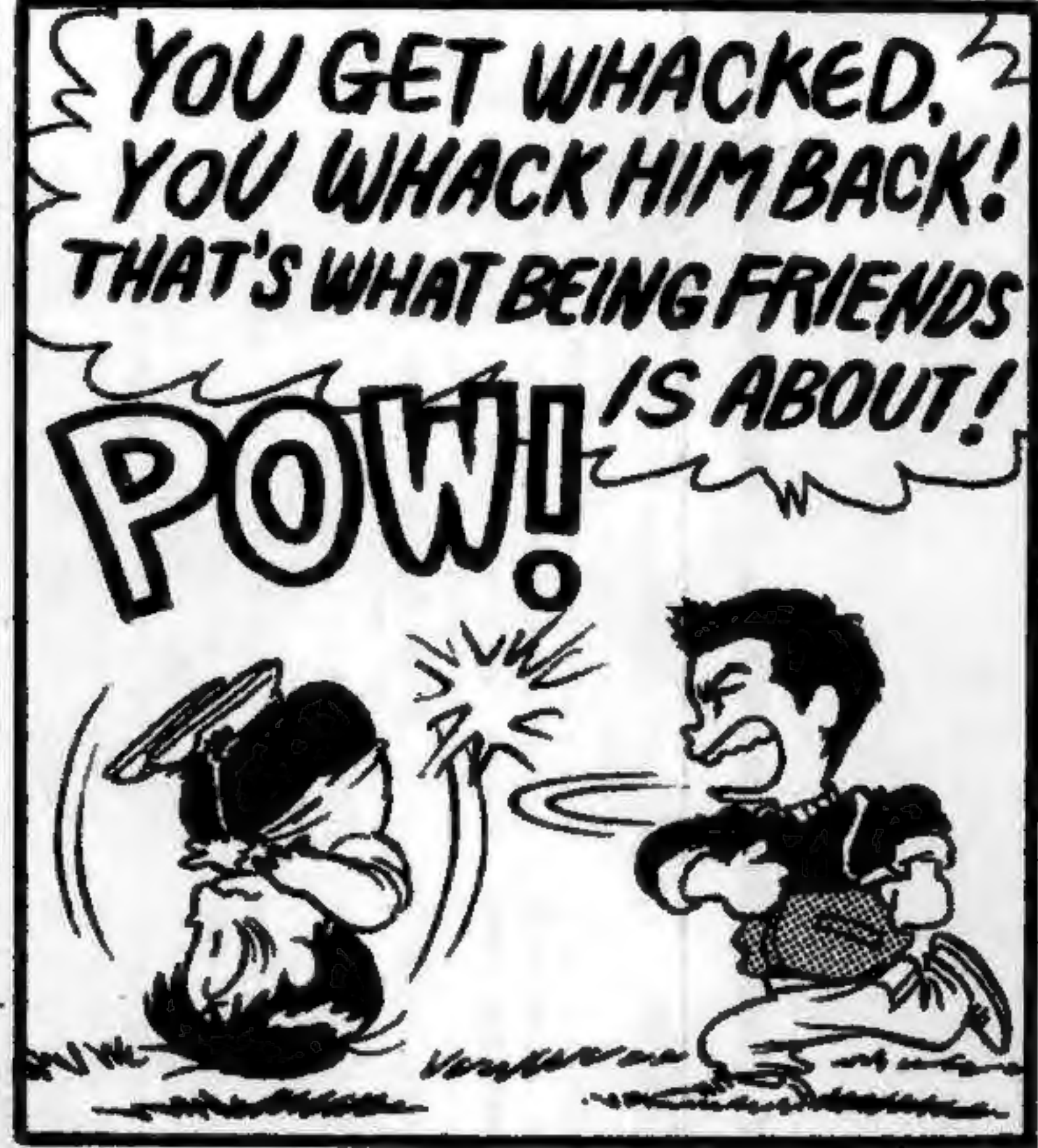
豊島ゆーさく

EVANGELION

I'M A COWARDLY WIMP.
MY FATHER TELLS ME GO HOME,
I HAVE NO FRIENDS.
WHAT IS FRIENDSHIP ABOUT ANYWAY?

IF IT WAS COMMANDER
IKARI'S ORDER,
I'LL BE YOUR FRIEND

TRANSRATED BY Don Konomitsu

★「もし、君がA.T.フィールドを解いたらボクも解くよ。それで僕達、友達だよね」

★「殴られたら殴り返せ！ それが友達だ！」

★パシーン

★「友達ってなにだろう？ ケンスケは知ってる？」

★「AR16とAM16の違いについて話すのが友達さ」

★「ボクはヒキョーで弱虫で父さんはボクに帰れって言うし、友達がいないんだ。友達って何だろう？」

★「もし、碇司令の命令だったら友達になってあげてもいいわ」

今日の珍品

◎「エヴァンゲリオン」では劇中で流れている、駅のアナウンスやＴＶ番組等の音声も、かなり作り込まれている。ここではその代表として、第参話冒頭、ミサトの部屋のシーンで流れているテレビのワイドショーの音声と、第四話でシンジが入った映画館でかかっていた映画の音声のアフレコ台本を採録する。

【第参話　テレビのワイドショー台本】

C28―37（テレビの声・左チャンネル）

朝の女性キャスター
「では、スタジオから松崎の、篠原ナツコさ～ん！」
（この台詞はC28で）
（SE・シャラララン／イージーなM、スタート）

お天気お姉さん
「はい！　おはようございます。篠原です。今朝はなんと西伊豆の松崎へ、ダイビングに来ているんですよ。」

朝の女性キャスター
「ああっ、いいなぁ～」

お天気お姉さん
「でっしょおぉ。本日の伊豆・箱根地方は快晴。予想最高気温は例年より２度高い、30度となっています。今はもう一年中、暑い日々が続きますが、昔はこの日本にも四季、春夏秋冬があったんですよね。雪なんか、ここんとこ見られないですが、この暑さのおかげでまた少し海の生物がもどってきました。こうして実際に潜ってみるとわかりますが、お魚がいっぱいいて、今夜のおかずにいいなぁ、なんて思ったりもします。ちょっと沈んだ町並みが悲しい思い出を感じさせますが、このダイビングスポット、なかなかのものですよ。」

【第四話　映画台本】
C-46～63
セカンド・インパクトをモデルとした劇中劇・パニック映画（ステレオ）

C-46はひたすら爆発音のＳＥ。
以下は大都会が台風の中、爆発炎上している状況音をOFFで。
台詞はC-47からよろしく。

女の悲鳴　「キィヤァアァアアァッ!!」（1＋00コマで）
男たちの悲鳴「ウワァアアァッ!!」（0＋18コマで）

以下は１ショットのイメージで。

男　「本当に探知できなかったんですか!?」
先生　「そうだ。直径数十ミリの物体が、光速の数十パーセントという速度で南極に激突したのだ」
助手Ａ　「我々の科学では予知も防ぐこともできなかったんだよ」
助手Ｂ　「それどころか、その正確な質量、速度も知り得ない。情けない限りだ」
女　「でも、外は地獄よ！　これじゃあ、何のための科学なの!?」

ＳＥ（ビーッとブザーの音・スピーカー）

男（スピーカー）「現在、地軸変化による大気流動は３パーセントに減少しました」
女　「じゃあ、外も少しは落ち着いたのかしら」
助手Ｃ　「だめです!!　津波が来ます！　秒速230メートルで接近中」
幕僚　「２時間後には、北半球の人口密集地を直撃か」
男　「先生！　脱出しましょう」
先生　「いや、私にはここに留まる義務がある」
男　「先生、死ぬことは簡単です。しかしあなたには、世界の地獄を見つめる義務があります」
女　「そうよ。生き延びましょう。何があっても」

CASTから一声

三石琴乃の巻

ミサトすゎんがすき♪
サービスサービス♥

もっと重箱の隅

「第参話」「第四話」の巻

執筆●小黒祐一郎

●第参話のミサトの寝室に注目。桁の上にハンドル。机の上の壁には自動車のポスターがパネルに入れられて張られている。いかにもカーマニアの部屋らしい。

●第参話は、第壱話、第弐話よりもさらに、特撮映画を思わせる趣味的な構図が多く、楽しませてくれる。灯台の向こうを第４の使徒が通過するCut、鉄塔をはさんで使徒と初号機が戦うCut等。山に初号機が落下するCutで、画面手前に自動車が止まっているあたりも泣ける。夕焼け空を背景にした、使徒と初号機のシルエットのCutもグー。

【よく見ると車のポスター】

●洞木ヒカリは鈴原トウジを「鈴原」と呼び捨てにして、相田ケンスケのことは「相田君」と呼ぶ。このあたりに微妙な女心を読みとることができる？

●第参話で切断されたアンビリカル・ケーブル（umbilical cable）とは、直訳すると「臍の緒のケーブル」。臍の緒が胎児に栄養を送るように、ＥＶＡに電気を送るというわけだ。

●第四話でシンジがオールナイトの映画館に入ったシーンに注目。虚ろだったシンジの瞳が、イチャつくアベックに反応している。他人との関係をうまく維持することができず、家を飛び出したシンジ。彼はアベックに何を見たのか……。視聴者に判断する幅を与えている描写であり、いかにも甚目喜一らしいといえよう。

●トウジが口にする「マタンキ」という言葉。実に70年代的な語彙である。『エヴァンゲリオン』に限らずＧＡＩＮＡＸ作品には懐かしい言葉使いが多い。

●第四話のシンジが家出した後のミサトの寝室では、布団の回りに、自動車雑誌、ＭＯＮＯ雑誌、女性誌等が散乱。雑誌が多いのは、シンジがいない寂しさをまぎらわせるためか。

●新箱根湯本駅のシーンで登場する、ネルフ保安諜報部の自動車は、屋根のＮＥＲＶの文字が印象的。ロングの方のCutをよく見るとボンネットの部分にＵＮの文字が。側面部にもＮＥＲＶとＵＮと書かれている。車種はキャデラックのようだ。

【批評しやすいアングル】

ゲリオンな人達

甚目喜一の巻

――絵コンテで参加して、「エヴァンゲリオン」はどうですか？

甚目　まず、話の中身がどうこうよりも、謎また謎。次々に謎を提出していくような、作品のスタイル自体に驚きました。実際には、すべて狙って謎を謎として意図的に作りこもうということではないのかもしれません。つまり、膨大で緻密な設定をドラマの中で全部説明する事は出来ないので、裏設定扱いにしておくと、それが見る方にとっては「謎」にみえるっていう事なのかもしれませんが。こういう作り方もあるんだなって。

内容に関しては、庵野監督の中にある、情念というか、怨念と言ってもいいものが全部出ている気がしますね。貞本（義行）さんのコミックの方は表現がどこかライトな感じがしますけど、ＴＶの方はコテコテ。ヤシの実ミルクというか、飲み込めないジュースみたいな。そういう部分も含めて、いろいろ勉強になります。勉強という言い方をすると、また庵野さんに「イヤなヤツ」と言われるかもしれないけど（笑）。意地悪く言うと、5年に一度だから、できるのかなあとも思いますよ（注1）。一球入魂とか、アクセル全開、あと死なばもろともかな。そういう言葉が似合う作り方ですからね。年がわりメニューで出せる料理じゃない。尤も、だからこそ作る意味があるんでしょうけど。

――たしかに、「エヴァンゲリオン」の放映直後に、新番組は作れないでしょうね。

甚目　庵野さんは、すべて出しきっちゃうんでしょうね。出しきっちゃうって言うと、語弊があるかな…でも、少なくとも出し惜しみして次のために取っておく、みたいな事はするつもりが無いと思います。だから休息が必要になる。多分、富野由悠季さんなんかは全部出しきってないんですよ。ここまでは自分でやって、後は人にやらせるというスタンスでいる。だから、「ガンダム」を作った後に、すぐ「イデオン」を作ったりできるんでしょうね。オトナですね。

――ガイナックスの方々と最初に打ち合わせをしたときの印象は？

甚目　お仕事でアニメを作っているという感じではありませんね（笑）。同人フィルムを作ってるとまでは言いませんが。あと、ガイナックスで打ち合わせをしてると、洗脳されているような気がするんです。「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ」ってセリフがありましたけど、ああいう気分なんです。

――逃げたいんですか（笑）？

甚目　逃げたくないと思う前に、「逃げちゃダメだ」という気分が湧いてくるんです。庵野さんから「コンテお願いします」と言われると、なんかやらなくちゃいけないような気がする。無茶なスケジュールなので断ろうかと思っていても、庵野さんに頼まれると、いつのまにか引き受けることになってるんですよ。我に返ったときは、すでにＧＡＩＮＡＸと書かれたコンテ用紙に向かっているんです。

――（笑）。ええっと、今回登場のケンスケとトウジのコンビですが、どのように説明されていますか？

甚目　特に説明はしてもらってないですね。「クラスメートです」くらい。トウジに関しては、後の展開は読めなかったな。ケンスケは、行動原理が一番つかみにくかったキャラクターです。ミリタリーオタクっぽいところとか、そもそも自分で持っていない部分でしたから。

――シンジと比べると精神的に安定した男の子という感じですね。

甚目　そうですね。みんな色々な境遇の中で暮らしていますけど、適応してますよね。シンジだけが適応しきれていない。

――女性陣もしきれてないですよね。

甚目　一応は適応してるんだけど、シコリを残している感じがありますね。主要キャラクターがみな子供の頃にトラウマがあるのは面白いですよね。だから、人を好いたり憎んだりという原点が全て子供のころにある。それって、やっていて感情移入というか、気持ちを共有する妨げになっているような気もしますね。

――見てる人にとって？

甚目　いや、作る側にとってです。過去にシバリがあると、キャラが自分で動きだしたり暴走したりということはなくて、落ち着くべきところに落ち着いてしまう。どんな作品でも、絵コンテを切っていて表情に悩むときって結構あるんですよね。ふつうそういうとき、一般的な人の場合だったらどうかということをヒントに考えるんですが、「エヴァンゲリオン」の場合、それぞれのキャラクターの子供時代に立ち返って考えないといけないんです。だから、暴走できない。ま、暴走すると困るから縛ってあるのかもしれませんが。

――「エヴァンゲリオン」のピリピリした人間関係ってどうですか？　あの中で仲がいいのはケンスケとトウジくらいですよね。

甚目　あの二人も本当に仲がいいんじゃなくて、お互いに距離をたもって上手くつきあっている気がします。ケンスケの方の性格のためだと思いますが、あまりグイグイいく関係じゃないですね。

――グイグイいくのは、冬月とゲンドウ。

甚目　もう、冬月とゲンドウは「オラオラ」でいってますけどね。オラオラ（笑）。でも、あれは庵野さんの理想の相棒なんでしょうね。庵野さんが仕事してると脇に立ってて「それでいいか」と心配してくれたり、「まったく困った奴だ」とか言ってくれる。

甚目　ゲンドウと冬月の関係は、後で少し出てきますよ。冬月は最初は、ゲンドウのことをイヤなヤツだと思ってたんです。大事ですよね、最初イヤなヤツだと思うのは。

――一回はケンカしないと。

甚目　そうですね。

――アスカはどうですか？

甚目　アスカは一番ほっとしますね。分かりやすいですよ。あと、ヒカリもアスカに通じるものがあって、ほっとしますね。他人と距離をとるのが気持ち悪いので、それを縮めようとする精神が働いている。そんな感じがします。アスカにも本当は、何か過去があるのかもしれませんが、今の所あかされていないのでキャラクター的には、多少暴走しているのかもしれませんね。いずれ過去が明らかになるんでしょうけど、その前に思う存分暴走しておいて欲しいですね。

――ミサトは距離を縮めようとする人に見えて、そうじゃないですね。

甚目　現状維持を保つ方に意識がいっているみたいですね。加持（第八話で登場）との関係も、近づきすぎると怖くなって離れて、離れてみるとまた心細くなって近づく。そんなことをずっと繰り返してる。

――リツコはどうでしょうか？

甚目　そうですね。ミサトは確かによくできたキャラクターだけど、よく練られたキャラクターという感じがする。リツコはちょっと違っている。冷静なようだけど、感情的に爆発させるところを持ってる。うまく言えないけど、「エヴァンゲリオン」に登場する殆どのキャラクターには、それぞれにドラマ上の役割があって、それにふさわしい設計図があって、設計図にしたがってうまく作られているっていう感じがするんです。勿論、リツコもドラマ上の役割は確かにあって設計図もあるんでしょうが、ときどき設計図からはずれている様な気がするときがあるんですよね。そう言うとき、何かホントの人間臭いものを感じるんです。つかみどころの難しいキャラですね。リツコにはけっこう難しいセリフがいっぱいあるんで、役者さんには気の毒ですけど。スタッフが「エヴァンゲリオン」のキャラクターをつかむ作業って、庵野さんの思い出を探ることと同義な気もするんです。「ゲンドウは今のワシっす」「シンジはかつてのワシっす」と庵野さんは言うし。

――気持ちの上では、ネルフはガイナックスを重ねて描いているんでしょうね。

甚目　人類補完計画を進めることは、「エヴァンゲリオン」を制作することなんでしょうね。

――なるほど。主人公についてはどうですか。

甚目　第四話のシンジって、頭の中に自分の境遇しかないという感じですね。「ボクはこんなに気の毒なんだ」というのがずーっとあって、他の人にもそういうケースはあるということに思い当たっていない。だから、ケンスケに母親がいないと聞いて驚くんですよ。でも、他の気の毒な人を、どんどん目にしているのがいいですね。ロボットに乗れと言われて、何でボクがと思っているとレイが乗るし。

――包帯巻いてる女の子が。

甚目　そうそう。自分より気の毒そうな女の子が。あとで自分の戦いでケガして入院した人がいると分かったり。

――で、自分の中で処理しきれなくなって家出しちゃう。

甚目　家出については、庵野さんに、そうとうこだわりがあったようですね。家出するんだけど、結局そんな遠くへは行けなくて、ぐるぐる回ってまた帰ってきちゃう。

――あれはどれくらい遠くへ行ってるんですか？

甚目　箱根近辺しか行ってないですね。

――東京で言うと、普段東京のどまん中に住んでる人が、山の手線の中でぐるぐるという感じですか？

甚目　ま、せいぜい中央線で吉祥寺まで行って映画見てるくらい。家を出て特にどうしようというのはないし、いずれ帰るしかないと分かってもいる。そういう覚悟のない家出の感じを出してほしいということでしたね。

――第四話で自信のあるシーンは？

甚目　冒頭のミサトの寝起きですね。寝起きで、ミサトが歯を磨いて、シンジの部屋へ行くあたりがいいかな。

――甚目さんの回は、そういう日常の風景というか、人間ドラマをメインに描いた回が多いですよね。あまりロボットが出てこなくて。

甚目　ええ。出ませんね。怪しいほど出ませんね。私は、ロボットもの専用の人のはずなのに（注2）、ロボットが出てこないところばかりやって（笑）。「Zガンダム」でも「ポケットの中の戦争」でもそうですけど、自分でやったメカのシーンの演出は、まったく自信ないんです。「エヴァンゲリオン」の第拾伍話なんかだと、自分がやったところは、庵野さんが絵コンテをきるのとはまた違う良さが出ただろうという自負はあります。だけど、ロボットのところをまかされてたとしても、やってもダメだろうって気がします。

――テクニカル的にはどうですか？　カット割りとか個々の構図とか？

甚目　あわせてますよ。構図とかはとりわけ。

――ガイナックスな雰囲気に……

甚目　そういう感じがするように。手前に妙なものを置いてナメたりとかしてます。

――普段から、わりとカメラ位置とか気にする方ですよね。

甚目　そうですねえ。でも、庵野さんとか摩砂雪さんのを見てると、自分のはそうでもないなと思いますね。なんか画面が平たい

副監督日記……鶴巻和哉

『オームの森』

「これが今回のお題。」

「なんだい、そう云うと毎回お題があるみたいだね。第1回はタイトルと内容に何の関係なかったじゃないか。自分の子供の頃の話なんかしちゃって、作家様にでもなったつもりかい？」

「いやいや、そんなことはない。あれはあのタイトルがあったからああいう話になってる。もちろん直接ネタばれするようには書いてないし、タイトルも『エヴァ』に合わせてもじってあるから。」

「本編同様深読みしろってこと?。それにしちゃあ、いやがおうにもオウムを彷彿とさせるな。もちろんエバゲを語るうえでオウムとのシンクロは見逃せないだろうけど。」

「オウムじゃなくてオームだよ。まあ、元はいっしょなんだけど。森が助けを求めてるってやつ。」

「環境問題だね。今では、エコロジーと云ったら錦の御旗みたいになってる。主流になってきたのは80年代前半くらいからかな。」

「東京なんかに住んでる人は清流とか森林に憧れがあるのかもしれないけど、田舎育ちの僕にはうんざりするものでしかない。」

「先日帰ったときには実家の前の道も舗装されてたじゃないか。」

「便利になってよかったじゃない。」

「でも、あの辺一体が宅地になって、まあそんなことないだろうが、様子がすっかり変わったらやっぱりさみしいと思うよ。」

「ほら、所詮そんなところなんだ。自然保護は物好きな快楽のためにやります、気持ちいいからやってます、程度なら許せるんだけど。すぐに田園で暮らす方が真っ当だ。とか、人は異常な生物で地球をめちゃくちゃにしてしまうって話になる。」

「エコロジーブーム以降では自明のことなんじゃないの。森を守れとか海を汚すなって事は、人もほかの動物たちと同じように生きるべきだって事でしょ。」

「そうさ、生物っていうのは恒常性を高めたいというシステムだ。外界に影響されにくい自分を作りたい。自然から環境のコントロール能力を奪いたい。田園に帰れ！なんて云うのはとても獣的じゃないね。本来、生き物はみんな大都会に住みたがっているはずだよ。」

「そんな。環境破壊で困るのは結局僕らでしょ。現に森林伐採や海洋汚染で生態系に影響が出てる。絶滅種もふえてるし。」

「でもね、酸素の発生や氷河期みたいに地球の環境はずっと一定だった訳じゃないし、少なくともこの自然はそういう選別を何十億年も続けてきた。自然のままに生きるのならバクテリアで十分のはずだろう。人も自然の中で生きるべきだっていう時、彼らは見落としているんだ。人だって自然のなかで生まれたってことを。」

甚目 この作品はなにを言わんとしているのか、この回はなにを見せたいのか、この人物はドラマの中でどういう役割なのか。そういう「狙い」を読み込むことですね。結構、読みが浅かったり、間違ったりするんですよ。他の作品で勘違いをしても、そんなに悔いにならない、「そういう解釈なのか」で済むんです。でも、「エヴァンゲリオン」は違うんですよね。読みきれなかったという悔しさが微妙に残る。読んだつもりだったのに、と。

なって、特別なことがないと、変わったアングルは使いませんから。

――「エヴァンゲリオン」は、他のガイナックス作品と比べても変わったアングルが多いですよね。

甚目 そうですね。そうされると「演出してある」というのがよく分かるから、見てる人には親切かもしれませんね。批評するのが苦手な人でも、ちゃんと批評できるように作ってある。「あのアングルが効果的である」とか言うと、ちゃんと批評らしくなっている。人に優しい作りですね(笑)。

――意地悪だなあ(笑)。

甚目 評価する人はここを評価するといいよ、批判する人はここを批判するといいよというところまでちゃんと用意してあって。総批評家といわれる時代にあわせた演出ですよね。最初にコンテを見たときに、ボクもそうしなくちゃなって(笑)。一億設定とか全然分からなくても批評できるようになっている。

――そういうことなんですか。合わせるって(笑)。

甚目 いろいろアドバイスしてもらいながらやってる感じですね。勉強になりました。いや、嫌味でなく、本当に。

――他に「エヴァンゲリオン」で気をつけていることは。

――庵野さんの頭の中を読むということですか?

甚目 そう言ってもいいかもしれません。結局、ヒントは庵野さんの中にしかないんです。その作品の世界がどうとかじゃなくて、庵野さんがミサトを好きなのか嫌いなのかを聞かないとコンテに入れない。そういう感じがします。一番最初に、庵野さんはレイに感情移入してると思ったんです。レイの設定をざっと読むと燃えるじゃないですか。健気で、かわいいし、がんばるし。この娘に想い入れすると最後は辛そうだなあ。おそらく、そういうのを狙っているのだろうと思った。でも、最初にシナリオもらったときに話したら、レイじゃなくてミサトだと言われたんです。

――ミサトなんですか。庵野さんが想い入れてるのは。

甚目 そうみたいですね。ま、シンジじゃないなというのは、最初から分かりましたけど(笑)。では、ミサトはどういう人なのかと聞くと、月野うさぎ(注3)みたいな人って言うんですよ。だから、第伍話のカレーを食べるシーンで、ミサトだけカップメンにカレーをどどどって入れるんです。あのアレンジは月野うさぎを思い描きながらやったから、できたようなもので、そうでなかったら、あんなコワイことはやらないですね。ミサトがメチャメチャになってしまう(笑)。

――でも、あれで随分キャラクターがハッキリしましたよね。

甚目 ええ。あれはあれで「よかった」ということみたいですから。でも、ミサトに関しては第四話で、はじめに大きな勘違いをしてるんです。最後にミサトがシンジを迎えにいくシーンがありますよね。そのシーンで、ボクは最初に描いた絵コンテでは、ミサトに軍人のカラーを出して描写していたんです。なぜかと言うと、ボクは軍人としてのミサトが素に近いミサトだと思っていたから。だから、カレーではそういうアホな面を見せながらも、軍人としてのしっかりした面がミサトの中にあると思っていた。そういう部分が、だんだんシンジに見えていくのだろうと思ってやったんですけど、違っていた。

――つまり、マンションにいる時のミサトの方が……

甚目 そう。軍人のミサトというのは本来の姿ではなくて、本当は弱っちい子供大人な女だったんです。そう言われてはいたんですが、どうしても頭のスミに軍人のミサトの顔が残っていて。だから、最初に描いたコンテでは、駅のホームに静かに現れたミサトは黙って立っていて、シンジがボロボロ泣いてから「よく帰ってきたね」という目をする。そういう毅然としたミサトだったんです。でも、実際にはミサトの方が慌てて来て、二人とも同じように言葉をなくして、60秒の間があって「ただいま」「おかえり」と言う。こっちがミサトだったんです。その前のミサトがシンジにエヴァに乗るのか乗らないのかと問い質すシーンも、ミサトは冷静に「ここから出て行きなさい」という感じでコンテを描いていたんです。ですが、その話をしているうちに、「ここは違うな」と思い直して。庵野さんに「感情的になってバーンと出て行く方がミサトですかねえ」って聞いたら「そうそう」と答が返ってきた。そこでミサトの姿が、ようやくつかめたんです。そうか、そっちがミサトかって。

――なるほど。

甚目 ボクがやる回って、なんかミサトの素のところばっかりなんですよね。

――後の話でも聞きたいことは沢山ありますが。

甚目 まあ、今回はこんなところで。

【注1】庵野監督は「エヴァンゲリオン」が、5年ぶりの新作。
【注2】甚目喜一が今まで手がけた仕事は「機動戦士Zガンダム」と「ポケットの中の戦争」、そして「エヴァンゲリオン」のみ。確かに、ロボットアニメの専門家と言っても嘘ではないだろう。
【注3】「美少女戦士セーラームーン」の主人公。声は三石琴乃。

ケンスケという少年

小黒祐一郎

人間関係に不自由な人間が多く登場する『エヴァンゲリオン』において、「お前には転校生の戦いを見守る義務がある」と詭弁を弄し、トウジを戦闘見物の仲間に引き込むことができるケンスケは、大変にコミュニケーションに長けた人物である。

その一方で、主人公のシンジは大変にコミュニケーションに不自由な少年である。

第四話の焚き火のシーンは、人間関係に長けたケンスケが、人間関係に不自由な上にイジケてしまったシンジと、苦労してコミュニケーションをとろうとするシーンと考えることができる。

ケンスケは、まず、共通の友人の情けない話をする。コミュニケーションとしては有効な手段であるが、シンジは乗ってこない。「蝉が……」等と、共通の話題を探しながら適当な話をしていると「生態系が戻ってるって、ミサトさんが言っていた」とシンジは言い出す。これは子供が「……ってお母さんが言ってたもん」と言うのと同じである。この台詞からシンジがミサトに依存しているニュアンスを感じとることができる。

恐らくは、それを鋭く感じとったのだろう。ケンスケは「ふうん……ミサトさんね」と返す。この「ふうん」からも、様々なニュアンスを感じとることができる。シンジとうまく会話する糸口を見つけてホッとしたという感情もあるし、依存する相手のいるシンジが羨ましいという気持ちも入っている。シンジを子供っぽい奴と思ったのかもしれない。勿論、ミサトというのがシンジのマンションにいた女性のことなのだろうという判断も、この時にしているはずだ。頭の回転はかなりいい。

何はともあれ、会話の糸口をみつけたケンスケはミサトの話から、エヴァンゲリオンの話へと持っていく。それでもシンジが「僕は世界で一番不幸さ」みたいな顔をしていると、自分にも母親はいないと言い出す。シンジの言葉の端から、母親がいないと瞬時に見抜いたのも見事である。さらに「自分は、君と同じ孤独な奴なんだ」という意味のことまで言う。ここまでやればいくらひねくた者のハートでも、つかむことができる。

斯くしてケンスケはシンジと、近しい人間関係を結ぶことができた。半分は幸運のおかげではあるが。使った手法は、トウジと付き合う時とは明らかに違うパターンである。

ケンスケは、確かにコミュニケーションに長けた人物である。第参話、第四話にはそれを感じさせる描写がいくつかある。いや、むしろ人間関係において防衛過剰な人間、つまり巧みにコミュニケーションをやり過ぎてしまう少年と考える方が正しいのかもしれない。

過剰な防衛が守るのは、やはり「孤独で、弱い自分」なのだろうか。

声優博士のちょっちチェック

小川びい

《第参話》

●Aパート

▼CUT25 シンジ「目標をセンターに入れて…スイッチ」
第参話で繰り返される印象的なセリフ。ほとんど聞き取れないほどの音量で、ボソボソとしゃべる、緒方恵美いうところの、舞台ではなくTVだからこそできる演技がひかる。

▼CUT28~37 朝の天気予報
朝寝坊のミサトのバックに流れているTV音声。朝の女性キャスターは岩男潤子、お天気お姉さんの篠原ナツコさんは宮村優子が演じている。

▼CUT41 リツコ「どお、彼氏とはうまくいってる」
普段は抑えた感じの印象の声が強いリツコの演技だが、このセリフはちょっとからかうようなニュアンスがあり、かわいい。

▼CUT59 ケンスケ「ギュオオオ~~ン ダ・ダ・ダ」
記念すべきケンスケの初登場のセリフ。演じる岩永哲哉はアーツビジョンの若手声優。最近では「エルハザード」の水原誠役が印象深い。一部のファンには「ゲンジ通信あげだま」の"ハイソックスくるるん"のエピソードで知られる鈴木役でも有名だ。

▼CUT61 ヒカリ「…昨日のプリント届けてくれた?」
こちらはヒカリの初登場セリフ。ヒカリ役の岩男潤子は、いまや若手人気女性声優の一翼を担う存在になった。「ジーンダイバー」のティル役、「KEY」のキィ役などが代表作。かつて、アイドルグループのセイントフォーのメンバーだったことでも知られている。

▼CUT69 トウジ「なんや、随分減ったみたいやな」
今度は、トウジの初登場。演じているのは関智一。もちろん代表作は「Gガンダム」の主人公ドモンだ。キれた熱血漢から、ユーモラスな怪物まで幅広く演じることのできる、芸達者である。独創的な関西弁をしゃべるのが特徴。もともと関西に出自をもつガイナックスのスタッフなら、より自然な関西弁に近付けることもできるだろうが、ナチュラルな演技まで殺しては意味がないということで、こういう形に落ち着いた。ちなみに関自身は東京出身。

▼CUT81~95 自分の世界に入っている老教師
シンジと女生徒がパソコン通信で対話している場面で流れている老教師のセリフ。アフレコ台本には「自分の世界に入っている」とある。演じているのは丸山詠二。「ウラシマン」のフューラー総統や「セーラームーンR」のワイズマンなどでアニメファンにはおなじみだろう。特撮ファンには「バロム1」のドルゲ魔人が印象深い。

▼CUT99 女子D「また~、そうやってすぐに仕切る」男子「いいじゃん、いいじゃん」
騒いでいる生徒たちの場面。女子Dは林原めぐみ。男子は、EDにクレジットされていないが、永野広一が演じている。

▼CUT100 女子A「ねぇねぇ、どうやって選ばれたの?」女子D「テストとかあった?」女子B「恐くなかった?」女子C「操縦席ってどんなの?」
林原の女子Dに続いて、女子A・B・Cが喋る。それぞれ、宮村優子、長沢美樹、三石琴乃が演じている。

▼CUT101 男子A「必殺技は?」
これも騒いでいる生徒のひとり男子A。演じるのは結城比呂。

▼CUT123 レイ「非常召集……。先、行くから」
今回のレイのセリフはこれだけ。まったくもって残念。

▼CUT125 アナウンス「ただいま東海地方を中心とした関東・中部の全域に~」
キャスト表にあるアナウンスというのはこれのこと。長沢美樹が演じている。

●Bパート

▼CUT128 オペレーター女A「中央ブロック・収容開始」
演じているのは宮村優子。CUT140で「中央ブロック、及び第1から~」というセリフもこのオペレーター女Aのもの。

▼CUT141 オペレーター女B「現在、対空迎撃システム、稼働率48%」
こちらを演じているのは林原めぐみ。レイが喋らない分、他の声で大活躍である。

▼CUT143~147 アナウンスA「小中学生は各クラス、住民の方々は各ブロックごとにお集まり下さい」アナウンスB「第7管区の迷子センターは、第323シェルターに設置してあります」
トウジたちが避難したシェルター内で流れているアナウンス。アナウンスAは長沢美樹、同じくBは岩男潤子によるもの。岩男潤子のナレーション的な芝居は珍しい。

▼CUT160 女A「エントリー・スタートしました」
これは宮村優子。このセリフはもともとアフレコ台本にはなく、アフレコ現場で追加されたものだ。

▼CUT161 女(無線)「圧着ロック解除」
これまた、林原めぐみによるもの。ちなみに直前の「LCL電荷」というのは、長沢美樹演じる伊吹マヤのセリフである。

▼CUT167 ケンスケ「この時を逃しては、あるいは永久に……」
並ぶ便器をひたすら映し、それに会話が被るという、なかなかトリッキーな場面。そのせいか会話にはかなり趣向がこらしてあり、声によって、いろいろと表現するよう求められている。例えば、取り上げたセリフは「軍人風に」という注釈があるもので、岩永らしくない、野太い声での演技が聞ける。

▼CUT187 シンジ「目標をセンターに入れて…スイッチ」
CUT25の繰り返し。セリフというよりは、ほとんど効果音のようにあつかうことで逆に効果をあげている。これが、CUT299以降の感情をあらわにした叫び声との対比で作られている点に注目したい。クライマックスの、ほとんど女性とは思えない声のカスレ方は本当に見事。

《第四話》

●Aパート

▼CUT33 ミサト「シンジのぶわぁかっ!! ――バカ」
玄関のドアを蹴り飛ばす場面。それまでのよそゆきの声から、一転激しい怒鳴り声、そしてつぶやきへ。三石琴乃の振幅の大きい演技がGOOD!

▼CUT35~36 電車アナウンス(録音・女)「次は長尾峠、長尾峠です。お出口、右側に変わります」
シンジの乗った電車で流れる、林原めぐみによるアナウンス。今回はレイのセリフはなし。

▼CUT41 アナウンス「本日は第3新東京市第7環状線を……」
駅のホームの案内。EDにクレジットされている結城比呂の役柄がこれ。

▼CUT41 シンジ「……帰らなきゃ」
聞き取れないほどのつぶやきが魅力的。「エヴァンゲリオン」は耳を澄ますアニメでもあるのだ。

▼CUT43~45 風俗アナウンス(女・左)「はい、安いよ安いよぉ♥ 若いピッチピチギャルが出血大サービス! 疲れたあなたを、極楽へと御案内いたしま~す」風俗アナウンス(女・右)「今日一日のストレスを癒す、特別サービス。明日への活力をあなたに捧げる、特別サービス」
シンジが繁華街を歩いているときに流れている、風俗ギャルの声。左から流れているのが林原、右から流れているのが宮村優子によるもの。脚本には、左が「お軽く」右が「お堅く」との指示がある。

▼CUT52、55 イチャつくアベック
特にセリフは用意されておらず、ささやきと息遣いによる芝居だけ。これが、EDクレジットにある、永野広一と宮村優子のカップル役。みやむ~の初々しい感じが聞き所……かも(笑)。

▼CUT46~63 セカンド・インパクトをモデルとしたパニック映画
ある意味、第四話最大の聞き所といえる劇中劇のパニック映画。最初と最後にセリフを喋っている男を演じているのが、結城。先生を立木文彦が、助手AとCをそれぞれ岩永哲哉と関智一が演じている。女は林原。続くスピーカーから流れる男の声は、結城が演じている。「先生! 脱出しましょう」といっている男は、結城のやっている男とは別人で、永野が演じている。ちなみに、資料には助手Bのセリフもあるが、収録現場でカットされたようだ。

▼CUT121 ケンスケ「小隊長どのぉ!!」「行け。相田ぁ。行くんだぁっ」
岩永のバカバカしい一人芝居がおかしい。自分はバカなことをやっているんだ、という冷めた意識も感じさせる演技だ。

●Bパート

▼CUT153 男A「碇シンジ君だね」
テントの周りを男たちが取り囲む場面。ネルフ保安調査部の男Aを演じるのは木野。CUT183の「君はすでにネルフの人間ではない」と喋るのも同じ人物。

▼CUT158 女子A「やあだ」女子B「ヘンタイ」女子C「サル」
トウジの「マタンキ」という言葉に顔をしかめる女生徒たち。順に、宮村、三石、そして山口由里子が演じている。

▼CUT163 ミサト「しばらくね」
ここからCUT176の「あんたみたいな気持ちで乗られるのは迷惑よ」までつづく、一連のシンジとのやりとりの中、微妙に変化するミサトの感情。それを息遣いもたくみに表現する三石の演技がナイスだ。

▼CUT208 トウジ「まったぁ――っ!!」
シンジが殴りかかろうとするのを止めるトウジ。「Gガンダム」でもわかるように、叫びのうまい関の面目躍如といえる演技だろう。

▼CUT226 男B「時間だ」
シンジを止めるネルフ諜報部員を演じているのは結城。2人の男の内、サングラスをかけている方だ。

▼CUT243~251 駅アナウンス(女・録音・左)「間もなく2番線に厚木行き特急リニアが……」駅アナウンス(駅員の男・中年・センター)「2番線の電車は、4時20分発・厚木行きの政府専用特別列車……」
シンジの乗り込む列車の入線を告げるアナウンス。女性の声は宮村、男性の声は立木のもの。

▼CUT268~272 ミサト「(溜め息)」
第四話のクライマックスシーン。ミサトもシンジもともに溜め息のみによる芝居。絵的にもそうだが、音の芝居も緊張感に満ちている。

▼CUT272 駅アナウンス(女・録音)「間もなく4番線に強羅行き各駅停車が……」駅アナウンス(駅員の男・中年)「4番線の電車は、4時32分発・強羅行き、折り返しの各駅停車……」
今度の駅の女性アナウンスは林原。男の方はCUT243と同様、立木によるもの。主役2人のセリフはまったくないまま、セミの声などと同様、バックノイズとして流れている。第四話はセリフを極力減らし、バックノイズを巧みにつかった芝居が特に目立つ。声もバックノイズの一部として使用されている。耳の傾けがいのある話といえよう。

ガイナさん

モデルはコレだッの巻 水玉螢之丞

ガイナックスにあるコーヒーメーカー。どっかで見たコトない?
いかにもコレは、NERVのコーヒーメーカーのモデルさんなのだ。

おー、NERVのコーヒーの味……。
他にもいろいろとガイナの備品が「エヴァ」に出演してるらしーぞ。

それでしたらこの部屋を…見ていただきましょ
?

おおッ、このリアルすぎる万年床!
ミサトの部屋作画用公式モデルルームすかコレ!?
いや、単なる庵野カントクの部屋ですねんけどな

シンジくんの着てるこのTシャツは実在するんだぜ。
英国のバンド"メテC"のロゴなのさコレ。まあ30代以上はジョーシキすけど。

がんばれミサトさん

作/むっちりむうにい

じゃん♥
一度着てみたかったのね~プラグスーツ♡
コレ
ムー年齢こいてやめなさいよ~
まあまあ
しばらくビールはひかえたら?
のみすぎよ
ぽっこり
NERV

えうぁ川柳

■同級生 呼ばれてみれば 殴られて ■ヤマアラシ 身をよせるほど 傷をつけ ■家出先 環状線と 映画館 ■今日もまた 鳴らない携帯 置いていき ■友情は 殴り合いから はじめよう ■転校生 訪ねてみれば 同棲野郎 ■みやむーの Hな声だけ マニア聞き ■逆らわない それがシンジの 処世術 ■青春に 密かに微笑む 黒メガネ

編集後記

●今回登場していただいた甚目喜一氏を、名前を聞いただけで「ははあ~~ん、あの人か」と思い出した人は、通である。何しろ手がけた作品の数が、大変に少ない絵コンテマンなのだ。ちなみに、はだめきいちと読む。●今回の編集作業は、取材のテープ起こしも、原稿チェックも、入稿も、みんなパソコン通信でやりとりされた。貴島氏は「ごあんないマンガ」のネームを、旅行先のアメリカのホテルからファックスで送ってきた。中学生がパソコン画面で授業中にお喋りする日も近い。(黒)

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード(株) スターチャイルド「EVA係」まで

【ところで】本ソフトでは、各話の最後に30秒オリジナルバージョンの予告編が、そして巻末には15秒バージョンの予告編が収録されている。「エヴァンゲリオン」の予告編は、30秒の長さで作られる予定だったが、フォーマットの関係で、テレビ放映時には15秒バージョンが流された。今回のソフト化では当初予定されていた30秒バージョンを収録、TV放映された15秒バージョンも特典として収録している。

【お詫びと訂正】LD「Genesis 0:1」ジャケット内の文中におきまして、フレーム数を誤って表記してしまった箇所がございました。解説の[Cut 20/ミサトの写真]は05772、また第壱話本編使用BGMリストのM-1は07200がそれぞれ正しいフレーム数となっております。ここに訂正するとともに、ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。(スターチャイルドレコード)

EVA友の会

第参号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

毎度のごあんないマンガ
だよ

今回収録の第伍話・六話は冒頭部のクライマックス！
「放送始まったばかりなのにもうこんな最終回みたいなノリをやっちゃうの」と言いたくなる迫力の前後編です
エヴァっ子でーす
ここでオールドファンなら「帰ってきたウルトラマン」の五・六話を思い出すかも知れませんねー
「帰りマン」のこのエピソードは怪獣が2体も出てくる迫力の前後編なの
ちなみに六話のタイトルは『決戦・怪獣対マット（MAT）』
使徒みたいでーす
テロップの多用は岡本喜八監督の戦争映画ですねー
漢字
…と、このよーにスタッフの楽しいアソビも作品のアジのうちですが
なによアンタ
第五話・六話の価値はこの作品がてれびあにめ等というカテゴリーに収まらない連続SFドラマであることを示した所にあるのではないでしょうか

主役はあくまで"物語"!!
いよいよ動き出す「謎」!!
この先も各話ごとに手をかえ品をかえ色んな趣向の演し物が用意されてるぞ！
うひょー!!
てなわけで
エヴァンゲリオンおまぬけ劇場
敵のシールドがジオフロントに向け侵攻中です
奴の目的はなんだ？
本部の直接攻撃でしょ
甘いわ！よく考えてここは箱根よ
箱根といえば
温泉
あ…熱いですね
本部に温泉がボーリングされたらどうなると思う？シンジくん
はァーびばのんのんになるのよッ！
はア…
はァびばのんのんですか

はァーびばのんのんになったらおヤクソクの露天風呂で乳ユラシとかしなきゃならなくなるわ
あーゆーの
そーゆーの
本格SFドラマの本編がそんな事になったらなんて恐ろしい！…ああッ
あの〜ガイナックス作品だから元々ソレはあるんじゃ…
SF崩壊の危機を回避するなら！
いっそ本部が温泉である必然性を得るために思い切って偽装として健康ランドへの改装を提唱します
日本中の温泉をひきこんで本部を一大スパレジャーランドにするのよ！
この作戦を湯島作戦と呼称します
注：湯島は東京中央の温泉湧出地
なんたって風呂は生命の洗濯よ
てよろこんでる

ヤシマ作戦 作戦報告

対使徒要撃作戦において最初に問題とされるのは、A.T.フィールドの存在である。ほとんどの使徒が備えていると推測されるこの防御手段は、通常兵器の威力を大幅に減殺するため、使徒をほぼ無敵の存在たらしめている。EVAが使徒に対抗しうる唯一の兵器と認識される要因の一つは、このA.T.フィールドを中和できるからに他ならない。ただし、A.T.フィールドを中和するには、EVA自らが使徒にある程度の距離まで接近する必要がある。事実、第3、第4の使徒戦において初号機は使徒に肉薄、近接戦闘を敢行することで勝利を納めている。

だが、芦の湖方面より侵入した第5の使徒は、加粒子砲による先制攻撃で初号機の接近を許さず、最初の戦闘において同機は撤退を余儀なくされた。ここに至って「A.T.フィールドを中和し、近接戦闘により使徒を殲滅する」という基本戦術の見直しが図られることとなった。この時、特務機関NERV作戦部長であった葛城ミサト一尉（当時）により提示されたのが『ヤシマ作戦』である。

長射程を持ち、尚且つ強力なA.T.フィールドを擁する第5の使徒を迎撃する為、敵射程外からの長々距離射撃により敵を狙撃、殲滅すること。これが同作戦の骨子であった。だが、敵射程外からの攻撃は、同時にA.T.フィールド中和の放棄も意味していた。そのため、同作戦では敢えてA.T.フィールドを中和せず、日本中の電力を集めた大出力の陽電子砲を使うことで、この問題を解決している。その極大なる攻撃力を以て、A.T.フィールドを貫通しようというのである。

初号機及び零号機は、敵使徒が位置する第3新東京市中心から遠く目的地に近いルート20発進口より出撃、敵使徒の攻撃を避けるために、山間を縫って仮設基地の設置された二子山山頂へと移動した。芦の湖を挟んで使徒と対峙した初号機は、0:00の作戦開始を待って発砲した。しかし、それと同時に敵使徒も加粒子砲を発砲、両砲火は芦の湖上空で互いに干渉しあいその軌道を乱した。

NERVの試算によれば、二子山山頂は敵加粒子砲の射程外のはずであった。これは、NERVの試算が誤っていた為か、使徒が自らを進化させたのかは判然としない。これにより対使徒戦における情報の不確定性が再確認され、EVAの一層弾力的な運用が重視されることとなった。また、EVA初の遠距離戦であり、2体以上のEVAが初めて連携して戦った作戦であるという点からも特筆されるべき作戦であろう。

この地図は、あくまで作戦内容を理解するための概念図である。必ずしも、位置関係が本編の画面や設定に忠実なわけではないことを断っておく。

CASTから一声　林原めぐみの巻

副監督日記　GAINAX広報・佐藤さんからのお知らせ

今日の珍品

第六話に登場した徴発令状。本編では上半分しか見えないが、ここで下ギリギリのところまでお見せしよう。

徴発令状

日本国政府は特務機関Nerv(以下、甲)に対し、防第3項により、戦略自衛隊技術研究所(以下、乙)保有する試作自走陽電子砲(以下、当該物件)を防役務に充当する目的において徴発し、その保守運当該物件ならびに当該物件の正常な運用を維持す通達する。
甲は乙に対し、当該物件の運用に関する全ての損して一切の責務を負わないものとし、また、乙は

もっと重箱の隅

「第伍話」「第六話」の巻　執筆●小黒祐一郎

●制作の最初の予定では、現在完成している第参話の次に、第伍話にあたるエピソードがくるはずであった。つまり、第4の使徒との戦いの直後に、第5の使徒との前後編がくるというシリーズ構成だったのだ。その構成で、脚本、絵コンテまでが進められていたが「やはり、このままシンジはEVAに乗らないだろう。次の戦いの前に、彼と周囲の人間との関係のエピソードが1話分いる」という判断から、後からシンジの家出を描く第四話が制作された。そのため、第伍話は、第参話の直後のエピソードと見たほうがしっくりくる部分と、第四話の直後のエピソードとして見たほうがしっくりする部分がある。

●制作の都合で『エヴァンゲリオン』のアフレコは、第壱話、第弐話の次に、第伍話、第六話の分が収録され、その後に第参話、第四話の収録が行われたのだ。ケンスケとトウジの初アフレコは、このエピソードなのである。

●第伍話のレイの部屋のシーン。シンジは転ぶのと同時に、引き出しをひっくり返してしまい、シンジの上にレイの下着が乗る。実は、最初に描かれた絵コンテでは、シンジの頭の上にドサっと下着が乗り「女の子の目の前で下着まみれになる」という、世にも情けない描写だった。勿論、庵野監督から「もっとシリアスに、青春のホロ苦さを出すように」というリテークが出て、現在のかたちに落ちついた。シンジの体の上に、下着が乗るのはコミカルなコンテの名残である。

【これが青春のホロ苦さ】

●第六話冒頭のミサトの行動。また、ネルフ直上の使徒の動向がわからないのに、現場を離れて、自分がシンジのもとに走るのは作戦指揮官としては軽率（それだけ、EVAのパイロットが大切という見方もあるが）といえよう。それほど、ミサトの中で「軍人としての自分」よりも「一人の人間としての自分」が強いということ。これは、この後の展開でも重要なポイントとなる。

●第六話はテロップが無闇に多い。本編中のモニターに表示された文字やサブタイトルを除いても、全部で29枚。テロップを多用することによって、ミリタリー映画的な雰囲気にするのは、『トップをねらえ！』5話、6話、『ふしぎの海のナディア』37話等でもお馴染みの庵野秀明監督作品のテクニック。1話あたりのテロップの枚数なら『トップをねらえ！』の5話の方が多いが、1枚のテロップのコテコテぶりは、この第六話の方が上。

EVA専用陽電子砲
(円環加速式試作20型)

【コテコテのテロップ】

●日本各地が写るシーンで登場する山口県宇部市は庵野監督の郷里。『トップ！』でユングが所属する「ここと座方面軍32部隊」の宿舎があったのも、山口県だった。旧東京市三鷹区（現・東京都三鷹市）はGAINAXが在る所。

●レイがシンジのところに持ってきた食事。「シモラク牛乳」は実在のブランド。

●第伍話と第六話はレイにスポットが当たるエピソード。とはいうものの、さすがはレイ。セリフは少ない。第伍話の彼女のセリフは全部は「どいてくれる？」「何？」「何が？」「どうして？」「……あなた、碇司令の子供でしょ」「信じられないの？」「ハイ」「了解」の8カ所のみ。第六話はさすがに少し多く、25カ所となる。

ガイナさん

ホントはどーなのよの巻　水玉蛍之丞

えうぁ川柳

■ 零号機　一つ目玉の　箱入り娘 ■ 綾波レイ　壊れたメガネが　宝物 ■ レトルトを　不味く作るも　才能か ■ 青少年　白い裸体に　ハッとなり ■ 弁解も　胸に置く手が　邪魔をして ■ 手の中に　包んだ乳房に　血がのぼる ■ 表情を　持たない少女の　初笑い ■ 別れ際　サヨナラなんて　悲しすぎ ■ 怖い父　無口な少女に　目を細め ■ 離れても　左手だけは　覚えてる

AD・ヨのアルバム【復活！】『NEON GENESIS EVANGELION II』ガイド…のつもり

再生怪人は以前より弱い。二代目怪獣は造形が悪い。そんなジンクスに惑わされないようにリキ入れて復活するこのコーナー。さて、CD「NEON〜II」ですがBGM構成はもちろん庵野監督によるもの。1stでは何度も使用されるテーマ的要素の強い曲が多かったのに対して、この2ndではその場面のためだけに創られたBGMが目立ちます。特に7トラック目に収録の「シンジとアスカのユニゾンでイヤ〜ン♥」などが印象的です。ボケが滑ったところで、次に大反響のED曲「FLY ME TO THE MOON」のちょっと表記がややこしい〈Rei（#5）TV.Size Remix Version〉（歌い方の違う#6も同様）について説明しましょう。実は第伍話と第六話で、林原めぐみさん歌唱によるヴァージョンが使用された時にCD化を望む声が殺到したのですが、元々はその予定がなかったのでちょっとクリアしなければならないことがありました。

① EVAのサントラは、声優さん人気に頼らずに制作するという美学がある。→ キャラクター名で表記 → Rei

② 放送のために急遽録音されたため、それぞれ1コーラス分しか存在しない。→ 使用話数とそれぞれがTVサイズであることを明記 →（#5）TV.Size、（#6）TV.Size

③ 放送されたのは、もとのCLAIREのオケにヴォーカルをダビングしただけ。→ 声質とのバランスを微妙に調整して、より聴き心地をよくする → Remix

以上3点の理由により、やたらと長い表記のヴァージョンになってしまったのでした。

また、〈Aya Bossa Techno Version〉も、使用された第八話でアスカが初登場＆大活躍だったため宮村優子さんが歌っていると思い込んだ方々がいらしたようですが、このヴァージョンを歌うAyaと〈Aki Jungle Version〉を歌うAkiはヴォーカリストなのです。ちなみにこの二曲はフルサイズで完成していたものを後からTVサイズに編集したのですが、Jungleの方はテンポが早く1コーラスが短いので、1フレーズ分の繰り返しを付け足した強引な構成で使用されたのでした。

［趣味の追記］

バンダイさんから初号機のプラモデルが出た（はず。このソフトが発売された頃には）！　プロポーション重視のガレージキット風味。一体成型のパーツがメインで部品数が少ないので、初心者でも組み立てられます。それでもちゃんと可動箇所もありますのでポーズは思いのまま。気を付けをするEVA、前へならえをするEVA、万歳をするEVA。是非、手に取ってアナタ自身の目でお確かめ下さい。

尚、このキットに碇シンジは入っていません。

声優博士のちょっちチェック

小川びい

〈第伍話〉

●Aパート

▼Cut7　男A「パイロット接合に入ります」
男Aは山野井仁。アーツビジョンの低音が魅力な新人声優。代表作は『十二戦支　爆烈　エトレンジャー』のドラゴと『黄金勇者ゴルドラン』のキャプテンシャーク。同カットの「システム、フェイズ〜」という女のセリフは、林原めぐみ。AR台本には、セリフ小さくとの指示がある。

▼Cut8　男B「シナプス挿入、結合開始」女A「パルス送信」
男Bは永野広一。女Aは宮村優子。Cut41の女オペレーターのカウントダウンも宮村優子。SE扱いで台本が用意されていないので役名は不明だが、女Aと同一人物だろうか。

▼Cut54　碇「レイ・・大丈夫か　レイ!」

Cut52のうめき声から、引続きCut53でアドリヴでのうめき声を経て、心配そうなセリフへ。碇の見せ場である。

▼Cut69　女アナウンスA「D-3ブロックの解体終了」
女アナウンスAは宮村。続くCut70で「全データを〜」といっているのは、女アナウンスBで、声は林原めぐみが担当。

▼Cut73　リツコ「ホント理想的なサンプル」
楽しげな演技は演出意図どおり。Cut78の「らしきものはね」という、無力そうな演技との対比を際だたせている。

▼Cut83　作業員と碇たち
「ロー、スラーイ〜」といっているのが作業員A。演じているのは山野井。続いて「止めろ」と声をかける作業員Bが、岩永哲哉。Cut85で「それが、劣化がはげしく〜」といっている男も山野井だが、作業員Aと同一人物かは不明。

▼Cut103　水着の女子たち
女子の声はアドリヴで演じるよう指示がある。「行けヒデ子!」「負けちゃえー!!」は例としてAR台本に用意されたセリフで、宮村、林原がそれぞれ喋っている。一方、Cut107でのバスケをする男子たちは、アドリヴではない。男子A「おっしゃあ行け行け」は永野広一。男子B「させるかあ」は結城比呂。男子C「ったあ」は子安武人。

▼Cut114　女子「なんか鈴原って目ツキやらしい」
これは宮村優子。彼女のおハコともいえる、お転婆系の女の子の声だ。

▼Cut117　ケンスケ「綾波きゃ？　ひょっとして」
「綾波きゃ」というのは、岩永のアドリヴによるものではなく、AR台本どおり。ちなみに、Cut168　ミサトの「オヒィシャル」という独特の言い回しも、同じくAR台本どおりだ。

▼Cut127　女アナウンスA「エヴァ初号機は、第3次冷却に入ります」
宮村優子が声を担当。Cut69と同一人物、ということらしい。

▼Cut130　無線での女性の声
シンジがエヴァに乗っているときに、バックノイズのように流れているセリフが臨場感を高めている。無線女B「先のハーモニクスは〜」は長沢美樹。無線女C「了解。結果報告はバルタザールへ」は林原。無線女D「エントリープラグの〜」は宮村。無線男A「メルキオール了解」は山野井。無線女A「第3次冷却、スタートします」は宮村。無線男B「廃液は〜」は永野。

▼Cut145　ミサト「ここに入れちゃって、ドバッと」
AR台本では、「ドバッ」の文字が倍角文字で書いてある。実際の三石琴乃の表現はどうなったか、音声で確かめてほしい。

▼Cut168　ウッとなるミサト
リツコに突っ込まれて、「ガアッ」という奇声を上げるミサト。AR台本にアドリヴでとの指示がある。

▼Cut173　リツコ「生きることが」
微妙なニュアンスを含んだリツコの見せ場のセリフ。リツコとゲンドウの上司と部下、研究者仲間といった関係を越えた、複雑な人間関係を臭わせる演技。愛人では、などという妄想も膨らむというもの。

●Bパート

▼Cut218　レイ「どいてくれる？」
レイのセリフはつくづく難しいと感じさせるセリフ。台本には「動じる様子もなく」との指示があるだけで、林原めぐみも相当悩んだのではないだろうか。

▼Cut241　女アナウンス「セントラル・ドグマは、現在開放中です」
これも宮村優子の担当。EDでクレジットされているのはこの役柄と思われる。

▼Cut251　シンジ「当り前だよ。あんな父親なんて」
台本に「この台詞は本音まじり」と注釈がある。それまで、沈黙に耐えられずに無理に言葉を繋いできたシンジが、思わずムキになる場面だ。シンジの父への拘りと思慕を複雑に表現する緒方恵美の演技に注目。

▼Cut317　叫ぶシンジ
台本には、「わめき声ひたすらつづける」とある。1話から、ここまでシンジは、叫んでいるかボソボソ喋るかのどちらかである。緒方恵美の演技に頼った演出表現だ。それだけ彼女の実力を評価してのことだろう。

〈第六話〉

●Aパート

▼Cut63　ミサト「なるほどね」
台本では特に指示はないが、それが三石琴乃によって表現されると、画面のようになるところが面白い。

▼Cut64　作戦課員A「これまで採取したデータによりますと〜」
作戦課員Aは岩永哲哉。Cut66で「健在です!」と報告している作戦課員Bは、関智一。関は、Cut117の技術開発部第3課の研究所員も担当している。また、Cut68で「現在、目標は〜」と言っているのは、同じく作戦課員Cの永野広一である。Cut99の軍人やCut129の「初号機パイロットの意識が戻ったそうです」といっているオペレーター（男）も永野の担当。Cut227の「温度安定、問題なし」という男も彼。

▼Cut77　作業員「3時間後には換装作業終了予定です」
作業員は岩永哲哉。Cut115で「現在予定より〜」と言っているのも同じ。

▼Cut97　ミサト「そ、戦時研のプロトタイプ」
妙に声が上がり、かわいらしいミサト。台本の指示には「悪意は笑顔と共に有り」とある。指示通り、女性らしい悪意を表現してみせた、三石琴乃の解釈が楽しい。

▼Cut103〜111　停電の告知
TVのアナウンサーは林原めぐみ、ヘリからの女性の声は長沢美樹、広報車の声は宮村優子がそれぞれ担当している。

▼Cut142　レイとシンジとの会話
シンジの甘えた態度に対してレイの無表情な声。その演技の対比が面白い。

●Bパート

▼Cut184　女「各冷却システムは試運転に入ってください」
声は宮村優子。Cut224も同じ。Cut228で喋っているショートで毛先がカールしている女性のことらしい。2話でも登場している。ちなみに同じ宮村によるCut113での「敵シールド、第7装甲板を突破」というセリフは、アナウンス（女）という役でのもの。

▼Cut208　レイ「じゃ　さよなら」
Cut186で、シンジが「死ぬかもしれない」と言ったときは、彼を非難したレイだが、自分でも同じような言葉を話す。ぎこちない言葉のキャッチボールが見物。本作らしい、対比のニュアンスの強い演技だ。

▼Cut214　電話の時刻アナウンス
0時を知らせる時報は、林原めぐみによるもの。彼女のお手のものの無機質系の声だ。

▼Cut332　レイ「ごめんなさい。……こういう時どんな顔をすればいいのかわからないの」
台本の指示に「微妙な『とまどい』が出ればナイス!!」とある。ある意味、いじわるな注文ともいえるが、それに見事に林原が応え、非情に印象的なセリフとしてファンの口に膾炙した。こうした演出陣と演技陣とのいい意味での緊張感にも耳を傾けて欲しい。

【第伍話の私服】

【珍しいリツコの私服】

（優しくない物語）

小黒祐一郎

碇シンジが、コミュニケーションに関して大変に不器用な人間であるなら、綾波レイは、他人とのコミュニケーションに関してほとんど興味を持たない人間にみえる。

他人と積極的にコミュニケーションをとるのを避けていた少年・碇シンジは、第四話までで、他人とのコミュニケーションの取り方を学んだ。第伍話と第六話は「コミュニケーションに不器用な人間が、コミュニケーションにほとんど興味を持たない人間に接近する物語」、あるいは「コミュニケーションに不自由な人間同士の関係の物語」と読むことができる。

第四話までは、他人から離れようとするシンジに他の人間が近づいてきてくれたが、今回はシンジが、綾波という少女に近づこうとする。他人に近づかれた時に「対応すること」も面倒くさいが、他人に近づこうとして「拒絶される」のも辛い。第5の使徒の攻撃を受けたシンジは、周囲の人間に「励まされたから」ではなく、一人の少女に「拒絶された」ためにEVAに乗る。追われれば逃げるし、逃げられれば追っていく。人間というのは、面白い。

第六話のラストシーン。シンジの「笑えばいいと思うよ」という言葉に応えて、レイは笑顔を浮かべる。コミュニケーションが苦手なシンジの不器用な言動だから、レイに気持ちが通じたのである。多分、それは間違いではない。他人に合わせるのが上手なケンスケが得意の話術で、いかに笑わせようとしても彼女は笑わないだろう。たとえ、ケンスケがゲンドウの息子だったとしてもだ。

コミュニケーションに不自由な人同士が、気持ちが通じ合った。これを感動的とみることはできる。だが、レイが笑ったのは、シンジの顔がゲンドウとダブったからである。これも間違いの無い事実である。

ここで、我々は躊躇する。二つの道のどちらかを選ばなくてはならない。つまり、「理由はどうあれ、レイに気持ちが通じたのだから感動的である」。あるいは「シンジの気持ちは、本当はレイには通じていない。残酷な話だ」。

どちらの取り方も間違いではない。

真実は、常にそれぞれの人間の心の中にある。

使徒ちゃんえかきうた

①スリー ①V、V、V ②まちがった ②まちゅウー ③失敗だー ③あーらふしぎワンツー

（作詞・あにピー）

みんなもうたってかいてみよう！

がんばれシンジくん

作／むっちりむうにい

編集後記

●この編集後記を書いているのは、2月の半ば。『エヴァンゲリオン』はTV放映最終回に向けて、制作が大わらわ。鶴巻副監督も、現在、第弐拾伍話の絵コンテを描いている真っ最中だ。そんなわけで、今回の「副監督日記」は休載となった。きっと、次号では復活してくれるに違いない。●前に募集した、読者諸君からの「EVA論文」が届きはじめた。力作が多い。『えうぁ川柳』もいくつか来ている。まとまったところで掲載したいと思う。プレゼントも何か凝ったものを考えよう。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第四号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

天使を描くとき・天使の描く窓

榎戸洋司

誰かを殺したくなる夜がある。

復讐ではなく、錯乱でもなく、サディスティックな快感を求めるためですらなく、ふとした苛立ちを引金に、とにかくただ狂暴な思いに憑かれてしまうときがある。そして、そんな自分の残酷さに戦慄する夜がある。普段はないものとして目を背けているが、ひとりの心の深部にはそんな危険な性向が確かにある。

そうした名前のない殺意を、あえてひきずりだし、庵野監督はレッテルを貼る。

なるほど、自身の無自覚な凶暴性を呼ぶには相応しい、『エヴァンゲリオン』第弐話の英語タイトルである。

THE BEAST

それは名前だ。

「——初めての戦いのあと、ビルのガラス壁に映った自分の操るエヴァの顔を見て、シンジは恐怖します……」

庵野監督からこのシークエンスの説明を聞いたとき、僕はロボットという記号が、本来の生々しさをとりもどすのを感じた。仮面という素顔の"自覚された"表現。

この作品が、パンドラの箱を（わざわざ）開けようとする試みらしいと理解した。

●

「"エヴァンゲリオン"の意味は、福音です……」

居酒屋で、この作品の初期構想を初めて聞いたのは、二年ほど前だったろうか。

淡々とした監督のその語り口調には、けれど、したたかな自信と野心が感じられた。

庵野秀明監督。庵野、というその苗字は、僕にはジオフロントと読めてしまう。こもって仕事をする施設のある、それは場所である。

肉も魚もまったく口にできない菜食（偏食？）主義の人であると知ったのも、その席でのことである。焼鳥屋で焼鳥を食べない人を、僕はあまり多く知らない。いつだったか、キノコなどというものを食べる人間は感覚が麻痺しているのだと鋭く批判されたこともあった。

才能はしばしば、奇異な選別を道理とする。状況によって、それは美意識と呼ばれることもある。

●

第七話『人のつくりしもの』、第八話『アスカ、来日』の二つの話は、民間企業や国連軍が、ネルフ——ゲンドウに出し抜かれ、翻弄される話である。物語の見せ場は、シンジ、ミサト、アスカらの英雄的な活躍を描くが、同時に、その彼と彼女らの行動が、所詮は予定されたシナリオ内の行動であることもポイントとしている。

主人公たちの意志や努力を、見かけの上では勝利させながら、実はそれが徒労でしかなかったことを強調する。シンジたちのリスクや喜びが大きいほど、そのアイロニカルな構造は強調される。しかもフィルムは、英雄的な戦いと、アイロニカルな構造の、その両方をウリにしようとする両義的な作品である。

その葛藤——。

●

庵野監督は引き裂かれた人である。それが、この『エヴァ』の脚本を書くにあたり、打合わせを重ねて、僕の辿りついた結論だった。

物語というものは"子供が大人になるための物語"である。

現代の物語は、だから今日の子供が、今日の大人になるための物語でなければならない。

『エヴァンゲリオン』は、現代に適応するための、皆が目を背けようとしているその過酷さをつきつける。

「"エヴァンゲリオン"の意味は、福音です……」

シンジやミサトの活躍、ドラマを描く庵野監督には、一片の悪意もうかがえない。

第七話では、シンジがミサトの"大人の部分"にふれ、成長を学ぶ構図を大事にするようにという指示もあったように記憶している。絵の好きな少年が、美しい風景をただ美しく描こうとするように、監督はロボットのカッコ良さや、いわゆる少年ドラマを演出する。

だが同時に、少年の無邪気でピュアな自由意志による成果が、結果的には、世界のシステムにはなにもフィードバックしないことも強調する。おそらく、そこにこの作品をつくる根拠があるのだろう。

したたかなゲンドウの冷笑。監督は肉も魚も口にしないが、よく人は喰う。

●

それでも——

庵野監督の不幸は、どこかでまだ"シンジたちの側"に立っているように思えることだ。フィルムを道具にせねばと言い聞かせながら、結局フィルムそれ自体を目的にしているように、素顔を暴こうとしながら、剥がされる仮面をも大切にしている。

追放されてなお、アダムとエヴァは、楽園の夢を捨てきれずにいる。

だからこそ、『エヴァンゲリオン』は、ロボットの出てくるアニメではなく、"ロボットアニメ"にカテゴライズされつづける作品である。描きたいものと、描かなければならないものに引き裂かれる作品である。だから面白い。だから悲しい。だから美しい。

●

新世紀エヴァンゲリオン。その福音。その葛藤。その現代性——。

開かれた箱の底から、希望以上のものが見つけ出せることを信じたい。

ハレルヤ。

1996／2／29

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第七話「人の造りしもの」

●今回収録した第七話と第八話は共にビジュアルの質が大変に高い。第七話はデチールの細かさと丁寧な芝居の良さ。第八話は派手なアクションとライトなタッチの作画が魅力。第八話のビジュアルも勿論見応えのある仕上がりであるが、アニメマニアなら第七話の完成度の高さにも注目したいもの。

●第七話は「組織と組織の対立」がメインストーリーであり、その一方で「シンジとミサトのドラマ」が展開する。シンジとミサトの活躍は、所詮、ゲンドウの掌の上での行為でしかないが、それでもシンジとミサトの距離は近づき、ラストでシンジは幸福そうな笑みを見せるという構成だ。

【ナイスなアングル】

●第七話に三度登場するトースター。中のニクロム線が透過光で赤く光っているのが、ナイスである。

【ニクロム線がリアル】

●冒頭のミサトのマンション。ミサトのだらし無さについてシンジが責めるあたりのテンポのよいカット割りは、映画監督岡本喜八の独特のカット割りを意識したもの。『トップをねらえ！』『ふしぎの海のナディア』でも岡本作品を意識した部分が多い。

●『毎朝新聞』の紙面。大変リアルに作られているが、よく読むと記事の本文はセカンド・インパクトについて書かれたものではない。実は……。一時停止してチェックしてみよう。

【リアルな新聞】

●完成披露パーティのシーン。イクハラ電子電波なる企業から日本化学工業共同体に花輪が贈けられている。幾原邦彦は『美少女戦士セーラームーン』シリーズで活躍した演出家で、庵野監督の友人でもある。

●J.A.の起動時に使われたプログラムは「ジェット・アローン起動用オペレーティングシステム.Ver.2.2.1c」。ラストで正常に戻った時に使われたプログラムが「ジェット・アローン再起動用オペレーティングシステム.Ver.2.1.1b」。起動用のプログラムの方がバージョンの数字が大きい。起動用のプログラムと再起動用のプログラムの内容に、それほど違いがあるとは思えない。プログラムが「Ver.2.1.1b」から「Ver.2.2.1c」にバージョンアップする際に、ゲンドウ達が暴走するプログラムを忍ばせたのだろう。いずれにしても「再起動用オペレーティングシステム.Ver.2.1.1b」が起動した段階で「Ver.2.2.1c」は削除されたに違いない。

【これは「2.2.1c」】

今日の珍品　その壱

◎第七話に登場した歴史教科書。セカンド・インパクトと、その後に起こった歴史的事件について記されている。セカンド・インパクト自体については、情報操作によって大衆に知らされた真実ではない情報。ここだけで語られている設定もある。

セカンドインパクトとその後の世界

1.セカンドインパクト

20世紀最後の年、西暦2000年9月13日、南極大陸マーカム山に**大質量隕石**が落下した。その直後に発生した津波と溶け出した氷による海面上昇によって、南半球諸国あわせて20億以上の人々が死亡し、有史以来、人類の被った最大の天災となった。

2.北半球諸国の動乱

北半球の諸国も海面上昇によって多大の被害を生じ、大混乱となった。隕石の落下から2日後の2000年9月15日、インド・パキスタン国境で難民どうしの衝突から戦端が開かれると各地で軍事衝突が発生した。

9月20日には東京に新型爆弾が投下され、50万人の人命が失われた。

翌2001年2月14日、**バレンタイン休戦臨時条約**が結ばれるまで、世界各地の紛争は続いた。

3.第2新東京遷都

日本臨時政府は新型爆弾によって壊滅した東京の復興を断念し、長野県松本市に遷都を決定し、2001年、**第2新東京市**として着工した。

復興は急速にすすみ、2003年初頭までに第2新東京市は首都としての役割を十分にはたすようになった。

2005年には第二次遷都計画が国会で承認され、富士箱根に第3新東京市の建設がすすんでいる。

1) ファーストインパクト

ジャイアントインパクトとも呼ばれ、太古、地球から月が分離する原因ともなった小惑星の衝突。

およそ40億年前といわれる

2) 大質量隕石

南極に落下したのは直径10cmに満たない超小型の隕石であった。光速95%以上といわれる速度によって、その質量は4.02×10¹⁸t以上あった。

落下の15分前にメキシコのアマチュア天文学者、セイモア・ナンによって観測されている。

セイモア・ナン（1971～）

えゔぁ川柳

皮肉言う シンジにミサト 笑みをみせ■部長さん 朝寝朝酒 大好きで■正装の ミサトにシンジ 凍りつき■火を点ける リツコの影は 魔女めいて■アメリカ軍 今ではタダの 郵便屋■うぶシンジ 加持発言にも平然と■弐号機の 八艘飛びに 目がまわる■日曜日 戦艦乗って 使徒釣って■転校生 そろってエヴァの パイロット

副監督日記

大好評連載中の鶴巻和哉の「副監督日記」は、作者多忙のため休載させていただきます。

CASTから一声

宮村優子の巻

22話のさるのぬいぐるみをひきさくのって、すごくつらかったっすっ。わかりますっ？この気持ち。ある日、庵野カントク「ねぇ、ねぇ、ぬいぐるみ何が好き？」宮村「おさる」庵野カントク「それふみつけるから」宮村「は!?」……なんでやねん

庵野カントクの罠に気をつけませう。

がんばれアスカちゃん

作／むっちりむうにい

今日の珍品 その弐

◎第八話の士官食堂で、背後に流れていたテレビドラマの音声である。意味については深読みするように。

C－66～78（台詞はC77まで）
米国ホームドラマ的TV番組（バックノイズ）

ノリよく、テンポよくお願いします。舞台っぽく。
（BGM・B－17リズム）

男 「ああ、どうして君はこんなに冷たいのかね」
女 「あなたへの気持ちが冷めてしまったからよ」
男 「外は今日も真夏日。外気は40度を越えてるというのに……何だ!? この凍てつく寒さは！」
女 「私の気持ちは氷点下よ。ビールも凍ってるわ。（わざとらしく）おぉ寒い！ コートが必要ね」
男 「君の心だけ、クーラーがきき過ぎてるんだよ。少し設定温度を上げたらどうだい？」
女 「そのクーラーは、あなたなのよ。自分だけ室外機みたいに熱くなっちゃって、バッカみたい。これ以上、私の心を冷やさないで」
男 「その冷えきった体を温めよう、さあ二人で！」
女 「残念でした。この私の心にライターで火をつけ、マキをくべ、油を注ぐのはあなたではないわ」
男 「誰だい？ その幸運な男は？ まさかあの男じゃ……」
女 「ちがうわ。このワンちゃんよ」
SE「ワンワン」（できれば、女性の鳴きマネでよろしく）
男 「すると何かい？ 僕はこのかわいいワンワンに負けたのかい？」
女 「ええ、そうよ。この子は誰かさんみたいに好き嫌いなんてしないんですもの」
SE「わはははは・笑い声」

声優博士のちょっちチェック

小川びい

《第七話》

●Aパート

▼Cut1 電話の男
ゲンドウが電話で会話している相手。演ずるは山寺宏一。アニメ作品での代表作は『魔神英雄伝ワタル』シリーズのクラマ、『らんま1/2』の良牙など。最近では活躍の場が、洋画の吹替えやCMに移っており、アニメファンとしては彼の声を聞く機会が少なくなって寂しい限り。若手・中堅随一の芸達者で、そのうまさは第七話で、すでに遺憾なく発揮されている。

▼Cut44 男（電話）
シンジの外出後、ミサトが電話をかけた先。シンジを監督しているらしい男。演ずるは永野広一。第四話にも似た男を永野が演じているが、同一人物かは不明。また、Cut73で、機内のゲンドウに話しかけてくる永野が演じている男も同じ「男」という役名だが、電話に出ている男とはもちろん別人。

▼Cut54 ミサトを見てはしゃぐ男子たち
「かっこいい〜〜」といっている男子Aを永野が、続く男子Bを山寺、最後の男子Cを結城比呂が演じている。特に山寺の演技は電話の男とても同一人物とは思えない、すばらしい声の砕け方。

▼Cut58 女の子
ミサトにはしゃぐ男子に我関せず、おしゃべりしている女の子。このセリフは特に用意されておらず、アドリヴでとの指示がある。演じているのは林原めぐみ。相槌を打っているのは岩男潤子。

▼Cut74 碇ゲンドウ
今回、碇ゲンドウの声はやや鼻声。風邪をひいたのだろうか？

▼Cut112 時田シロウ
日本重化学工業共同体の責任者。演じているのは大塚芳忠。最近では洋画の吹替えを中心に活躍するベテランである。アニメではやや古いが『重戦機エルガイム』のキャオや『機動武闘伝Gガンダム』のチボデーなどが印象的。外国TVドラマでは『スター・トレック ネクストジェネレーション』のデータ役が最近のハマリ役。アメリカンテイストな皮肉をいう時田役はまさに絶妙のキャスティングで、リツコとのやりとりは海外実写ドラマの趣さえあった。

▼Cut140 ロッカーを蹴るミサト
今回はミサトの大活躍編とあって、場面場面で豹変する三石琴乃の演技が楽しめる。なかでも、「ハ、ラ、立、つ、わ、ね、ぇぇぇぇ!!」のセリフは絶品。対するCut143の「エコエコアザラク」（AR台本より）なリツコの演技も楽しい。

【時田シロウ】

▼Cut154 アナウンス「――起動準備よろし」
アナウンスは林原。EDにクレジットされたのはこの役。Cut205も同じ。

▼Cut155 JAの管制員たち
管制員A「全動力、開放」が、岩永哲哉。以下Bの関智一、Cの永野広一と順にセリフが続く。Cut218で斧をふるったり、コードを引き抜くのは別の管制員D、Eで、それぞれ永野と結城によるもの。一方、Cut190で「まさに奇跡です」と告げているのは技術員で、結城比呂が演じている。

▼Cut197 万田
時田がJAをとめる許可を得るため、電話をかけた先。内務省長官。演ずるは山寺。続くCut199で八杉を演じているのは立木文彦。2人とも持ち役を離れ、ディフォルメの利いた演技で耳を楽しませてくれる。

▼Cut227 日向に命令するミサト
「エヴァー1」と最後を伸ばすように発音するのは、三石琴乃の癖なのだろうか。

▼Cut353 ミサト「いってらっさい」
セリフはAR台本のまま。わざわざ「誤植にあらず」との注記あり。逆にCut359、ミサトのズボラを表している。ラストを飾るシンジの息の演技はAR台本に指示がなく、完全なアドリヴ。気持ちのいい息遣い！

《第八話》

●Aパート

▼Cut14 『オーヴァー・ザ・レインボウ』艦長
演じるのは第壱話にも出演した西村知道。『トップをねらえ！』の副長から出世というところだろうか。副長は山野井仁が演じている。

【艦長と副長】

▼Cut20 興奮するケンスケ
「すごい！すごい！」の連発で、もはやギャグメーカーと化しているケンスケ。見ている分には楽しいが、演じている岩永は大変であったろう。「男だったら〜」というセリフの後、Cut24以降は「アドリヴでとにかくほめる」との指示によるもの。キレそうな演技がナイス。

▼Cut30 アスカ「ヘロ〜ォ」
アスカの初登場場面。演じる宮村はアーツビジョン所属の期待の若手声優。本格的デビューは『勇者警察ジェイデッカー』のレジーナ。以降、『ウェディングピーチ』のひなぎくなど、男勝りのキャラクターを演じることが多い。本作ではこれまで、オペーレーターなどを演じていた。AR台本には「ドイツなまり」との指示がある。

▼Cut56 加持「相変わらず凛々しいな」
加持の初登場セリフ……といいたいが、正確には加持は第七話の電話の男として初登場。ただし、制作スケジュールの都合で、第七話のアフレコは第九話のあとであった。また、第八話の彼と立木のセリフは抜き録りで、後で収録された。したがって、山寺宏一が実際にアフレコに参加したのは第九話から。

▼Cut66 艦内アナウンス
「第3小隊は予定通り発艦。当直の第7小隊は第2デッキへ上がって下さい」というアナウンス。演じるは、緒方恵美。彼女が本作でシンジ以外の役柄を演じるのは、これが初めて。

▼Cut66〜78 米国ホームドラマ的TV番組
バックノイズとして流れているTV番組。「ノリよく、テンポよく、舞台っぽく」との指示がある。男は西村知道が、女は山口由里子が演じている。犬の鳴き声は三石琴乃。台本には「できれば、女性の鳴きマネで」との注記がある。ちなみに、本作の音響監督である田中英行が演出したTVアニメ『キャッ党忍伝てやんでぇ』で、三石琴乃が動物の鳴き声などを多く担当しているのは有名な話。このキャスティングとなったのも当然の結果といえる。

▼Cut71 加持「彼女の寝相の悪さ、直ってる？」
とにかくこのシーンでの山寺の演技は絶品。ミサトにちょっかいを出しながら、シンジに探りを入れ、心の底ではミサトのことを気にしていながら、表面上はあくまで軽く、と演出的に要求されているものをクリアしながら、加持という男の幅を表現している。

▼Cut99 アスカ「チャ〜〜ンス」
宮村優子が第八話のアフレコでもっとも苦労したセリフ。現場で何度も「チャ〜〜ンス」とだけ繰り返したという。たしかにちょっと悪戯っ気を含んだニュアンスが難しい。庵野監督も、初登場のアスカのキャラクターを決めるセリフと見て、拘ったのだろう。

●Bパート

▼Cut101 アナウンス「シンベリン沈黙」
演ずるは関智一。Cut138の「オセローより入電〜」のアナウンス男は岩永。Cut170で「目標、本艦に急速接近中！」というアナウンスAは再度、関。

▼Cut137 ドイツ語で命令するアスカ
アスカはドイツ系ということで、宮村はドイツ語に備えて外国語学校に通ったという。その成果がこれ。AR台本ではドイツ語表記にしっかりふり仮名がふってある。大月プロデューサーも現場を訪れたとき、彼女にわざわざ「ドイツ語、うまくできた？」と尋ねていた。それだけ、彼女も気合いを入れていたのだろう。そこまでしてのセリフなのに、シンジが「バームクーヘン」ではイライラもしようというもの（笑）。

【第八話の私服】

▼Cut181 スピーカーからの音声
スピーカーA「予備電源〜」が山野井。以下、順にスピーカーBが山口、スピーカーCが岩永、スピーカーDが関。また、Cut214のスピーカー「エヴァ、目標を喪失！」は山野井。続くCut249のスピーカー男A「総員退艦」も山野井、直後のCut250のスピーカー男B「各フリゲイトは〜」は関。Cut256のアナウンス女「全艦、キングス弁を〜」は山口。Cut270のスピーカー（女）「戦艦、目標へ対し〜」も同じく山口によるもの。また、使徒と戦艦の接触までのカウントダウンを告げているスピーカーは山野井である。

▼Cut208 ケンスケ「いや〜んな感じ」
……最後まで、ギャグメーカーのケンスケ。岩永らしい軽さがよく出ているナイスなセリフ（笑）。

●J.A.の内部に侵入できるようにするため、トーチカ内のコンソールを手斧で破壊するスタッフ達。未だ時田がミサトに協力する事を決断していないのにもかかわらず、現場の人間は自分の意志で協力している。これが時田が、官僚と官僚の間を盥回しにされた後の描写だというのも意味深い。七話は「組織対組織」の話でもあるが、「組織と個人」の話でもあるのだ。

●ラスト近く、リツコがゲンドウに事件の事を報告するシーン。隣に立つ男はネルフ諜報部の人間であるらしい。リツコがこの男を気にしながら喋っている点にも注目。彼に気を許していないのだろう。

第八話「アスカ、来日」

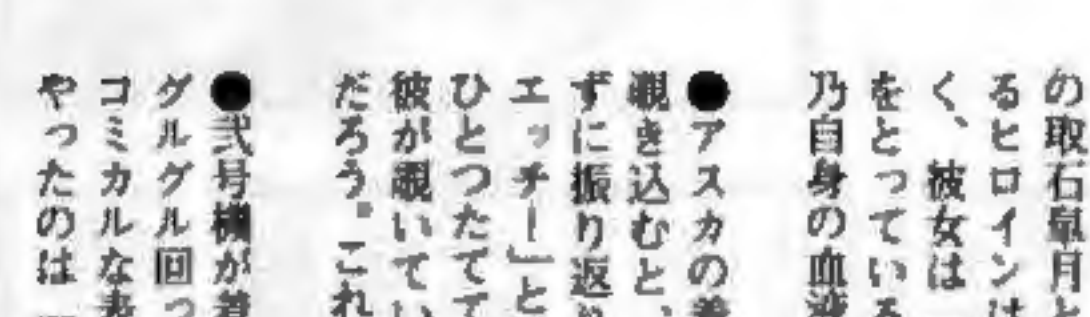
●第八話と第九話は、絵コンテを担当した樋口真嗣の個性が色濃く反映されたエピソード。シンジの性格描写についても、前後のエピソードと少々ニュアンスが違う。彼が監督を務めた『ふしぎの海のナディア』の「島編」（23話以降）とノリが近いため、この第八話と第九話はスタッフに「島編」と呼ばれている。第八話でアスカの平手の音に合わせてサブタイトルが出るのを見て「まるで『ナディア』の25話のようだ」と思った人はかなりのGAINAXマニア。

●サブタイトルが出る寸前、風でアスカのスカートがまくれるカット。劇中ではアスカのパンツが見えているはずだが、画面ではお腹しか見えない。あえてパンツを見せない方がHに見えるというナイスな演出である。ここに掲載したようにセル画では、ちゃんとパンツが描いてある。

●IDカードのアップで、ミサトの血液型がAO型である事が判明。恐らくはO型であろうという大方の予想がここで裏切られた。『美少女戦士セーラームーン』の月野うさぎ、『新世紀GPXサイバーフォーミュラ』の菅生あすか、『アイドル防衛隊ハミングバード』の取石皐月と、三石琴乃が演じるヒロインはO型である事が多く、彼女は「O型声優」の異名をとっている。ちなみに三石琴乃自身の血液型はAO型。

【セル画ではこの通り】

●アスカの着替え中にシンジが覗き込むと、アスカは間髪入れずに振り返り、「覗かないでよ、エッチ！」と叫ぶ。シンジは物音ひとつたてていないのに、何故、彼が覗いている事が分かったのだろう。これも『ふしぎの海のナディア』を思わせる描写である。

●弐号機が着艦する直前のシンジの目が渦巻き状になり、さらにグルグル回っている。これはキャラクターの目が回っている事のコミカルな表現。漫画ではありがちな表現だが、これを本格的にやったのは『トップをねらえ！』であると言われている。第八話は他にも、GAINAXファンにはお馴染みのカット割りや単語も多い。

【文字どおり目が回る】

●最後の教室のシーン。後の壁に生徒の書いた「書道」の作品が飾られている。書かれている文字は「夏の太陽」。この時代の日本には季節が失われている。失われた季節を忘れる事がないように、こういった文字を子供達に書かせているのかもしれない。

●この話は予告編ナレーションも異色。「てんでパラパラ」「コチンパン」等の愉快な言葉が使われている。これも『ふしぎの海のナディア』の「島編」的なセンスといえよう。

【背後の壁に習字】

仮面の下に仮面

執筆 小黒祐一郎

人は誰も、いくつかの「顔」を持つ。ある時は意識的に、ある時は無意識にそれを使いわける。大切なのは、今、自分が見ている他人の「顔」が、どんな意味を持った顔であるかという事だ。

第七話はミサトの多面性についての話でもある。このエピソードでは様々な彼女の「顔」が描かれる。「ガサツな独身女性」のミサト。「凛々しい軍人」のミサト。「素敵なお姉さん」のミサト。リツコがセカンド・インパクトについて説明している時に、顔をそむける彼女。

第七話でシンジは、彼女が家の中と外で「違った顔」を見せる事が理解できなかった。あるいは、J.A.を止めた時は「凛々しいミサト」こそが本当の彼女だと思ったが、翌日の朝には「ガサツな独身女性」に戻っていたので怒ってしまう。

シンジは、彼女が色々な「顔」を持つ事に振り回されているわけだ。

ラストシーンで、人間関係に長けた友人が説明する。「ガサツなお姉さん」は、親しい者だけに見せる「本当の姿」なのだと。人は誰も、いくつかの顔を持つ。ある時は意識的に、ある時は無意識にそれを使いわける。この説明でシンジは納得する。

だが、それは真実なのだろうか。「ガサツなお姉さん」が本当の彼女であり、他の「顔」はそのバリエーションなのだろうか。

同じ話で、シンジの進路相談のために学校に行くのは「仕事のため」だと口をすべらせてしまい、しまったと思う描写がある。この時は、ミサトが「ガサツなお姉さん」を演じているように見える。第弐話においても、彼女がシンジに対して「気さくなお姉さん」を演じている事を匂わせるセリフがあった。ひょっとしたら「ガサツなお姉さん」も、数多くの「顔」のひとつであり、「本当の顔」などは、どこにも無いのかもしれない。人の心とは複雑なモノである。他人について知るのは難しい。他人を完全に知る事などできないのかもしれない。

それにしても驚くべきは、トウジとケンスケである。達観していると言っていい。彼等は、ミサトが「いつも格好いいわけではない」と承知の上で、中学生らしい憧れを抱いているのだ。シンジと彼等。どちらが中学生らしいのだろう。

【第七話の私服】

ガイナさん

ヲタクの戦い 水玉螢之丞

やっと最終回の絵コンテがあがったよ
よかったですねぇ
さあ これからがスケジュールとの闘いだっ
しかしココに、また別の勝負をいどむ男がいた──
ど〜ゆ〜勝負かとゆーと、相手の買いそーなLDのチラシをそれの上においといて、買わせたら勝ち、とゆー
買うてくれはりますよーに
今んとこ やや優勢っちゅうとこですねん だそーだ
あっ 欲しい…
何だかなぁ
ほーらね
はぁ
その庵野かんとくは、ボーズ刈りにしちゃったらしい。ソレが「ダ○ヤ○ンドアイ」のLDとカンケーあるかどーかは不明だけどな

編集後記

●この編集後記を書いているのは、3月の半ば。『エヴァンゲリオン』は、まだまだ制作が大わらわ。そんなわけで、今回の『副監督日記』は休載となった。きっと、次号では復活してくれるに違いない。あれ、前回も同じような事を書いたような……。●今回、ソフトに収録されている第七話と第八話は、ともに榎戸洋司が脚本を執筆しているエピソード。いわば「榎戸特集号」である。そんなわけで、今回は彼に登場していただいた。今後も、機会があったらスタッフに登場していただこうと思う。（鼠）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第伍号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ　豊島ゆーさく

もっと重箱の隅　執筆●小黒祐一郎

第九話「瞬間、心、重ねて」

●冒頭の制御室のシーンでリツコがかけている眼鏡。多分、日本で三人くらいは気がついた人がいたことであろうが、『ふしぎの海のナディア』でエレクトラさんがかけていたのと同じデザインである。

●ブラッドタイプ・ブルーとは……いちいちとりあげるのもアレだが、一応、説明しておこう。岡本喜八監督の『ブルークリスマス』からの引用である。この映画では血が青いのは宇宙人なのである。

●『エヴァンゲリオン』では、キャラクター同士が互いの目を見ながら話すシーンが少ない。特にミサトとリツコに関しては、それが顕著である。第九話のミサトの公務室のシーンは、ミサトとリツコが互いの目を見ながら会話をした珍しいシーンで、ちなみに同じシーンで、ミサトはゲンドウのお馴染みのポーズをやっているぞ。やはり、悩む時にはこのポーズなのか。

【ゲンドウのポーズ】

●「誤解もロッカイもないわ」は、まさしく樋口テイストなセリフである。『エヴァンゲリオン』の他のエピソードでは、耳にする事はできまい。

●アスカがトイレに行くシーン。何故、シンジはSDATを止めたのか？　それを考えてみるのも面白いかもしれない。トイレの中の物音が気になった……という事か？

●アスカの成績が悪かったのは、テストの問題が読めなかったせい。だが、ミサトに成績の事を言われた時、彼女はそれを言い訳の材料にしなかった。それがアスカらしいという事なのだろう。

●弐号機がマグマに突入する際に、アスカは「ジャイアント・ストロング・エントリー」と言う。これは「バックロール・エントリー」と同様にスクーバダイビングの用語。一般には「ジャイアント・ストライド・エントリー」だが、庵野監督は、昔、「ジャイアント・ストロング・エントリー」と習ったのだそうだ。

【♪ゴックリ、ゴックリコン】

●使徒の腕が、使徒キャッチャーの電磁膜を破るカット。破れる電磁膜の処理が特撮ライクでなかなか素敵。庵野監督にどんなテクニックを使っているのか聞いてみたが、「企業秘密」だそうだ。

●孵化するシーンの使徒の声は「人間の赤ん坊の泣き声」を加工したSEを使用したいと、絵コンテやアフレコ台本に書かれている。面白いアイデアである。ただ、実際に使われたのは、通常のSEであった。

【企業秘密のCut】

●アスカがシンジの布団に入ってきた時、シンジの目玉が飛び出しそうになるのも、なかなか愉快である。それにしても、このシーンのアスカの胸は実に立派。さすがは長谷川眞也である。

【飛び出す目玉】

●第九話は「それモン」のマニアには、コマ送りのしがいがあるエピソード。最後の非常電話からアスカの立体映像が出てくるところは大変にグー。このシーンは、変なポーズで文句を言っているアスカも、はしたなくて実によろしい。

【コマ送りしよう】

第拾話「マグマダイバー」

●冒頭でミサトが飲んでいるビールの銘柄は黒潮物産の「BOAビール」。勿論、原点は東映動画のマンガ映画『空とぶゆうれい船』のボアジュース。

副監督日記　「復活の今回は日記らしいネタ」……鶴巻和哉

「この正月はミニ幻魔大戦でしたよ。」

友人の従姉妹が突然霊感に目覚めたらしい。正確に云えば突然ではなく徐々に進行していたのが一気にピークを迎えたのがこの正月だったということだ。

酒の席で「あ。この店、空気が重い。」とか云う女みたいな生易しいものじゃなく、一日中ガタガタ震えてるし、ときどき山伏や即身仏の霊が降りて来て説教や予言を始めたりするのだそうだ。

「十も下の女の子に『有無、許す。』とか云われてもねぇ。」

おどけて見せる彼はまんざら信じてない訳でもないようだ。

「予言がね、当たるんですよ。地震とか。」

地震の予言なんて日本にいればいつか当たるものだし、そういう人に限っていつも「地震が地震が」なんて云ってるから猶予は無期限、いざ当たればまるで自分が起こしたみたいな騒ぎようだ。

この友人みたいにちょっと信じやすい人には予知だお告げだと耳にするチャンスがあるのに、何故か僕にはない。たまにあっても、それは予測や妄想の類いでしかない。

磁石のように信じてもらえる人（つまり効果の高い人）のもとへ吸い寄せられて行くのだろうか。超能力も不信のなかでは不安定になるというのと同じようなものなのかしらん。

「一つね、これが当たったらすごいっていう予言があるんです。ボクのくすり指から赤い糸が伸びてるのが見えるんですって。近いうちに結婚するらしいんですよ。」

相手の名前や性格まで教えてくれたが、彼には覚えがないという。

「これが当たったらもう信じるしかないですよね。」

しかし、くすり指から赤い糸っていうのは何だか嘘っぽい。

「神様や霊が語るにしても憑いた人の脳みその中にあることでしか表現できないんですよ。本人がそう言ってましたから。」

恐山のイタコに外人の霊を降ろしたら岩手弁でしゃべったという笑い話があるが別におかしい事ではないらしい。

ロシア語で自動書記を始めちゃう小学生もどこかでロシア語を見たことがあるはずだ。本人はおぼえていないし、もちろん理解もしていないが意識下のどこかに記憶されている。

だからよく見るととんでもない文法間違いや意味不明の文字があったりするのだという。と、そこまで聞いてこれは多重人格の説明と変わらないと思った。

突然、他人格（この場合、山伏の霊とか）で話し出すというのも表面的には人格の入れ替わりと似ている。知らないはずの言葉を操る多重人格者の説明も前述と同じようなものだった。

同じ現象を、方や神霊で方や精神科学で語っているに過ぎないのかもしれない。どちらもうさん臭いことにかわりないが・・・。

ただ、友人は本当に相手の名前に覚えがないのだろうか。赤い糸の話はシャイな彼が用意したネタ振りにすぎなかったのでは、と少し疑っている。

コレクターの部屋

TVアニメのBGMは、必ずしもその番組のために作られた曲だけが使われるわけではない。既成の楽曲が使われる場合がある。勿論、版権の関係があるので、どんな楽曲でも流用していいというわけではない。

『エヴァンゲリオン』では、『奥井雅美　GYUU』と『Lilia～from Ys～』というアルバムから何度も曲を流用している。

『Lilia～from Ys～』は、ゲーム『イース』のイメージアルバム。三石琴乃の花嫁衣装の写真がジャケットに掲載され、当時、話題になったものである。彼女は、パソコンゲーム『イース』『イースⅡ』でリリア役を務めているのだ。アルバムの内容は、三石琴乃のイメージソング6曲と、ゲームのBGMをアレンジしたインストゥルメンタルが4曲。この中の「You are the only one」は第弐話と第九話で、どちらもコンビニの中で流れている曲として使われている。第九話では他に「蒼いレジェンド」と「遠い海の約束」が、シンジが聴いているSDATの曲として、第拾話では「FALL in STAR」がデパート内で流れている曲として使われている。ヒロインを演じている声優がその作品と関係ないアルバムで吹き込んだヴォーカル曲が、BGMとして使われるというのも実に珍しい事である。

『GYUU』はキングレコードに所属する奥井雅美のベストアルバム。収録されている14曲中、12曲がOVAやラジオドラマの主題歌かイメージソング、あるいはそのカバー曲である。第四話ラストの駅のシーンで、商店街で流れている歌謡曲として使われた「FACE」は、OVA『万能文化猫娘』のイメージソングをカバーした曲（ただし、曲のアレンジは違うのである）。同じく「Bay side love story・from Tokyo・」は『GYUU』用のために作られた新曲である。

さあ、君も二枚のアルバムをDATに録音しよう。ヘッドホンで聴けば、シンジ君気分にひたることができるぞ。

『Lilia～fromYs～』
収録時間48分42秒
KICA－132　¥2500
'92年12月4日発売

「奥井雅美　GYUU」
収録時間63分54秒
KICS－482　¥3000
'95年4月21日発売

ゲリオンな人達

長谷川眞也の巻

――どうですか、『エヴァンゲリオン』に参加してみて？

長谷川　そうですね、僕自身とても興味のあるテーマだったので、とても有意義だったと思います。言っている事は、普遍的なテーマじゃないですか。それを、作り手側と視聴者側の両方の視点から確認できた。発信する作り手側が思う事と、受信する視聴者側が思う事の違いみたいなものを感じ取れて、面白かったですね。

――普遍的なテーマというと？

長谷川　存在の意味を解明する事。ある意味で哲学的なものですよね。

――参加してすぐに『エヴァンゲリオン』のテーマがそういったものだと自覚したの？

長谷川　最初は思春期ドラマのスタンダードかと思ってたんですけれど……結果的には実論主義的になっていったと思います。

――第九話に関しては？

長谷川　いや、第九話はその辺の概念がかなり希薄なもののような気がするじゃないですか。実際、見ている方もそう感じとったから、アニメグランプリとか取っちゃった（注1）。そういう生々しいテーマだったら、評価されなかったと思うんですよね。

――確かに、第九話は番外編みたいなものだからね。2位っていうのは意外だね。

長谷川　あれが2位でいいのか、もっといい話数があるだろうって思いますけれど（笑）。

――長谷川さんが、庵野さんと初めて会ったっていつなの？

長谷川　第弐話をやる、2、3か月前だと思います。『美少女戦士セーラームーンS』をやり始めてすぐくらいですかね。幾原（邦彦）さんに紹介してもらったんですよ。

――その時の庵野さんの印象は？

長谷川　開口一番、レイちゃんのパンクの指の節が許せんと言われました（注2）。いきなり（笑）。

――ああ、ファイヤーソウルの指ね。それが出会いなんだ。

長谷川　噂に違わぬマニアックな人だなと思いました。普通の人は、そんなツッコミしませんからね（笑）。

――いつか長谷川眞也に会ったら、それを言ってやろうと思っていたんだね。

長谷川　業の深い人ですよね。その後、仕事で付き合い出しても、そういう面って、いっつも持ってるんですよね。他の作品に関しても何かしら批評できるポイントを見つけようとする。そこが、庵野さんの人をひきつける方法なんだなと思いました。

――そうすると、同業者やマニアの心をグッと掴むわけだ。

――その後、庵野さんの印象は変わった？

長谷川　仕事に対しては厳しい人で、現場に入ったら相当怖いんじゃないかと思っていた。そしたら、そうでもなく、人に対してえらい気を遣ってくれるっていうか、自分を多分に犠牲にしてまで他人に気配りしているような気がしたんです。ま、ごくごく親しい人から言わせると、全然そんな事はないらしいんですが。

――ふーむ。

長谷川　そういった事が庵野さんのネットワークの広さの秘密なのかなと思いました。いい監督って、技術のみならず、現場の人間をまとめあげる人徳もあるじゃないですか。思わず仲間に引き込まれてしまれて、仕事を手伝うような。カリスマ性っていうんですかね。そういうものを多分に持っていたので、だから監督としては一流なんだなと思いました。僕は業界入ってから、そういう演出家には数える程しか会った事ないですから。実作業でも一流でしたね。

――第九話はどんないきさつで作画監督をやる事になったの？

長谷川　庵野監督から、ライトな話があるんだけど、やってみないかと言われたんです。ギャグ的だし、やって楽しい話だから長谷川君にはぴったりだと。そのとき僕は第弐話で既に原画をやっていたので、作品の世界観とか大体分かっていたんですが、そういう話なら僕にもできるかなと。多分、庵野さんも、僕の『セーラームーン』とかを見て選択材料にしてくれたんだろうし、そういう事で誘いにのってみました。

――実際にやってみると？

長谷川　それまでは東映で、『セーラームーン』中心でやってたわけなんですけど、自分の実力を評価されて他社から大きな仕事を得るというのは、その時が初めてだったんですよ。それで相当気合が入って、GAINAX内に席を用意してもらい、自分で知り合いの原画マンに声をかけて手伝ってもらいました。ま、気合入れ過ぎて、ちょっとハメをはずしすぎたかなというのはありますけど。

――あの回は、相当に画面が賑がしかったよね。

長谷川　ま、求められているものがそれかなと思って。

CASTから一声　山口由里子の巻

がんばれアスカちゃん2

作／むっちりむうにい

でも、やはりGAINAX作品なので、抑えなきゃというのと、ここで無個性化したら、何も僕でなくてもいいじゃん、と暫くの間はジレンマに苦しみました。まあ、後半は疲労困憊し、思わず本能だけで乗り切ってしまいました……。が、ラッシュを観て苦笑する監督に「大成功するか大失敗するか」だと監督にも言われたんですけど……案の定、大失敗して（笑）。

――自分では大失敗だと。それは、バランスですか、それとも……？

長谷川　やはりバランスもそうですが、キャラに慣れていないというのがまず一つ。あとは時間をかけすぎて、ポイントを絞り切れなかったという事かな。

――実作業としてはどれくらい？

長谷川　4か月くらいですかね。僕は、東映の仕事でタイトなスケジュールに慣れていたので、時間をたっぷりかけての作業に新鮮さを感じましたね。GAINAXの作品だと、1本に半年位かけてもいいんじゃないかって気がするけど、実際はそうじゃないんですよね（笑）。相当、制作さんにも迷惑かけたと思ってますけど。

――自分で原画を描いたシーンは？

長谷川　シンジとアスカがキスしそうになるシーンがそうです。一コマで唇が近づいていくあたり、劇場版の「セーラームーンR」を意識してるんですけどね。多分に、自分の今までの仕事で評価をうけたところをリフレインする意味で、「セーラームーン」的画面を狙ったところは、いくつかあったんですけど。

――6日間の特訓のところの原画は誰なんですか？

長谷川　あそこは摩砂雪さんです。監督から「摩砂雪の原画はまったく手をつけずに通すか、全部直すかどちらかしかないよ」って言われて。昔から噂は聞いていたんですが、あんなにコテコテの原画は初めてでしたね。

――というと、枚数が多いとか？

長谷川　枚数多いし、画に非常にクセがあって、かつタイミングがすごくフクザツ。これは触りようがないのかもしれないと、大方そのままです。

――ラーメン食べるカットとか、動きと曲があっているよね。あれは摩砂雪さんのアイデア？

長谷川　摩砂雪さんです。曲合わせは相当大変だったと思いますよ。

――曲合わせの作業って、作画する時に摩砂雪さんが自分でやってるの。

長谷川　ええ。タイミングづくりは、曲合わせパートの原画さんが、各自で行って、最終的に編集で合わせてます。

――じゃ、最後の62秒のところは。

長谷川　あそこは、渡部圭祐くん（『覚悟のススメ』キャラデザイン・作監）と、中村豊さん（『テッカマンブレード』メカ作監）にミュージックテープを渡して、曲に合うように作画してもらったんですけど、非常にナイスな仕上がりになったと思います。

――修正は、どれくらい入ってるんですか？

長谷川　いや、メカはほとんど入れていません。多少レイアウト段階で手をいれたり、やりすぎなところを抑えるようにはしたんですけど。

――最後の非常電話は？

長谷川　あそこは小倉陣利さんです。あそこは、ギャグ好きの小倉さんらしさが出るように、好きにやってくださいとお願いしました。原画マンの方々を誘った時に、コンテに照らし合わせて、誰がやったら一番効果的かという事を自分で考えたんです。

――『エヴァンゲリオン』に関して、他に思い出深い事などは？

長谷川　一番最初にコンテを見た時に、情報量が段違いだなと驚かされましたね。それまでの仕事で経験したコンテというのは、大体シナリオから作画に移る叩き台という印象があったんですけど、GAINAX作品の場合は、ちょっと乱暴な言い方ですが、コンテでフィルムの7〜8割方完成。そのくらい情報量があるんです。コンテの情報量を、作画でさらに拡大させるのはすごい大変でしたね。

――感情的な事とか、表現が難しい事まで書いてあるよね。顔は笑っているけれど、本当はこう考えているとか。

長谷川　以前、そういうのを見たのって、佐藤順一さんのコンテくらいだったんです。EVAの他話数に関しても、多分に作画に対して挑戦的なコンテが多い。ある意味、作画にとって、とてもやり甲斐のあるんですけど。それまでの仕事に食傷気味だったので、非常に楽しかったです。いろいろチャレンジできたし。

――チャレンジというと。

長谷川　コンテとコンテの間を読み取って、それを限られた描写、一枚絵とか、表情の画にフィードバックさせる作業ですね。コンテで描き表している画期的なものは、それほど複雑なものじゃないんですよ。ワンカットの中でも、長回しでキャラが芝居したり、カメラをあちこち振ったりとかほとんどないわけで。コンテに無駄がない。だから、作業的には単純に済むはずなんですけど、この単純な画一つ一つの間の感情まで描き込まれている。そこを逆に刺激される。

――自分の仕事として思い出深いのは？

長谷川　時間をかけたし、気合の入り方からいったら第九話が一番印象に残っているというか。第九話以外、ほとんど時間なかったですからね。自分の担当原画のカット数も少なかったし。

――第九話は、自分の画柄に近いんですか。

長谷川　いや、そうとも言えないと思いますけど。画柄的には第拾六話がまだ近いんじゃないかなと。

――第拾六話の方が、普段の『エヴァンゲリオン』に近いよね。

長谷川　ようするに、まだ前の作品をひきずっていた時期だったので、非常にバランスが悪かったんです。貞本さんのキャラを消化吸収しきれなくて。だから、今見ると非常に苦痛なんですけど。未完成ぽくて。

――あなたから見ると、貞本さんのキャラは動かしやすい？

長谷川　非常に難しいと思います。単純化されているんですけど、一本一本の線がとても重要なんです。ものすごい立体感を持っているように見える時もあれば、マンガチックに見えるような時もある。そのテクニックというのは、会得するまで大変なんですけど、一旦マスターしてしまうと、これがまた非常にラクチンだったりするわけですよ。『ふしぎの海のナディア』の後に貞本さん風の画が流行った時期がありましたよね。参加したメンバーがその後も、そういう画を継承していったんだと思うんです。難しいけど、慣れると非常に抗し難い魔力を秘めた画だという事なんでしょうね。

――単に今風の画であるという事ではないんですね。

長谷川　ええ。バランス的に、非常にいいラインだと思います。名作ものみたいな清潔感もあれば、美少女系のようなマニアの心を揺さぶるような画でもある。今回の仕事では、それを会得したというより、体験できたので、実のある一年だったと思います。では、今やっている仕事では、またまた、絵柄を変えていかねばならず、んごいツラいっスよ（笑）。

【注1】第九話は徳間書店主催の「第18回アニメグランプリ」のサブタイトル部門で、2位だった。

【注2】「美少女戦士セーラームーン」のファイヤーソウルのバンクカットは、彼が原画を担当した。指がたくましい。

声優博士の ちょっちチェック

小川びい

〈第九話〉

●Aパート

▼Cut1　男子学生たち

アスカの噂話をする男子学生たち。今回唯一名前のある外野の声である。EX男子学生という怪しげな名前が『トップをねらえ！』の女子学生Σといった名前を彷彿とさせる。清川元夢を除く、男性声優全員が参加している。A「おい見たかよ」が子安武人。B「見た見た」が関智一。C「何が」が岩永哲哉。D「グーだよなぁ」が結城比呂。E「バカ云え〜」が山寺宏一。

▼Cut16　アスカ「ヘロォ」

前回と同じく独語ナマリとの指示がある。Cut28も同様。一種の繰り返しギャグ。

▼Cut38　加持「少し痩せたかな」

山寺宏一の面目躍如のくどき声。ささやき声でとの指示にみごとに応えた。

▼Cut39　リツコ「どうしてそんな事が解るの？」

リツコも甘い声で加持の声に応える。裏返ったささやきとの指示がある。さらに「どうして」で息を吸い、「そんな事が〜」で息を吐くとの指示もあり、結果、甘い会話の雰囲気を醸し出すことに成功している。同カット内での「でもダメよ」という、普段の声への変化がまた楽しい。

▼Cut41　ミサト「フンガ〜〜」

憤懣やるかたないという感じで、鼻息がガラスを曇らせる場面。セリフではなく鼻息なのは三石琴乃のアドリブ。処理としては彼女の鼻息にさらにエフェクトが加えられているようだ。

▼Cut115　シンジ／アスカ「何でこんな奴と―」

今回はこの場面に限らず、全編に渡ってセリフのタイミングを揃えるギャグが続出している。演じる声優陣はかなり苦労しただろう。

▼Cut119　ミサトとリツコとの会話

互いに気を許し合った会話の、甘えるようなニュアンスが楽しい。旧友といいながら意外に本作では2人のこうした雰囲気の会話は少ない。

▼Cut164　顔を背けるアスカ

シンジと顔を見合わせた後、プィッと顔を背ける場面。「プィッ」というかわいらしいセリフは台本には指示がなく、アフレコ現場での、庵野監督の要望によるもの。

●Bパート

▼Cut173　ケンスケ「イヤ〜ンな感じ」

これまた第八話と対をなすセリフ。岩永のおどけた調子が愉快。

▼Cut177　ヒカリ「ゴカイもロッカイもないわ」

「宮崎アニメ泣き」をしながら（と台本に書いてある）イヤイヤをしているヒカリ。セリフが妙に古くさい。岩男潤子の裏返ったような声がけなげで聞き物。

▼Cut188　ヒカリ「碇くん！」

アスカを泣かせたことでシンジをなじるヒカリ。ボケのシンジと怒るヒカリとの対比が楽しい。AR台本ではこのセリフは「言い方としては委員長っぽく」との指示がある。命令口調で、という意味なのだろうか？　ともかく、実際の表現はよりギャグ調の強いものになっている。岩男ファンにはこたえられないセリフ。

▼Cut230　シンジ「!!」

アスカの急接近に驚くシンジ。ここからの一連の場面は、緒方恵美の息の演技が絶妙。スピーカーの音量を大きくして聞きたい。

▼Cut249　ミサト「やっだ、見てる」

シンジとアスカのお子様な場面から一転、ミサトと加持との大人のラブシーン。こちらもまた息の芝居。三石琴乃の艶っぽい息が素敵。Cut254の「もう、加持君とは何でもないんだから〜」というセリフも心なしか甘えるよう。

▼Cut314　冬月「またハジをかかせおって」

ギャグ編を象徴するように、普段はシブイ冬月のおどけたセリフで本編了。

【第九話の私服】

〈第拾話〉

●Aパート

▼Cut3　デパート・アナウンス

水着コーナーでアスカたちが買物している後ろに流れていたアナウンス。岩男潤子が担当している。

▼Cut42　女（スピーカー）「浅間山の観測データは〜」

発令所に流れる女性の声。担当は林原めぐみ。Cut114、Cut116などのスピーカーからの女の声も同じく林原。一方、Cut162での男（スピーカー）「進路確保」は岩永哲哉。

▼Cut75　浅間山地震研究所の所員

「もう限界です」とミサトに迫る男。関智一が演じている。同じシーン・Cut78での亀裂発生を伝えるアナウンス女は岩男潤子。Cut87のアナウンス女も同様。

▼Cut96　人類補完委員会

「A―17!?」と驚いている委員Bは関智一が演じている。一方、Cut98の緑色のライトに照らされているのが委員Aで、こちらは永野広一。第弐話では長嶝高士が演じていた。永野はCut226でのペンペンを運んできた宅配人も演じている。

【これも第九話の私服】

●Bパート

▼Cut146　ロープウェイ

加持と会話している謎の女。演じているのは岩男潤子。あくまで余裕を失わない山寺の演技も楽しい。

▼Cut225　作戦成功後のミサトとリツコの会話。

大人な感じ、との指示がある。実際にどうなったかは画面で確認して欲しい。

▼Cut252　アスカ「遅い」

本作はひとりごちるセリフが多いが、それは勿論、リアルな気分を演出するための物。『機動戦士ガンダム』以降、特に広く流布した手法だ。「遅い」というのは特に『ガンダム』的な気分を彷彿とさせる。

▼Cut314　アスカ「せっかくやったのに」

茫然としたまま、口元は笑っている様にとの指示がある。実感をともなっていないとの説明だが、実際の演技ではそれを越えて、諦念すら感じさせている。実はアスカも、シンジやレイのようにどこかで、この世界で生きることを諦めている人間なのかもしれない。

▼Cut325　アスカ「バカ……無理しちゃって」

AR台本では、いい顔で、との指示。それまでキンキンと刺々しかった様から一転、優しげな様子に変貌する。なかなかの好演。

▼Cut338　温泉でのアスカとミサト

何やらHなムードさえ漂う会話が楽しい。シンジをからかっているのか、それとも単にじゃれあっているだけなのか。いや、役者が視聴者に「サービスサービス」しているのかも。

【やっぱり第九話の私服】

※前回の「ちょっちチェック」にて、大塚芳忠の『ネクストジェネレーション』での役名をボーグと記しましたが、データの誤りでした。お詫びして訂正します。猛省。

ガイナさん

せーふくものはご用心……の巻　水玉螢之丞

丸みのついたセーラーカラーのブラウス

独特な色とデザインがポイント高い、市中の制服。

赤いリボンタイ

プリーツスカート

前スカートはボックスプリーツ×2

モデルになった制服があるのでは、と研究してみましたが、どーにも特定できないので、

色は中村が担当

でもウエストのボタン2コは星美のデザインだし

明の星かも…

ブラウスは日本橋女学館のからラインとったかんじだし

キャラデザの貞本さんにうかがってみましたら…

あーアレはねー

いろんなとこのを混ぜたんだけど、中でも参考にしたのは

わくわく

上のは…？

えゔぁ川柳

無防備な　カッコの女が　一人増え ■ ツイスター　どこからミサト　持って来た ■ 決戦前　未遂と強引　キス二態 ■ 据膳を　食わないシンジ　いくじなし ■ ユニゾンも　62秒で　解消か ■ 胸元に　ついつい目が行く　男の子 ■ 金出せば　いいのかミサト　観測機 ■ バカという　アスカの言葉も　やさしくて ■ 温泉で　シンジの股間も　熱膨張 ■ らしからぬ　乳のゆれない　温泉シーン

今日の珍品

【ネガフィルム】

第九話冒頭でトウジ達が持っていたネガ。実際に、カメラで本編のセル画を写し、現像したネガを本編で使っているのだ。このネガからプリントをおこせば本当にアスカの生写真ができるはず。

スターチャイルドからのお知らせ

【お知らせ1】

初回特典のLD5枚収納BOX仕様が、あっという間に完売してしまったGenesis 0:1。買い逃してしまったファンの皆様の熱烈なコールにより、そのGenesis 0:1の復刻版BOXが特別通信販売されることが決定しました。この復刻版BOXを手に入れるためには、'96年7月5日発売予定のGenesis 0:8と、'96年11月1日発売予定のGenesis 0:10のそれぞれ初回製造分にのみ付いている応募券（※）の両方が必要となりますので、お買い逃しのないようにご注意下さい。尚、詳細はGenesis 0:6の初回製造分（こちらもBOX仕様となります）を御覧下さい。

※通常の応募者全員プレゼントの応募券とは別に付きます

【お知らせ2】

'96年3月、惜しまれつつテレビ放送を終了した「新世紀エヴァンゲリオン」ですが、この度改めまして第弐拾伍話及び最終話を、当初の脚本に準じた形で制作する事が決定致しました。こちらの2編はテレビ放送されたものと大幅に異なるため、未放送地区のお客様の事も考慮して同一話数同士をカップリングとして発売、よって最終的にはGenesis 0:14までの（もしくはGenesis 0:13を2枚組として）発売となる予定です。また、第拾九話は再ダビング版に、第弐拾壱話から第弐拾四話は放送時の内容に新たなシーンを追加したリテイク版となります。詳細は決定次第「EVA友」にてお知らせ致しますが、編集時期の都合により各雑誌記事や広告の方が早く情報が掲載される可能性があることを御了承下さい。

（スターチャイルド）

編集後記

●先日、『エヴァンゲリオン』のTV放送が終了した。最終回の放映前後、ファンとアニメ業界は大変な騒ぎであった。当惑する人、怒る人、誉める人。多くの人が感情的になった。単に『エヴァンゲリオン』における問題だけではない。アニメに関する様々な問題も、露呈したと思う。スタッフは、アニメーションがやるべき事は何なのか。ファンは「作品」に何を求めるのか。「作品」とは何なのか。今後、「EVA友」は、そういった事についても考えてみたい。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第六号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第拾壱話「静止した闇の中で」

●選挙カーに乗っているウグイス嬢のルックスは、何となく「エヴァンゲリオン」のキャラクターらしくない。実は、このエピソードの作画担当は、宮崎駿作品で知られるスタジオジブリ。ウグイス嬢は、ジブリ的な画風のキャラクターといえるのかも。

●「エヴァンゲリオン」では、メインキャラクターの年齢や血液型も、設定されていない場合が多い。だが、このエピソードに登場した市議選立候補者の高橋覗、どういうわけか、この名前しか出てこないキャラクターについては、プロフィールが詳細に設定されている。以下の通りである。「高橋覗。54歳。1960年生まれ。1982年国立大学卒業後、東京の某出版社に就職。1989年映画製作部門に配属。1991年よりプロデューサーを務める。2000年退社後、地元に帰り、以後、政治家として活躍」。高橋覗の名前の元になった、スタジオジブリのプロデューサー（当時）高橋望のプロフィールをベースにして作られた設定であることは説明するまでもあるまい。

【ウグイス嬢はジブリ的？】

●第拾壱話ラスト。小高い丘の上で、シンジ、アスカ、レイが第3新東京市を見おろすシーン。脚本段階では、彼等の脇で青葉がギターを弾きながら歌をうたうという案もあったのだそうだ。おおっ、まるでキャンプファイヤーのようだ。その展開なら、コインクリーニング屋のシーンで彼がギターをもっていたのは、それの伏線になったというわけだ。

●裏話をもうひとつ。第拾壱話は、脚本＆絵コンテの段階では、エレベーターに閉じこめられたミサトと加持のシーンが、もういくつか用意されていた。加持がミサトにシリアスな事（恐らくは過去の事であろう）を話そうとすると、ミサトが「ごめん、今は言わないで」と止めるくだりもあった。また、絵コンテ段階では、シンジ達が進んだ、ネルフ本部へ通じる地下通路が入り組んでいるのは「テロ工作を防ぐため、わざとそうしているのだ」とレイが、説明するくだりがあった。

【青葉のギター】

第拾弐話「奇跡の価値は」

●ミサトが飲んでいるのは、第拾話と同じ「BOAビール」。ただし、第拾話は500ミリリットル缶で、第拾弐話は350ミリリットル缶。ミサトは愛飲するビールの銘柄は「エビス」から「BOAビール」にかわったようだ。

【350ミリ缶だ】

●遺書を書くかとミサトに尋ねられて、シンジ達が断るシーン。それぞれの断る理由は違うのではないか。アスカは絶対作戦を成功させてやるという想いからこう言っているのに違いないし、シンジは遺書を読ませたい相手も伝えたい内容もないから、あるいはアスカとレイにあわせただけ。それでは、レイは？　これは彼女のキャラクターを考えるうえで大切なポイントであるはずだ。この台詞を言うときの、彼女の目をみせないようにしている演出に注目。

●終盤で、シンジ達が乗っているのは第四話と同じ、第3新東京市第7環状線の列車。ただし、列車のデテールは微妙に違う。シンジ達が行ったラーメン屋は、第3新東京市の旧市街。街の名は新宮ノ下。すなわち、兵装ビル等がある中心部から離れた場所にあるものと思われる。

【デテールが違う】

●ラストのラーメンの屋台でかかっている曲は、第四話の駅

CASTから一声　立木文彦の巻

碇ゲントウ

碇ゲンドウ

（サイン）のたわ言……

エヴァンゲリオンはエンドマークの無いアニメーションである。

碇ゲンドウという役は声を吹き込む必然性の無い完成されたキャラクターである。

眺めているだけで夏の風が吹いて来そうなこのジャケット、素晴らしいです。アスカ派で良かった。

そんな「NEON〜Ⅲ」は作品後半に使用されたBGMが収録されていますが、中でも最終話でしか使用されなかった曲が印象的です（「ウルトラマン」の最終回で、初使用のBGMが画面に異質な緊張感を持たせていたのを思い出しました）。アルバム後半は「FLY ME TO THE MOON」TVサイズの嵐、そしてラストはTV未使用の〈Aya London Beat Version〉。こちらは本来は〈Aya Bossa Techno Version〉のバリエーションの筈だったのですが、リミックスを担当したロンドン在住アンドレイ・シャフスキー氏が大ノリで、ヴォーカルのスピードは変えるし関係ない音ばっかり入れるしで、全くの別モンになってしまったのです。なんかチリチリいってるのも当然わざと入れてある音ですので、「CD買ったら雑音が入ってんだけどさぁ〜」と云ったクレームの電話は御遠慮願います。

それではここで「FLY〜」TVサイズの全曲収録を記念して、各バリエーションを表にさせて戴きましたので御参照下さい。

尚、未収録とあるのは96年5月現在のCDリリース状況においてのことであります。

バージョン名	ヴォーカル	使用話数	フルサイズ収録盤	TVサイズ収録盤
※1	CLAIRE	1〜4、11、18、19	シングル②③、アルバム①	アルバム②
〈Rei (#5) TV.Size Version〉	Rei	5	（フルサイズなし）	アルバム② ※2
〈Rei (#6) TV.Size Version〉	Rei	6	（フルサイズなし）	アルバム②
- 4 BEAT VERSION - ※3	YOKO TAKAHASHI	7、12	シングル②	アルバム③
〈Aya Bossa Techno Version〉	Aya	8、22	アルバム②	アルバム③
〈YOKO TAKAHASHI Acid Bossa Version〉 ※4	YOKO TAKAHASHI	9、13	アルバム①	アルバム③
〈YOKO TAKAHASHI Version〉	YOKO TAKAHASHI	10、14、21	（未収録）	アルバム③
- 4 BEAT VERSION - 〈OFF VOCAL VERSION〉	（カラオケ）	15	シングル②	アルバム③
〈OFF VOCAL VERSION〉	（カラオケ）	16、24	シングル②	アルバム③
〈Aki Jungle Version〉	Aki	17	アルバム②	アルバム③
(B-22Aタイプ) ※5	（オリジナルサウンドトラック）	20	（未収録）	アルバム③
〈Rei (#23) TV.Size Version〉	Rei	23	（フルサイズなし）	アルバム③ ※6
〈Rei (#25) TV.Size Version〉	Rei	25	（フルサイズなし）	アルバム③
〈Rei (#26) TV Size Version〉	Rei	最終話	（フルサイズなし）	アルバム③

※1：CLAIREのバージョンは便宜上〈Main Version〉と呼称されるが、CDに収録されたものに特別な表記はない。

※2：(#5)(#6)共にテレビ用に急遽録音されたものであったため、CDにはリミックスして収録。

※3：同ディスク収録の〈OFF VOCAL VERSION〉と両脇の記号がダブってしまうためシングルの上ではこの表記にしてあるが、それ以外では見やすさを優先して他の記号が付いても問題はない。大文字にしてあるのも単に目立つようにするため。

※4：アルバム①に収録されたこの曲より、ヴォーカリストの名前を最初に入れるようになる。

※5：元はBGMのためMナンバーを（ ）で括ってあるが、アルバム③ではエンディングとして統一するため〈 〉で表記された。

※6：(#23)以降のReiの3曲は、元々CD収録を想定してトラックダウンしてある。

注：〈Main Version〉は「All I worship and adore」の箇所が「オラは知ってんだどー」と聴こえるが、けして歌詞をダブルミーニングとしている訳ではない。

シングル②＝KIDA-115　FLY ME TO THE MOON
c/w　FLY ME TO THE MOON ―4 BEAT VERSION―
シングル③＝KIDA-118　残酷な天使のテーゼ
c/w　FLY ME TO THE MOON
アルバム①＝KICA-286　NEON GENESIS EVANGELION
アルバム②＝KICA-290　NEON GENESIS EVANGELION Ⅱ
アルバム③＝KICA-300　NEON GENESIS EVANGELION Ⅲ

副監督日記「王様の映画」

鶴巻和哉

「エド・ウッド」という映画がある。ティム・バートンが監督だから話題にもなったし、実際見た人も多いのじゃないだろうか。史上最低の映画監督といわれるエド・ウッドをユーモラスに描いたモノクロ作品だ。

僕はエド・ウッドの名前は知らなかったのだけど10年ほど前に買った「SF・ホラー映画ベスト100」みたいな本の中で紹介されていた「外宇宙からの第9次侵略計画」なる映画のことがずっと気になっていた。

97位くらいにランクされていたこの映画についてのキャプションは「まったくわけがわからない。史上最低の映画だ。」というものだった。

史上最低の映画と断定しているにもかかわらずベスト100にランキングされていることじたいわけがわからないが、30位以降になると各映画の紹介も1／8頁程度、スチールもなしというのがほとんどなのに、何故かこの最低映画には半頁を割き「猿の惑星」や「ブレインストーム」より大きなスチール入りだった。自主映画でも半端にダメなやつは全く記憶に残らなかったり、だんだん怒りが込み上げて来たりするのだけど、突き抜けたダメさというのは逆に愛しく思えたりする。たぶん、この映画はほんとにダメ映画なのだ。そしてこの本の編集者はそれゆえにこの映画が愛しいのだ、などと勝手に想像した。

最低だ、と言われればその最低ぶりを確かめてみたくもなるが、古い映画で最低の映画でもあるから当然テレビ放映されることも名画座でかかることもなく、当時急速にリリースされ始めたビデオになることもなく、「時かけ」のもとネタ「ラ・ジュテ」やフランスのスピルバーグと呼ばれたリュック・ベッソンの「最後の戦い」などと同じように決して観ることのできない映画の一本だろうと思っていた。

そこにティム・バートンの「エド・ウッド」である。

この史上最低映画「外宇宙からの第9次侵略計画」こそ、史上最低監督エド・ウッドの代表作であったのだ。

便乗商売で「エド・ウッド」の公開中にどこぞのミニシアターで「外宇宙からの第9次侵略計画」も上映していた。いざ見に行けるとなると気持ちも萎える。だって最低な映画なのだ。結局、行かなかった。

「エド・ウッド」も後にLDで観た。映画の中で悩むエドに対してオーソン・ウェルズが語る台詞が心に残る。彼の「市民ケーン」はまちがいなく史上最高の映画のひとつだが、興業的には成功しなかった。

オーディエンスには最高であれ最低であれ評価する権利がある。だけど、映画はただ監督のためだけにあるのである。

がんばれプラグスーツ組

作／むっちりむうにい

のシーンでも使われた奥井雅美の「Back side love story ―from Tokyo―」。この歌は『エヴァンゲリオン』世界における流行歌謡曲なのだろう。

●この辺りで読みづらいのがアスカの、シンジとレイに対する気持ち。第拾話では「あなたにだけは弐号機にふれてほしくないの」とレイを強く拒絶。第拾壱話の地下通路のシーンでは、彼女の事を独善者と言い、それについてシンジに同意を求めようとしている。だが、同じ第拾壱話でレイの発言に対して「哲学ぅ!」とふざけつつも認めているのに対して、同様の事を言っているシンジに「あんた、馬鹿じゃないの」と言う。アスカは、恐らく深い考えは無く、その場その場の感情でシンジ寄りになったり、レイ寄りになったりしているのだろう。第拾壱話で、レイの事を仲間として認める気になったという事なのか。それともライバルになりそうもないと見切ったのか。

映像特典

●今回の映像特典はキングレコードの『エヴァンゲリオン』関係のTVスポット集である。収録されたのは「シングルCD編」「先行ビデオ編」「ビデオ&LDの第壱巻」「ビデオ&LDの第四巻」の4バージョン。ナレーションはそれぞれ三石琴乃、林原めぐみ、長沢美樹、宮村優子が担当。編成の都合等もあり、本放送中に『エヴァンゲリオン』の枠内で放映されたのは「シングルCD編」のみ。他は未見の方が多いのではないだろうか。その中でも「先行ビデオ編」は、他の番組中での放送もほんの数回のみというレアなバージョン。「ビデオ&LDの第四巻」は、30秒間まるまるアスカの声と映像で埋め尽くされているというファンには超おいしいバージョンであった。

【随筆】失礼な言葉

小黒祐一郎

いきなり個人的な思い出話である。中学の頃に、同じクラスに少し生意気で、少し綺麗な女の子がいた。ある日、私は彼女に「頼りない男」と言われた。どうしてそんな失礼な事を言われたのかは、憶えていない。ただ、彼女の言葉の「男」という部分のみが、やたらと生々しく、ドキリとした。

『エヴァンゲリオン』を観ていて、その事を思い出した。そして、あの時の生々しさの理由がわかった。彼女は、私を「男」として評価していたのである。男子生徒を「男」として評価する女生徒。それは「女」でしかない。子供じみた「男子と女子の関係」だと思っていたのに、いきなり、「男と女の関係」の物差しで計られてしまったのである。そのニュアンスを感じとったから、当時、私は生々しいと思ったのだろう。

惣流・アスカ・ラングレーも、同い年の男子に対して、たびたび「あんた、男でしょ」という発言をする少女である。何故、彼女はその言葉を繰り返すのだろうか。

彼女は、同年代の男の子に頼ったり甘えたりはしない少女にみえる。むしろ、「男の子なんかに負けないわよ」と、頑張る少女である。男の子になりたかった女の子なのかもしれない。男の子よりも強くなりたい女の子なのかもしれない。精神分析で言うところの男性的抗議の傾向の強い女の子なのかもしれない。

彼女にとって、男の子はライバルである。自分が努力した結果、勝つべき相手なのだろう。彼女は自己実現願望が強い。より立派な自分を実現したいと思っている。だから、自分が倒すべき相手、すなわちライバルは、より立派で、より強くなくてはならない。だが、彼女のライバルになるであろうサードチルドレンは、彼女のライバルにふさわしい、立派な相手では無かった。パイロットとしての才能はともかく、日常的には実に情け無い男の子だったのである。だから、彼女はシンジに言わなくてはならないのだ。「あんた、男でしょ」と。

もう一つ、こういう見方がある。より自己実現願望が強い彼女は、より強く幸福を求める女性でもある。したがって彼女はこう想う。「自分は素晴らしい女性になるのだから、その伴侶となる人間は、より素晴らしい男性でなくてはならない」と。自分に相応しい男性は、自分が知っている中で最も素晴らしい男性で無くてはならない。それが、現在においては加持なのだろう。それ以外の男性は無意味だ。それどころか、明らかに自分より劣った男性は、いるだけで腹が立つ。

アスカの言葉の裏には、そんな意味があるのではないか。アスカは「男の子なんかに負けない」と頑張りながら、「こんなに頑張っている私に相応しい男性はどこ?」と追い求めているのではないか。彼女が頑張れば頑張る程、周りの凡庸な男の子達とのギャップは開いていく。

彼女の言動は矛盾しているかもしれない。だけど、それはきっと今の世の中においては珍しくない矛盾であるはずだ。そんな女の子は、自分より劣っている男の子で我慢するのか。あるいは加持のような年上の男性を探すのか。どちらにしろ、女の子が「あんた、男でしょ」などと親切に言ってくれた時には、男の子は奮い立つべきでなのであろう。

では、中学の頃に「頼りない男」と言われた時に、私はどうしたのか。奮い立つどころか、ただただ吃驚しただけだった。

だから、シンジの事は笑えないのだ。

今日の珍品

第拾弐話で、ミサトとシンジが自動車に乗っているシーンでかかっていたラジオのＤＪの喋り用の台本である。このパーソナリティーは、ミサトと同じセカンド・インパクト世代であるようだ。

C68〜75（カーステからのラジヲ番組・OFF・左寄り）

女パーソナリティー「――という第二東京にお住まいの『ワー君』からの御ハガキでした。でもまぁ、何だね。女にふられたからって、そうグダグダとイジケないこったね。私が小さかった頃はこの辺もバラックばっかでサ、その日御飯が食えたら御の字ってやつ。好きな人の事でとやかく云えるゆとりってもんがなかったからねぇ。御両親が健在で、食いもんの心配しないですむだけ、ありがたいんだぞ。今は。しあわせを噛み締められる、いい時代なんだよ、今は。わかってんのかな？『ワー君』」

声優博士のちょっちチェック

小川びい

〔第七話〕

●Aパート

▼Cut4　子供の声

「うわ〜い、あたったあたった」と言いながら通りすぎる子供。演じるは矢島晶子。「アイドル伝説えり子」の主役えり子で、いきなりアニメデビュー。その可憐な声でファンに衝撃を与えた。その後、「クレヨンしんちゃん」のしんのすけの憎らしい声で、全国的に知られるようになり、現在に至る。ほかに「クマのプー太郎」のしあわせうさぎ役も記憶に残る。子供の声ならお手のものだ。また、本作の音響演出を担当している田中英行と彼女はデビュー以来の長いつきあい。デビュー前、小劇団にいた彼女を見いだしたのも彼なのだ。

▼Cut8　コインクリーニング

自動クリーニング機とでもいうのだろうか、洗濯機の声の「ありがとうございます」の声は長沢美樹。

▼Cut30　男「ギリギリの計測誤差の範囲内ですが〜」

演じるは宇垣秀成。Cut28「電源回復します」も同じ男。ちなみに台本では「ギリギリ計測誤差の範囲内ですが〜」となっている。Cut247の「2番から32番までの油圧ロックを解除」という男の声も宇垣だが同じ男だろうか。

【アッシーのような日向】

▼Cut46　女秘書の声

シンジの電話をゲンドウにとりつぐ女性。宮村優子が演じている。

▼Cut60　下のフロアの女の声

発令所の下のフロアから冬月に叫ぶ女性オペレーター。演じているのは林原めぐみ。

▼Cut62　ウグイス嬢の声

声は矢島晶子。Cut144でのおびえる演技がカワイイ。他の番組では主役クラスの矢島だが、本作ではウグイス嬢とは粋なキャスティングだった。ちなみにCut148で登場するこの車の運転手は永野。

▼Cut84　男（スピーカー）の声

管制所に響く男の声。演じるのは永野広一。Cut88も同様。同Cut88での女のスピーカーからの声は三石琴乃。

▼Cut85　軍人たち

向かって左から軍人A、C、B。EDのクレジットとは違い、実際にはAが永野、Bが山寺宏一、Cが西村知道。デザインは1話に出てきた軍人のようだが、配役は1話と異なっている。

▼Cut118　セスナからのスピーカー

演じているのは宇垣秀成。

▼Cut141　冬月と碇のやりとり

「ぬるいな」「――ああ」はファンの話題になったギャグ場面。ナイスな演技がグー。第拾壱話は全体に演技もコミカル。

●Bパート

▼Cut214　碇に報告する作業員

無線機での連絡を報告している作業員。声は永野。

▼Cut262　オペレーター女

手持ちのスピーカーで「非常用バッテリー〜」と知らせる女オペレーター。矢島が演じている。

▼Cut278　レイ「いけない、よけて」

珍しく感情の入っているレイのセリフ。AR台本に「叫びではない」との注がわざわざあるあたり、レイの演技には特に注意が払われているのを伺わせる。

▼Cut314　アスカ「Gehen!!」

というのは、もちろんドイツ語。日本語にすると「行きまーす!」。

【少し地味な伊吹】

▼Cut340　イイ顔のシンジ。

AR台本では当初、シンジは「うん」というセリフで答えるようになっていたが、現場でそのセリフは削除され、かわりに、画面のように「ふ」ともなんともいえない息遣いでアスカの言葉に応じるように差し替えられた。

▼Cut343　ヒステリックなミサト

大声で「非常事態なのに〜」と叫ぶミサト。AR台本では次の「もう、もれちゃう〜」は小声でとの指示だが、実際の三石の演技はより過剰なものになっているようだ。

▼Cut346　伊吹「フケツ」

伊吹がポツリという印象的な言葉。ずいぶん妙な演技だが、「無感動に」とはAR台本の指示。

〔第拾弐話〕

●Aパート

▼Cut11　少女時代のミサト

ちゃんと年齢の下がった声になっているのが素晴らしい。

▼Cut61　オペレーター男A

「まさにエヴァに乗るために〜」とリツコに相槌をうつ男。演じるのは永野広一。

▼Cut68　ラジオのパーソナリティ

今回の聞き所! 演じるのは林原めぐみ。庵野監督による指名。実際にラジオ番組を持つ林原に、との理由だ。話している内容もなかなかすごい。

▼Cut82　顔を見合わせるヒカリとアスカ

楽しげにニッコリ笑う2人。が、アフレコ台本には「表層的な女の友情」というすごいト書きがついている。演技からそれが感じられるだろうか。

▼Cut83　アスカ・ヒカリ・トウジのやりとり

トウジの「なんやて」というセリフ以降の4人のやりとりはアドリヴ。「4人のアドリヴで」との指示がAR台本にある。

▼Cut110　アナウンス「報告します〜」

艦橋でのアナウンス。永野が演じている。

▼Cut112　発令所のアナウンス

アナウンスA「第6サーチ衛星〜」が林原。アナウンスB「接触まで〜」が永野。Cut117アナウンスC「受信確認」が宮村優子。

▼Cut113　警告アナウンス

Cut113のアナウンス男「政府による〜」が永野。Cut138の女アナウンス「第6〜」が長沢。Cut141のアナウンス女「部内警報〜」が岩男。

【青葉はギターがすき】

●Bパート

▼Cut138　シンジの言葉にゲーっとなるアスカ

AR台本にはシンジの台詞しか書いておらず、アスカ「ゲー」となるとのト書きのみ。現場での判断でアスカのリアクション台詞がつけられたと思われる。

▼Cut301　車内アナウンス

電車内のアナウンス。三石琴乃が演じている。

▼Cut306　屋台でのシンジたち

レイが「ニンニクラーメンチャーシューぬき」を注文しているが、これは林原自身によるナイスなアドリヴ。AR台本では「ノリラーメン」を頼むことになっていた。役者の判断による完全なアドリヴが少ない本作では、もっともファンに知られたアドリヴといえる。ちなみに屋台のおやじを演じているのは永野。

▼Cut310　アスカ「ホントにバカね」

本エピソードでは、アスカの「アンタ、バカ」が連発される。そのニュアンスの変化を演技から読みとって欲しい、というのが製作者側の意図だろう。宮村のこのラストの、言葉はキツいが優しげなセリフは素敵。

言葉の研究

●庵野秀明監督作品独特の台詞回しについて、研究してみよう。

まず、妙に古くさい言葉使いが多い。「ちょっち、寄り道してくわよ」（第弐話）、「しゃらくさい」（第六話）、「ナイス、アスカ」（第八話）、「ネコもシャクシも、アスカ、アスカか」（第九話）、「ゴカイもロッカイも無いわ」（第九話）、「はあ〜、極楽、極楽」（第拾話）、「シャクなやつらだ」（第拾壱話）等。

●文語的な言葉を台詞に取り入れる事がある。テロップの文章等も同様。「彼等はそんなに傲慢ではありませんよ」（第拾話）、「即時殲滅。いいわね」（第拾話）等。オペレーター達の台詞も相当に堅い。

●台詞の途中に体言止めをいれる事が多い。すなわち「……。……である」という言い回しである。台詞の押し出しが強くなり、また、クールな感じが強調されるのがグーである。「世界再建の要。人類の砦となる所よ」（第壱話）。「……人造人間エヴァンゲリオン。その初号機。我々人類最後の切り札よ」（第壱話）。「これが使徒迎撃専用要塞都市。第3新東京市。私達の街よ」（第弐話）。「さすがは、科学の街。まさに科学万能の時代ですね」（第拾壱話）。「電気。人工の光がないと……」（第拾壱話）等々。

このテクニックをマスターすると、誰でも「エヴァンゲリオン」的な台詞を駆使する事ができる。

●お気に入りの台詞の繰り返しも多い。その中でも有名なのは「奇跡は自分で起こす」というもの。『トップをねらえ！』の最終話のノリコの台詞「奇跡は起きます。起こしてみせます」。『ふしぎの海のナディア』23話のサンソンの台詞「奇跡ってのは、起こしてこそ初めて価値がでるものよ」。第拾壱話の「奇跡ってのは自分の力で起こすもんです」。これは、使われる度に、どんどんオーバーになっていく。

●格言や故事等の引用が多い。これは若者向けのアニメとしては異色といってよかろう。『エヴァンゲリオン』では、「風呂は命の洗濯よ」（第弐話）。「男女七歳にして同衾せずよ」（第九話）。「郷に入れば郷に従え」（第拾話）。「鬼が出るより生むが易しってね」（第拾話）。「備えあれば憂いなしですね」（第拾壱話）等。

また、前述の「奇跡は自分で起こす」等見、格言風のオリジナルの台詞も多い。庵野監督作品の格言好きは昔から。その集大成ともいえるのが、ひたすら格言を並べまくる『ふしぎの海のナディア』の挿入歌「人生行路のマーチ」であろう。この歌詞の中には「奇跡は自分で起こす」も「こぼれた水は、また、くめばいい」も入っている。

【青葉のギターはエレキ】

えゔぁ川柳

洗濯を　頼む女と　男の関係■ほらシンジ　わたしのために　扉をお開け■優等生　いまいましいけど　正しくて■頭上げた　シンジに　アスカの　蹴りが飛ぶ■足元の　バケツが大人の　ズルい知恵■エレベーター　ふけつな男女が　くんずほぐれつ■見下ろした　都市に広がる　光かな■女子トイレ　女が本音を　語る場所■喜んで　みせるはシンジの　気配りか■ごちそうと　いえばステーキ　旧世代■父親の　おほめの言葉に　驚いて

編集後記

●引っ越し。それは、生活や仕事の場を移す事。手間がかかる事。疲れる事。やれやれ。この編集後記を書いている私は、引っ越しのまっただ中なのである。目の前には資料や本の詰まった段ボール箱が一杯。新しい仕事場は、明治通りと高速道路が目の前。車は五月蝿いけれど、深夜に大音響でＣＤをかけても大丈夫。全てのアニメ雑誌のバックナンバーが揃った理想の仕事場（トホホ）まで、あとわずか。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

【お詫びと訂正】

LD「Genesis 0:4」ジャケット内の表におきまして、フレーム数を誤って表記してしまった箇所がございました。第七話BGMリストのM-5は28408、M-6が31480がそれぞれ正しいフレーム数となっております。ここに訂正するとともに、ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。（スターチャイルドレコード）

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

第拾四話の総集編（?）は実はフィルム複製はほとんどなく撮り直しで作られています！
例えば第3使徒が山影から現れるカットでヘリがいなくなっていることにお気づきでしたばばばば

レイのセリフ「血を流さない女」とはどーゆー意味なのでしゃらばばばば

別話のシーンをつないで一本新しく作ってしまうのが上手かったのはやはり富野由悠季大先生で第拾四話は氏のVGの「幻覚に踊るウッソ」に挑んだのではないかとあわびゅぴゅぴゅぴゅ

えーエヴァ子ちゃんが使徒子ちゃんにハッキングされておりますのでここは代理を務めさせて下さい

第拾参話だけは色々と言いたいことがあるのでひとつごカンベンの程を

パソ通やってる知人が拾参話を評し「アレは『アンドロメダ』と『ウォーゲーム』のパクリですねーへへへへ」とそれだけで判断しておりました

人類側からの攻撃ね

あの「ウエストサイド物語」「サウンド・オブ・ミュージック」のロバート・ワイズ監督作品だ！

確かに環境の変化に対し無限に進化し適応してゆく細菌の脅威はSF映画の名作「アンドロメダストレイン」で描かれてますし

コンピュータハッキングというネタは「ウォーゲーム」に限らず多々描かれてます

しかし小生は観ながらそれとは別の作品を思い出しておりました

それは…

「宇宙○艦ヤ○ト」です

初代に限るよ

極限の危機に一丸となって立ち向かう船乗りの群れ

火花のように飛び交う専門用語

右15度転換

ヨッグガン動力連動

測的完了

自動追尾装置完了

子供の時分の興奮が蘇りましたですよ

そういや発令所の外観は艦橋そのもの

すなわち船乗りがコンピュータオペレータになっただけのこと

同時になぜ人類存亡の最前線に純粋培養ケッペキねーちゃんや茶髪ギターあんちゃんが座ってるのかという謎も黙して語られます

彼等は多分天才なんでしょう

誰よりも能力の高いプロ！
しかれども生身の人間、そんな彼等の戦場　それは…

作戦部と技術部の対立も良かったな

弾丸のくれ合いでもロボットの殴り合いでもなく人類の砦の胎内、はちきれるほど情報をたくわえた風船を針で突くような攻撃！

相手の知的活動の根幹をさぐり解析し、そして破壊しようとする数値と自動制御と情報攻撃でくり広げられる知性あるもの同士の斗い!!

力強い味方だった技術が牙をむくうすら寒さ

異種知性体である使徒の送り主（?）との知性面のファーストコンタクトの話でもある

自分達が作り出した模擬体をかすかな嫌悪をこめつつも冷静に見すえるミサト

人間と技術との業の図式だ！

仁王立ち

全てを巻き込み畳みかけ加速してゆく演出！

MAGI侵食のシーンはSFドラマ史に残ることでしょお

うれし　うれし

ごろごろごろ

やったぞ　ゲーリーアンダースン!!
やったぞ　ジーンロッテンベリー!!

日本にもとうとうこんなSFドラマが現れましたよーッ

うわあん　うれん　おいおい

物語のミンキーステッキ

大森 望

イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。

（マタイによる福音書第二章）

アダムを見守るマギ（Magi）の名は、ご承知のとおり、東方の三博士に由来する（バルタザール、カスパル、メルキオルの表記が一般的だが、ネルフではなぜか、部英語読みを混じえている）。キリスト教的に見れば、拾参話は、「神」の誕生を見守るべくやってきたこの博士たちに、「使徒」が襲いかかる物語だといっていい。

とはいえ、エヴァ世界では、ものごとが見かけどおりであることはめったにない。説話論的に見れば、「娘が異人と闘い母親を守る」物語だし、SF読者が狂喜したのは、それが「人格移植OSを搭載したバイオコンピュータにマイクロマシンが侵入を企てる」物語だったからだろう（SFおたくにリツコファンが多い——という事実はたぶんない）。

「じゅうぶんに進化したテクノロジーは魔法と区別がつかない」とは有名なクラークの第三法則だが、使徒を可能にする技術もそれに近い。第十一使徒はその典型。そもそも「使徒侵入」の侵入とは物理的侵入なのか情報的侵入なのか、"Lilliputian Hitcher"とはアトム（物理的存在）なのかビット（電子的存在）なのか、それさえも決定できない。

ナノテク自体、現代SFでは一種の「魔法」として重宝されている観があるが、イロウルは魔法のごとくタンパク壁を侵食するばかりか、あるときはアトムのように、あるときはビットのようにふるまう。もっとも、コンピュータウイルスも生物学的ウイルスもマイクロマシンも、説話論的には同一の役割を担うわけだから、たいした問題じゃないともいえる。むしろ、第十一使徒の両義的な性格（アイデンティティの決定不能性）は、「エヴァンゲリオン」全体が持つ重層的な構造を鏡のように映し出す。複雑にからみあいながら複数レベルで同時に語られてゆく神話的／心理的／SF的／説話的物語。おそらく、このような語りの技術こそ、「じゅうぶんに進化したテクノロジー」にほかならないのである。

総集編のカタチ

今回収録された第拾四話「ゼーレ、魂の座」は、総集編として作られたエピソードである。日本のTVアニメの歴史において、総集編自体は決して珍しいものではない。ただ、このエピソードは、少々変わり種の総集編といっていい。

「総集編」は、物語のかたちから概ね二つのパターンに分類する事ができる。すなわち、①それまでのストーリーを振り返るパターンと、②それまでの映像をつなぎあわせて新しい物語を作ってしまうパターンである。パターン①は「映像、物語両面においての総集編」、パターン②は「映像に関しては総集編、物語に関しては新作」というわけだ。「ゼーレ、魂の座」は、Aパートでは NERVと使徒との戦いを振り返り、Bパートでは機体相互互換試験における零号機の暴走事件を描く。つまり、Aパートはパターン①の総集編であり、Bパートはパターン②の総集編という構成。AパートとBパートとで総集編の意味が違うのである。この構成は珍しい。

また、Bパートの構成の緻密さも注目に値する。多くの場合、総集編は、映像をつなぎあわせると言っても、それまでのエピソードから1シーン単位で映像を抜き出して構成する事で作られる。だが、この話のBパートでは、ほとんど1Cut単位で以前の映像を抜き出しているのである。例えば、Bパートの最初なら、第四話の郊外の風景（第四話で、シンジがいるCutはシンジのセルを外して撮影している。他も同様の処理あり）が4Cut続き、その次が第弐話の青空に太陽、次に第四話の郊外の風景が2Cut、第四話の夜明けの赤い空、第壱話のケイジ内の初号機、第伍話のビーカー、第壱話の血がついたシンジの掌、OPの赤い宇宙、第拾壱話の第3新東京市全景、OPの初号機のアップ、EDの水中の月（ただし、人物のシルエット無し）……というように、あちこちの話数から引っ張って来た1Cut、1Cutを繋ぎ合わせる事によって作られているのだ。

【第四話の郊外の風景】

この偏執狂的な構成の凝り方は、感動的ですらある。第拾四話は、Aパートのテロップの多用等も含めて、いかにも庵野監督作品らしいマニアックなムードに満ちたフィルムである。

以下は余談。パターン②の「総集編」に関しては、富野由悠季監督の作品が有名だ。「無敵超人ザンボット3」や「無敵鋼人ダイターン3」には、それまで倒した敵が続々復活する「再生怪人話」があったし、「機動戦士Vガンダム」には「幻覚に踊るウッソ」という怪作がある。このエピソードは「エヴァンゲリオン」にも少なからず影響を与えてるそうだ。興味のある人はチェックしてみるといいだろう。TV「超時空要塞マクロス」の「ファンタズム」も、総集編を語る上で忘れてはいけない超異色作である。

それにしても何故凝った総集編はロボットものに多いのだろう?

【第拾四話で再使用された郊外の風景】

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第拾参話「使徒、侵入」

●『エヴァンゲリオン』の脚本は、シナリオライターがフィニッシュした脚本を、庵野監督が手を入れるかたちで決定稿にするのが基本スタイル。例外は第壱話や第拾四話のような庵野監督が単独で執筆した脚本と、薩川昭夫が単独で執筆した第四話の脚本のみ。この第拾参話は、アニメーターでもある磯光雄が執筆した脚本を、薩川昭夫がまとめ直し、さらに庵野監督が手をいれてフィニッシュしている。

【出番の少ない主人公】

●セントラルドグマ、プリブノーボックス、ポリゾームと、このエピソードには生物学用語からつけられたネーミングが数多く登場する。シグマユニットも、そのひとつ。DNA依存性RNAポリメラーゼのサブユニットのひとつである、シグマ因子から。

●CASPER・3の内部に書かれていたリツコの母親の落書き。演出意図としては、視聴者に読んで欲しい文字はCut240の「碇のバカヤロー」のみ。これだけ特にビデオを止めなくても、読めるように書かれている。同Cutではパイプの上に「のるな へこむ」や「パーツは新品よこせ」等と書かれている。

【出番の少ないアスカ】

●Cut238の落書きには「キセ様　カゲは撮影時にマーカー処理するそうです」「北爪様へ いつも早くから御苦労様です」「みなさん ごくろーさま もうすこしです がんばって下さい」等という楽屋落ちが書かれている。だが、これは大半フレームアウトしていて完成画面では読めない。アニメのお遊びの基本である。

●リツコがCASPER・3の中を覗き、開発者の人間味に触れて微笑むCut241。その画面の左下には「こんな小さな所まで読んじゃダメ」というナイスな落書き。これは、ビデオをコマ送りして何でもチェックしようとするマニアに対する警告（笑）であろう。

【大活躍のリツコ】

第拾四話「ゼーレ、魂の座」

●使徒との戦いの映像にかぶるケンスケの台詞は秀逸である。「綾波は自分の存在を希薄に感じているように見えるからだ。ペシミズムとも違う何かを彼女はすでに持ってると思う。同じ14歳とは思えぬ程に」と彼は語る。鋭すぎるほどに鋭い読みである。恐らくは、彼の意見は正しい。それでは、ペシミズムとは違う「何か」とは、一体何か。それ

それこそが綾波レイについて考える上で、最も大切な事であるはずだ。ちなみにペシミズムとは、人生は、生きる価値などないとする考え方。悲観論。あるいは厭世主義の事。

●Bパート頭のレイのモノローグも、なかなかの聞きモノ。深読みしようと思えば、色々と深読みできる内容である。シリーズ終盤まで見てから振り返ると「ああ、そういう意味だったのか」と分かるかも。

【派手なテロップ】

●『エヴァンゲリオン』の予告は編集や構成に凝ったものが多いが、この話の最後についた第拾伍話のオリジナル版の予告は相当に愉快。台詞で「ゲロマズ」とミサトが言うが、ちゃんとその前の画面でもミサトが吐いている（笑）。ちなみに『エヴァンゲリオン』の予告ナレーション原稿の全話は庵野監督自身の手によるもの。

【綾波の内的宇宙】

CASTから一声

長沢美樹の巻

エヴァンゲリオン

この作品と出会えて、伊吹マヤと出会えて私は幸せです。そして、今までもこれからも、私はこの作品の大ファンです。

←この伊吹はマンガ家の野坂さんに描いていただきました　ありがとうございます。

今日の珍品

其の壱

○これが「もっと重箱の隅」でも話題になっている、CASPER・3内部にリツコママが残した落書きだ。画面に映っているものもあれば、撮影時にフレームアウトして画面では読めないものもある。一時停止で確認してみよう。

副監督日記

「幻惑のブロードウェイ」

鶴巻和哉

プログレが好きだ。

といってもプログレッシヴナイフのことではない。プログレッシヴロックのほうだ。

プログレッシヴナイフの由来は敵に刺さった刃が高周波震動によって自らプログレス（前進＝さらに食い込む）してゆくからだが、プログレッシヴロックは進歩的なロックとでもいう意味で名付けられたのだろうか。クラシックやジャズとのクロスオーバー的な楽曲、思索的幻想的な歌詞が特色の60年代末期から70年代中頃にかけて流行したロックだ。ピンクフロイドやイエス、キングクリムゾンなどメンバーこそ変われ現存するビッグネームも多い。

しかし、プログレの真の魅力はロックの暗黒大陸ヨーロッパに巣くう有象無象のマイナーバンドたちに止めを指すだろう。自筆のSF詩を聞いてもらうために曲を付けてみたが、中学生でも書けそうなその時よりも、流れるような緊張感のある楽曲とライヴでの演奏力で評価が高い仏国のマグマ。オーケンをしてロックの極北といわしめたインプロビゼーションとノイズと悲鳴、独国のカン。フォーカス、ゴング、PFM、ファウスト等々、その質の高さとくだらなさ、高い志となげやりさ。まさに境界ロックのごった煮的うさん臭さがたまらない。彼らはメジャーでないからメディアにもほとんどのらない。ゆえにアルバムを購入するにあたっては多分に博打的要素が強いので、あの頃貧乏学生だった僕にはそれこそたまらない。なにしろ1回も聴いたことのないバンドのレコードを買わねばならないのだ（別に買わなくてもいいんだけど）。

日本版には帯のあおりがあるが、これとて「新たな知覚領域を刺激する」とか「混沌の世界の美意識の極み」とか日本情緒に訴える抽象的な表現ばかり。結局、バンド名やジャケットのデザインの好みで選択せざるを得ない。まあ10枚に1枚納得できる買い物があるかどうか。ちょうど今のインディーズみたいなもんだ。アダルトビデオみたいともいえる。「苦労を自慢する」、これこそマニアの趣味というものか。

何かひとつということであれば、初期のジェネシスを薦めよう。

当時リーダーだったピーター・ガブリエルの心的問題が創作のイマジネーションを支配しているという意味でエヴァンゲリオンと共通していると思うからだ。

「ハートフルボイス」誌上で結城比呂さんがムチャ濃いプログレ談義（タイトルはジェネシスのアルバムから）を連載中である。「何故、声優グラビア誌で?」という疑問は置いといて御一読を。読者のほうが置いてけぼりかもしれないけど。

がんばれリツコさん

作／むっちりむうにぃ

設定補の研究

『エヴァンゲリオン』のエンディングには「設定補」という見慣れない役職が登場する。

本作のメインキャラクターのデザインを貞本義行が、メインメカのデザインを山下いくとと庵野秀明が手がけているのは、皆さんも御存知の通り。「設定補」とはそれ以外のメカ、キャラ、小道具、美術等のデザインを担当する役職なのである。

今回収録の第拾四話までで、設定補としてテロップされたのは9人。以下に、その主な仕事内容を紹介しよう。また、EVAと使徒のデザイナーについても一覧表を掲載する。

★きお誠児（第壱話、第弐話、第伍話、第拾話）
漫画家。代表作は『始まりの惑星』『エヴァンゲリオン』では、制作開始時にメカニック関係の美術設定で参加。第3新東京市の兵装ビルや集光ビル、兵装ビルから出ているコンセント、第伍話に登場したプラグスーツを入れるロッカー等は、彼のデザイン。第拾話の地中観測機も彼のデザイン。

★今掛勇（第壱話）
『おいら宇宙の炭坑夫』のメカデザイン、『熱血最強ゴウザウラー』のDN作画等で知られるアニメーター。『エヴァンゲリオン』では、EVA零号機、初号機、弐号機のアニメ用のリライト、ディテールの設定を担当。第壱話では初号機発進シーンの原画も担当している。

★夢野れい（第六話）
漫画家。メカデザイナー。代表作は『GRAND BANK』『琵琶湖要塞』。第六話に初登場した指揮車等のデザインを担当。

★ヲギミツム（第七話、第八話、第九話、第拾話、第拾弐話）
テロップされていないが『エヴァンゲリオン』では演出助手的な立場でも参加していた。庵野監督の描いた、第八話のミル55d輸送ヘリや、第九話のEVAに電力を供給する電源車のラフをクリンナップするなどの作業もしている。

【ミル55d輸送ヘリ】

【14式大型移動指揮車】

【初号機の発進シーン】

【第伍話のロッカー】

★あさりよしとお（第壱話、第弐話、第参話等）
『宇宙家族カールビンソン』等で知られる漫画家。『エヴァンゲリオン』では第3の使徒サキエル、第4の使徒シャムシエルのデザインを担当。また、彼は月刊「アニメージュ」の『エヴァンゲリオン補完計画』の補完委員も務めている。

★[illegible]和哉（[illegible]）
本作の副監督の一人。絵コンテ、演出、作画監督は勿論、美術、メカ、キャラ、コスチュームのデザインもこなす。例えば、設定補としてクレジットされた第参話では、中学校の老教師等のキャラ設定等もしている。

★磯光雄（第拾参話等）
『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争』等で知られるアニメーター。第拾参話のMAGIを構成する三つのコンピュータの関係をモニター上でいかにわかりやすく見せるかというアイデアや、CASPER・3内部のデザインは彼。第拾参話「使徒、侵入」のストーリーコンセプトも彼が提出したもので、脚本も書いている。

【MAGIのモニター】

【老教師】

【第4の使徒シャムシエル】

★[illegible]和哉（[illegible]）
『機動警察パトレイバー2 the Movie』等で知られるアニメーター。第拾参話では、作画監督としてだけでなく、設定補も担当。模擬体等をデザインした。

★前田真宏（第八話、第九話）
監督、作画監督、デザインをこなす才人。GAINAXファンには『ふしぎの海のナディア』の絵コンテでの仕事が印象的。本作では、第6の使徒ガギエル、第7の使徒イスラフェルのデザインを担当。確かにイスラフェルは、彼らしいシュールなデザインといえよう。

【イスラフェル】

【模擬体】

『エヴァンゲリオン』メカニックデザイナー一覧

メカニック	デザイン担当者
EVA初号機	基本デザイン＝山下いくと アニメ用リライト、ディテール設定＝今掛勇
EVA零号機	基本デザイン＝山下いくと アニメ用リライト、ディテール設定＝今掛勇
EVA弐号機	基本デザイン＝山下いくと アニメ用リライト、ディテール設定＝今掛勇
第3の使徒　サキエル	基本デザイン＝あさりよしとお アニメ用リライト＝庵野秀明
第4の使徒　シャムシエル	基本デザイン＝あさりよしとお アニメ用リライト＝庵野秀明
第5の使徒　ラミエル	庵野秀明
第6の使徒　ガギエル	前田真宏
第7の使徒　イスラフェル	前田真宏
第8の使徒　サンダルフォン	庵野秀明
第9の使徒　マトリエル	庵野秀明
第10の使徒　サハクィエル	[illegible]
J.A.	庵野秀明

声優博士のちょっちチェック

小川びい

〈第拾参話〉

●Aパート

▼Cut1　アナウンス群
アナウンス女「エヴァ3体のアポトーシス～」は瀧本富士子。アーツビジョン所属の若手声優で、代表作は『魔法陣グルグル』の主役ニケや『キャプテン翼J』の中沢早苗などがあげられよう。続くアナウンス男「作業確認～」は、水野広一。Cut106の「シグマユニットをDフロアより隔離します」、Cut120「シグマユニット以下のセントラルドグマは～」、BパートのCut232「R警報発令」なども同じく瀧本演じるアナウンス女。

▼Cut10　オペレーターの声
オペレーターA「マギシステム、3基とも～」は水野広一。Cut20の「各パイロット～」も同じオペレーターA。続くCut22「テストスタートします」のオペレーターBは山寺宏一。Cut24の「システムを模擬体と接続します」といっているオペレーターCは緒方恵美が演じている。ちなみにCut59で奥の眼鏡をかけている人物がA。手前がBである。

▼Cut41　冬月「碇がうるさいからな」
まるでゲンドウを中心に世界が動いているかのようなセリフである。妄想をたくましくする女性ファンも多いことだろう。もっとも、Cut45でリツコも同じようなことをいっていることからすると、単にNERVという組織のありようを示しているのだろうか。

▼Cut52　館内アナウンス女
「シグマユニットAフロアに汚染警報発令！」との台詞。演じているのは瀧本富士子。ちなみにCut99の館内アナウンス「セントラルドグマを物理閉鎖」は青葉によるもの。

▼Cut125　冬月「さて、エヴァなしで使徒に対しどう攻める？」
彼の台詞は碇をからかうようである。どこかしらこの状況を楽しんでいるのか、あるいは碇が困っているのを喜んでいるのか？　第拾参話ではこのように妙に冬月の「突っ込み」台詞が目立つ。

●Bパート

▼Cut180　コンピュータ音声アナウンス
「人工知能メルキオールより自律自爆が提訴されました」というコンピュータアナウンスを演じるのは林原めぐみ。「否決、否決……」と繰り返す、感情のない声の演技が絶品。Cut256のコンピュータアナウンスも同様で、特に数字読み上げのいかにも合成音声といった表現が聞きもの。ちなみにCut276以降の自爆カウントでは、AR台本に「この後のアナウンスは他の人の台詞にダブって正確に言って下さい。カット割りに合わせなくてOKです」との指示がある。

▼Cut313　リツコ「もう歳かしらね」
第拾参話では最初と最後に、リツコの年齢に言及する台詞がある。演じている山口由里子もリツコとほぼ同年齢のはずだが、果してどういう気持ちだったのだろうか。

〈第拾四話〉

●Aパート

▼Cut291　委員たち
委員A「この遭遇戦で～」が長嶝高士。続く委員C「失ったのは君の国の船だろう」が鈴木勝美。委員B「左様」が清川元夢。さらにCut368で「もし、接触がおこれば」と手前で話しているのが子安武人が演じる委員D。第拾話で一度委員の配役が変わったが、これは第壱話と同様である。

●Bパート

▼Cut1　独りごちるレイ
インナースペースでは意外なほど雄弁なレイ。普段は喋らないレイがとつとつと喋るという困難な演技に挑んだ林原めぐみが見事。

▼Cut40B　アナウンス
「弐号機のデーターバンク終了」がアナウンスA。演じるは長嶝高士。「ハーモニクス」全て正常値」がアナウンスBで、こちらは岩男潤子。

▼Cut50　オペレーター女
「LCL電通」といっているのがそれ。演じているのは岩男潤子。Cut52の「主電源、接続完了」も同じ。同Cutで、「各拘束、問題無し」というオペレーター男は鈴木勝美によるもの。

▼Cut51　いやがるアスカ
ちょっとコミカルな演技が楽しい。「変態じゃないの」は早口でとの指示がある。

▼Cut66　伊吹の意見具申
伊吹のまだ若い部分がでる場面。「意見具申」はAR台本にある表現で、いかにも庵野秀明監督作品らしい。長沢美樹の堅めの演技もなかなか。

▼Cut69　リツコ「潔癖症はね、つらいわよ」
他人事の如く淡々と云っているが、実は過去の自分の事を覚めた自分の眼で語っている……との指示がAR台本にある。山口由里子のまだアニメになれきっていない演技が逆に、そうした淡々とした調子にマッチして微妙なニュアンスを表現した場面になった。

▼Cut110　くだらないTV番組
病院のベッドにどこからともなく漏れ聞こえてくる、「万国ビックリショー」といった趣のTV番組。「くだらない」というのはAR台本の表現。女アシを長沢美樹、男司会を岩永哲哉が担当。犬はもちろん三石琴乃である。犬の声の表現力に耳を傾けるべし。

▼Cut116　ラジオ番組
アスカの部屋に流れているラジオ番組。パーソナリティを演じているのは岩男潤子。彼女のキャラクターイメージからすると、「こう一年中暑いと頭のボケたやつらも出てくんだよな、ったく」などと悪態をつくようなセリフは珍しい。

今日の珍品

其の弐

◎第拾四話のBパート後半で、シンジの病室で遠くから聞こえるTVの音声の台本と、アスカが自分の部屋で横になっているシーンでかかっているラジオのDJの台本である。
どんな演出意図で入れられているか考えてみるのも一興であろう。

C110～112（漏れ聞こえるくだらないTV番組・右）
SE（わざとらしい拍手）

女アシ「それでは、次の万国びっくりさんは、なんと！　算数のできるワンちゃんの登場です！」
男司会「ほう、それはすごい！」
女アシ「はい、新潟からお越しの天才ワンワン、カナちゃんです！」
犬「ワン！」
女アシ「いいお返事ですねぇ、言葉がわかるのかしら？」
犬「ワン！」
女アシ「あら、ほんとに！？　ではさっそく、問題に答えてもらいましょうね！」
犬「ワン！」
女アシ「325－324は？」
犬「ワン！」
女アシ「すっごい！　あってます！　そう、答えは『イチ』ですね！」
犬「ワン！」

C116～118（アスカが垂れ流しているラジヲ番組・右）

女パーソナリティ「ハイ、あたしは元気にやってんだけど、世間では南沙諸島を巡ってのテロがまたあったね。こう一年中暑いと頭のボケたやつらも出てくんだよな、ったく。自分で死にたがる奴ほど他人を巻き込みたがるから、始末におえないよね、ホント」

誰もが最初に思いついた（よね…?）EVAアイテム「エントリープラグ型魚肉ソーセージ」は出る予定ナシだ。今んとこは。
とはいえ

えう゛ぁ川柳

丸裸　前を隠すは　シンジのみ ■ 穴の底　何の仕事か　加持シンジ ■ 母の中　かすかな笑みを　リツコ見せ ■ INTのC　マニアなマヤが　ちょっと見え ■ バカヤロー　女の部分の　走り書き ■ MAGIの中　今でも使徒が　潜むのか ■ レイの匂い　我もかぎたや　クンクンクン ■ 潔癖症　辛いと語るは　経験者 ■ 詰め将棋　睨むは棋譜か　現実か ■ 14話　タイマー録画に　失敗し

編集後記

私が寝泊まりしているマンションで殺人事件が起きた。本当の話だ。マンションの1階のロビーには血だまりが出来ていた。事件の次の日、刑事が取り調べにきた。まるでドラマに出てくるような二人組だった。彼等はドラマのような台詞を口にした。関係者にとっては大事件だが、新聞の紙面では沢山ある事件のひとつにしか過ぎなかった。自分がいる建物の中で、そんな事件が起きたのはショックだった。だが、私はその夜熟睡する事ができた。熟睡できた事が自分で驚きだった。リアルは重たい。リアルは刺激に満ちている。そして、リアルはクールだ。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第八号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄
©GAINAX / Project Eva.・テレビ東京・NAS

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

「第拾伍話」の巻

●加持とミサトの夜道のシーンの最後。絵コンテのト書きには、加持に抱かれた後、ミサトが加持に手を回すかどうかについて「この時、ミサトの手は垂れ下がったままか、加持の背に回すか……どっちだ？」と甚目喜・によって書かれ、それに対して「熟考します」と庵野監督の返事が書かれており、保留になっている。それはこのシーンでミサトが加持を受け入れるかどうかという問題である。完成したフィルムでは、ミサトは手を上げかけて、また、戻すという描写に落ち着いている。

【ミサトの手】

●ネルフの地下に隠されていたアダムは、設定補の役職でテロップされている磯光雄によってデザインされたもの。絵コンテでは、「目の模様がついたマスクをかぶっている」という事になっているが、さて、あれはマスクなのだろうか。

【本当にマスクなのか】

●もう一人の、この話の設定補である本田雄は、ミサト、リツコ、加持が結婚式に着ていった衣装のデザインを担当。アスカのデートも彼の設定。

【ミサトのドレス】

「第拾六話」の巻

●この話のサブタイトルは、デンマークの哲学者キルケゴールの主著「死に至る病」からの引用。「死に至る病」とは「絶望」の事だが、前話についた次回予告で、ちゃんと「彼に『絶望』を教える」とミサトのナレーションが言ってる。

【TV版サブタイトル】

●英文タイトルの「Splitting of the Breast」について説明しよう。「分裂」（=splitting）とは、初めフロイト（Sigmund Freud：1856～1939）によって解明され、後にクライン（Melanie Klein：1874～1936）をはじめとする精神分析的対象関係学派によって論じられた概念。特に一歳前後の乳幼児において活発に働く防衛諸機制のひとつで、対象および自己の良い側面が、悪い側面に汚染、あるいは破壊されてしまうという不安に対して、両側面を別々の存在と認知する事によって防衛する機制をいう。「Splitting of the Breast」は「乳房の分裂」を意味し、幼児が、母親の乳房に抱いているイメージを「良い乳房」と「悪い乳房」に分割してしまう心理的過程の事をいう。

【英文タイトル】

●このエピソードでは、副監督の鶴巻和哉が、絵コンテ、演出、設定補を担当。第12の使徒も彼のデザインである。第12の使徒の「影」の部分は、最初に彼が描いた元絵をMacintoshで歪ませたものを、動画にしている。他にも、弐号機のスマッシュ・ホーク、ビルの美術等も彼の設定。

●シンジのインナースペースを、古びた電車の中のシーンとして処理するというアイデアも、鶴巻和哉のもの。彼が子供の頃に見た夢がもとになっているのだそうだ。

【シンジの内的宇宙】

●ミサトは「ネルフは、使徒を全て倒した後、EVAをどうするつもりなの？」と云う。「全て」と言うことは、ミサトは、使徒の数に限りがあるという事を知っているのか。

ゲリオンな人達

薩川昭夫の巻

――「エヴァンゲリオン」では、個々の脚本というのは、どういうシステムで書かれていたのでしょうか？

薩川　まず、庵野さんが書いた「シリーズ構成」というのが先にあるんですよ。それを元に脚本を書くんです。

――それはプロットみたいなもの？

薩川　ええ、そうですね。だから、あるエピソードがどういう話になるかというのは、だいたい決まっています。第一稿、第二稿までが脚本家の仕事で、最終的に庵野さんがまとめるというかたちです。

――薩川さんは、アニメの脚本はこれが初めて？

薩川　初めてみたいなもんですね。だから最初は、なんで僕に話がきたのかよく分からなかった。庵野さんから、「お仕事の事でご相談がある」と電話がかかってきた時、「ひょっとして編集ですか」と聞き返したくらいで。僕の作品を見て、声をかけてくれたのならわかるけれど、庵野さんは見てないんですよ。

――え、実相寺（昭雄）さんのとかもですか。（注。実写映画「屋根裏の散歩者」等で脚本を執筆）。

薩川　「屋根裏」もね。後で見てくれたんですけれど。榎戸（洋司）さんに関しては、たぶんそれまでの作品を見て声をかけたんでしょうけれど。なんで僕が？　なんでロボットものを？　と思いましたね。ロボットものって僕、見たことないんですよ。「マジンガーZ」くらいしか。

――ホントに子供の頃見たくらいなんですね。

薩川　アニメーションを仕事にはしていましたが（注。「ふしぎの海のナディア」等に編集として参加）、あくまでも仕事でやってただけなんで。だから、「お受けしたいのは山々ですが、ロボットものを書く自信がないです」と言ったんですけど、「ドラマを書いてくれればいいから」って言われたんです。で、榎戸さんもロボットものみたいなのあんまり得意じゃないらしいんで、ロボットものを書かない人がライターに入ってるから、ロボットものらしくないのができちゃうんではないかと（笑）。

――完成した脚本には、メカの描写が沢山書いてありますが。

薩川　メカのシーンはね、全部庵野さんが書いてます。「誰が書いても僕は直しちゃうから、ここはリキ入れなくていいです」って言われました。

――第四話「雨、逃げ出した後」は単独でエンディングに名前が出ていますね。

薩川　第四話のいきさつって知ってますよね。

――ホントは予定されていない話だったんですよね。

薩川　第参話は「鳴らない、電話」というタイトルになっていますけれど、シリーズ構成では、「初めての、TEL」というタイトルで、戦いの後、シンジのところにトウジとケンスケから電話がかかってくる話だったんです。Aパートは殆ど変わってないんですけど、Bパートにトウジとケンスケがエントリープラグに入って、戦ううちに仲良くなるという、わりとロボットものらしいプロットだったんです。書けなかったんですよ、僕。まず、トウジがシンジを殴るシーンが書けなかったんです。トウジのキャラクターって、その頃は若干違ってて、大阪弁じゃなかったんですよね。いわゆる熱血漢の少年みたいな感じで。僕、ドラマの中で人を殴るの嫌いなんですよ。EVA対使徒という巨大な暴力は許せるのですが、この手の小さな暴力には抵抗があって。それに、一緒に戦っていて仲良くなるというパターンがね、なじめなくって。そういうアニメ的なドラマの教養がないんすよ。

――教養ですか（笑）。

薩川　そういうドラマ作りの教養がないから、できなくって。で、第参話が一番苦労したんです。七稿くらいまで書いてる。なかなか、まとまらなくて。世界観自体が分からなかったし。ゼロに近い状態から始めてるでしょ。だから、第3新東京市がどんな街なのか、ネルフがどんな組織なのか、ほとんど分かんない状況で始めてるから。どういうトーンを狙っているのかとかも。それから、一緒に戦って仲良くなるのが、なんていうかな、唾棄すべき話じゃないかという思いが、どうしてもあるのでね。申しわけないけど、途中で放り投げるような形になりました。七稿まで書いた段階で、自分でもまだ納得できない状態だったんですけれど、あとは庵野さんにお願いするかたちで、渡しちゃったんです。で、渡して僕は次の話をやり始めた。だけど、庵野さんも、この話がうまくまとまんなかったみたいなんですよ。たぶん、やってるうちに作品の世界観が変わってきたんでしょう。そうするうちに、トウジが大阪弁っていう設定になった。あ、大阪の奴なら殴ってもいいかなと思いました（笑）。

――人を殴ってもいいキャラクターとして見えてきたんですね。

薩川　それからしばらくたって、第拾話の「マグマダイバー」を書いている時に、庵野さんから「実は第参話のことで、お話がある」と連絡があったんです。鶴巻（和哉）さんが第参話の絵コンテを描いていて、やっぱり上手くまとまらなかったみたいなんです。これは話そのものに問題があるのではないかということで、話し合ったんです。その時に集ったのが、監督、副監督、それから貞本（義行）さんも。それで、もう1本必要なんじゃないかってことになってきた。

――今でいうところの第参話と第伍話の間に。

薩川　貞本さんも、一緒に戦って、初めて電話がかかってきて、めでたしめでたしというのは、そりゃあないんじゃないか、みたいな事をおっしゃったんです。僕としても途中で放り投げちゃったという負い目があったんで、新四話を作る事に賛成しました。で、庵野さんがプロットをやってる暇がないという事で、新四話はプロットから最終稿までやったんです。最初は第参話は、ああいったかたちじゃなくて、一緒に戦って、別々の部屋で怒られて、出てきた3人が廊下で顔をあわせて笑い出すというアレだったんです。

――青春（笑）。

薩川　うん。でも、僕はダイッキライだったんで。

――では、第四話を作る事が決まった段階で、第参話も書き直す事になったんですかね。「マグマダイバー」の作業をとめて、第参話を書き直して、第四話。

薩川　そう。この段階では、トウジのキャラクターも大阪弁であるということで進んでて、ある程度キャラクター見えてきてるんですよ。だから、わりとすんなり書けたんですけどね。

――第参話で、ケンスケが「2発も殴って」と言ってトウジを責めますよね。ああいうところに薩川さんの気持ちが入ってるんですか。

薩川　そうですね。ケンスケに茶々を入れさせれば、まあ、できるかなと。あのね、日本のドラマの悪いクセなんですよ。やたらと人を殴るのは。「支那の夜」って昔の映画があるでしょう（注。昭和15年公開の劇映画。監督・伏水修）。日本の中国侵略を正当化するための映画だったんですが、李香蘭が演じる中国娘を、日本人の長谷川一夫が殴るシーンがあるんです。その悪い伝統が残ってるんだと思いますけれどね。青春もので、先生が生徒を殴って、説教して、すまなかった俺が悪かったんだって生徒が反省して……そういうかたちに残ってる。よその国の作品だと、あまりないでしょ。一種の気持ち悪いマゾヒズムなんですけどね。それに似たものがあるから嫌だって庵野さんに言ったんですけどね、「でもまあアニメだからやってくださいよ」って言われました（笑）。

――他にご苦労なさった話は？

薩川　そうですね。苦労したのは、第拾話と第弐拾壱話。「マグマダイバー」は「これアスカが潜ったら、すんなりまとまるだろうな」と、ずっと思いながら書いてました。最初は、シンジが修学旅行いけなくってダダをこねて、最後に溶岩にもぐって、トウジたちに地下何千メートルの溶岩をおみやげに持って帰るという話だったんです。

――90年代のノリじゃありませんね（笑）。

薩川　というか、ガイナックスの世界って元々70年代的でしょ。で、そこらへんの教養とかあまりないんで。

――また、教養ですか（笑）。

薩川　第拾話は、そういった話よりも、温泉の中で一人、膨張した方がいいんじゃないかと（笑）。

――あれは最初はなかったんですね。

薩川　そう。で、その温泉の場面は第拾弐話に出て来る予定だったんです。場所は銭湯でした

今日の珍品

◎第拾伍話のミサトの部屋で、アスカが見ているTV番組の音声である。まるで、加持との関係について葛藤するミサトの内面を表現しているかのようだ。その意味でサブリミナル性は高いといえよう。

C－70～77
TV番組の音・ダサいトレンディドラマ（死語）

女　「何よっ！　あの時、別れようって云ったのは、あなたの方じゃない！」
男　「あの頃の僕は、きっと、どうかしてたんだよ」
女　「今更、何云ってんのよ！　あなたはどうか知らないけど、私はもうあの頃とは違うの！」
男　「でも、僕は君のことが――」
女（遮って）「時計の針と人間は、二度と元には戻らないのよっ！　あの頃には、もう　戻れないのっ！」
男　「でも、やはり僕は君のことが――」
女（遮って）「だから、無理だって云ってるでしょ！　私はあなたの事、忘れるのに3年もかかったんだから、今更なこと云わないでよ！」

副監督日記

『ダイバーズ・ハイ』

鶴巻和哉

慰安旅行のおりスクーバダイビングなるものを試してみる。

「是非、体験してみるべき」と以前より摩砂雪副監督から事あるごとに薦められていたが生来の臆病者で「かなづち」とあってはなかなか踏ん切れるものではない。

ダイビングはいかに長い間潜っていられるかで偉い偉くないが決まるスポーツらしい。タンクの容量は同じだから要はいかに呼吸しないか、体を動かさないかがキモだ。おまえはそれでもスポーツかっといいたくもなるが酸素消費の効率がいいということだからこれはこれで確かにスポーツなのだ。でも、こういったことは効率を求めると楽しくなくなっていくのではないかという気もする。勝たねばならない草野球とかタイムを気にしてのマラソンなんかはどう考えても楽しそうじゃない。ダイビング中、あっちにもこっちにも行ってみたいが空気がもったいないからやめようというのはいかにもおもしろくない。

摩砂雪さんはかなりのベテランダイバーだが最近は海中でビデオを撮るという付加価値のほうに楽しみを見いだしているようにもみえる。

庵野監督もダイビングをやる。海の中で浮いているととても気持ちいいのだそうだ。楽しいでもおもしろいでもなく気持ちいいのだ。「自分のからだがバアーと広がって海と一体化してしまうような感覚」とも云っていた。

僕は全く逆の感覚を知っている。意識がキュウと細くなって鋭く研ぎ澄まされていく感覚。はじめてバイクで箱根を走りまわった時、次のコーナーへ次のコーナーへと向かう僕はとても気持ち良かった。高速で走るライダーの視界は狭まっていくというけど、もちろん臆病だからそんなに出していたわけじゃない。ただスムーズに滑らかに走ろうと心掛けていた。最初はぎくしゃくして全然楽しくなかったけど、慣れていくにしたがってバイクは安定しスピードも上がっていった。意識全体はボーとしているのに自分をとりまく世界は狭まり、走っていくラインだけに集中していく。ブラインドコーナーの先の状況までが理解る（見える、ではない）気がする。いかにも頭の中で快楽物質が分泌されている感じ。ダイビングにしてもライディングにしてもスムーズ＝効率がいいというのは楽しくはないけど気持ちいいのかも知れない。効率よく体を使ったその見返りに快楽物質が与えられるのだ。効率がいい＝無駄がないということだから余裕がないともいえる。極限状態での苦痛を和らげるため快楽物質が与えられるという説にも合う。メスナーやマイヨールの神秘体験のように。

最近、庵野監督は新たな気持ちのよいことを見つけた。バンジージャンプだ。

「気持ちのいい飛びっぷりだ。」と係のおじさんに云われるほど悦に入った監督はその日だけで10回以上飛んだらしい。気持ちのいいことを数珠のように紡ぎまくった監督、次は「スカイダイビングだ。」と息巻いている。

さて、僕のスクーバダイビング初体験の感想はといえば、とても楽しくおもしろかった。効率が悪かったせいだ。

CASTから一声

山寺宏一の巻

加持リョウジ

オレを撃ったのはダレダ?!

……でも最後にできたからいいか

えゔぁ川柳

■未来世界　それでも残る　かっぱえびせん■三十路前　友も次々　片付いて■かくし芸　誰にも一つ　あるものか■うつむいた　頬に朱がさす　エレベーター■暑い夜　大人と子供の　キス二態■ラベンダー　香る匂いに　手をほどき■瓶詰めの　少女に微笑む　怪しさよ■エプロンが　似合う男に　腹が立ち■マニアマヤ　シンジのデータに　うっとりと■泳げない　そういやプールで　制服着てた

が。で、第拾弐話も僕が書く事が決まってたから、アバンタイトルで加持がセカンドインパクトで修学旅行に行けなかったという話をして、最後に温泉であいう場面になる。その方が構成的にはがっちりするんじゃないかなあと思いまして。まあ、シンジが主軸だと書けなかったから。まあ、庵野さんは苦々しく思ったんでしょうけれど(笑)。

―― 第伍、第十伍、第弐拾壱話は、御自分で志願したそうですが。それはどうして。

薩川 ロボットの戦いがあんまりない話だからです(笑)。

―― ああ、甚目喜一さんがコンテを描く回とバッチリあってるという。

薩川 そうですね。薩川の脚本には鈴木(俊二)さんが作監で甚目さんがコンテ。それが合うんじゃないかという庵野さんの判断があったようですね。

―― 今回のソフトは、第拾伍話が収録されているんですが、第拾伍話に関して思い入れとかは？

薩川 割とすんなり書けたんですよ、自分のテリトリーに近いから。

―― テリトリーに近いって、ドラマの内容が？

薩川 話のトーンですね。ドラマ自体はサジ加減でどうにでもなるんです。ドンパチが主体になる話って脚本家の役割ってあまりないですよ。スタッフに、あれだけ描ける人がそろってるから。だけど、第拾伍話みたいな話って、脚本家の世界を出せるわけだから。

―― 書きがいがあるというわけですね。

薩川 ああ、あれは庵野さんですね。難しい言葉とか好きじゃないですか。ホメオスタシスとか。『エヴァンゲリオン』というと、難しい言葉はだいたい庵野さんです。「ヤマアラシのジレンマ」とかは、僕でしたけど。

―― 第九話の「ジェリコの壁」は。

薩川 「ジェリコの壁」って書いたのは僕でしたっけね。

―― あれは打ち合わせのときに、こういうセリフを入れようという話になってるんですか？

薩川 いや、それはあまりないです。

―― アイデア出し等は、第一稿の前にかなり綿密にやる？

薩川 脚本発注の段階で、プロデューサー、監督、副監督、別話数の脚本家も集まって、「シリーズ構成」を元にアイデアを出していきます。でも、思いついた事を打ち合わせの時に言わないで、脚本に書いちゃう事も多かったですけどね。第拾伍話で言えば、アスカとシンジのキスシーンなんてのもそうだったんですけれど、庵野さんに切られちゃうかなと思ったけど、残ってましたね。

―― ということは、脚本書く作業ってのは、庵野さんのシリーズ構成があって、それを元に一度プロットを書く訳じゃなくて、そこから第一稿になる。

薩川 そうです。ものによっては六稿や七稿まで書く事もあります。第拾弐話や第拾伍話は第一稿で終わりだったんです。第拾伍話は3日で書けちゃった。第弐拾壱話は随分長くかかりましたが。

―― 例えば第拾伍話では、庵野さんの「シリーズ構成」はどのような感じで。

薩川 断片しか書いてなかったんですよ。起承転結がはっきりしたもんじゃなくて、例えば「加持はマルドゥック機関を探る」「シンジは父親と会う」くらいで。あ、そうだ。第拾伍話は、小津安二郎の「秋刀魚の味」(注。昭和37年公開の劇映画)を下敷きにしたんですよ。だから、シンジが佐田啓二で、アスカが岡田茉莉子で、ミサトが岩下志麻でって感じに考えたんですけどね。小津のいつものパターンで、娘の結婚式が終わった後、笠智衆がだいぶ前に亡くした奥さんによく似た人がやってるバーに息子を連れて飲みに行くんです。そういうムードでユイを出そうかって(笑)。「秋刀魚の味」では岸田今日子扮するバーの女が、笠智衆のタキシード姿を見て「お葬式ですか」と言うと、笠智衆は「ま、そんなもんだよ」と答えるんです。そんなわけで、結婚式の場面もある事だし、あのシーンはお墓参りにしちゃったんです。シリーズ構成では、シンジと父親がレストランで食事をする事になっていたんですよ。

―― 『新世紀エヴァンゲリオン』全体についてですが、最初に思われていた展開と、それほど変わっていない？

薩川 変わってますよ。参加した頃には、話は真ん中までしかできてなかった。最初はもうちょっと普通のロボットものに近かったんじゃないですかね。

―― シンジくんが成長する話だったんですか？

薩川 だったと思います。僕は別に成長なんかしなくてもいいんじゃないかと思ってましたけどね。

―― 無理に成長させようとするから(笑)話がややこしくなる？

薩川 というかね、アニメに限らずドラマや映像の制作者ごときが人間の成長をうんぬんするのはおこがましいと思うんですよ。

―― どういうことですか？

薩川 「成長」というのは非常に漠然とした概念ですよね。他人とのコミュニケーションがうまくとれるようになる事が成長だとは、全く思わないし。描けるのは「変化」だけでね。

―― 『エヴァンゲリオン』は、最初はコミュニケーションがとれないシンジくんが、とれるようになっていく物語、みたいなニュアンスでしたよね。

薩川 第壱話でシンジが「逃げちゃダメだ」と言ってますけれど、僕は逃げてもいいと思いますから。それもあって第四話は逃げる話にしたんですけれどね。わりとガイナックスって、ポジティブにものを考える人達が多いんじゃないかと思いますが。僕はちょっと物事をハスに見ちゃうんで。

―― 薩川さん自身が『エヴァンゲリオン』に共感できた部分はあります。

薩川 一杯あります。どこがどうって言われると困るんですけど。まあ、面白かったということは、共感できたということなんでしょうね。

―― 自分で見ていても面白かった。

薩川 面白かったですね。ま、自分の書いた話数は、あそこはああすればよかったという反省はどれもありますけどね。人が書いた話数は、非常に楽しめましたから。8話なんて、声あげて笑いました。

―― 薩川さんからみて、庵野さんってどんなタイプの作家なんですか？

薩川 よく分かんないです(笑)。

―― じゃ、人としては？

薩川 作家の性質は作品が一番よく現わすというから、『エヴァンゲリオン』みたいな人なんじゃないですか。現世に存在する庵野秀明という人は、『エヴァンゲリオン』という虚構世界の「映し絵」なんだと思います。第拾六話の使徒と一緒ですね。

誕生日と血液型

突然だが『新世紀エヴァンゲリオン』の主要キャラクターの誕生日、血液型が発表できる事になった。今まで、殆どが未公開だったはずだ。これで相性占いもバッチリできるぞ。

キャラクター	誕生日	血液型
●碇シンジ	6月6日生まれ	A型
●葛城ミサト	12月8日生まれ	A型(正確にはAO型)
●綾波レイ	不明	不明
●惣流・アスカ・ラングレー	12月4日生まれ	O型
●赤木リツコ	11月21日生まれ	B型
●碇ゲンドウ	4月29日生まれ	A型
●冬月コウゾウ	4月9日生まれ	AB型

男の子と「母親」達

小黒祐一郎

第拾伍話、第拾六話は「母」が大切なモチーフとなるエピソードである。シンジは雑巾を絞るレイを「お母さんみたい」だと思い、父と共に母の墓参りに行く。シンジが閉じこめられたエントリープラグの内部は「子宮」のイメージであろうし、最後の血を迸らせながら初号機が脱出する様子は「出産」のイメージであろう。第12の使徒の影は「複数の女性器」を持った球体にも見える。

シンジは、今まで「男の子でしょ」とか「男でしょ」等と、ミサトやアスカにさんざん言われてきた。「男の子をする事」をちゃんとは出来ない少年だったわけだ。だが、この話で、自信をつけてきたシンジは「戦いは男の仕事!」などと言って、積極的に使徒と戦おうとした。例え冗談めかしてでも、シンジが「男は……」的な発言をするのは珍しい。だが、そのシンジは第12の使徒にとりこまれて脱出できなくなってしまう。

このエピソードを「男の仕事は男にまかせろ」等と調子に乗ったシンジが、お母さんにしかられて、その子宮の中に閉じこめられてしまった……という物語として読む事もできる。このお母さんは、息子がマッチョ的に「オレは男だ!」と胸を張るのが厭なのだろうか。だが、シンジの内的宇宙に現れて彼を助けてくれたのも、また、「母」であるユイのイメージなのである。子供を胎内に閉じこめる「悪い母親」と、助け出してくれる「良い母親」。「乳房の分裂」という意味の英文タイトルは、この二つの母親のイメージの事を指しているのかもしれない。

シンジが調子に乗った時に「帰ったらしかっておかなきゃ」と言い、シンジが助かった時に涙を流して彼を抱きしめたミサトは、言うまでもなく彼の「母的な存在」である。このエピソードに限っては、レイも「母的な存在」といえるだろう。最後の病室のシーンで「そお、良かったわね」と言う彼女の台詞に、シンジはドキリとする。それは彼女の中に在る「母親的な部分」を感じたためではないのか。

第12の使徒の中から脱出したシンジは、ミサトに抱きしめられて「……ただ、会いたかったんだ。もう一度……」と云う。この会いたかった相手とは、ミサトの事なのか、それとも概念としての「母親」なのか。

第拾伍話と第拾六話 は、シンジが「母的な存在」の価値を再確認する話だ。そう考える事もできる。

がんばれ加持さん

作／むっちりむうにい

声優博士のちょっちチェック

小川びい

《第拾伍話》

●Aパート

▼Cut17 女
加持と接触をはかる女。見た目はオバハンである。演じているのは長沢美樹。

▼Cut30 嘆くアスカ
AR台本では「どっか連れてってもらおーかと思って」となっていたが、実際には「どっか連れてってもらおっかなぁーと思って」となり、甘えた女の子のニュアンスの芝居になっている。宮村優子によるナイスなニュアンス追加がうれしい。

▼Cut33 内緒話をするヒカリ
小声で、とのAR台本の指示がある。「どーしても」と伸ばしているのが、この年齢の女の子っぽいニュアンス。岩男潤子の「おねがいッ!」というセリフもかわいい。

▼Cut44 流れるアナウンス
「ネクローシス作業、終了」が長沢演じる伊吹のセリフ。続いて「可逆グラフ、測定完了」という男のアナウンスが永野広一。その後の「3機ともに、シンクロ位置に問題なし」という女のアナウンスが岩男潤子。

▼Cut50 悪態をつくミサト
「どいつもこいつも」の台詞が楽しい。この前後のCutは、感情が次々と変化するミサトと冗談とも本気ともつかない淡々としたリツコとの対比の芝居に注目。

▼Cut66 シンジ「お母さんの絞り方って感じがする」
優しい感じの緒方恵美の芝居が素敵。口説いているようにさえ聞こえる。その後、一転、軽くなって「あは……は」という困まった笑いも見事。それを受けてのCut68のレイの「何を云うのよ」というセリフも素晴らしい。AR台本では、「その背中は明らかに少女のものである」という説明がある。結果としてレイにとって、口説き文句のように聞こえたのか。

▼Cut70 バックに流れるTV番組
表面に掲載した、ダサいトレンディドラマ(死語)と題された別録り用の台本が用意された。長沢美樹と関智一が女と男を演じている。

▼Cut73 ミサト「だめ」
「だめっ!」と強く叱るでもなく、かといって「だ〜め」とおどけるでもなく、ちょうどお姉さんが妹と会話しているような感じだろうか、あくまで自然な、たしなめる感じがGOOD。この姉と妹のような微妙なニュアンスは、Cut98でのミサトが買った服をめぐるやりとりの中で、もう一段深まった形で繰り返される。

▼Cut88 ギクッとなるシンジ
天井を見ているシンジにミサトが声をかける。ちょっとギクッとなるシンジの息の芝居はアドリヴで入れるように、との指示がAR台本にある。続くCut90での戸をあけたミサトの聞こえるか聞こえないかのかすかな息のリアクションも、アドリヴで「気づき」の芝居を入れるようにとのAR台本の指示による。

▼Cut106 結婚式の人々
Cut106でのえらいさんは立木文彦。個性的なキャラクター作りが光る。続くCut107では岩男、長沢、宮村、そして緒方(!)という豪華メンバーによる、女4人の「てんとう虫のサンバ」の合唱。Cut106での司会は永野が担当。

●Bパート

▼Cut155 ミサト「いまさら、何云ってんだか」
バーで加持、ミサト、リツコが夜景をみながら座っている場面。このミサトのセリフはAR台本にない。追加はアフレコ現場での指示によるものだろうか。「ちょっち〜」からが台本にあるセリフ。より芝居がスムーズに流れるようになった。こうした細やかな芝居づけが、第拾伍話Bパートの芝居を、全話を通しても屈指の仕上がりにした。充分味わって欲しい。

▼Cut161 加持「ヒール……か」
山寺宏一のやさしいニュアンスを大切にした芝居が素晴らしい。ミサトへのやさしさがBパートの芝居を支えている。

▼Cut163 加持「現実は甘くないさ」
笑顔でごまかしているがここの台詞は本音(目は笑っていない)との指示。この無茶なほどの要求にいかに山寺が応えたか。画面で確認してほしい。茶化して笑い飛ばそうとするが、どちらかといえば自嘲気味になって……と言葉で書くのは簡単だが、それを芝居にまで持って行くのは並大抵のことではない。

▼Cut169 リツコ「自分の話はしない主義なの」
それまで軽い口をたたいていたリツコが、「面白くないもの」のセリフで、急にかたくなな感じになる。山口由里子の好演。

▼Cut170 ミサト「花火でも買ってきませうか」
加持とリツコの間に入る、ミサト。AR台本では右のように表記されていたが、いかにもGAINAX的な文字表記である。口調はおどけているが、よりシリアスな感じへニュアンスが変更されたようだ。

▼Cut181 ガード下もどしているミサト
酔ってもどしているときの息の演技は、アドリヴでとの指示がある。

▼Cut184 ミサト「悪かったわね、いい歳で」
「女っぽく!三石様よろしく」との指示あり!三石琴乃の名演が聞きもの!このCutでの加持とミサトのお互いにどこかしら甘えているような会話は絶品。「そうよ」と消えるような声の演技もいい。

▼Cut185 ミサト「無精ヒゲ剃んなさいよ」
好演の多い第拾伍話だが、これは中でも絶品中の絶品。三石琴乃と仕事の機会の多い、絵コンテ担当の演出家・甚目喜一も、この演技には舌を巻いたとか。「わざと無精ヒゲの感触を楽しんで」いっている、とか「甘えた感じあり」で、といった、AR台本での演技への指示もすごい。三石琴乃はミサトに近い年齢のはずだが、もう少し若くてもベテランになっていたとしても、この演技はできないのではないか。甘えたかわいい少女のような声と人生を感じさせる女性の感受性の双方があって初めてなしえた声の芸術。

▼Cut188 ゆっくり歩くミサトと加持
「他に好きな人ができた…って云ったのは、あれ――ウソ。バレてた?」とちょっと甘えた感じでいうミサト。「いや」とそれまでと変わってシリアスに応える加持がいい。「これは方便(本当はウソだと知っていた)」との演技への指示もすごい。

▼Cut220 呆気にとられるシンジ
「キスした事ないでしょ」といわれて、ぼんやりうなずくシンジ。「うん」という何気ないセリフがかわいい。

▼Cut231 目を開くシンジ
「?」となり、目を開くシンジ。アスカの指示に驚いたまま……キス、という場面。緒方恵美のさまざまなニュアンスを込めた息の芝居。この前後もあわせ、息だけで、台本をより豊かなものにしている点に注目。

▼Cut241 うがいするアスカ
デリカシーのない音、というのはAR台本の指示。宮村優子は実際にアフレコ現場で口に水を含んで、この演技をしたのだという。水をはく演技も品がなくてGOOD。

▼Cut252 先生の声
演じているのは永野広一。「今日も」といっているが、声からすると、第参話に出演していた教師とは違うようだ。

《第拾六話》

●Aパート

▼Cut10 アスカ「内罰的すぎるのよ、根本的に!」
内罰的とはずいぶん珍しい言葉を知っているものだ。ドイツの日本語講座で習ったのだろうか? 機関銃のようなポンポンという勢いのある苛立った演技がアスカらしい。それはまた宮村優子の魅力でもある。

▼Cut13 ミサト「加持なんかとは何でもないわよ」
空トボけるミサト。フラットな感じがうまい。

▼Cut19 アナウンス
女性アナウンスは伊吹のもの。続く男の声は永野広一が担当。

▼Cut23 リツコ「加持君?」
ミサトをからかうリツコ。山口由里子の楽しげな色っぽい声がうれしい。

▼Cut39 バスのテープアナウンス
「次は誠晶廃瀬。次は誠晶廃瀬〜」というもの。演じているのは長沢美樹。

▼Cut42 笑う子供
笑い声だけでわかりにくいが、演じているのは長沢美樹と三石琴乃。

▼Cut53 女「西区の住民避難を〜」
警報の中発令所に流れる女の声。担当は宮村優子。続く男の声は永野によるもの。

▼Cut145 オペレーターの通信
それぞれ、通信A「第2戦車小隊〜」が岩永哲哉、通信B「了解、現在位置のまま〜」が林原めぐみ、通信C「サウレーザー回線開きます〜」が永野広一、通信D「確認〜」が立木文彦によるもの。

▼Cut153 アスカに向かいあうレイ
「あなたは? 人に誉められるために〜」がAR台本だが、実際の演技は「あなたは、人に誉められるために〜」とひとつながりのセリフに。怒っているが感情が表にでない、という矛盾した芝居を、どちらともつかないギリギリの演技で林原めぐみが表現。

●Bパート

▼Cut158 シンジ「眠ることがこんなに〜」
泣きつくし、声も嗄れてしまった様子を乾いた声で緒方恵美が表現。Bパートは緒方恵美の独擅場で、聞きどころも多い。

▼Cut178 狂乱のシンジ
ハッチを叩きながら「開けて!」と叫ぶシンジ。段々と弱気になる。リツコの名前を呼んだあと、ほとんど聞き取れないほどの声で「父さん」と言っているのがわかるだろうか。

▼Cut201 シンジA「誰?」
ノーマン・マクラレン風の前衛アニメか、はたまたいわゆる「線録り」かという、線のみによる表現。シンジの内面の対話の始まりである。このAR台本ではタテ線の声がシンジA、ヨコ線の声がシンジBと表記されている。緒方恵美のニュアンスを微妙に変えた芝居が素晴らしい。おそらく同時録音であろう。

▼Cut246B シンジB(子供)
「自分から逃げ出したくせに」とシンジAをなじる。皮肉屋で冷静なシンジBのさらに子供バージョンという、ものすごい演技。

▼Cut247A ゲンドウを非難する男たち
男A「そうだ、この男は〜」が子安武人。男B「自分の妻を殺したんだ」が永野広一。「興奮して」との指示がある。

▼Cut257 母「もういいの?」
シンジの見た幻影だろうか。母の声は林原めぐみによるもの。

▼Cut281 スピーカーからの男の声
「エヴァ両機、作戦位置」というセリフ。演じているのは子安武人。青葉とは別の人物であるらしい。

▼Cut318 シンジを優しく見るレイ
「そお、よかったわね」は、感情を出すことが苦手なレイの、精いっぱいの優しさの表現か。恋人、あるいは母親をイメージした林原めぐみの芝居がすばらしい。シンジがみた母(の幻影?)と同じ台詞である。また、第六話での同様の場面で見せたものと対照的な演技も興味深い。

▼Cut325 シンジ「とれないや、血の匂い」
不機嫌そうなシンジの声。それまでの無邪気な少年ふうの声から一転、シンジBのようなちょっと冷酷そうなニュアンスを含んだ声へ変わる。この声の幅が、緒方恵美の人気の秘密であり、魅力だろう。

編集後記

最近、昔のマンガが次々に文庫で復活している。あの『750ライダー』を、カラーページつきで読めるとは！ おおう、長生きはするもんだ。ところで、あのマンガ文庫というやつには巻末によく解説なるものがついている。『どろろ』の解説を出崎統が書いていたりするのだ。ううむ、凄い。マンガについて文章が書かれる機会が増えるのはよい事だと思う。ところが、時々ものすご〜〜く酷い文章があったりもする。それを業界の重鎮とよばれる人が書いていたりするから困ったもんだ。(黒)

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード(株) スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第九号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

第拾七話から第拾九話まではシリーズ中盤の最大のクライマックスにいたる三部作!!

いよいよです

その一本目である第拾七話は日常生活中心のエピソード! この後に控える嵐の前の一時の静けさ的意味あいを持つしっとりとしたお話です～～～

「しっとり」はけっこうエヴァでは珍しいのよ

そして運命の第拾八話

Aパートの屋上でのシーンのトウジはレイの心中を察したりしてやたらと勘がいいです

とても彼とは思えない(笑)

「お前が心配しとるのはシンジや」という台詞はなかなかカッコいいですね――

TVアニメの黄金パターンではサブキャラがこんなカッコいい台詞をもらえる時は大抵不吉な前兆……

うっ

ぴろぴろぴろ

使徒子ちゃんにのっとられてる

どうじゃこれでも変態かーッ!

ものすごい変態ですっ!!

わッ!! なっなんじゃお前らはっ!

僕達はネルフ変態クラブのものです 君も入会しませんか?

僕は初号機!

わたしは零号機 ポリッ

あたしは弐号機!!

そして君は参号機!!

四人合わせて花のビーストズが～～

ぱんっ!

できるではない

か!

もっと重箱の隅

「第拾七話」「第拾八話」の巻　文●小黒祐一郎

●洞木家の弁当は、いつもヒカリが作っているという。すると、ヒカリの家にも母親がいないのか。シンジ、トウジ、ケンスケにも母親がいないらしい事にも注目。実は、これは大切な事だったりする。

●参号機のデザインは、零号機、初号機、弐号機と同様、山下いくとによって行われた。ただし、ポーズ等の設定は、これまでのEVAとは異なり、副監督の鶴巻和哉の手によって描かれている。

●第拾八話のAパート、第2実験場の外観のCutが2回ある。コンクリのドームの手前に、レーダー車やアンテナ車が止まっているCutだ。同アングルだが、2回目では、手前に一台自動車が増えている。それがフォースチルドレン・鈴原トウジが乗ってきた車だ。

【1回目のCut】

【2回目のCut】

ゲリオンな人達

樋口真嗣の巻

――テロップに名前が出ているのは、第八話、第九話の絵コンテと、第拾七話、第拾八話の脚本ですね、『エヴァンゲリオン』の企画段階から参加していたんですか。

樋口　企画立ち上げの時は、何回か打ち合わせに出たかな。まだ、松本を舞台にしようと言っていた頃だったけど。

――その時は、何の段階で参加する予定で？

樋口　恐らくコンテだったんじゃないスかね。その辺は、結構曖昧でした。

――『エヴァンゲリオン』の制作が始まった頃の印象は。

樋口　「ガメラー」が終わって、ガイナで摩砂雪さんのコンテを見た時は「うひー、しょっぱなからトバしてるな」と(笑)

――とばしてるというのは。

樋口　今までの庵野さんの作品って『ふしぎの海のナディア』にしても、『トップをねらえ！』にしてもスロースタートだったと思うんですよ。最初はあらかじめ敷かれたレールがあって、そのレールの上で作っていく。作っていくうちにどんどん加速していって自分のやりたい方向に作品が脱線していくとでも謂いましょうか。大概シリーズ前半部分にどうするか迷ってる感じがあって、後半に「これだ！」っていう凄いモノが出来てくる。それが今回は、第壱話がもう今までのシリーズ終盤みたいですからねえ。これから先どうするんだろうって(笑)。

――第壱話から、クライマックス並みのテンションでしたね。

樋口　『ナディア』では最後の5本で、それが始まるわけじゃないですか。だけど、『エヴァンゲリオン』は、いきなり『ナディア』のラスト5本並みのテンションで始まっちゃった。始めちゃったら、もうテンションを落とせない。そこから先は違うステップを目指さなくちゃいけない。それは前人未踏の領域なわけですから　そこへ、どうやって引っ張っていくのかなあ。それは、俺には分からん。本人にも分かってなかったみたいだし。だからいまだに終わっていないんでしょうけどね。

――今、ラスト周辺を作りなおしてるみたいですね。今のところ、前人未到の領域は、前人未到のままですね。

樋口　やっぱ前人未踏なのには理由があるんじゃないですか？　ま、そうは言っても、なんらかの形で着地はするでしょうから。早くラストを見たいなあと。今はお客さんの気分です。

――(笑)。絵コンテを描いたエピソードに関しては。

樋口　こう見えても(笑)個人的にはヘヴィなやつが好きですから。最初の方のヘヴィなノリのコンテを読んで、「俺も、こういうのに参加出来るのか、嬉しいな」って思ってて　で、絵コンテを担当する事になってホン(＝脚本)を読んでみたら、それまでとまるで毛色が違う話だったんで、「あれ？」って(笑)。

――アスカ初登場で、いきなり明るく楽しくなって。

樋口　自分で自分を、アスカはこういう女の子なんだ、こういう女の子が出てきたから、周りのみんなが引っかき回されてああいう展開になったんだ、と納得させてコンテを切りましたね。

――無意味に明るく楽しい話になったわけじゃない、という事ですね。アスカについてはどうですか

樋口　ああいうエキセントリックで強気な娘というのは、一番描きやすいわけで。

――それは樋口さんの資質として？

樋口　いや、一般論として簡単なんじゃないかなあと。アニメーションで表現すると、感情のレベルメーターが一番ふりきってる状態の方が、画にしやすいと思うし。揺れ動く内面とか、何を考えているか分からない女の子とか、そういうものに比べれば遥かに描写しやすいはずです。第六話までで、いったん物語が閉じるわけじゃないですか。様々な対立とか葛藤とか、シンジという異物が入って来た事による混乱が一通り収束するわけですよね。そしたら、アスカという新たな異物が入って来るわけです。だとしたら違った形の混乱を作らないと。

――『エヴァンゲリオン』の？

樋口　いや、個々のキャラクターの。シンジだけじゃなくてね。加持というキャラクターもここで出て来るんだけど、加持に関しては「『プロハンター』の草刈正雄みたいにしてくれ」と庵野さんに言われたんです(注1)。ただ、キャラクターのイメージは、草刈正雄と言うより、もう少し下半身ユルそうな感じかなと思いまして(笑)。第八話のコンテをやってる最中に、第九話の薩川さんの脚本があがってきたんです。それを読んだら、いよいよ下半身ユルそうなわけですよ(笑)。ああ、加持はここまでやっていいんだなって。

――かなり生々しいキャラクターとして描写されていましたね。

樋口　実際にいたら、こうだろうと考えて描きました。そうしないと人間として薄っぺらなものになってしまう気がして。だから、物語と無関係な、無意味な事させたくてしょうがなかったんです。アニメーションのキャラクターって、基本的には何もしないし出来ないもんですから。

――何にもしない？

樋口　動かない……つまり、物語を進めるための行動はしますけど、それ以上の事はわからない。実写の役者さんでいうところの役作りみたいなモノで、ちゃんと生活をしている存在として描写しようとするのであれば、何かしらの振る舞いをしてないとただのセルになっちゃう。だから仕種や表情に神経を遣いました

――生活感、存在感みたいなものですか。

樋口　そうですね。立って歩いてセリフを喋ってればいいってものじゃないと思うんで。必要な言葉しか喋らない――もちろん、そういうキャラクターもアリだと思うんですけど――それだけだと、どうしても奥行きがなくて物足りないんですよ。あと、第九話はスポッティングが大変でした(注2)。

――スポッティングがあるのは2シーンですよね。特訓と

えゔぁ川柳

■2－Aの　夫婦漫才　今日もまた
■冷やかしに　口をそろえて　否定して
■訪問も　2度目となると　大胆に
■届けても　レイはプリント　読まんだろう
■ありがとう　初の言葉に　頬染めて
■相田パパ　口が軽すぎゃ　しませんか
■4番目　やはり縁起　悪かった
■ネブカワの　話はそろそろ　聞き飽きた
■屋上は　今も昔も　青春だ

CASTから一声　関　智一＆岩男潤子の巻

副監督日記

「神様の想い込み」

鶴巻和哉

「100匹目のサル」と呼ばれる現象がある。

宮崎県の幸島という無人島で暮らすニホンザルの群れに泥のついた芋を川まで運び洗ってから食べる天才サルが現れた。サルの世界では革命的な出来事だった。天才サルをまねて芋を洗う習性は主に若いサルの間に広まっていくが、古い世代のサルたちはこの新しい習性をなかなか受け入れようとしなかったらしい。ところが、芋を洗うサルがある数を超えたとき信じがたいことが起こった。群れ全体で芋洗いが行われるようになったのみならず、幸島とはコミュニケーション不能であるはずの本土や別の島のサルの群れでも同様の行為が確認されるようになったというのだ。

「あることを真実だと思う人が一定数に達すると、それは万人にとって真実となる」現象であると名付け親であるライアル・ワトソンは云う。彼はこの臨界にあたる一定数を便宜的に100匹目としたわけだ。

最近、生命活動の痕跡が発見され話題になっている火星は二つの月をもっている。1877年の大接近の際、A・ホールによって発見されるまで誰もその存在に気づかなかったが、発見が報告されてからは誰にでも観測できるようになったという。ほぼ同じ時期、スキアパレリは有名な「火星水路地図」のため詳細な観測を行っていたはずなのだが。

この一件も「100匹目のサル現象」だったのかもしれない。それまでは存在しなかったものが「ある」と想えた瞬間から実在する。人の意識が物理的現実にも影響を与え得る可能性。「量子論」やホーキング博士をはじめ著名な科学者にも支持者の多いメタ科学理論「人間原理」もこの辺と関係あるのかもしれない。

僕は100というのは一定の数のことではなく量を示しているのではないかと考えている。100人分の想いで想うことができれば一人で「100匹目のサル現象」を起こすことができる。たった一人で望む現実を引き寄せることができる。ドリームズ・カム・トゥルー。ロマンチックな根性論のようにも聞こえるが一人の狂人が世界をめちゃくちゃにしてしまう可能性もある。火星に月を造ったのかもしれないホールのように、あるいは150億年前の誰かのように……。もし彼が新しく宇宙を造ってしまうほど想い込みの激しいやつなら「神様」と呼んでも差し支えあるまい。

後半の戦闘シーン、

樋口　曲に乗せて訓練や戦闘をモンタージュするのは、ガイナックスの社風みたいなもんです。「DAICON Ⅳ」を始祖として「王立宇宙軍」の頃からやってますから。「トップ」でもやったし、「ナディア」でもやったし。まあ、いつもの事で(笑)。

――あれは絵コンテの段階で、音あわせを？

樋口　絵コンテの段階で大体は。まず曲を決めて、それを何度も聞きながらカットを割ります。最終的な尺出しが面倒で、シネテープに落とした曲をゆっくり転がしながらキッカケとなる音を拾ってコマ数を出していくんですが、鷺巣（詩郎）さんのスコアって生音が多くて厚みがあるんで、普通に聞くぶんにはかっこいいんですが、手動でゆっくり再生すると拾いたい音が埋もれて聞こえなくなっちゃうんです。だから、音が拾いづらかった(笑)。

――脚本の方の話にいきましょう。

樋口　うー、実は、「ガメラ2」の準備とぶつかっちゃいまして、第拾七話、第拾八話は第一稿を書いたら、あとは庵野さんに任せちゃったから、迷惑のかけっぱなしだったんですよ。思い出すだけで結構辛いんですけれども、申し訳なくて。

――そうなんですか。元々、脚本の発注を受ける事になった経緯は。

樋口　庵野さんに「やってみる?」って聞かれたんで、「はい」って応えたんです。

――シンプルですね。

樋口　あの「ナディア」の「島編」って（注3）、全部、俺が脚本を書き直したんすよ。だから、出来るだろうって。甘かった(笑)。「ナディア」の時は、スケジュール的にさし迫ってたのと、既に上がっていたホンが壮絶だったので何とかせにゃイカン、まあ、勢いと怒りに任せてワッと出来た。でも、エヴァは内容も全然ヘヴィだし、自分で最初からやるには剰りにも難しかったです。で、薩川さんのインタビューでも話題になってましたけど（注4）、脚本を書く前に、庵野さんから渡されるプロットって漠然としたものなんですよ。とりあえず、2話かけて、シンジが裏切られる話をしたいという事でした。プロットの段階では親父に裏切られる話だったんですけど、それがピンとこなくて。今までも親父に裏切られ続けているわけですから、それは、それほどシンジの心の傷にならないんじゃないかと。

――第拾七話、第拾八話は、シンジが心に傷を負うという事が必須だった？

樋口　ええ。第拾九話の展開だけは先に決まってるわけですよ。だから、ゲンドウから酷い目にあわされなくてはいけない。俺はそれよりミサトに裏切られたほうが、シンジの心の傷が深いんではないかと思ってハコを作ったんです。だけど、それをやるとシンジとミサトの関係が修復不可能になっちゃう。

――結局、親父に裏切られる話と、ミサトに裏切られる話の折衷案になったわけですね。ミサトに裏切られる話にしたかったというのは他には理由は。

樋口　第弐話、第参話を見た段階で、ミサトの人格っていいなあ、泣けるなあと思ったんですよ。外ヅラをよくして、生臭い部分を全部を内側に抱え込むっていうのが切なくていいな。無理に明るく振る舞うあたりとか。

――シンジと暮らし始めたあたりですね。

樋口　表裏をはっきり分けて巧くやっているけれど、いつかボロを出すだろうなと思って、だったらぜひボロを出してやろう、と。

――なるほど。他に構成上の狙いは。

樋口　結局、あの時点でシンジが第3新東京市にいられる理由で、精神的な支えとしてのミサトやクラスメートがいるからっていうのが大きいじゃないですか。第拾八話は、その両方を喪失しちゃう話に出来るといいなあと思ったんです。

第3新東京市は戦闘のための街なんだから、シンジが通っている学校なんていつ無くなってもおかしくない、仮のものなわけじゃないですか。シンジが、ミサトと暮らしているという関係も、仮のものであって、いつ無くなってもおかしくない。そのへんの脆さを暗示させて、ほとんどドラマらしいドラマの無い、生活だけの話があって、その次に、それらが全部壊れるという……。

――ドラマがない話と言うのが、第拾七話で。

樋口　ええ。そこである程度、シンジの居場所というのを明確にしておいて、次の話でそれを壊せないかなと。

だから第拾七話で、今までよりも学校生活を描写したかった。昼休みに弁当を買いに行くとか。日直が学級日誌をつけなくちゃいけないとか。前の授業が終ったら黒板を消して、そういう事をつぶさに見せていく。でも、その学校は本当は不必要な学校で、そこで行われている事の、一つ一つは、物語の進行には全く関係のない事なのかもしれない。生徒達は普通に学校に行って、普通に生活しているつもりなんだけど、それは端からみれば、学校のセットで生徒の演技をしているようなもんだと。そういう不安定な側面が出せればいいなと。

――学校が不必要というのは、NERV側にとってという事ですね。さしあたって、子供達がいてくれれば、それが学校だろうと何だろうとかまわない。

樋口　ええ、それから、NERVの側と、そうでない側があったとすると、ヒカリはNERVじゃない方にいる。そして、ヒカリと同じ側にいたトウジは、NERV側に引き抜かれてしまう。するとそこに摩擦が起こる。

――非日常に見えるNERV側と、日常に見える学校側の問題ですね。

樋口　「帰ってきたウルトラマン」だと、MATの隊員である郷秀樹が、MATと、民間人である坂田兄弟の家との間を行き来しているじゃないですか。MATの隊員なのに、坂田兄弟のところに行くと「あっ、郷さん」とか言われて慕われている。何だか変だなあと思っていたら、案の定、岸田森と榊原ルミは車にはねられてアッサリ死んじゃう（注5）。

――なるほど。非日常であるMAT側の問題で、日常側にいた人間が死んでしまう。

樋口　あの突き放すような無常観が大好きで、そういう感じの話が出来ないかなあと思ったんです。ただ、ヒカリがステロタイプな恋する乙女になっちゃったのは、残念だったなあ(笑)。あそこまで恋している事を他人に明かす……想ってる事を口にはしないんじゃないかと。

――まだ、中学生ですしね。

樋口　自分は中学生の時って口に出来なかったし(笑)、むしろ反動で好きじゃないキモチを強調しようとしてた。そういう揺れ動く思春期の心を描出したかったんですけどね。

『エヴァンゲリオン』って、キャラクターの殆どが他人を信じてない感じじゃないですか。その中で、NERVと無関係なヒカリが恋愛感情を持ちはじめる。そうすると無関係な世界の住人である彼女が際立って、そこから切り離されるトウジの悲劇性が強調できるんじゃないかと。

――みんな、他人を信用してないんですか？

樋口　信用してないというか、一人で完結してる人間というか。最悪の場合、自分だけで生きていけると。他人を拒む事はしないけど、他人との関係が失われるのを恐れてそこそこ距離をとりながらつきあっていく。その距離の取り方ってのは人によってマチマチだけど、それでも人と人が距離を近づくにはそれなりの事情や理由があるんじゃないかと思うし、それは好意や恋だったりして、やがて依存という感情(笑)を憶えるんでしょうけど。

――「エヴァンゲリオン」には、人は本当は一人で生きて行くんだみたいなムードがあると。

樋口　いや、現実そういうものだと思います。他人と一緒に生きて行けるなんてのは、幻想じゃないですか。

――人間関係が冷めているという事ですね。でも、アスカが登場して「もう、あんた、バカね」とか言うじゃないですか。そうすると、ちょっと楽しげなムードが。

樋口　でも、そう言われてもシンジ君は、楽しそうじゃなかったでしょ。冷めてるなコイツって感じ。それは絵コンテを描いている時も、結構気をつけてました。そっちに踏み込んだら絶対にいけないと思ったんで。

――それは「エヴァンゲリオン」だからですか。自分の作品だからですか。

樋口　「エヴァンゲリオン」だから、かな。だから、力及ばず、でしたけれども第拾七話は、もっともっとドライにしたかった。起伏も何にもなくて、ただ淡々と過ぎて行くという。市川準さん（注6）の映画みたいにしたかったんです。あの人の映画、監督が他人を信用してないのがあからさまに分かって好きなんです。

登場人物の感情だけでドラマが転がっていくっての、キライなもんで。「そうか、俺が頑張んなくちゃいけないのか、頑張ってやる、うおおお！」っていうのは暗っぽくて嫌だなあと(笑)。

でもやっぱりそこまで描けていないのは脚本を書く力が足りないって事だし、仕事が重なったからと言って「逃げちゃダメだ！」じゃないですか。だから庵野さんにはしばらく顔向け出来なかったんです。

――なるほど。

【注1】「プロハンター」は昭和56年に日本テレビ系で放映されたドラマ。ハードボイルドタッチの探偵もの。
【注2】音楽に動きやカット割りを合わせる事。
【注3】「ふしぎの海のナディア」は、庵野秀明の監督作品であるが、諸般の事情で23話から33話までの通称「島編」のみ、樋口真嗣が監督として内容をまとめた。「島編」は彼のセンスが炸裂したカルトなノリのシリーズとなっている。
【注4】前号の「EVA友」を参照。
【注5】「帰ってきたウルトラマン」37話「ウルトラマン夕陽に死す」で、岸田森演じる坂田健と、榊原るみ演じるアキは、ナックル星人のために命を落とす。ちなみに、この37話も前後編の前編。
【注6】映画監督。代表作は「BU・SU」「会社物語」「ノーライフキング」「病院で死ぬということ」等。

◎もはや、このコーナーの恒例となった別録り台本である。第拾八話で、シンジとアスカがいる部屋で流れているTV番組の音声。何と第拾七話で流されていたドラマの続きである。オチもなかなかグーである。

C−85〜97　TV番組の音
（再びダサい、トレンディドラマ【死語】）
（S・E）（テーブルのひっくり返る音）BGMはB-3。

女「ああっ、やはりあの時、あなたとヨリを戻したのが全ての間違いだったのよ！」
男（ポツリと）「今更、そんな」
女「いえ、今からでも遅くないわ！　そうよ、人生、いたる所に落とし穴ですもの。たとえ穴に落ちても、また這い出せばいいんだわ」
男（ポツリと）「僕がその落とし穴か？」
女「ああ、悲観にくれることもないのね。絶望の果てには必ず希望が用意されているもの！」
男（ポツリと）「僕はその、絶望の代名詞かい？」
女「そう、あなたとはきっと別れるために、つきあっていたのよ」
男（ポツリと）「それはないと、思うな」
女「だいたい、キスの下手な男にろくな奴はいないのよ！」
男（ポツリと）「キスが下手…」
女「もちろん、キスだけじゃないわよ！」
男（ポツリと）「キスだけじゃない…」
女「ああ、そのことはとっくにわかっていたハズなのに、あやまちを二度も再び、繰り返すだなんて…。（決心して）そうよ。間違いは、正さなければならないわ。そして後悔を残さず、反省をしなければならないわ」
男（ポツリと）「そのまえに、服を着て、ここを片付けたらどうだい？」

ミニミニゲリオンな人達 Michael Houseの巻

●質問その1　MichaelさんはGAINAXで何の仕事をしているのですか。

主に和英、英和の翻訳の仕事です。

●質問その2　日本にきて何年ですか。日本にきた理由は何ですか。

今年の九月に丸五年になるのです。小さい時からアニメや特撮が好きで、長年、一度日本に行きたいなぁと思っていました。実際に来られる事になった理由は、ビデオアニメの米国販売用ソフトの翻訳と字幕制作のためでした。

●質問その3　第拾八話に一緒に出演している、George A.Arriolaさん、Hiromi Arriolaさんはあなたのお友達ですか。それから、この二人はご夫婦なのでしょうか。

はい、この二人は僕の友達で、結婚して二年くらいになります

●質問その4　「エヴァンゲリオン」に出演することになったきっかけについて教えてください。

きっかけも何も……ある日、庵野さんが「ちょっと出演してみないか？」と聞いてきたので、「ぜひ」と僕が答えただけです。要するに、その場で声をかけられただけです。あと、英語の出来る友達を呼んでって言われました。ちなみに、日本語で書かれた台詞を英語に翻訳したので、ある意味、自分達の台詞を自分で書いたわけです。

●質問その5　「エヴァンゲリオン」に出演した感想をお願いします。

とても面白かったです。もし、機会があれば、またやりたいと思います。但し、お金をもらえれば、という話…（笑）。

「男」を演じる。滑稽な事

――小黒祐一郎

今更云うまでも無い事だが、「エヴァンゲリオン」には「男」という言葉が頻繁に登場する。シンジは、ミサトやアスカに「オットコのコでしょ！」とか、「あんた、オトコでしょ」とか云われ続けてきた。そんなシンジが、第拾六話で「戦いは男の仕事！」と血気にはやり、第拾七話では「僕、男ですよ」と加持に云う。

はは〜ん、シンジは自分が「男」である事を自覚しはじめたのか。つまり、「エヴァンゲリオン」は、上手く「男の子」をする事ができなかったシンジが、男らしくなっていく物語なのか。

本当に、そうなのか。

多分、そんなに簡単な話ではない。

加持リョウジ、鈴原トウジ、相田ケンスケの三人のネーミングは、村上龍の小説「愛と幻想のファシズム」の登場人物からとられている。

「愛と幻想のファシズム」はマッチョ的な、男らしさを描いた物語である。タイトルに「愛と幻想」とついているのがミソであり、一種のファンタジーとしての「男らしさ」を描いた小説なのだと私は思う。

主人公の鈴原冬二は、究極的に男らしいキャラクターとして描かれている。第拾七話「四人目の適格者」では、その鈴原冬二から名前をもらった、鈴原トウジにスポットが当てられる。

綾波の部屋を訪れたシーンでの、彼の言動は注目すべきでもあるのである。

ここで、実は、トウジが意識的に男らしくあろうとしている事が明らかになる。「男らしい男」を演じていると云ってもいい。女の部屋を片付けるなんて、男のする事ではない。たとえ、憧れのミサトに嫌われても、そのポリシーは貫かなくてはならない。

そんなトウジを見て、シンジはクスリと笑う。

この笑顔の持つ意味は複雑だ。

勿論、シンジにとっては好意的な笑いなのだが、第三者から見るとこの笑いには、意地悪な意味が感じられる。

「男を貫く」とは全くもって、辛いものなのである。

そして、滑稽なものでもあるのだ。

そういう意味を感じる事ができる。

EVAと使徒の戦闘によって、トウジの妹は重傷を負った。トウジは一度は、EVAに対して激しい怒りを感じた。だが、妹のために、EVAに乗る決心をする。その決心も大変に「男らしい」ものといえる。

だが、第拾八話において、その「男らしい」トウジが乗った参号機は、活躍する事はない。使徒に乗っ取られ、彼は参号機ごと初号機に倒されてしまう。

ここで思い出していただきたい。第拾六話で「男の仕事は男にまかせろ！」で調子に乗ったシンジは、お母さんにしかられて、子宮の中に閉じこめられてしまった。単に、シンジが男らしくなっていく物語であるならば、あそこでシンジは大活躍をしなくてはならない。初めて自分から、男らしくあろうとしたのだから。

「エヴァンゲリオン」は、主人公が男らしくなってく物語を展開する一方で、「男らしさ」というものに対する疑問を投げかける。

そして、続く第拾九話のサブタイトルは「男の戦い」。このサブタイトルの「男」には、どんな意味があるのか。

がんばれトウジくん

作／むっちりむうにい

声優博士のちょっちチェック

小川びい

〈第拾七話〉

●Aパート

▼Cut1　委員会の査問
メンバーは2話と同様。但し、これまでは委員A〜Dと表記されていたが、今回は男A〜Dと表記されている。男A「では閉ごう〜」が長嶝高士、続く男Bが滑川元夢、男C「彼の記憶が〜」が鈴木勝美、最後に男D「使徒は人間の精神〜」が子安武人。

▼Cut3　看護婦たちの会話
看護婦A「12号室のクランケ?」が岩男潤子、看護婦B「例のE事件の〜」が長沢美樹、看護婦C「なかなか難しいみたいよ〜」が緒方恵美。

▼Cut8　ヒカリの号令
第拾七話において繰り返されるセリフ。岩男潤子の生硬な感じの演技がヒカリ生真面目さを表しているようでグー。

▼Cut9　先生
演じるは第参話同様、丸山詠二。

▼Cut14　パニックしているネルフ本部
日向などのセリフにかぶさって、オペレータ1A「メルキオールのベースト、3.2、3.9〜」やオペレーター B「第6、第7、第8光学回線〜」といったセリフが聞こえるだろうか？　オペレーターAは岩男。同Bは永野広一がそれぞれ演じている。

▼Cut94　トウジ「かまへん！ワシの信念やからな」
息をのんでウッとなる演技が楽しい。関智一のユーモラスな側面とトウジのどこかしら滑稽なほどの男っぷりがうまく噛み合っている。

▼Cut107　レイ「あ、ありがと」
突然のことに、気持ちが生のままで出た様子が伝わってくる台詞。林原めぐみの表現が見事。

●Bパート

▼Cut126　女性アナウンス
「第3管区の形態移行、並びに指向兵器試験は予定通り行われます」が岩男。続く「技術局3課の西添博士、西添博士。至急開発2課まで御連絡下さい」が林原。

▼Cut150　シンジ「ぼく、男ですよ」
「ブ然と答える」とアフレコ台本にある。緒方の演技はほんとうに男のように聞こえるからすごい。

▼Cut162　アナウンス「プラグ深度は3.2で固定」
ミサトとリツコの会話の後ろに流れているアナウンスは伊吹マヤによるもの。

▼Cut170　教室に流れるアナウンス
トウジを呼び出すアナウンス。演じているのは永野。

▼Cut199　女子生徒のアナウンス
下校時刻を告げるアナウンス。長沢美樹によるもの。

▼Cut205　ヒカリ「……鈴原くん」
AR台本に指示はないが、画面では「鈴原…くん」と一拍おいている。岩男のアドリヴだろうか。ヒカリの胸のドキドキが伝わってくるようだ。

▼Cut240　鼻歌まじりのヒカリ
なにかの節をつけているようだが、岩男のアドリヴだろう。はたして何の歌なのだろうか？

〈第拾八話〉

●Aパート

▼Cut1　エクタ64とネオパン400の交信
無線A、BによるMichael HouseとGeorge A.Arriolaによるもの

▼Cut37　キッと振り向くアスカ
荒げた息の演技は、アドリヴを入れるようにとの指示によるもの。

▼Cut51　レイ「そう?よくわからない」
「そう」の部分。本来なら語尾が上がるところだが、わざと抑揚をなくし、曖昧な感じを出している林原めぐみの演技に注目。そのあとすぐにCut53で「そう」という台詞がさらに繰り返されるが、それぞれの変化にも注意。ふいに人間的な感情をあらわすあたり、見事な表現である。

▼Cut61　講義する教師
前回より引続き丸山詠二が担当。台詞は第参話の繰り返し。そのまま第参話の回想へつなぐという仕掛けだ。

▼Cut83　アンガ〜と口をあけるアスカ
アスカとヒカリの会話が続く場面。宮村と岩男の声が耳に心地よい。消え入りそうな声で「……やさしいところ……」というヒカリの台詞など、岩男潤子ファンにとってたまらないだろう（「消え入りそうな声」というのは台本の指示）。そのヒカリの台詞を受けて、「は?」というアスカがあきれるリアクションの台詞は、AR台本から判断するに、現場で追加されたもののようだ。

▼Cut85　ダサいトレンディドラマ（死語）
「ダサい……」と台本のト書きに書いてある。女と男の会話。女を演じているのは平松晶子。男は永野広一。演じている役者は異なるが、第拾六話で流れていたドラマの続きのようだ。

▼Cut87　アスカ「加持さんお風呂長いのね！」
シンジの言葉を遮るアスカ。「気持ち早口で」との指示がAR台本にある。

▼Cut107　アナウンス女「3号機起動実験まで〜」
アナウンス女は長沢美樹。続くCut108でのアナウンス男は永野。バックに同時通訳的に流れている英語はMichael House、George A.Arriola、Hiromi Arriolaによるもの。

▼Cut123　アナウンス「エントリープラグ固定完了」
こちらのアナウンスは平松晶子によるもの。Cut132まですべて同様に平松による。

●Bパート

▼Cut138　女「被害、不明！」
これも平松。Cut145の男「空輸開始は〜」は関智一。

▼Cut247　オペレーター男「全神経ダミーシステムへ直結完了」
オペレーター男を演じるのは永野。続くオペレーター女は平松。アナウンスと同一人物かは不明。またCut266でのアナウンス女と男も平松と永野だが、同一人物かは不明。

▼Cut318〜322　救助作業現場の声
LDライナーのキャスト表に掲載できなかった作業現場のキャストを左の表に上げておく。

▼Cut329〜331　エントリープラグ回収作業の声
「指向性マイクで音を拾っている感じで」との注釈がある。男A「了解。変形部はレーザーで切断」が丸山。男B「LCLの変質サンプルは〜」が永野。続く女「付着している生体部品は破棄処分！」が平松。

▼Cut331　シンジ「……トウジ」
参号機パイロットの名前が呼ばれたのはこれが初めて。ポイントになる台詞だが、聞き取れないほどの調子での発声が素晴らしい。緒方恵美の名演だろう。

▼Cut335　シンジの叫び
ラストCutでのシンジの叫びは台本にはない。現場で追加されたようだ。

▼Cut319〜322　救助作業現場の声

役	キャスト
男A	永野広一
男B	丸山詠二
男C	岩永哲哉
男D	関　智一
男E	子安武人
男F	結城比呂
男G	立木文彦
男H	滑川元夢
女A	山口由里子
女B	長沢美樹
女C	林原めぐみ
女D	平松晶子
女E	宮村優子

男A「こっちにもいたぞ！　生存者だ！〜」
女A「第3班は807のデーターを可及的〜」
男B「そうだ。レコーダーのグラフは〜」
女B「第2班は、リニアブロックの〜」
男C「20号線は全面封鎖だ！〜」
男D「いいから、信濃境から小淵沢への〜」
男E「報道管制は広報に話をつけてある〜」
女C「第8シャフトにて生存者2名を確認〜」
男F「了解、至急救護班〜」
女D「仮設ケイジの火災は〜」
女E「了解、再確認の後〜」
男G「第23坑道は破棄だ〜」
男H「はい、地下800メートル以下は〜」

●スターチャイルドからのお知らせ
御好評戴いております『新世紀エヴァンゲリオン』ビデオ・LDシリーズですが、最終巻Genesis0:14までのリリースが決定致しました。また、制作上の都合によりGenesis0:10以降の発売予定日が、以下のように変更になっておりますので御注意下さい。今後とも本シリーズをよろしくお願い致します。

巻数	収録話数	発売予定日	商品番号・ビデオ	LD
【10】	#19、#20	96年12月6日	KIVA-258	KILA-158
【11】	#21、#22	97年2月5日	KIVA-259	KILA-159
【12】	#23、#24	97年3月5日	KIVA-260	KILA-160
【13】	#25、新#25	97年5月3日	KIVA-261	KILA-161
【14】	最終話、新最終話	97年6月4日	KIVA-311	KILA-311

編集後記

●東京には、アニメ業界御用達の喫茶店がいくつかある。今回、樋口氏の取材をさせてもらったのも、その一つ。隣りのテーブルには、『新世紀エヴァンゲリオン』のプロデューサーを務めていた植田もとき氏が！　●今回登場していただいた、Michael House氏は、GAINAXで働く外人さんである。昨年の末、GAINAX社内でLD第壱巻のデザインコンセプトについて打ち合わせしている時に、隣りで仕事をしながら、「オーウ、コレ、カッコイイネ」とまるでジャッキー・グーデリアンの様にコメントしてくれたのが印象的だ。

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード(株)スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第拾号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

特別寄稿　摩砂雪

第拾九話の絵コンテ・演出・設定補も担当した摩砂雪副監督による特別寄稿である。本人の要望により、元の原稿に一切手を加えず、文字組もそのまま掲載する。

“祭り囃子は已まず”

その依頼が巡り廻ってきたのは、“怒号と困惑”・“賛美と罵倒”という嵐も凪いできて、南々西からの“誹謗”という旋風が、手招きをし始めた頃である。
「この“作品”なるものについて、あなた様のコメントを頂きたい。」というモノである。
彼は、即二つ返事でそれをお断り申し上げた。
何故なら、彼はインタビューなるモノ（それが編集者の手に掛かり、記事となって誌面に載ってしまったモノ）に、良からぬ印象しか持ちあわせていないからである。

その昔、某国の総理大臣様が仰せられた有名な“お言葉”があった。
「この記者会見に於いて、ＴＶ各局のスタッフの方々には、生放送という条件付きで会見場入席を許可致すが、新聞記者諸氏は全て、この場からの速やかなる撤収を願いたい。」
はっきりとした記憶としては残ってはいないが、確かこの様な台詞だったと思う。わかり易く言えば、記者会見なるものに際して、ＴＶカメラをとおした放送メディアを使った“生”の自分の言葉を有りのまま伝える（ＬＩＶＥで肉声や表情を流す）という行為は、本人の意志が国民の前に晒される上での信憑性を欠くことは無いが、活字媒体を使った会見情報の発表内容には、まったく信頼が於けない。というミもフタもない言い方である。
日頃、“雑誌記事”等で手痛い目に逢っている彼は、これと似たような想いを常に心に抱いていた。

<<言いたいこと>>は、山ほどある――。
しかし、これが本当に旨く伝えられない。否、活字上では、その<<言葉のニュアンス>>なるものは、まったくと言っていい程伝わらないのが実情である。
喩え、本人が本人自身のことを誠心誠意で語ったとしても、それは相手に伝わるとは限らない。
彼でさえ、この腹立たしくも、どうしようにもならない<<言葉>>なるものに面と対峙してしまった時、ローマ兵とアラブ人の策略に塡まってしまったスパルタカス宜しく、矛と盾を頭の上に翳しながら不毛の荒野を、あてどなく放浪う破目に陥るのである。
尚且つ、他人様の手に掛り、<<活字>>なるものに変換してしまうというのは、尚更相手に伝わりようがないではないか。
そのうえ追い討ちをかけるが如く、記者や編集者の作為的な意図（私見と呼ばれている悪慣習）加味されてしまうケースがあまりにも多過ぎるのだ。
――これでは、堪ったものではない！
故に、<<言葉>>なるもの（つまり、その当時に本人が喋っていた声のトーンや仕種等）は、<<活字>>というモノに変換してしまうという作業上、読者諸氏や編集者による細心の注意と心掛けが必然となってくる筈である。
だが、万が一を期してそれらが行われ、また本人自身の語った言葉を有りの儘記事にしたとしても、多分それは100％読者諸氏に伝わるとは限らないのである。

それにもうひとつ、彼には“その作品”について語れない――否、語る必然性などは、一斉、無いのではないかと、常日頃から想っていた。
そもそも映画なり、映像作品づくりと世間一般で呼ばれている職業は、仮にも映画人と自称している輩が、自分たちの表現したいコトをお金を貰いながら、好き勝手に作らせて頂いているという、
“我儘の塊物”が怪獣と化し、プロデューサーの免罪符という加粒子ビームを眼光から放ち、スタッフというエネルギー源を糧として、その獰猛な口元からは“設定”という紅蓮の火炎弾を吐きながら、大手を振り振り、“お客”という街並を蹂躙しながら伸し歩いていくという、
“想像の強制自慰行為”が映倫の御墨付きで一般公開（上演）されているようなモノである。
つまり<<言いたいこと>>は全て、お金と時間が許す限り、全身全霊を尽くして、フィルムに焼きつけてある筈なのだ。
それを喩え、喩えだよ。世間を少しばかり騒がそうが、大顰蹙を買ったフィルムを作ってしまおうが、将又、ファンとやらに何らかの影響を与えてしまおうが、映画という完成品を提示してしまった後に「このシーンは、こういう想いで描きました。」とか、「このカットにはこんなに凝った方法で撮影しているんですよ。」などと活字媒体でベラベラと如何にも得意気に喋ってしまう行為自体、可笑しい事ではないのだろうか？
彼には、これが都合のいい“**跡付け**”と“**言い訳**”としか取れない。

更にそれらが専門誌やｍｏｏｋ本等に掲載され、後日本として書店に平積みされてしまう昨今、映画人として、これらに荷担することに彼は疑問を隠し得ない。
剰え、この“作品”は、現時点に於いて、未完、且つ行き先知れずであるところの発展途上の代物である。
そして彼には、未だに終われないこの“お祭り”について語れるほどの度量はまだ持ちあわせてはいない。

よって、彼はこの“作品”について語らない。

――しかし、「これもお仕事なんだから請けてヨォ～！」と広報担当様各位から再三の追及が厳しく、彼は<<くだらない随筆>>なら、という条件付きで、渋々とお請けする破目となる。
だが、これが彼自身の首を絞める結果となったのは前文を読み返す限り一目瞭然である。

これは、ただの“**凄い言い訳**”である。

それでも、彼は願っている――。
「少しでも心ある映画人と称される人々よ、多くを語ることなかれ――。」と。
何故なら、彼等は“夢”を売る仕事人であり、彼等が作品づくりというものに携わってきたその“過程”は、彼等のみに与えられた唯一の財産なのだから・・・。

'９６年　初秋

――多摩川の砂に降る雪――

副監督日記　「夢みる気持ち」　鶴巻和哉

どうも、知らないおっさんを殺して雑木林に捨てて来たところらしい。という夢を見た。大地康雄似のおっさんだ。何故そうなったのか、どうやったのか全く覚えていない。木立の向こうにいくつもの赤いパトライトが見える。人影も多い。警官だけじゃなくやじ馬も集まってるらしい。ひとごみに紛れて警察の包囲を突破する。落ち着いて、おどおどしないように。怪しまれて顔をみられたら終わりだ。なにげなく、いかにも通りがかりのやじ馬に見えるように。やっと安心できる場所までたどり着いたところで、包囲の中に忘れ物を思い出す。あれが見つかったらすぐにバレる。ここは危険を冒してでも取りに戻らなくては。ああ～、俺のバカバカ！。なんて思いながらムッチャクチャ後悔してる。何故自首しなかったんだ？。どうせすぐに捕まるんだろうし、逃げ切れたところで一生びくびくして暮らさなきゃいけない。そもそも何故人なんか殺しちゃったんだぁ～。て、とこ ろで目が覚めた。
雑木林での逃亡劇が夢だっていうのは寝ぼけた頭でもすぐに理解ったが、さて、人を殺しちゃったのは夢であろうか？現であろうか？。4秒くらいドキドキしてから、ゆっくりと夢であったことを思い出す。それでもしばらく気持ちは残る。気の遠くなるような後悔…。懺悔…。絶望…。
起こったことは幻なのに、あの「気持ち」は本物だった。
なんだかとても変。すべて夢の中の出来事なんだから、「気持ち」もまた夢の中にあるべきなのに。夢が現実を侵食している感じ。

知識は事物の積み重ねだけど、経験は「気持ち」の積み重ねだと思える。とすれば、経験上では現実でのことも夢の中でのことも変わりがないことになってしまう。夢と現実が等価だという話は知識としては知っていたが、経験するのははじめてだ。
僕にとっての夢はビジュアルよりはシチュエーションによって生ずる「気持ち」として現れることが多い。他人の夢について、場面や状況をくわしく聞くことはあっても、そのときの気持ちについて話す人は少ない。ジグムント・フロイトの「夢判断」でも夢のビジュアル的な象徴性のみが考察されていたように思う。僕の夢が特殊なのかもしれないし、夢で見る気持ちは現実に属していて夢の領分ではないということなのかもしれない。
今、バーチャルリアリティといえばインタラクティヴな３ＤＣＧとして語られているが、あんな出来損ないのビジュアルよりはシチュエーションと「気持ち」を与えてくれる、例えば良くできたロールプレイングゲームのほうがよほどバーチャルリアリティだといえる。初代ドラクエをプレイ中、帰宅する僕はとても憂鬱だった。その日は見知らぬダンジョンに潜らねばならなかったからだ。あのときの「心細さ」はやっぱり本物だったはずだ。

がんばれ主人公くん

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

「第拾九話」の巻

●第拾九話に、設定補の役職でクレジットされているのは、あさりよしとおと摩砂雪の二人。あさりよしとおは、第14の使徒のデザインを担当。摩砂雪は、シンジがかけられた手錠、片腕の無い零号機、初号機が壊されていく過程の姿、初号機のコア、再生された初号機の腕等のデザインを担当。

●第拾九話は、第壱話、第弐話、第四話のCutに構図等を似せた、リメイク的な意味の映像が多い。左に写真を掲載したAパート最後の、使徒の出現を知ったシンジのCutもそのひとつ。元になっているのは、第壱話冒頭のシンジだ。

【第拾九話のシンジ】

【第壱話のシンジ】

●ジオフロント内部でネルフが使徒を迎撃するシーンの、光弾の動きはリアルタッチの動きが印象的。この一連の光弾の作画も、演出担当の摩砂雪の手によるものだ。

「第弐拾話」の巻

●第弐拾話は「心の話」の色が濃い。冒頭でマヤと青葉は、第一発令所と同じ作りだが違和感があり、椅子はきつく、センサーも堅いと云う。つまり、「要は気持ちの問題だ」という事。意外とこのエピソードのテーマに関連した台詞かもしれない。

●第弐拾話の内的宇宙シーンには、アニメの制作過程で書かれる絵コンテや、レイアウトも画面に登場する。本編で使われたセルも、背景が別のものになっていたりする。Aパートの終わり近く、シンジが「うるさい、うるさい、父さんがみんな悪いんじゃないか」と云う箇所では、ゲンドウの同じCutの、完成画面、セルコピー、動画、絵コンテが次々に画面に登場するという映像も。

●精神分析用語の文字のみの映像も、なかなか意味深長。「抑圧」という文字が、下の方に文字通り抑圧されていたりするお遊びも。

●内的宇宙で、シンジは前には分からなかった「淋しさ」や「幸せ」がわかる様な気がしてきたと云う。第3新東京市で多くの人と出会い、関係を保ちつつ生きていくうちに、彼も、人の温もりや、他人に優しくしてもらえる悦びを知ったという事なのだろう。そして、同時に、淋しさも知ったのだ。

◎またまた今回も別録台本である。第弐拾話でミサトとリツコが自動車に乗っているシーンで、カーステレオから流れてくるラジヲ番組。オーラルステージや、リビドー等、精神分析的な用語がここにも登場している。

女性パーソナリティ

「それはわかるんだけど、オーラルステージってえの？ 昔の心理学者が云ってた。
つまりさ、母親といつまでも一緒にいたがるっていうか、常に何かに頼ってる連中なんだけど。そういう奴が私の知り合いにもいてさ、よく似てんだよね、そいつと。
君の手紙、読んだ限りじゃ。ま、彼女にしてみればさ。恋人と母親、あと妹かな。これらを兼ねるのって、ケッコウ大変だと思うよ。
それにさ、恋人という肩書使って自分のリビドーのはけ口に利用してないかな？　キミ。
と、まあ、これは云い過ぎかも知れないけどね。
女ってのはね。この人は自分を好きかどうか、というアンテナはすっごく敏感にできてるから。
彼女はもう感づいてると思うよ。君が捜てくれる母親として自分を求めてるって事に」

CASTから一声 岩永哲哉の巻

ガイナさん

お気に入りはコレだ…の巻　水玉螢之丞

今や集めきれないほど出てる、"エヴァ・グッズ"。
オレ的には「ぬりえ」が欲しいなあ
トレーディング・カード etc…
コスプレ用プラグスーツ
プライズマシン用ポスター
キャッチャーぬいぐるみ

コレはグー！
ガイナックス社内で評判がいいのは、きせかえ人形とトレーディングカード、200円ガシャポン、といったところ。
さだもとさん

コレがスゴいことにアグラがかけるんですわ
でも「座禅ゲリオン」状態で
ダントツに出来がいいのは、てんちょさんも大絶賛のハセガワ？の「初号機プラモデル」
ほー

で、庵野かんとくのイチオシは…
やっぱコレだよ
ソフビのジ○ナ○マン
番組ちがうってばよそれ

どーぞ
「1分の1綾波」買った人は「EVA友」に写真を送ってくれ
インパクトもデカいのはコレだ、
…とまあいろいろある中で、大きさもネタとも
え見たいだけだけど。

連載企画（じゃ困る）スターチャイルドからのお詫びが多くて済みませんのコーナー！

その1

第拾九話次回予告（30秒バージョン）ですが、第弐拾話のサブタイトルを「人のかたち　心のかたち」と云っています。マスタリングの際にそれを見た0月が気が付いたのですが、もう録り直す時間などない…その時、一緒にいたカントクの天の声が響いたのです。「まあこれはこれで」。許可が出た（？）ということで、ファンの皆様御容赦下さい。それにしてもナレーション録りの時点で気が付かなかったと云うことは、もしや原稿自体が…？

その2

Genesis 0:7の発売予告ですが、シミュレーション（simulation）プラグのことをシュミレーションプラグと云っています。これは私が書き間違えたもので、ナレーションとしては原稿通りの正しいものなのです。うう、ごめんよマヤちゃん。じゃなくて長沢美樹様とマヤマニア（云いにくい）の方々にお詫び申し上げます。

（スターチャイルド・ヨ）

声優博士のちょっちチェック

小川びい

《第拾九話》

●Aパート

▼Cut25　解体作業中に流れるアナウンス
アナウンス男A「ライトプレストの溶解処理～」が山寺宏一。続くアナウンス女「体液の洗浄は～」が松下美由紀。アナウンス男B「第6パーツは熱処理されます～」が永野広一。松下美由紀は本作初登場。アーツビジョン所属の若手声優。代表作は「大草原の小さな天使　ブッシュベイビー」のケイトなど。

▼Cut30　アスカ「ダメかもしれないわね」
Cut29の最後のミサトの台詞「今度は」とつながる感じで、との演出上の指示がAR台本にある。

▼Cut54　看護婦
「面会は特別だから～」とヒカリに伝えている看護婦。演じているのは松下美由紀。

▼Cut62　ヒカリ「うん」
同Cutに2つの「うん」が登場する。そのニュアンスの違いが興味深い。岩男潤子の好演である。

▼Cut63　シルエットの男
シンジを独房から出す男。演じているのは永野広一。EDでクレジットされているのはこの役。

▼Cut83　女の声
ケンスケからの電話に割り込んで、機密保持を告げる女の声。松下美由紀が演じている。

▼Cut94B　シンジ「僕はもうエヴァには乗りません」
キッパリと、との指示あり。ポツリと力はないが意志を感じる台詞と説明されている。シチュエーションは4話とパラレルだが、シンジの決意の違いをその演技が表している。緒方恵美の好演に注目。

▼Cut99　駅のアナウンス
非常事態を告げるアナウンス。これも松下美由紀によるもの。

●Bパート

▼Cut103　男「総員第一種戦闘配置」
スピーカーから流れるアナウンスは永野広一。Cut110「第1から18番まで損壊」も同じ。

▼Cut120　女「エントリースタート」
こちらは岩男潤子。Cut123A「パルス逆流」も同じ。

▼Cut128C　レイ「私が死んでも代わりはいるもの」
決意というより、自然に何かを受け入れているニュアンスの芝居が面白い。AR台本には、悲観的なものでなく、極当然な自然な台詞との指示がある。

▼Cut131　男「君一何をしている～」
演じているのはキャスト表によれば岩永哲哉。同様の台詞がCut194の群衆の台詞の中にもあり、岩永哲哉が演じている。

▼Cut175　スピーカーからの声
スピーカー（右）「第8区に直撃!!」が山寺宏一。続くCut176スピーカー（左）「第6シェルターは放棄!!～」が岩永哲哉。

▼Cut185　女（スピーカー）
「ダミープラグ、搭載完了」と告げる声。これは松下美由紀。

▼Cut213B　レイ「A.T.フィールド全開」
あくまで冷静な演技が聞きもの。叫ばずに、との注釈がある。

▼Cut226　シンジに淡々と語る加持
淡々と、とは台本にある指示だが、実際にはかなり厚みのある感じである。山寺宏一のうまさが、そう聞かせるのだろうか。

▼Cut238　男A「ダミープラグ拒絶!!」
男Aは岩永哲哉。続くCut239の男Bは永野広一。

▼Cut315　シンジ「動け!!動け!!～」
「駄目です!!～」は永野広一。
本作に繰り返し現われる手法のひとつである、シンジの繰り返し台詞の集大成ともいえる。台本の「ひたすら続ける」との指示に応える緒方恵美の壮絶ともいえる叫びの演技がすばらしい。

《第弐拾話》

●Aパート

▼Cut2　ゼーレの委員達。
委員ABCDは初登場時と同様のメンバー。それぞれ、長嶝高士、清川元夢、鈴木勝美、子安武人。キールは麦人。

▼Cut47　ミサト「最後まで責任とりなさいよっ!!」
ミサトのヒステリックな演技が生々しい。三石琴乃の好演。山口由里子によるリツコの冷静な演技との対比も面白い。

▼Cut50B　ラジヲのニュース番組
流れるアナウンサーの声は鈴木勝美によるもの。

●Bパート

▼Cut126　アナウンス
アナウンス女「現在、LCLの温度は～」は三石琴乃。アナウンス男「放射電磁パルス～」は関智一。アナウンス女「各計測装置は～」は緒方恵美。

▼Cut180　裸のミサト・アスカ・レイ
セクシャルなイメージのヒロイン達。それに合わせてやさしくセクシーな声が響く。各々の声優のファンにはたまらないだろう。

▼Cut185　発令所に流れるアナウンス
アナウンス女「全探査針～」が緒方恵美、アナウンス男「電磁波形～」が岩永哲哉。

▼Cut189　オペレーター達
オペレーター男「対象カテクシス～」が長嶝高士、オペレーター女「デストルドー～」が林原めぐみ。

▼Cut208E　バックに流れているアナウンス
アナウンス女「LCL循環停止～」が宮村優子、続くアナウンス男「体内アポトーシス～」が長嶝高士。

▼Cut208P　シンジの母
シンジの母・碇ユイを演じているのも林原めぐみ。今回はCut98で子供のレイも演じており、子供から親までの幅広い世代をひとりで演じていることになる。

▼Cut257　カーステからのラジヲ番組
ミサトのカーステレオから聞こえてくる女パーソナリティは林原めぐみが演じている。拾弐話に登場したものと同一だろうか。長く人気ラジオ番組を支えているだけあって、さすがの調子。話している内容も興味深い。

▼Cut281　リツコ「人のことは、云えないか」
直前までミサトを軽蔑する調子でひとりごちているが、ふと自分を振り返ってつぶやくセリフ。それまでの冷徹な感じがふと緩んで、甘いニュアンスが漂う演技がナイス。

▼Cut288　ミサトと加持のベッドシーン
本作の台詞ドラマとしての神髄をみせたともいえる場面。加持「御婦人に利用されるのも光栄の至りだが」という台詞の直前、微かに息を吹いて笑いをもらす山寺宏一の演技など、聞き所は多い。特に後半の三石琴乃のアドリヴによるあえぎ声が素晴らしい。「三石様、何卒よろしくお願いいたします。庵野拝」というAR台本の注意書きが泣かせる。庵野監督の三石琴乃への信頼を示すとも受け取れよう。

クライン空間

執筆　小黒祐一郎

第弐拾話で、一度、シンジのサルベージは失敗する。

それがリツコの云う通り「シンジが現実の世界に帰りたくないから」であるのだとすれば、その後、シンジの肉体が実体化されたのは「彼が現実の世界に帰りたい」と思ったからなのだろう。

以下は、例によって、いくつかある考え方のひとつだ。

第弐拾話における、内的世界でのシンジの葛藤は「自分と他者」の問題である。「他者」とは、敵であり、父であり、女性達であり、自分に優しくしてくれる人達である。敵とはどう戦うべきなのか、他者とはどうつきあっていくべきなのか。そして、自分はどうすれば「他者」に「ここにいて、いい」と認めてもらえるのか。自分は、本当に存在してもよい存在なのか。

肉体を許してもいいという女性達の言葉も、友人達の呼びかけも、シンジを現実の世界に連れ戻す事はできなかった。

葛藤を続けたシンジは、母のイメージと出会った事をきっかけにして、現実の世界に戻ってくる。「どんな世界でも幸福になる方法はある」という励まし、そして、自分が両親に祝福されてこの世に誕生したのだという事実（これが、現実において事実なのかどうかは問題ではない）。それが、恐らくはシンジに一時的な心の平静を与えたのだろう。「自分は存在していても、よいのだ」と彼に思わせたのだろう。

「自分はここにいてもよいのだ」と思う事が、シンジの肉体を再構成した。「心のかたち」が整えられた時、「人のかたち」が再現されたのだ。

だが、それはあくまで一時的な、心の平静なのだろう。

ところで、10年前にも同様の事件が起き、その時のサルベージは失敗したのだという。

その時の被害者は、「心のかたち」が元に戻らなかったのだろうか。だとしたら、何故？

えゔぁ川柳

■よく見れば　トウジの片足　見当たらず■分かっとる　分かってないわよ　男と女■黒塗りの　車にロゴ入り　極秘機関■地底湖の　艦はどこから　入ったか■アルバイトばれて　水まく　猫の鈴■胸のうち　開いてみれば　コアがあり■包帯は　綾波だけじゃ　ないとEVA■軽口を　たたいて日向　頭下げ■変なもの　いったいどこに　入れたのか■密会を　重ねる女の　愚かさよ

編集後記

●ようやく辿り着いた10巻目。何て長い道のりだ。残りは、4巻。皆さま、おつき合いください。ああっ、そろそろ、全巻購入特典の事を考えなくては。●私としては、今までの「ごあんないマンガ」の中で、今回のが一番お気に入り（笑）。やっぱ、オタク文化の原点のひとつだもんなあ。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第拾壱号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

皆様おひさしゅうございます
劇場映画も成功を収め
改めてソフトのリリースに際しファンの皆様もさぞやお慶びのことと存じあげます

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第弐拾壱話「ネルフ、誕生」

●ネルフの組織や、ゲンドウのイメージが英国の特撮TVシリーズ「謎の円盤UFO」に登場した地球防衛組織SHADOを意識したものであるらしいと云われている。「謎の円盤UFO」にも、シリーズ終盤の22話にSHADOの成立を、ストレイカー司令官の回想のかたちで描いた「シャドーはこうして生まれた」というエピソードがあり、そこでもストレイカー司令官とその妻の関係が問題となるのだ。この第弐拾壱話を観て、「謎の円盤UFO」を思い出したオールドファンもいたことだろう。第弐拾壱話でインサートされる若い頃のゲンドウのイラスト（オープニングにも登場）も、ストレイカー司令に似ている。

●第弐拾話「心のかたち 人のかたち」のAパートの最後で、初号機に取り込まれたシンジが、「僕はエヴァを知っていた」と気づくシーンがある。その時に、この第弐拾壱話でユイの実験を見ている幼いシンジの映像がインサートされる。つまり、シンジは第弐拾話の段階で、ユイが消失した実験を自分が見ており、その時にエヴァを見ていたという事なのだろうか。2004年に地下第2実験場で行われたユイに関する実験とは、初号機が直接関係したものだったのだろうか。

●1999年、紅葉の山道をユイとともに歩く冬月。冬月にとっては、どうやら調査にかこつけたデートだったようだ。2003年に、冬月は日本に秋が無くなったのを残念がっているが、ユイと紅葉の山道を歩いたことを懐かしんでいたのかもしれない。

●TV版放映時、この話の終盤で加持を撃ったのはミサトではないかと思ったファンが少なからずいたようだ。今回のビデオ&LD版では手直しされているが、TV放映版では、銃声がした直後に「鵜城」の表札がついたマンションのドアのカットとなる。それをミサトが犯人である事を示す演出ととったファンもいた事だろう。加持を撃った相手は、ゼーレ側の人間と云う事も考えられるし、ネルフ側の人間とも考えられるが、前後の展開から、ミサトが撃ったと考えるのは不自然なのではないだろうか。今回のビデオ&LD版では、加持がゲンドウにアダムのサンプルを渡した事が、ゼーレ側に露見してしまいそうでマズイという彼自身の台詞が加えられている。これで、ゼーレ犯人説が濃厚になる？

第弐拾弐話「せめて、人間らしく」

●TV放映版で、第弐拾壱話についた第弐拾弐話の予告に登場した「拒否」「父」「母」「愛着行動」「合理化」「喪失感」「犯さないで」等の文字。この文字は、TV放映版では本編には登場せず、予告だけの幻のカットだったが、今回のビデオ&LD版でようやく本編への登場となった。ただし、撮影処理等は予告とは違っている。

●独国からかかってきた継母からの電話で、アスカは独語で「彼を紹介しようか？ まさか、そんな事ないわよ。彼は社交的じゃないのよ」と話しているが、「彼」とはシンジの事。「まさか」とは、継母にシンジが恋人なのかと訊かれての回答だ。

●アスカとレイがエレベーターの中で約50秒、沈黙したままという場面。TV放映時には、あまりの制作者の大胆さと、視聴者に与える緊張感の強さが大変な話題となった。TV放映版では、50秒の間にアスカがまばたきをする描写のみが有り、このソフト版ではアスカが鼻をすする描写も加わっている。『DEATH』編の同シーンも、このビデオ&LD版と同じ、鼻をすするバージョンだった。

●アスカの内的宇宙での戦闘で、ちょっと気になる台詞と映像がある。第九話「瞬間、心、重ねて」のフスマをしめるカットの次に、フスマを閉めたままうなだれるアスカのカットが新作で入る。第拾伍話「嘘と沈黙」でシンジとキスするアスカの次に、第拾話「マグマダイバー」での初号機に助けられた弐号機、その次のカットが再び第拾伍話で、キスの後に洗面台に駆け出すアスカ。次のカットは新作で、キスをした後にうがいをするアスカ。すなわち、全てシンジとの関係に関連したカットである。そこにかぶさる台詞は「何もしない！ 私を助けてくれない！ 抱きしめてもくれないくせに」。この台詞がアスカの真実の気持ちだとすれば、彼女はシンジに守ってもらい、愛してもらいたいと望んでいた、と考える事も出来る。だが、シンジは彼女の気持ちに応えてくれなかったという事か。だとすれば、彼女の第拾伍話でキスをしようと自分から誘っておいて、その後で、さも不快そうにうがいをしたのも理解しやすくなる。

●アスカの内的宇宙の終わり辺りに登場する子供が描いたようなクレヨン画。人間が頭から血を流している絵もあるが、絵コンテの指示によれば「父母を殺したクレヨンの画」との事。アスカが子供の頃に描いた絵なのだろうか。

●Aパートで、駅のホームにいるシンジとレイを見て、アスカは「すっかり、元のサヤに収まっちゃってさ」と悪態をつく。彼女は、二人が恋人同士か、あるいはそれに近い関係だと思っているのだろうか。だとすれば、その後の浴室で「ファーストはもっと嫌」と云っていたのも納得できる？ このあたりのアスカの描写は『THE END OF EVANGELION』への伏線となるのだろうか。

●Aパートのネルフ本部の前のベンチで、遠景で、カット割りも動きもなく、ミサトと日向が喋るシーン。あるいは、先に触れたエレベーター内のレイとアスカの沈黙シーン等、このあたりの話数から、通常のアニメのお約束的な描写から逸脱した「アニメーションの解体」ともいえる描写が続出しはじめる。第弐拾弐話についた第弐拾参話「涙」の予告もなかなか強烈。この予告で画面に登場しているのは、アニメの制作過程で描かれるレイアウトと呼ばれるもの。背景や、キャラクターの位置等が描かれた「画面の設計図」である。

●アスカが自分が生理になるのを嫌がったり、男性の性的な事に対して否定的だったりするのは、幼い頃に、父親と愛人が愛し合う場面を見てしまった事がトラウマになっているためなのかもしれない。「子供なんか絶対いらない」と思う一方で、加持に対して「キスより先もOK」と云ったりするあたりの矛盾は、人間らしい生々しさが出ていてなかなか深い。

一年二ヶ月ぶりの友の会

この度は小社ビデオ&レーザーディスク「新世紀エヴァンゲリオン Genesis 0:11」をお買い上げ戴きまして、誠に有り難う御座います。当初の予定を大幅に変更し、大変長らくお待たせしてしまいました事を深くお詫び申し上げます。今回の長期発売延期の大きな要因としては、'97年春及び夏の劇場版公開が急遽決定し、ビデオ&LD版の修正カット及び新作シーンの制作スケジュールに影響が出てしまった事が挙げられます。当然の事ではありますが、本ビデオソフトはユーザーの皆様あっての商品であり、またその御期待に添えるよう最大限の努力を払うのがメーカーの努めである事は明白であります。しかしながら「新世紀エヴァンゲリオン」に関しましては、表面上の企業倫理を守るよりも庵野秀明監督の意向を最優先し、作品に於ける作家性を純度の高い状態でお客様にお見せする事が、何よりのサービスと判断させて戴きました。諸事情御高察の上、御了承願えましたら幸いです。今後共、宜しくお願い申し上げます。

スターチャイルドレコード
／吉岡隆志

えゔぁ川柳

■無防備な　人妻姿に　魅せられて
■母親の　情事を見つめる　娘の目
■ばあさんと　呼ばれて自分の　立場知り
■元のサヤ　戻った二人に　アスカ荒れ
■葛城家　アスカのセリフで　洋式と知れ
■バスルーム　こもるアスカの　呪詛の声
■ドイツ語は　すべてアドリブ　えらいぞみやむー
■エレベーター　我慢くらべの　60秒
■三林長　山岩の順　分かったか？
■主役ロボ　空に弱いは　伝統か

副監督日記「ヘタリ者宣言」

鶴巻和哉

バルセロナにある聖家族教会は、奇怪なデザインとともに、もう一つ特異なことにおいて建築史にその名を刻んでいる。現在も教会として使用されているこの建物は、建築が始まって90余年、今だ完成していない。もちろん様々な理由によって未完成のまま使用された建物はある。しかし、かくも永きに渡って建築中のまま、しかも、建造物としての目的を果たし続けている建物は他にあるまい。実用を果たしながら完成へ近づいていく。あたかも一個の生物のようにゆっくりと成長しているかのようでさえある。

工業品というものは完成した後、使用されながら徐々に崩壊し、ある日完全に破壊され一生を終える。が、中にはバルセロナの教会のように実用の中で完成へ近づいていく工業品もある。例えばジーンズは、適度に履き込んで色が褪せたり、表面が傷んでいくことで完成する（純粋に実用品としてみれば、どうでもいいことであるが）。わざわざ表面を傷つけた状態で販売しているくらいである。

ジーンズやワークブーツ、金属性のカメラのように使用しているうちに擦れたり傷がついたりすることでいい感じになっていくモノを、個人的にヘタリ物と呼ぶことにしている。ここで大事なのは、そのモノがいい感じになっていく過程なのであって、すでに使い込まれているものを手に入れたのでは楽しみも半減だということであろう。

さて、この冬、若人の間で流行っているスタジャンも、混紡メルトンや袖の牛革が着込んでいくといい感じになっていくヘタリ物であるが、小学生の頃着ていたためか子供っぽいイメージが付きまとっていて、この歳になって欲しがることもなかろうなどと高を括っていたのである。ところが、先日某誌のグラビアで明るいグリーン十袖白のスタジャンを羽織っているりょんりょん（注1）を目撃してからというもの、頭のスイッチが切り替わってしまったのである。もう、欲しくて欲しくてたまらないのである。この歳になってりょんりょんが着ていたという理由で欲しくなるのもどうかしていると思うが、どうしようもないのである。詳しい友人にそれとなく尋ねてみたりするのだが、ここで「スタジャンていいよね」などと聞いてしまうと、こういった仲間内では「俺、買うぜ」と宣言しているのと同義になってしまうので注意が必要である。うかつに口を滑らせてしまうと後に引けなくなったりするのでたいへんマズい。「スタジャンてどうなの？」くらいの曖昧さがちょうどいいのである。私の場合、根が優柔不断なので衝動買いというのはほとんどないのであるが、あれにしようかこれにしようか、いや、そもそも買うべきか買わざるべきか、などと四六時中考えてしまうので仕事にならない。いっそ手に入れてしまえばさっぱりするのであろうが、迷う事もまた一興という困ったちゃんなのである。

と、まあ、ここまで読んでもらってたいへん申し訳ないのであるが、あなたたちにはなんの関係もないことなのだ。ウンチク物が好きだということなのだ。

だれか、俺の物欲を止めてくれ。

（注1）広末涼子のこと。樋口真嗣はこう呼んでいるぞ。

新作カット&シーンを探せ!! ビデオ・LD版の研究 第弐拾壱話、第弐拾弐話 編

上の「ごあんないマンガ」にもあるように、今回収録されている第弐拾壱話、第弐拾弐話は、より完成度を高めるために、TV放映版に大幅に手直しを加えたバージョンである。このコーナーでは、追加された新作カットや新作シーン等の、大きな変更をチェックすることにしよう。

ここで取り上げた以外にも、第弐拾壱話、第弐拾弐話には作画の手直し等の修正が、かなり多くのカットで行われている。TV放映版とほとんど同じに見えるが、微妙に直しが入っているケースも多い。

ソフト化のための第弐拾壱話、第弐拾弐話のリテイク作業は、TVシリーズ放映終了直後から、映画版制作の作業とは別に進められていた。だが、そのうちのいくつかは'97年春に公開された映画「EVANGELION DEATH AND REBIRTH」の総集編パートである『DEATH』編で使用され、先に公開されている。

第弐拾壱話「ネルフ、誕生」

	場面	カット番号	変更
（アバンタイトル）			
1	南極の基地。	Cut 306〜309	これはTV放映版にはない新作シーン。だが、『DEATH』編で使用され、先に公開されている。ただ、最後の「TOP SECRET」のテロップは、このビデオ&LD版での追加。
（Aパート）			
2	2015年、電話BOXの前の加持〜拉致された冬月とゼーレ〜1999年京都の冬月、ユイとの出逢い〜1999年、ゲンドウと冬月の出逢い〜2001年	Cut 1〜69	特に新作は無し。修正は作画のみ。
3	2002年、愛知県豊橋市郊でモグリの医師をする冬月。	Cut 70、311〜322	ここは新作シーン。
4	2002年、南極大陸へ向かう船で、冬月とゲンドウの再会〜2015年〜セカンドインパクトの原因が発表される	Cut 323、71〜103、324〜327、104〜109	冬月が、幼いミサトを小窓越しに見た後の、赤外照明で画面が赤くなっている2カットと、南極大陸のスキャン図、レポートを読む冬月の計4カットが新作。この新作部分の台詞で、南極大陸の爆心地に巨大な空洞があったことが新たに語られた。
5	2003年箱根、人工進化研究所を訪れる冬月。ゲンドウにゼーレと死海文書の公開をせまる。	Cut 110〜126	人工進化研究所の前で、冬月とユイが出逢うシーンは新作。実は、これはTV放映版の段階で予定されていたが、制作スケジュール等の都合で、カットされたシーンなのである。
6	ゲンドウと冬月が地下空洞へ〜赤木ナオコとの再会、ゲンドウが冬月を仲間に誘う	Cut 127〜132、328〜331、133〜144	地下空間へ行く列車の中で、冬月が「南極にあった地下空洞と同じものか」と驚くカットから、碇が「それは御自分の目で確かめてください」と云うまでの4カットが新作。
（Bパート）			
7	2015年のリツコとマヤ〜2005年の学生時代のミサトとリツコ。	Cut 145〜164	特に新作は無し。
8	2003年箱根芦ノ湖畔、大きな木の下の冬月とユイ	Cut 332〜346	新作シーン。ここも『DEATH』編で先に公開されたが、ややアオリで、ユイがシンジをあやしているカットは、このビデオ&LD版での追加。他のカットに関しても、ユイの作画が『DEATH』の段階から修正されている。
9	2004年、地下第2実験場〜執務室のゲンドウと冬月	Cut 165〜181	ユイが消失した後に、ゲンドウ、ユイ、冬月のモノクロの映像が挿入されるが、これはTV放映版には無かった映像。実は角川書店のフィルムブック8巻の表紙イラストの流用である。TV放映版では、ここは新聞記事とユイとシンジの写真が挿入されていた。
10	2008年、リツコがゲヒルン基地にやってくる〜2010年、ゲンドウがレイを連れてくる〜赤木ナオコがレイを絞殺。	Cut 182〜259	基本的に内容はTV放映版と同じ。ただ、ナオコがレイを絞殺する直前の、レイの顔とユイとの顔がダブるカット等で、TV放映版では無かったイメージ的な処理が加えられている。
11	2015年、電話を切る加持〜加持によって冬月が助けられる〜加持が何者かに撃たれる	Cut 260、347〜348、261〜264、349、267〜278	「2015年」のテロップの直後、加持が電話を切って「さて、行きますか」と云う2カットが新作。加持が「それにアダムのサンプルを碇司令に横流ししたのが、バレそうなんでね……」と云いつつ物陰から出て、それに冬月が続くカットも新作。
12	ミサトのマンション	Cut 279〜304	シーン頭の、外灯のカット、マンション全景、廊下のカットは、追加されたもの。TV放映版では、ここはマンションのドアが閉まるカットだった。

第弐拾弐話「せめて、人間らしく」

	場面	カット番号	変更内容
（アバンタイトル）			
13	空母の上の加持とアスカ。	Cut 292〜309	これもTV放映版にはない新作シーン。映画「DEATH」編でも使用されているが、このシーンの全カットが『DEATH』編で使われているわけではない。寝ころんでいるアスカや、アスカが加持に抱きつくカット等は、このビデオ&LD版が初出。
（Aパート）			
14	母の葬儀に参列するアスカ〜回想〜シンクロテスト〜修理中のエヴァ〜ミサトと日向	Cut 1A〜23	病室で、父親と女医の話が聞こえてくる場面での、手が人形の首を持っているカット、ドアのノブのカットは新作。
15	駅。シンジとレイが一緒にいるのを目撃するアスカ	Cut 310〜318	ここは新作シーン。
16	ミサトのマンション、アスカに電話がかかってくる〜浴室のアスカ	Cut 24A〜54、319〜339	浴室のシーンは新作。これも『DEATH』編で先に公開されている。浴室のアスカの声を、ミサトが自室で聞いている2カットはこのビデオ&LD版が初出。
17	シンクロテスト〜喫煙所のミサトとリツコ〜洗面所のアスカ〜エレベーター内のレイとアスカ〜弐号機の前のアスカ	Cut 55A〜113	特に新作は無し。だが、ここも作画の修正が多い。演技面ではエレベーター内での沈黙のカットで、アスカが鼻をすする描写が追加されている。
（Bパート）			
18	使徒出現〜弐号機発進〜使徒の心理攻撃	Cut 114〜211	特に新作は無し。
19	アスカの内的宇宙、子供のアスカと父〜色々なアスカ〜夜の操車場をさまようアスカ〜「いやああああ」の声とともに画面に現れる文字	Cut 212〜221、340〜412	内的宇宙のシーンは、最初の10数カットのみがTV放映版と同じ。首つり人形のカット以降の70数カットは全て新作。そのうちの色々なアスカが登場するシーンは『DEATH』編で先に公開されている。
20	脱力状態の弐号機〜零号機がセントラルドグマ最下層へ。ロンギヌスの槍を抜く。	Cut 222〜259D	ロンギヌスの槍を抜いた後、地下の巨人に下半身が生える描写が追加。この新作は『DEATH』編にも有り。
21	零号機はロンギヌスの槍を投げ、使徒を殲滅する〜ロンギヌスの槍は宇宙へ〜アスカの生存を確認〜膝を抱えたアスカとシンジ	Cut 260〜291	A.T.フィールドを貫く瞬間に、ロンギヌスの槍が変形するカットが新作で挿入されている。大気圏外でのロンギヌスの槍は、TV放映版では静止していたが、ビデオ&LD版では回転している。

声優博士のちょっちチェック

小川びい

本巻では、TV放映版に大幅な修正が加えられ、TV放映時のもの、劇場公開版、今回のビデオ&LDのための新録音と3種類の音声が使用されており、非常に錯綜した構成となっている。当原稿は、主に収録のために用意されるキャスト表と耳による確認から成立しているが、以上のような事情により、資料も錯綜しており、耳に頼る面が大きくなっている。そのため不確定にならざるを得ない部分が多々出てきてしまった。どうかその点をご容赦願いたい。

《第弐拾壱話》

●アバンタイトル

▼Cut305 南極

冒頭の南極の場面。劇場公開版『DEATH』編よりの音声である。会議の場面での、A「葛城博士の提唱した〜」が岩永哲哉、B「あれはあまりに〜」が永野広一、C「まだ仮説に過ぎん〜」が麦人、D「図らずとも既に実証ずみ〜」が鈴木勝美、E「現実に存在しているのだから〜」が長嶝高士。この場面にキールとゲンドウの音声が重なり、さらに「碇さんたちは来月の〜」といった川村万梨阿ほかのバックノイズ音声が重ねられている。続くCut307のG「表面の発光を止めろ〜」は長嶝、無線（右）「アダムにダイヴした〜」が川村、無線（左）「ATフィールドが全て解放されています」が岩男潤子。Cut308H「槍だ〜」が結城比呂。I「だめだ、距離が〜」が永野、Cut309「沈んでいくぞ!!」が岩永、K「わずかでもいい〜」が子安武人、L「すごい…歩き始めた」が結城、無線「地上からも歩行を確認」が永野、M「羽を広げてる〜」が麦人。アフレコ台本上では以上のセリフが用意され、さらに岩男「ガフの扉が開くと同時に〜」、川村「カウントダウン進行中」等のいくつかの音声が重ねられているという、筆者泣かせの凝った構成である。

●Aパート

▼Cut6 諜報部員

ミサトの元を訪れる諜報部員。アフレコ台本では男Aとなっており、EDクレジットでは諜報部員となっている人物。永野広一が演じている。

▼Cut17 ゼーレの声

冬月を問い質す査問の場面。音声加工されているため、耳での確認は困難である。資料によれば、07が子安、03が結城、05が岩永、09が関智一。Cut37よりの02が子安、04が永野、06が岩永、12が永野、13が結城。

▼Cut20 男子学生

冬月の回想場面。大学時代の冬月に話しかける男子学生は、順に、男子学生Aが岩永哲哉、男子学生Bが結城比呂、男子学生Cが関智一。TV放映版での若いときの冬月の演技は本当に若く聞こえる。伸びやかな高音がすばらしい。清川元夢の実力の一端を覗く思いがする。

▼Cut25 教授

居酒屋のカウンターで冬月に話しかける教授役は大山豊。東京俳優生活協同組合所属のベテランである。「宇宙エース」、「0戦はやと」などの頃から活躍。「ベリーヌ物語」のセバスチャンなど、年老いた人物を演じることが多い。

▼Cut32 碇ユイ

碇ユイの本巻初登場。EDではクレジットされていないが、碇ユイ役は云うまでもなく林原めぐみ。落ち着いた感じの演技が魅力的。

▼Cut312 小船の中

愛知県豊橋市跡に浮かぶ小船の中。完全新録音部分。国連からとおぼしき男を演じているのは長嶝高士。清川の演技はTV放映版よりは、やや年をとった感じである。

▼Cut84 笑う碇ゲンドウ

捺番を冬月に渡しながらニヤリと笑うゲンドウ。立木文彦の演じる、やや若い感じのゲンドウが興味深い。特にこの場面は含みのある笑いを含んだ演技が奥行きを感じさせる。

▼Cut97 南極調査船・第2隔離施設

幼いミサトが保護されている場面。冬月と話している男は永野広一が演じている。

▼Cut135 赤木ナオコ

赤木ナオコの初登場。演ずるは土井美加である。劇団昴所属。「超時空要塞マクロス」の早瀬未沙、「魔法のプリンセス ミンキーモモ［旧］」のママなどで人気を博した。近年では、「花より男子」の道明寺楓、「るろうに剣心」の高荷恵などがある。洋画では主役級の美女やキャリアのある女性を演じるが、アニメではもっぱら（若い）母親役を演じることが多い。本作でもやはり母親役であった。優しげな母親、甘える女、そして嫉妬に狂う人間と3つの面を表現し、厚みのある演技が本作の奥行きをさらに増した。

●Bパート

▼Cut336 冬月とユイの会話

湖面を見ながら、語り合う冬月とユイ。劇場版よりの流用。シンジの赤ん坊の声の演技が可愛らしい。続くCut169での3歳のシンジの演技もよい。緒方恵美の魅力が横溢する場面といえよう。

▼Cut184 警備員

通路で迷ったリツコを誰何する警備員は関智一が演じている。

▼Cut232 幼いレイ

道に迷ったレイに赤木ナオコが話しかける場面。幼いレイを演じるはもちろん林原めぐみ。Cut247で「所長が云ってるのよ、あなたの事」という口調で、声がユイに変化する演技には特に注目。レイ、ユイ、幼いレイと林原に演じさせる本作の趣向とそれに応えた林原の演技の聞き所であろう。

▼Cut287 TELメッセージ

ミサトの電話に録音されている時刻を告げる女性の音声は、長沢美樹が演じている。

《第弐拾弐話》

●アバンタイトル

▼Cut283 加持とアスカ

完全新録音。空母の甲板上で語らう加持とアスカ。加持の反応を伺いつつモーションをかけるアスカが魅力的。特にCut299の「ブゥ〜〜」と唇を尖らす演技が楽しい。

●Aパート

▼Cut118 参列者達

アスカの母の葬儀。喪服姿のアスカの背後で参列者が会話している場面。参列者A「仮定が現実の〜」は永野、参列者B「ではあの接触実験が〜」は子安、参列者C「いや案外〜」は岩永が演じている。

▼Cut2 アスカの母

病室のベッドの上のアスカの母。精神に異常をきたしたアスカの母の演技がすばらしい。演じるは川村万梨阿。アーツビジョン所属。アニメ映画『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』のクェス・パラヤなど、富野由悠季監督作品での、エキセントリックな美少女役で有名。ほかに『ロミオの青い空』のアンジェレッタなど、名作アニメでも活躍。ビデオアニメ『トップをねらえ!』のユング・フロイト役で、GAINAX作品でもお馴染みの声優である。本作への登場は当話が初めてであったが、その後、劇場版にも参加。そのため、本巻・第弐拾壱話に登場している。

庵野監督が『逆襲のシャア』のファンであるという話は有名であり、その点から考えれば、「アスカはクェスの子供」という深読みも可能か。

▼Cut5A アスカの父と女医

アスカの父を演じるのは関俊彦。81プロデュース所属の人気声優。『YAWARA!』の松田耕作や『忍たま乱太郎』シリーズの土井半助先生、『新機動戦記ガンダムW』のデュオなどで知られる。GAINAX作品では『ふしぎの海のナディア』15話にフェイト役で参加。庵野監督の信頼も厚いという。本作ではちょっと空々しい感じの父親を見事に演じている。

また、女医役は、同じく81プロデュース所属の勝生真沙子。『ガラスの仮面』の北島マヤ、『鎧伝サムライトルーパー』の加遊羅など。特に『美少女戦士セーラームーンS』の海王みちる（セーラーネプチューン）役でアニメファンにもお馴染みだろう。ビデオアニメ『トップをねらえ!』で、カシハラレイコを演じ、GAINAXファンにも知られる。これまた庵野監督の信頼の厚さを感じさせる。

▼Cut6 押し殺した女の声

アスカの横顔に重なる、女性の押し殺したあえぎ声。洋画等で濡れ場の場面を魅力的に演じる、勝生の面目躍如の場面。ちなみに筆者はとあるCDドラマの収録で勝生のあえぎ声を生で拝聴したことがあるが、その迫力と躊躇の無さに息をのんだ覚えがある。TV放映時には当該音声はなく、代わりに林原めぐみによるアナウンスが流れていた。諸事情を勘案すると、放映時に録音済みのものがビデオ&LD版で復活したのであろうか。

▼Cut8 中年女性

葬儀の参列者のひとりである中年女性が、泣きながら、アスカに向かってなぐさめの言葉をかける場面。中年女性は林原が演じている。

▼Cut15B 弐号機修理作業

水中に沈んだ弐号機の修理場面。ダイバー姿の作業員の背後に流れるアナウンス。アナウンス女A「弐号機左腕の〜」は川村、アナウンス男「ネクローシスは〜」は永野、アナウンス女B「アポトーシス〜」は林原めぐみによる。

▼Cut311 駅構内

携帯電話をかけているアスカの場面。完全新録音。「現在使われておりません」という電話の音声は林原。また、ホームに流れるアナウンスはGAINAX社員・和田昌子によるもの。アフレコ当日に飛び入りで参加したものだという。

▼Cut40 電話に出るアスカ

母親と電話で会話する場面。第八話以来の本格的なドイツ語による会話である。内容は宮村優子による完全なアドリブ。ドイツ語を話す役ということで、語学学校にまで通ったと聞く、その成果が実った場面である。が、そんな挿話も今ではすっかり有名な話となってしまった。

▼Cut322 風呂場のアスカ

湯船の前で立ちすくむアスカの場面。音声は劇場版からの流用。しだいに追い詰められるアスカを宮村が見事に表現している。

▼Cut61 館内アナウンス

喫煙所で会話するミサトとリツコの後背に流れる館内アナウンス。館内アナウンスA「第8動力システム〜」は川村、館内アナウンスB「第1発令所〜」は勝生による。

▼Cut71 エレベーター前

エレベーターの上下ボタンが映る場面。背後に流れる館内アナウンス女「第7環状ルート〜」は、緒方によるもの。

▼Cut103 ケージ内の弐号機

修理が完了して元にケージに納められた弐号機の前にたたずむアスカ。背後にアナウンスが流れている。アナウンス男「エヴァ弐号機の〜」は永野、アナウンス女「VAの接合〜」は勝生。

●Bパート

▼Cut185 アナウンス

使徒へ向かった光弾が失速した後、発令所に流れる「陽電子、消滅!」というアナウンスは川村による。Cut242の、セントラルドグマの隔壁が開いていく場面で流れる「セントラルドグマ10番から〜」というアナウンスも同様。

▼Cut184 ポジトロンライフル

弐号機が構えているポジトロンライフルが映る場面。背後に流れるアナウンス群。アナウンス男A「加速器〜」が岩永、アナウンス女A「電圧上昇中〜」が勝生、アナウンス男B「強制収束機〜」が永野、アナウンス女B「地球自転〜」が川村、アナウンス男C「薬室内〜」が関によるもの。Cut226Aの音声もアナウンス女A、Bによるものである。

▼Cut212 おサルのぬいぐるみ

おサルのぬいぐるみを抱いた幼いアスカが泣いている場面。LDのライナーでも触れられており、すでにファンのみならず有名になってしまった話だが、サルのデザインは宮村がサインなどに添えるサルの絵がもとになっている。庵野監督から「ぬいぐるみをもらうとしたら、何が嬉しい?」と聞かれ、「サル」と答えたことから、もともとクマの予定だったものがサルに変更されたらしい。その後、鶴巻副監督からサルを描くように頼まれ、何の気無しに描いた落書きが使用されたのだという。そのため、サルのぬいぐるみを踏み付ける場面で、宮村はひどく心を傷めたそうだ。

▼Cut343 アスカの幻影

アスカの目の前に次々とアスカの幻影が現れる、本巻の白眉ともいえる場面。音源は劇場版『DEATH』編からの流用である。三石琴乃、林原めぐみ、長沢美樹、山口由里子、岩男潤子らが次々と第八話でのアスカの印象的な台詞を繰返す。強迫神経症的な場面を作るという演出的な意図とは別に、それぞれの声優の芝居の細かなニュアンスの違いが興味深い。特に「チャーンス」という台詞はアフレコ当時、宮村がリテイクを繰返した台詞でもあり、それが繰返されるのは意味深長。なおアフレコ台本では、混乱を避けるためか、役名として各声優の名前が記されているが、キャスト表を作るにあたって、記号表記に改めた。

▼Cut399 泣くアスカ

完全新録音。幼いアスカと現在のアスカとの対話場面。対比を力いっぱい演じる、宮村に拍手。特にこの前後のCutでは叫び声、あえぎ声、幼い声と様々な宮村の声を聞くことができる。第弐拾弐話を通じてのことだが、半ば強迫的な演出に対して、宮村の熱演がとにかく光る。

▼Cut384A 立ち尽くす弐号機

使徒は撃退され、雨もあがり、取り残されたように立ち尽くす弐号機。「第67番ルートを使用してください」と語るオペレーター女は林原によるもの。

今日の珍品

COMPUTER SIMULATION SURVIVAL / KATSURAGI EXPEDITION

1.SUMMMERY

2.KATSURAGI EXPEDITION

3."SECOND IMPACT"

冬月が見ていたセカンドインパクトの資料。タイトルにはもっともらしい事が書いてあるが、よく読むと文中には「DAICON 3」（大阪で開催された日本SF大会の事）や「Aikokusentai Dai-Nippon」（愛國戦隊大日本）、「Kaiketu nootenki」（快傑のーてんき）等、GAINAXに縁の深い作品についての解説が！

D・ヨのエヴァンゲリオンCD事情

※文中、価格は当時の税込価格です。

NEON GENESIS EVANGELION ADDITION
（'96年12月21日同時発売）

●初回限定盤：KICA-333 ¥3000 CD＋「シト新生」特別鑑賞券(¥1300)＋クリアケース付き●期間限定盤：KICA-334 ¥1700 CDのみ

謎①あの濃い内容で低価格なのは何故？→当初ADDITIONは初回限定盤のみの企画でしたが、既に鑑賞券をお持ちの方や公開劇場が無い地域の方々の事を考慮し、CDのみの発売も急遽決定。それぞれを¥3500と¥2200で、と云う変更案を蹴散らしてファン感謝価格を貫いた所¥1700になってしまい、余りの安さに「それでも儲けがあるんだろコノ野郎！」とファストフードのお得なセットの如きツッコミを入れられる事となりました。

謎②製造を終了した期間限定盤が、お店によっては未だに(97年12月現在)あるのは何故？→小売店様から多くの御注文を戴き、期間内に大量に製造していた為です。「限定盤」で煽るだけ煽っといて今もキング秘密基地で遊っている、と云うのは根拠の無い噂です。

謎③メサイアと第九は何故サントラⅢに収録されなかったのか？→本編で使われた音源は小社関連会社で扱っている輸入盤でしたが、CDに収録する際は先方の海外レーベルと慎重に交渉する必要が有りました。サントラⅢには間に合いませんでしたが、その後正式に契約してやっとADDITIONに収録出来たと云うのが真相です。ところで、エヴァンゲリオン本編で「既存音源」が大々的に使用されたのはメサイアが初めてですが、これ以後も何度か劇中で使用されるクラシック曲の数々が、私には作品世界に突き付けられる「現実世界」の象徴に思えて仕方が有りません。

謎④ジャケットイラストは「シト新生」用の流用？→あの素晴らしいイラストは貞本義行先生の手によって描き下ろされ、私が名古屋までお邪魔して棊子麺を食べる間も無くお預かりして来たGenesis 0:10の初回特典BOX用のものであります。より多くのファンの皆様におすそ分けしたく思い、庵野監督の助言も受けてADDITIONのジャケットにも使用させて戴きましたが、その後「シト新生」関係やその他の様々な所で流用される事に。ガイナさん制作のポスターは原作者サイドなのでこれは当然。エースさんの表紙も納得。バンダイさんのカードダスマスターズも意義が理解できます。しかしその他の使用例の一部に「え、何で？」と云う扱いのモノも・・・。いえ、非難などでは御座いません。あのジャケットに希少価値を見いだし、購入動機の一つとして下さった御客様申し訳ありません、と云うお詫びとメーカーの苦悩の過剰な思い入れなんぞ政治的な力の前では屁にもならないもんですね、と云う自嘲でした（涙目）。

がんばれミサトさん2

作／むっちりむうにい

暗闇は苦手
嫌な事ばかり思い出す
まっくら
あーっ 又、電気が止められたぁっ
嫌な事
ビールがぬるいーっ
命のおフロが冷たーいっ
ぎぎぎ
ドアが開かないーっ
リツコーっ リツコーっ あたしの口座にお金振り込んどいてーっ
またなの？ ブザマね

編集後記

ビデオ＆LD10巻の発売から1年と2ヶ月。色々な事があった。『エヴァンゲリオン』は、2本の劇場版が公開され、様々な媒体で話題になった。『エヴァ』ブームと言ってよい状況だった。個人的な話では、この1年と2ヶ月の間に『エヴァ』関連の仕事も沢山したし、他のアニメにも2本参加させてもらった。そのうちの1本である『少女革命ウテナ』も、昨日、打ち上げパーティーだった。ま、色々あったけれど、今後もよろしく。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会 第拾弐号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第弐拾参話「涙」

●リツコがEVAの墓場をシンジとミサトに見せるシーンの最初のカットで、五つのカメラがついたEVAの頭がUPになる。このカットの絵コンテのト書きには「五つ目の零号機?」と書かれている。完成した零号機はモノアイであったが、開発中には五つ目の零号機も作られたということなのだろう。

●水槽の中のレイ達を前に、リツコが「神様」とEVAの関係等を語るシーン。画面にオーバーラップするかたちで、様々な映像が挿入される。その中に横たわった二体の巨人の映像がある。これはユイが消失してしまった実験をした段階での、リリスとEVA初号機であるらしい。共に下半身が殆ど無い状態であり、欠落した下半身同士が繋がっているようだ。リリスと初号機が繋がった状態でユイは、リリスに接触し、取り込まれてしまったのだろう。

●この話の最後についた第弐拾四話の予告の映像は、アニメのアフレコやダビングの段階で、まだ画面が完成していない場合に使用される「レイアウト撮」と呼ばれる映像である。文字通り、アニメの制作過程で描かれるレイアウトを撮影したもので、通常は一般に公開される事はない。『エヴァンゲリオン』のレイアウト撮は、音響スタッフやキャストに完成画面のイメージを伝えるために、このようにレイアウトを着色したものを撮影していた。ただし、実際にアフレコで使われた「レイアウト撮」では、台詞が書かれたフキダシは画面に出てはいない。このフキダシは予告編のための「演出」なのである。

第弐拾四話「最後のシ者」

●カヲルはレイに対して「お互いに、この星で生きていく身体はリリンと同じ形に行きついたか」と語る。以下はひとつの仮説である。第8の使徒サンダルフォンを思い出していただきたい。第8の使徒サンダルフォンは、浅間山火口の中に人間の胎児の様な状態で発見され、瞬く間にカンブリア紀に生息していたアノマロカリスに酷似した姿に変化した。それは、状況に応じた瞬間的な進化のようでもあった。また、ネルフ本部に侵入した第11の使徒イロウルも進化する使徒であった。個々の使徒は状況に応じて、あるいは対ネルフ、対EVAの戦略に沿ったかたちで進化し、人類の前に姿を現してきたのではないだろうか。そして、様々な取捨選択の中からカヲルはヒトの形を選んだという事ではないだろうか。

●シンジの心に直接攻撃を仕掛けてきた第12の使徒レリエル、アスカに心理攻撃をした第15の使徒アラエル、レイの心と身体に同化した第16の使徒アルミサエル。シリーズ後半の使徒は「人の心」に興味を持ち、心に攻撃を仕掛けてくる傾向にあるようだ。そこに登場したのが、渚カヲルである。彼のシンジへの接触は、第12、15、16の使徒と同様の「心」への攻撃だったのかもしれない。人間であるEVAのパイロットの心に、より巧みに攻撃を仕掛けるために、ヒトのかたちに進化した使徒だったのかもしれない。

●渚カヲルの姓の「渚」の偏と旁をバラバラにすると、「シ」と「者」になる。これはサブタイトルにもなっている「最後のシ者」とかけているのである。また、渚は、綾波レイの「波」とも対になっている。

●第弐拾四話の英文サブタイトルは「The Beginning and the End, or "Knockin' on Heaven's Door"」。このサブタイトルの『The Beginning and the End』は聖書からの引用だそうだ。

●カヲルの言葉を信じるならば、地下の巨人はアダムではなくリリスであった事になる。これにより、今まで作中で語られていたアダムに関する情報について整理し直す必要が出てくる。

まず、第弐拾弐話「せめて、人間らしく」では、「アダムと使徒が接触するとサードインパクトが起きる」といわれていたが、地下の巨人とEVAの接触によってサードインパクトは起きなかった。しかし、これは「アダムと使徒（あるいはEVA）の接触によってサードインパクトが起きる」という情報が嘘だったのではなく、「地下の巨人がアダムである」という事が嘘だったという事なのかもしれない。

第弐拾参話「涙」で、リツコが語った「神様」とアダムとEVAの関係についても然り。第弐拾参話までの段階では、リツコの話を聞いていたミサトを含めて登場人物の多くが地下の巨人をアダムだと思っていたはずであり、リツコの話の中に出てきたアダムとは地下の巨人の事、つまり、リリスの事だったのかもしれない。

●この話の最後にはTV放映版の第弐拾伍話「終わる世界」の予告と、劇場公開版の第25話「Air」の予告が収録されている。すなわち、この第弐拾四話のラストを分岐点にして『エヴァンゲリオン』の物語は、TV版と劇場公開版のふたつに分かれて展開していくわけである。TV放映版の第弐拾伍話の予告の映像は「絵コンテ撮」と呼ばれるもので、文字通り絵コンテの絵を撮影したものである。『エヴァンゲリオン』では「絵コンテ撮」に関しても、このように絵コンテを着色したものを撮影していた。劇場公開版の第25話の映像は「ラフ原撮」と「原撮」と「動撮」で構成されている。「ラフ原撮」は原画の前段階に描かれるラフ原画を、「原撮」は原画を、「動撮」は動画をクリンナップした動画を撮影したもの。これらも、アフレコやダビングのために用意される映像である。こういった制作過程の映像を見せるのも、スタッフの「気分」を作品に直接反映させる『エヴァンゲリオン』ならではの、ライブ感覚といえよう。

●カヲルが弐号機と共にセントラルドグマを下降し始めた後の、ゼーレの会議シーンで「アダムや使徒の力は借りぬ」という台詞がある。カヲルを送り込んでおきながら、使徒の力は借りぬとは、どういうことなのか。アダムの魂を持つカヲルは使徒ではないということなのか。もしそうだとすれば、ゲンドウの「老人は予定をひとつ繰り上げるつもりだ」という台詞の意味にも見当がつく。使徒がもう一体来るはずだったが、その予定が繰り上げられたという意味なのかもしれない。

えゔぁ川柳

■缶ビール　20話すぎれば　缶コーヒー■セガサターン　大人の事情が　ほの見えて■螺旋使徒　ほどけて変わって　ジャジャジャジャーン■インテリの　白衣の女が　好きな父■水槽に　浮かぶ綾波　父の趣味■ちびアスカ　首吊る母に　笑み凍り■最後のシ者　ヤオイネタまで　掘元して■カヲルくん　たった1話で　人気者■大浴場　裸の触れ合い　シトとヒト■墓場の絵　NERVのロゴは　サブリミナル?

新作カット&シーンを探せ!! ビデオ・LD版の研究II 第弐拾参話、第弐拾四話 編

今回収録されている第弐拾参話、第弐拾四話も、TV放映版に大幅に手直しを加えられたバージョンである。このコーナーでは、追加された新作カットや新作シーン等の大きな変更をチェックすることにしよう。

ここで取り上げた以外にも、作画、仕上げ、背景、撮影等の修正が、かなり多くのカットで行われている。TV放映版と殆ど同じに見えるが、実は微妙な直しが入っているケースもある。

第弐拾参話「涙」

	場面	カット番号	変更内容
（Aパート）			
1	ミサトのマンション〜ヒカリの家〜リツコの部屋〜ゼーレとゲンドウの会議〜ネルフ本部へ向かうミサト	Cut 1〜51	リツコの部屋のシーンで、リツコが足を組みなおすカットが新たに追加されている。他にも作画、背景等の修正有り。
2	零号機発進〜第16の使徒が零号機を侵蝕しはじめる	Cut 52〜118	零号機が使徒に侵蝕されるシーンで、モニター画面が1カット挿入、1カット変更。伊吹の構図が1カット変更。
3	内的宇宙での二人のレイ	Cut 119〜138	大幅な作画の修正有り。
4	初号機出撃〜零号機、使徒とともに爆発	Cut 139〜163、335〜378、182〜190	ここは新作カットが多い。零号機の背中から謎の物体が出現。使徒に侵蝕される初号機、レイのかたちに変形する使徒、コアに使徒を取り込む零号機、爆発の前に巨大な綾波レイの姿となる、等。
（Bパート）			
5	レイのエントリープラグ発見〜ゼーレの会議〜リツコの部屋〜ミサトのマンション	Cut 191〜223	Bパートでは、リツコ、ミサトのカットの殆どが作画修正されている。ミサトのマンションで、ミサトがシンジを慰めようとするシーンは、カット割りの変更有り。
6	ダミープラグ・プラントの前のゲンドウと冬月	Cut 223B〜F	ここは新作シーン。
7	電話を受けるミサト〜病院、三人目のレイ登場〜レイの部屋	Cut 224〜255	特に新作カットは無し。大幅な作画の修正有り。
8	執務室のゲンドウと冬月〜ゼーレと全裸のリツコ〜加持の残したチップに気づいたミサト〜電話を受けるシンジ	Cut 256〜278	執務室のシーン、冬月のカットの構図が変更。ゼーレと全裸のリツコのシーンも、構図の変更有り。
9	セントラルドグマ〜レイの生まれた部屋〜EVAの墓場	Cut 279〜303	リツコ、ミサト、シンジがエレベーターで降りていくシーンは、エレベーター内と、エレベーターが下降していく空間のデザインが大きく変更。同じく、EVAの失敗作が放置されている場所のデザインも変更。
10	ダミープラグ・プラントの前のミサト、リツコ、シンジ	Cut 304〜334	水槽の中のレイ達のカットに、リツコの説明に合わせて、アダム発見やEVA創造に関する様々な映像がオーバーラップするかたちで挿入されている。この映像はテレビ放映版では無かったものである。

第弐拾四話「最後のシ者」

	場面	カット番号	変更内容
（Aパート）			
11	アスカの少女時代の回想〜ダイニングでアスカが加持の死を知る	Cut 1〜14、14B〜14H	アスカが加持の死を知るシーンは新作。台詞とアスカの泣いている表情は劇場版「DEATH」編で先に公開されている。
12	バスタブの中のアスカ〜発令所のミサトと日向〜部屋で横たわるシンジ〜ゲンドウとリツコ〜シンジとカヲルの出逢い	Cut 15〜58	バスタブの中のアスカは、TV放映版では影で隠れて見え辛かったが、クリアに見えるようになっている。発令所のミサトと日向のシーンでは、最後のミサトの横顔のカットが構図変更。カヲルとシンジが出逢うシーンは、最初のカットの次に夕空を背景にした電柱のカットが新たに挿入されている。また、同シーンで、カヲルの演技に描き足し、背景や撮影の修正有り。
13	カートレインの中のミサトと日向〜シンクロテスト	Cut 62〜70	特に新作は無し。
14	エスカレーターの前のカヲルとレイ	Cut 71〜79	追加の台詞有り。カット数も増えている。
15	執務室のゲンドウと冬月〜マンションのミサト	Cut 80〜90	特に新作は無し。
16	ゲートの前のシンジとカヲル〜風呂場	Cut 91〜118	ゲートの前のシンジに、微笑むカヲルの[illegible]直されている。風呂場に印刷されたネルフマークが、TV放映版では上下逆になっていたが、修正されている。
（Bパート）			
17	ケイジで初号機を前にしたゲンドウ〜レイの部屋〜ミサトとペンペン〜寝室のシンジとカヲル	Cut 119〜144	ケイジでゲンドウが初号機を前にしたシーンで、掌にアダム[illegible]合しているカットが新たに挿入されている。この描写は映画「DEATH」のリニューアル公開版「DEATH (TRUE)²」が初出。
18	ゼーレとカヲル〜それを監視していたミサト	Cut 319〜337	ここは新作シーン。
19	橋の上のミサトと日向〜ミサトとリツコ	Cut 145〜149	ここは特に新作は無し。
20	カヲルが弐号機を操ってセントラルドグマを下降〜シンジは初号機で追撃〜カヲルと地下の巨人の対面〜カヲルの死	Cut 150〜310	弐号機が起動した次のカット、弐号機起動を知らせるモニター[illegible]更。ゼーレの台詞が変更。地下の巨人はTV放映版では下半身が無かったが、下半身が生えた状態となっている。他にも作画、撮影等の修正有り。
21	ケイジ内の初号機〜湖の畔のシンジとミサト	Cut 311〜318	湖の畔のシーンの、最初のカットの次に夜空を背景にした電柱のカットが新たに挿入されている。湖に映った対岸の光の処理等が修正。

CASTから一声 特別編・壱
ビデオ&LD修正版アフレコ終了コメント

三石琴乃

今回の追加録音で、久々に「エヴァ」のフィルムを目にして、懐かしいな、と感じましたね。アフレコは、新作場面のみだったので、その場面の前後の気持ちの高揚を思い出すのにちょっと苦労しました。新作場面が加わった事で、かなりストーリーが分かりやすくなったんじゃないかと思います。

私としては、今の三石琴乃が感じる[illegible]ミサトとしてやったんですが、スタッフサイドでは「ちょっと大人になったかな」っていう話があったみたいです。マイクテストでは、「ミサトさんは、落ち着いちゃいましたね」という声もありました（笑）。でも、そこで無理をして、役を若く作ると、ウソになってしまうと思うんですよね。「エヴァ」は、そういうウソは通用しない作[illegible]だと思うので、今の私の感じるミサトさんで通させていただきました。

林原めぐみ

よく、長かったような短かったようなという言葉を使いますけれども、本当に長かったなという気がします。決して、短かったとは思いません（笑）。そんなわけで、「エヴァ」が残したモノとか、振りまいたモノは、みなさんそれぞれの中で、もう形を変えているころだと思います。ビデオやLDを見直して、初めて「エヴァ」に会った時の感じと、見直した感じとでは何か変わりがあるでしょうか？　無いのも良し、有るのも良し、ですけれど。

私個人の事で言えば、紹介で、「あの平成天才バカボンの」とか、「キティちゃんの」と書かれるんですけど、最近では「綾波レイ」というのが紹介の頭につく事も多くなりましたね。綾波レイというのは、バカボンと同じくらい一般の人が分かるんだなあって、せつないやら、ありがたいやら、複雑な気持ちです（笑）。

山口由里子

なんだかずいぶん前の作品だという気がするんですよね。映画版のアフレコを終えた段階で自分の中では「エヴァ」に関して完結していたので、今日の録音は複雑な気持ちでした。ちゃんとリツコを演じられるのかなというプレッシャーもありましたよ。リツコって、難しい台詞が多いでしょう。こんな台詞なのに、よく自分は口が回っていたなあって、感心してしまいました。

そんな事は絶対にありえないでしょうけれど、例えばリツコが碇の子供を生んでいたとか、そんな形で、いつかまたリツコとして復活できたらな、なんて今、思ってます（笑）。

リツコを演じる事で、自分の生活もだいぶ変わりました。声だけでひとつの役をこんなに長く演じる事は初めてだったので、自然に自分の人生とシンクロしちゃったみたいですね。そういう意味では、私の生活もリツコで狂わされちゃったかもしれません（笑）。自分をずいぶん大人にしてくれたように思います。もう二度とないような役柄でしたね。

副監督日記
「天の光はすべて…」

鶴巻和哉

学生時代、友人だった男に月一でプラネタリウムへ行く奴がいた。高校で天文部だった彼は星空を眺めるのが好きで、「東京では星が見えないから」とプラネタリウム通いしていたらしい。かく言う私も、宇宙のことには一家言持っているつもりだったのだが、彼とは全くといっていいほど話が合わない。すれ違うだけで一向にかみ合わない。彼の方は日食や月食、オリオン座や北斗七星や天の川、つまり地上からみた星たちに興味があり、私の方はと言うと火星の大気や木星の衛星、老衰した赤色巨星、遠い銀河系たちなどなど、星たちが実際のところどうなっているのか?どのようにして出来たのか?これからどうなっていくのか?というところに興味があったからだ。

小3の時に叔母に買ってもらった「写真でみる天文学」という写真集にえらく感動したのを覚えている。図鑑ほどの厚さにほとんどフルカラーで天体望遠鏡写真が満載、当時2800円くらいしたはずだから子供に買い与えるにしてはずいぶん奮発したのだなと思える。有名な馬頭星雲や三裂星雲、プレアデス星団、アンドロメダやソンブレロ銀河などの美しくも奇妙な姿に釘付けになり、そしてなによりも写真のキャプションに書かれていたそれらの星たちの巨大さに、星までの途方もない距離に得も言われぬ快感をおぼえたのであった。「超スケールフェチ」とでも言おうか、それ以上でかいことを考えたら脳味噌がどうにかなっちゃうから、脳内麻薬でボーっとさせちゃおうってことだったのかどうかは知らないが、宇宙スケールの時間や空間を想像することでクラクラしてくる、そのナチュラルハイに病みつきになってしまったらしい。それ以来、ブラックホールやら重力レンズやらボイドやら、知識のスケールは大きくなる一方だが、子供の頃のクラクラくる感覚は遠くなっていく。遠い宇宙のことをリアルに捉えられなくなっていた。

最近になってハッブル宇宙望遠鏡による破格に鮮明な天体写真が公開され始めた。CG等による画像加工技術の進歩もあり、特にガス状星雲と爆発した恒星の姿である惑星状星雲の美しさは格別で、これだけでもNASA偉い!と思ってしまう。

そして、なによりも私を喜ばせてくれたのは、ハッブルディープフィールドプロジェクト。最も遠い銀河系（＝最も古い銀河系でもある）を捉えようと、おおぐま座の一郭、銀河系内の天体や近距離の銀河系のほとんど存在しない一点に向けて撮影された1枚の写真だった。見慣れた夜空のようにカラフルに輝くおびただしい数の星たち。しかし、目を凝らしてよく見るとそれらは星、所謂、恒星ではなく全てが小さく写った初めて発見された遠い銀河系たちなのだ。全天域のほんの一郭、わずかな隙間から覗いただけで、気の遠くなるほどの数の銀河系が存在する。その銀河系の一つ一つにこれまた気の遠くなるような数の星星が…。

懐かしいあの感覚が戻ってきた。

がんばれミサトさん3

作／むっちりむうにい

声優博士のちょっちチェック

小川びい

本巻では、TV放映版に大幅な修正が加えられ、TV放映時のもの、劇場版の録音、ビデオ&LD版のための新録音、さらにTV放映版の台詞の再録音といくつもの音声が複合的に使用されており、非常に錯綜した構成となっている。資料も多岐にわたり、結果として、不確定とならざるを得ない部分も多い。どうかその点を含み置きいただきたい。

〈第弐拾参話〉

●Aパート

▼Cut16 ヒカリとアスカ

EDにはなぜかクレジット表記がないが、ヒカリはもちろん岩男潤子が演じている。

▼Cut41 ゼーレの会議

モノリスたちが碇を取り囲んでの会話の場面。委員A「ロンギヌスの槍を～」が長嶋雄一。委員B「何故使用した」が清川元夢。委員C「エヴァシリーズ～」が石野竜三。委員D「やむを得なかった～」が子安武人。石野は今回が本作初登場である。放映当時はぷろだくしょんバオバブ所属で、現在は移籍してエル・ビエントに所属している。アニメファンには何と言っても「新機動戦記ガンダムW」の五飛役が有名だろう。他に「恐竜冒険記ジュラトリッパー」のゴッドなどがある。近年ではマペットによるショーという趣向が目をひいた海外TVドラマ「マペット放送局」の、ネズミのリゾ役が印象的だろうか。

▼Cut54 発令所

発令所に響き渡るアナウンス群。アナウンス女「零号機発進。迎撃位置へ」は、岩男によるもの。続くCut58でのアナウンス男「エヴァ弐号機、発進準備」は、長嶋。

▼Cut87A 伊吹「展開中～」 リツコ「使徒が積極的に～」

零号機の危機に逼迫する発令所内の場面。Cut87Aの伊吹からCut88のリツコの台詞迄は新録音もされたが、演出的な判断で結果としてTV版の音声が使用されたようだ。

▼Cut143 叫ぶミサト

零号機の中から異形物が飛び出すのを見て、ミサトが「レイ」と叫ぶ場面。作画が修正されているばかりでなく、わかりにくいが実は新録音である。

▼Cut341 ミサト「シンジ君! プログ・ナイフで応戦して!」

この一連の場面は、Aパートの山場であり、第弐拾参話において、TV版から大きく改変されていることが最もわかりやすい。音声も基本的に全て新録音である。中でも、このミサトの台詞はTV版には登場していないものである。三石琴乃本人も今回の「CAST から一声」で触れていることだが、TV版のミサトと比べて、どこか大人びた印象を受ける。これは単に当時の声と今の声が変わったということだけではないだろう。実際、三石の演じる役柄は、かつての「美少女戦士セーラームーン」の月野うさぎのように明るい美少女役から、本作の前後を境に、例えば「少女革命ウテナ」の有栖川樹璃や「烈火の炎」の陽炎といった陰を秘めた女性役へと大きく移行してきている。特に最近では、『センチメンタルジャーニー』で夢を信じる少女ではいられなくなった女性を演じたり、映画「クレヨンしんちゃん 電撃ブタのヒヅメ大作戦」では舞台経験のある女性を演じたりと、(それまでも舞台ではそうした役柄は多かったようであるが)役者本人にもプレッシャーのかかる役柄を演じる機会が多くなっているようだ。そうした彼女の役者としての変化や、劇場版でのミサトを経たことが、どこかしら今回の修正版のミサトの役作りに影響を与えているのだろうか。Cut366の「レイ! 機体は捨てて逃げて!」も同様の新録音。

▼Cut352 苦悶するレイ

レイ「これは私の心? 碇くんと一緒になりたい?」と煩悶するレイの台詞も新録音。微妙な違いだが、強いて言えば、TV版の方がか弱さ、せつなさを感じさせる演技なのに対し、今回の修正版は、切迫した気持ちと明晰な意志を感じさせるものとなっている。ファンは、こうした林原めぐみの微妙な解釈の違いにも注目できるのでは? Cut356の「だめ、私がいなくなったら!」も同様に新録音である。前後に流れるレイの笑い声も林原によるものので、もちろん新録音。

▼Cut364 発令所

伊吹の「フィールド、限界! これ以上はコアが維持できません!」という台詞も新録音である。長沢美樹の役作りも今回は、どちらかといえば、初々しい感じ女の子といった演技からキャリアウーマンといった感じの落ち着いた演技に変更されているようだ。

▼Cut377 あやつり人形のごとく立ち上がる零号機

曲面に被さる赤子のような泣き声は、新録音用の台本には指示がなく、当日アフレコ現場で演出からのアイデアにより録音されたものである。演じているのはもちろん林原めぐみ。これは、零号機の声、ということになるのだろうか?

●Bパート

▼Cut1162 防護服の人物達

現場検証の場面に流れる交信音声。TV版では、明瞭に聞こえる交信は、男「レベルCの汚染区域は南西方向に広がっています!」と女「了解、D−16の発令を承認～」とのやり取りのみ。この男女は、それぞれ石野竜三と岩男潤子が演じている。今回の修正版では、その男女の音声の録音レベルを下げ、新たに「第16使徒の構成物質はいまだ発見できず～」「零号機の～」という別の男女の交信が重ねられている。これは、修正版のアフレコ終了後、ダビング時に演出側の要請で急遽音声が追加されたものである。男性の声は、今回収録及びダビングが行われた東京テレビセンター制作技術部の佐竹徹也が。女性の声は、スターチャイルドのディレクターである西崎知子が担当している。

▼Cut1185 リツコと技術局要員

破壊されたエントリープラグを覗きこむリツコと技術局要員。「赤木博士」と呼びかける技術局要員の声は岩永哲哉が演じている。

▼Cut1214 シンジにモーションをかけるミサト

生々しい画面を作り上げたスタッフ、身を硬くするシンジを表現した緒方恵美の演技、「女」を感じさせる三石の演技が素晴らしい。緒方が本作でも最も好きな場面の一つである。

▼Cut1223C ダミー・プラグプラント前

冬月の台詞は修正版用の新録音。本作での冬月役としての清川の最後の台詞である。

▼Cut1230 病院の中

病院内に流れている「第一内科の～」という院内アナウンスは長沢美樹によるもの。

▼Cut1367 ゼーレ会議

先に触れたAからBまでの4人の委員の他に、2人の委員が喋っている。委員E「エヴァンゲリオン、すでに8体まで!」は岩永哲哉が、委員F「残るはあと、4体か」は結城比呂がそれぞれ演じている。

▼Cut1325 ダミー・レイを破壊しながら嗚咽するリツコ

第弐拾四話も併せ本巻はリツコ編という趣である。特にリツコの描写において、本作全編を通して白眉とも言えるのが、この場面。山口由里子の一世一代と言っても過言ではない熱演が素晴らしい。人の「生な」演技を目指した本作の一つの到達点ではないか。「もう2度とないような役柄」と今回の山口の談話にあるが、それも宜なるかな。特に、Cut1331以降のリツコの嗚咽は、修正版でアフレコをやり直しており、庵野監督以下演出側のこだわりも尋常ではない。ファン必聴の場面である。

〈第弐拾四話〉

●Aパート

▼Cut14C アスカとシンジ

加持をめぐるシンジとアスカとの対話は、劇場版「DEATH」編からの引用である。シンジとアスカに関しては、残念ながら今回の修正版では追加録音がなされていない。

▼Cut20 アスカを発見する男

保人同様のアスカを発見する諜報2課の男らしい人物の声は子安武人が担当している。

▼Cut41 碇とリツコ

独房内で碇とリツコが会話する場面。「失望!?」と激情に任せ、一オクターブ高くなるリツコの声が素晴らしい。リツコとの「シンクロ率の高い」気持ちのこもった山口由里子の演技には聞き惚れてしまう。

▼Cut61 シンジとカヲルとの出会い

新キャラクター・渚カヲルの登場。カヲルを演じているのは石田彰。江崎プロダクション所属の実力派声優である。ファンにとっては、「スレイヤーズ」TVシリーズのゼロスが、もっとも馴染み深い人気キャラクターだろうか。最近では「剣風伝奇ベルセルク」のジュドー役で味のある演技を見せたのも印象的であった。他に「美少女戦士セーラームーンSS」のオカマの眼鏡フィッシュ・アイや「ママレード・ボーイ」の上原蛍などが記憶に残る。「STAR TREK THE NEXT GENERATION」のウェスリー・クラッシャーや「シークエスト」のルーカスなど、洋画・海外TVドラマの吹替えも数多い。総じて、冷静で理知的な天才肌の少年役が多いと言えるだろう。本作でもやはり、冷静で老成した感じの少年を見事に演じており、まさに適役であった。詳しくは右のインタヴューを参照されたい。

▼Cut74 レイとカヲルの出会い

新録音場面である。新たな台詞は「お互いに、この星で生きて行く身体は!」の部分のみだが、レイの気付きの息遣いの部分から改めてアフレコし直している。TV版との演技の微妙な差違が興味深い。どちらが優れていると言うわけではないが、修正版の方が、全体にゆっくりした調子になっており、強いて言えば、TV版では感情の起伏の少ない演技であったのが、修正版ではカヲルはやや芝居がかった調子に、レイは芯が強い感じの演技になっているだろうか。

▼Cut92 本部施設ゲート前のベンチ

一人ウォーキングステレオを聞いているシンジの背後に流れるアナウンス女「現在、セントラルドグマは開放中、移動ルートは!」は長沢美樹によるもの。

▼Cut105 大浴場でのシンジとカヲル

石田独特の、他人を誘惑するかのような台詞回しがもっとも生きた場面ではなかろうか。甘い美声と演技が艶めかしい。石田によれば、当然ながらボーイズラブ系の演技という意識はなかったとのことだが、多くの女性ファンが悩殺したのも頷ける。

●Bパート

▼Cut118 ゼーレの会議

モノリス同士の会話場面。EDではゼーレの声と表記されているが、新録音部分と役名を区別するため、アフレコ台本に従い、男Xのように表記させて戴いた。それぞれ、男A「ネルフ、我らゼーレの実行機関として!」が清川、男C「だが、今は一個人の～」が長嶋、男B「我らのシナリオを!」が鈴木勝美、男02「左様!」が子安、男04「約束の日の前に」が結城比呂によるもの。Cut1179も同様。

▼Cut132 ミサトとペンペン

ベランダから情状を見ているミサトとペンペン。気付き難いところだが、この一連の場面のペンペンの声は新録音である。図らずも林原が本編で演じる、最新にして最後のペンペンとなった。思わぬ要求にとまどったのか、アフレコ現場では意外にも、多少苦労していたのが印象的であった。

▼Cut1320 ゼーレとカヲル

修正版のための完全新作場面であり、もちろん新録音。TV版のカヲルの演技との微妙な差もファンには興味深いところかも。また、この場面に登場するモノリスを演じているのは、それぞれ、ゼーレA(12)「我らの外に、再び!」が長嶋高士、ゼーレB(04)「そこにある、希望が現れる前に～」が清川、ゼーレC「希望の形は人の数ほど～」が鈴木。ゼーレCのモノリスナンバーは不明。ゼーレ04はTV版では、Cut119にあるように結城が演じていたが、今回の修正版では清川となっている。

▼Cut1332 双眼鏡で眺めるミサト

ここも完全新作場面であり、新録音。第弐拾参話でも触れたが、三石のミサトの演技は、TV版の時点と若干ながら異なっているようだ。今回の彼女自身の談話にもあるように、それが、TV版当時と劇場版等を経た現在とでの、ミサトに対する解釈の差と云うことなのだろうか。

▼Cut1178 発令所

発令所に流れるアナウンス。「目標は第4層を通過～」と、続く「第5層を～」を担当しているのは、鈴木勝美である。Cut196の「エヴァ初号機、ルート2を降下～」も同様。また、Cut172の隔壁が閉じていく場面に流れるアナウンス「マルボルジェへ全層を緊急閉鎖」は岩男潤子によるもの。

▼Cut1178 ゼーレ02

ここも修正版のための新録音である。円卓上に並ぶモノリスたちの台詞はTV版とは異なる新たなものが用意されている。制作進行の関係で、LDジャケットのCAST表では触れることができなかったが、Cut119と異なり、この場面で再登場するゼーレ02の声は、TV版の子安から、修正版では長嶋に変更になっている。

▼Cut1232 モニターに映る3つの光点

モニターに被さって流れるアナウンス。アナウンス男「エヴァ両機、最下層に到達」を長嶋が、アナウンス女「目標、ターミナルドグマまで!」を林原がそれぞれ演じている。

今日の珍品

◎今回お届けするのは、第弐拾参話「涙」のアフレコ台本の表紙だ。御覧の通り第弐拾参話は、アフレコ台本作成の段階までは「希望に続く病、そして」というサブタイトルが予定されていたのだ。第拾六話の「死に至る病、そして」と対になるサブタイトルとして考えられていたわけだ。

CASTから一声 特別編・弐 石田彰の巻

――今日、新作部分を撮り終えての感想をお願いします。

石田 本日の収録が、たぶん、最後の「エヴァンゲリオン」のお仕事だと思うんですけど(笑)、ようやく終わりましたね。今回のアフレコでは、TVシリーズを撮ったときから、だいぶ時間が経って、声が老けてしまったらしくて、芝居がどうのこうのよりも、声質で苦労しました(笑)。若干は声質や芝居の仕方が違っているかなと思いながらスタジオ入りしたんですが、スタッフから、これほど「違う」と指摘されるとは思わなかったんで、このビデオ版を見た人がどう思うのかなと、ビクビクしているところです。

――もともと、カヲル役というのは、オーディションみたいなものはあったんですか?

石田 いえ、特になかったですね。

――TV版のアフレコのときには、カヲルくんについての説明みたいなものはありました?

石田 あんまりなかったように記憶してます。あっても忘れているだけかもしれないですが(笑)。

――TV版の時は、どのような演技プランでカヲルを演じられていたのでしょうか。

石田 最初にTV版の第弐拾四話に参加したときには、カヲル自身が前後の話には関わっていないキャラクターだったので、どういう位置関係にいたらいいのかわからなくて。で、わからないなら、普通にやればいいだろうというつもりで臨みました。カヲルという役柄は、謎めいているし、どうやら、ストーリーの重要な所を占めてるようだったので、そういう事は匂わそうかなといった謎めいたものは、当時考えてはいたんです。ところが、あんまりわからないものだから、逆に目立って緊張してしまって。

――なるほど。

石田 役柄や関係があまりにわからないから、どうしようと思って緊張して、そんな緊張も頭の中からなくなってしまったように思います。その結果、ああいうキャラクターになったんでしょうね。それが、今日、スタッフから「(役柄が)違う」といわれた原因かもしれませんね。

――というと?

石田 自分の中で「普通」っていうスタンスの取り方が、その時のアドレナリンの量なんかで変化したんじゃないかなあと思うんです。

――つまり、自分では同じように「普通に」と心掛けていても、TV版のときのように緊張しているのと、今回のようにある程度リラックスしてやられるのとで、自分の中の「普通」の基準が違ってしまったのではないか、という事ですか。

石田 ええ、そうですね。……以前、別のインタビューで「カヲルをどういう風にやられたんですか」ってきかれて答えに窮したんですけれど、冷静に考えてみればそういう事だったんでしょうね。

――一度きりのゲストで呼ばれたキャラクターで、どうやられたんですか、ときかれても困ってしまいますよね。

石田 たとえば、これがギャグもので、わかりやすいポジションのキャラクターであれば、こういうふうにやってみようという事がはっきりわかるものなんですけど、シリアスもので、しかも謎めいたキャラクターだったりすると、どうしようかなと悩んでしまうんでしょうね。まだまだ、そうした役柄をカバーするほどには、自分の中の引き出しがなかったんでしょう。

――じゃあ、TV版のカヲルくんは、ある意味、偶然の産物だったという事ですか?

石田 たぶんそうなんでしょう(笑)。

――そうすると今日の修正や劇場版というのは、その偶然できたカヲルくんに戻っていく作業だったんでしょうか?

石田 (笑)

石田 あっ、そうですね。そういう事でいうと、TV版と映画版との間に、お遊びのCDドラマがあったんですよ(「SOUND」)。その時に、初めて、どういう傾向で演じようかなと考えたんです。で、結構CD自体が遊んだ構成だったので、これは「やおい」系でいっちゃえーっと思ったんですよ(笑)。そうしたら、ファンの方から拒絶反応をいただいちゃって、ああ、こういう演技は違うんだなあってわかったんですよね。そんなふうに一度極端に(演技を)振ってみたおかげで、こちらに進んではいけない、行き止まりだよ、という事が分かったという意味では、こう云うと共演者の方には失礼かもしれませんが、ああいう企画があって、映画版のときには助かりました(笑)。

――石田さんの中で「やおい」系の演技とナチュラルな演技はかなり違うものなんですか。

石田 ちょっと遊びで、そういったニュアンスを含ませるかどうか、くらいの違いですね。

――ところで、石田さんというと、カヲルくんもそうですが、洋画も含めて、わりと知的な男の子役が多いという印象がありますね。

石田 多いですね。嬉しいですよ。声質が頭よさそうに聞こえるのかな(笑)。それはそれでいい事だなと思うんですよ。声の作っているキャラクターにわかりやすい傾向があるなら、その方が面白いかなって思います。

――最後にファンのみなさんに何かあれば。

石田 オンエアが始まったころから「エヴァ」を追いかけて下さったみなさん、あと一息です。ようやくゴールが見えてきました(笑)。ぜひ、最後までつき合って下さいね。そうしていただければ、作品にほんの少しでも関わった人間としてもうれしいです。

ガイナさん

思いおごしも 業のうち(オイ)の巻 水玉螢之丞

編集後記

前にとあるアニメ雑誌でも似たようなことを書いたが、最近、アニメと「消費」の関係が気になっている。全く消費されないと商売にならないし、消費されつくすと作品は空っぽになってしまう。作品やキャラクターだけではなく、人の才能や、人の魅力も消費されてしまうものであるようだ。消費されても、消費されても、なかなか空っぽにならないところが『エヴァ』の凄さなのかなと、この12巻のライナーを編集していて思った。(黒)

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112-0013 東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード(株) スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会

第拾参号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ　豊島ゆーさく

この巻にはTV放映版の第弐拾伍話「終わる世界」とリテイク版の第25話「Air」を収録してあります
タタタタタ
ドガガ
うわあああああああ戦自は強いよ助けてえええええ
この第弐拾伍話と最終話がTV放映されたときにゃ〜もう大騒ぎでした
その後謎解きゃアクションやキャラクタの見せ場などを補完して劇場公開された「Air」と第26話「まごころを、君に」はTV版のラスト2本とは別の物語になってます
量産型エヴァ子ちゃん
クスクス
クス
いたいいたいいたい
TVゲームのマルチエンディングみたいなものか？だとしたらどっちかが正解でどっちかがバッドエンディング？
わっわたしは例え前衛的裁判アニメでも楽な方が好きぃイィ

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

第弐拾伍話「終わる世界」

●第弐拾伍話の英文サブタイトルの「Do you love me？」は英国の精神分析医R・D・レインの著作のタイトルよりの引用。日本語タイトルは「好き？好き？大好き？」。「Do you love me？」は不特定人物による対話形式で描かれた、詩のような、ドラマのような独特のスタイルの作品である。この第弐拾伍話の登場人物達による対話で進められるスタイルは、その作品を連想させるものである。

●「第2のキャラクター　惣流・アスカ・ラングレー、彼女の場合」のパートで「愛着行動」というテロップが出る。「愛着（attachment）」とは、精神医学の用語で、乳幼児が本能的に母親、あるいは養育者に対して、しがみついたり、後追いをしたり、泣いたりする事によって、母親が応じると云う母子相互関係のシステムの事である。幼児の「愛着行動」は早期から複数の対象に示されるが、それに対して、特定の人物に対して示される選択的な愛着が「絆」である。アスカの行動は「愛着行動」的で、レイの行動は「絆」的と云えようか。

●「第3のキャラクター　綾波レイ、彼女の場合」において、自問自答する三人の綾波レイ。アフレコ台本では、子供の彼女がレイ1、プラグスーツ姿の彼女がレイ2、学生服の彼女がレイ3と表記されている。それぞれが、初代、二代目、三代目のレイに対応していると考える事も出来る。だすると、「今までの時間と他人との繋がりによって、自分は自分になった」という考えは、第弐拾壱話「涙」で死んだ二代目のレイ独自のものなのかもしれない。「自分」が、他者との関係によって作られるという考え方は、『エヴァンゲリオン』の特長的なもの。

●Bパートの頭で、シンジは自分の形が消えていく感覚について「前に一度あったような」と感想を云っているが、恐らく第弐拾話「心のかたち　人のかたち」で、エントリープラグの内部で生命のスープになった時の事を云っているのだろう。

●「CASE1　葛城ミサトの場合（PART-1）」で、床に散らばった積み木が、子供のミサトが「泣いちゃだめ、甘えちゃだめ、だから、良い子にならなきゃいけないの」と云った時には、ロケットのような形に積み上がっている。絵コンテには、その積み上がった積み木は「ペニスの象徴」とある。泣かず、甘えず、良い子になるという事は、彼女にとって男性性を身につけるという事なのだろうか。それが現在の彼女の言動を形作っているのだろうか。

●大学時代の加持の部屋と思われるシーンで、扇風機の手前に二冊の本が重ねて置かれている。下の本に関しては「生命」というタイトルの一部が読める。彼の専攻は生物学なのだろうか。

●「人間を生々しく描く」事は、『エヴァンゲリオン』という作品の特徴であり、制作上のテーマでもあったはずだ。その意味では、彼女が、加持に抱かれた理由を手がかりに、その内面に踏み込んでいく展開は、ある意味、『エヴァンゲリオン』の人間描写の頂点と云えるのではないだろうか。

●この話の最後についた最終回「世界の中心でアイを叫んだけもの」の予告の映像は、アフレコ時に使用されるアフレコ台本を映したもの。勿論、「世界の中心でアイを叫んだけもの」のアフレコ台本である。

第25話「Air」

●第25話の最初に、製作に関わった会社のクレジットが次々と出る。他社がCG等で派手なクレジットを出しているのに対して、ガイナックスは画面の片隅に、シネカリグラフによって表現された文字がひっそりと出る。シネカリグラフとは、フィルムの一齣一齣に、直接手で傷をつけて文字や絵を表現するアニメーション技法の事。主にプライベート作品で使われるテクニックである。最先端の技術であるCGと、このようなクラシックな技法を並べるのも、ガイナックスならではのセンスと云えよう。このシネカリグラフは、庵野秀明自らが担当。

●第25話「Air」はTV版制作中に仕上がっていた第弐拾伍話の脚本をベースにして作られている。制作期間等の問題もあり、TV版の第弐拾伍話「終わる世界」では、その脚本は使われなかったのだ。第25話は最初に予定されていた内容に戻されたものとも云える。TV版の第弐拾伍話「終わる世界」で、弐号機が湖に沈んでいる描写や、ミサトやリツコが撃たれた描写等、「Air」を予告するような描写があるのは、そのためである。

●MAGIへのハッキングに対して、リツコは第666プロテクトをかける。666は映画「オーメン」で有名。6は悪魔の数字であり、6が三つ並ぶのは悪魔と、反キリストと、偽予言者の三位一体を示すという。666という数字は新約聖書「ヨハネの黙示録」第13章にも登場している。

●人と人のコミュニケーションをテーマのひとつにしているためだろうか、『エヴァンゲリオン』では、シリーズを通じて作中で人物と人物の視線が合う描写が極めて少ない。このエピソードで、廊下等に倒れたネルフの職員達の死体を映すカットでも、全ての死体がカメラに顔を向けていない点に注目。

●戦略自衛隊と戦う弐号機には、十字架の形をした爆発、手でミサイルを受ける、炎の中に立つ姿等、第壱話「使徒、襲来」の第3の使徒サキエルを思わせる描写が多い。A.T.フィールドを自在に使えるようになった弐号機は、もはや、使徒と同じという事なのだろうか。

●EVAシリーズを乗せた9機のエヴァ輸送用巨大機が、最初に画面に現れるカットは、第25、第26話にいくつかあるCGで作られたカットのひとつ。重なり合った様に見える9機の巨大機が、それぞれ別々の方向にスライドするという動きは通常のアニメの撮影では不可能に近いものなのだ。

●EVAシリーズの名称について、詳しく説明しておこう。弐号機に最初に倒されたのが9号機、プログナイフで倒されたのが11号機、首を折られたのが7号機、槍で首を切断されたのが6号機、槍で上半身を切断されたのが12号機、槍で片足を切断されたのが8号機、ニードルガンでやられたのが10号機、ビルにめり込んだ後にパンチで胴体を貫かれたのが5号機、5号機を貫いた腕にそのままコアを潰されたのが13号機である。

●この話の最後についた第26話「まごころを、君に」の予告の映像は、実写で構成されている。撮影されているのはガイナックスの社内である。『エヴァンゲリオン』終盤の予告では、原撮やレイアウト撮、あるいはアフレコ台本等、普段は一般の目に触れる事のない、アニメの制作過程の様々な映像を見せてきたが、最後の最後でついにアニメの制作現場そのものを映したのだ。

劇中音楽使用回数研究

さて、今回は『エヴァンゲリオン』のTVシリーズ本編で、どのBGMが何回使われたかについてチェックしてみよう。左が、各BGMがどの話で使われたかについてのリストである。収録アルバムと、アルバム収録時のタイトルも掲載した。鑑賞の参考になれば幸いである。

多く使われた順に見てみると、一番多く使われた曲が計15回使用された「E−1（リズム）」、二番目に多く使われたのが「E−6」、三番目に多く使われたのが「E−7」。これらMナンバーの頭にEがつくシリーズは、戦闘テーマ、アクションテーマの曲である。戦闘中心のエピソードでは、ほぼ毎回かかっている「E−1（リズム）」と「E−6」は『エヴァ』の劇中音楽を代表するものと云えよう。

次いで使用されているのが、計6回使われたB−1とB−16である。B−1は「Hedgehog's Dilemma」のBGMタイトルが示す通り、シンジが他人との距離を計りかねたり、不器用にコミュニケーションをとろうとするシーンで使用されている。B−16はミサトのマンションでのシーンで使われていた。これも印象的な曲のひとつだろう。

意外なのが「You are the only one」が、計5回も使用されているという事。これはゲーム「イース」のイメージアルバム「Lilia〜from YS〜」に収録されている三石琴乃のヴォーカル曲の流用。厳密にはBGMではなく、劇中でコンビニ店内で流れている曲や、TVから流れてくる曲として使用されている。『エヴァ』世界の流行歌という位置づけなのだろう。

Mナンバー	収録アルバム	BGMタイトル	使用話数	合計使用回数
A−1	I	Rei I	1話　14話　25話	3回
A−1（ピアノ）			11話	1回
A−2	II	BACKGROUND MUSIC	2話	1回
A−3	I	NERV	7話	1回
A−3（ハープ抜き）			11話	1回
A−3（リズム）			9話　11話	2回
A−4	II	BORDERLINE CASE	14話　16話　20話　25話　26話	5回
A−4（シンセボイス）	III	Do you love me?	20話　26話	2回
A−4（別バージョン）	D	無様な、自我境界	22話	1回
A−6	I	I.SHINJI	1話	1回
A−7	II	ANGEL ATTACK II	9話	1回
A−9	II	ANGEL ATTACK III	11話	1回
A−10	III	MOTHER IS THE FIRST OTHER	16話　20話	2回
A−10（シンセボイス）	III	Splitting of the Breast	26話	1回
A−11	III	DEPRESSION	25話	1回
A−12	III	INTROJECTION	25話　26話	2回
A−13	III	SEPARATION ANXIETY	16話　20話　25話　26話	4回
A−13（Bタイプ）	III	CRIME OF INNOCENCE	21話	1回
A−13（Cタイプ）	III	HOSTILITY RESTRAINED	21話　23話	2回
A−13（リズム）			25話	1回
A−15	II	She said, "Don't make others suffer for your Personal hatred."	12話	1回
A−16（ストリングス）	III	BACKGROUND MISIC II	23話	1回
B−1	I	Hedgehog's Dilemma	3話　5話　6話　18話　20話　26話	6回
B−1（ピアノ）			12話	1回
B−2	III	IN THE DEPTHS OF HUMAN HEARTS	10話　21話	2回
B−3	III	BACKGROUND MUSIC III	15話　18話　23話	3回
B−4	I	FLY ME TO THE MOON	2話　16話　17話	3回
B−4（ピアノ・さびしく）	III	THE SORROW OF LOSING THE OBJECT OF ONE'S DEPENDENCE	21話	1回
B−5			22話	1回
B−7	II	When I Find Peace of Mind	7話　11話	2回
B−9	III	INFANTILE DEPENDENCE, ADULT DEPENDENCY	20話　25話	2回
B−10			12話	1回
B−12	II	Both of you, Dance Like You Want to Win!	9話	1回
B−13			15話	1回
B−14	II	The Day Tokyo-3 Stood Still	13話　16話　20話　21話	4回
B−14（ピアノ）			11話	1回
B−16	I	MISATO	5話　7話（2回）　12話　16話　26話	6回
B−16（リズム）			2話　7話	2回
B−17	I	ASUKA STRIKES!	8話（2回）　9話　20話	5回
B−17（リズム）			2話　8話（2回）　9話（2回）	4回
B−19			17話	1回
B−20	I	Rei II	6話	1回
B−21	II	A Moment When Tension Breaks	10話　26話	2回
C−2	I	BAREFOOT IN THE PARK	1話　15話	2回
C−4	II	Waking up in the morning	3話　10話　17話　22話	4回
C−5	I	RITSUKO	9話（2回）　15話　21話	4回
C−6	II	A Crystalline Night Sky	6話	1回
C−7	I	TOKYO-3	1話　2話	2回
C−55（Dタイプ）	III	THREE OF ME, ONE OF SOMEONE ELSE	21話	1回
E−1	I	DECISIVE BATTLE	6話　8話　11話	3回
E−1（リズム）	II	Spending Time in Preparation	3話　5話（3回）　7話　8話　9話　10話　11話　12話　16話　18話　19話　22話　23話	15回
E−3	I	EVA-01	1話	1回
E−4	I	EVA-02	8話	1回
E−5	I	EVA-00	5話　7話　18話	3回
E−5（テンポアップ）	I	THE BEAST	2話　13話　14話　16話　20話	5回
E−5（テンポアップ・リズム）	III	HARBINGER OF TRAGEDY	2話　13話　20話	3回
E−5（リズム）			2話	1回
E−6	I	ANGEL ATTACK	1話　2話　3話　5話　6話　8話（2回）　13話　16話　18話　19話　23話	12回
E−7	I	MARKING TIME, WAITING FOR DEATH	3話　5話　7話　13話　16話　18話　19話（2回）　22話	9回
E−8	II	PLEASURE PRINCIPLE	4話　13話	2回
E−9	I	A STEP FORWARD INTO TERROR	1話　3話　9話　10話	4回
E−13	II	THANATOS	19話　23話	2回
E−13（小編成）			23話	1回
E−14			10話	1回
E−15	II	MAGMADIVER	10話	1回
E−16	II	THE BEAST II	16話　19話	2回
E−16（テンポアップ）	III	NORMAL BLOOD	18話	1回
F−2	I	次回予告	9話	1回
F−3（テイク2）	III	CHILDHOOD MEMORIES, SHUT AWAY	15話	1回
OP−1（ストリングス・テンポダウン）	III	THE HEADY FEELING FREEDOM	26話	1回
OP−2（Dタイプ）	III	Good, or Don't Be.	26話	1回

以下、流用曲

曲名	収録アルバム	使用話数	合計使用回数
Bay side Love story — from Tokyo —		4話　12話　20話	3回
FACE		4話	1回
FALL in STAR		10話	1回
You are the only one		2話　9話　11話　15話　22話	5回
オラトリオ「メサイヤ」	A	22話（2回）	2回
交響曲第九番	A	24話（4回）	4回
交響曲第九番（別バージョン）		26話	1回
ラジオ体操		2話　11話　16話	3回
遠い空の約束		9話	1回
結婚行進曲		15話	1回
蒼いレジェンド		9話　15話　21話	3回
不思議な夜		22話	1回
両手いっぱいの夢		23話	1回

その他

曲名	収録アルバム	使用話数	合計使用回数
てんとう虫のサンバ	A	15話	1回

○「A−1」、「A−2」等は、Mナンバーと呼ばれる音楽の整理番号である。例えば「A−3（リズム）」は「A−3」のリズムを強調したバージョンの意味。このリストではそういったバージョン違いを、別の曲としてカウントした。
○「流用曲」は『新世紀エヴァンゲリオン』のために録音されたものではなく、既成の音源から流用して使用した楽曲の事。
○『新世紀エヴァンゲリオン』のTVシリーズの話数は通常は、漢数字で表記されるが、このリストでは、読み易さを考慮し算用数字で表記した。
○「ベートーヴェン交響曲第九番」は、第弐拾四話「最後のシ者」で使われているのと、第弐拾伍話「終わる世界」で使われているのが別のバージョンであるため、別曲扱いにした。
○第拾伍話「嘘と沈黙」の結婚式で歌われた「てんとう虫のサンバ」は、既成のカラオケを使い、本作のキャストが歌ったもの。『エヴァンゲリオン』のために録音された楽曲とも、既成の曲からの流用ともいいがたいため、別枠に入れた。
○表中の収録アルバムの記号はI、II、IIIがそれぞれTV版サウンドトラック、Dは「EVANGELION：DEATH」、Aは「NEON GENESIS EVANGELION ADDITION」を指す。

謎の整理 壱【リリス編】

『エヴァンゲリオン』の謎の中で、最も情報が少なく、解明が難しいと思われるのが、碇ユイ、綾波レイ、リリス、初号機の関係である。以下、情報を整理してみよう。

アスカの実母は接触実験によって精神崩壊をおこした。アスカの母が何と接触実験をしたのかは不明だが、ユイの実験も、接触実験であったと考える事はできる。

同様の実験は、かつてアダムに関しても行われていたらしい。第弐拾壱話「ネルフ、誕生」の冒頭のセカンドインパクト時の南極のシーンで「アダムにダイブした遺伝子は既に物理的融合を果たしています」という台詞がある。卵の状態か、卵から孵りかかったアダムに、人間の遺伝子を投げ込んだ事がきっかけで、セカンドインパクトが起きたのだろうか。アダムに対しては人間の遺伝子を使い、ユイやアスカの母が参加した実験では人間そのものを使ったという事なのだろうか。

第弐拾話「心のかたち　人のかたち」で、エントリープラグの中で「生命のスープ」となってしまったシンジを、サルベージする計画が行われようとした時、同様の計画が10年前にも行われており、失敗に終わっているとリツコは語っている。丁度10年前にユイの実験が行われている。接触実験の結果、シンジが初号機に取り込まれたように、10年前にユイが取り込まれてしまったために、サルベージが計画された可能性は高い。では、ユイが取り込まれてしまった相手は、何か。初号機か、それとも、リリスか。

ゲンドウは、初号機に向かって「ユイ」と呼びかける。また、第25話「Air」で冬月は「彼女」が自分の意志でEVAに残ったと語っている。すると、ユイが実験で接触したのはリリスではなく初号機なのだろうか。

レイの謎に関しては、さらに情報が少ない。ユイと関係が深そうな事は間違いないのだが。レイが具体的にどのようにして作られたのかについては、本編中では殆ど語られていない。

実は、レイに関する謎を解くのに、手がかりとなるのがアダムとカヲルの関係なのかもしれない。ビデオ＆LD版の第弐拾四話「最後のシ者」では、アダムの肉体はゲンドウとともにあり、その魂はカヲルの中にあると語られている。魂と肉体がバラバラになる。それと同様の事がリリスにも起きているのではないだろうか。アダムの魂を持つカヲルに「君は、僕と同じだね」と云われた事から、彼女が、身体と分離されたリリスの魂を与えられているのではないかと考える事はできる。だが、それではレイがユイに似ていたり、シンジが彼女に母親を感じた理由がわからない。魂はリリスのもので、身体はユイのコピーなのだろうか。

副監督日記 「魔法」……鶴巻和哉

ロバート・フリップは自らのバンド「キングクリムゾン」を魔法であると語った。ライブの場において、すぐれた楽曲とすぐれたプレイとすぐれたオーディエンスの間にだけ起こる魔法、「クリムゾン」はそのための装置であると。

フリップは、非常に知的なミュージシャンで音楽理論だけでなく白魔術などにも興味の及ぶ変人だ。「レッド」は、まがまがしいギターのリフが印象的なインストゥルメンタルだが、中世ヨーロッパでは邪悪であるとの理由で教会から使用を禁止された「トリトーン」と呼ばれる和音をわざわざ用いるあたり、マニアならではといえる。クリムゾンの休止中は、「ギタークラフト」なるギター教室を主催して優れたプレーヤーを育てたりもしている。教室風景をビデオで見たことがある。張り詰めたような緊張感は学校というより何か宗教的な修行のようだった。

彼はアルバムタイトルに「ディシプリン（規律、訓練）」とつけるほど緻密で厳格なリハーサルをメンバーに課すことで有名だが、一方でインプロヴィゼイション（即興性）も重要視する。それは現代サッカーに似ているかもしれない。個人技だけでは勝てない、だがプレーヤー全員によるシステムを極限まで突き詰めても、その最期の最期ではやはり個人の創造性が勝負を決める。マニアックなまでに練り上げられた楽曲に周到なリハーサルを繰り返した、その上でなお即興プレイの出来る才能を要求する。しかしそれだけではダメだ。楽曲とプレイ、スタジオレコーディングではクリムゾンは力を発揮しない。ここに観客が必要だ。オーディエンスのいるライブでだけ「キングクリムゾン」は魔法になるのだ。

それは演劇にもあるだろうし、野球やサッカーのゲームにもあるかもしれない。プレイヤーの表現がオーディエンスの反応でねじ曲げられ、その反応をプレーヤーがさらに表現する。そういった螺旋の高みへ至る行程が魔法なのだろうか。

映画は客の反応によって変化することはない。映画の表現は客が見る前に終わっているからだ。だからこそ「映画は監督のためだけにある」と云える。映画に魔法はない。TVも同じだろう。寸断され、引き伸ばされ、繋ぎ合わされた時間、100000分の時間をかけて作られたわずか20分のフィルム。1秒の表現が1秒の時間として終わっていくライブの潔さがうらやましい。

プレイがその瞬間にリアクションされ、フィードバックする。そのレスポンスの中にこそ「魔法」は宿るのかもしれない。

D・ヨのエヴァンゲリオンCD事情

「EVANGELION：DEATH」の場合

（97年6月11日発売／KICA-3[illegible]）

アニメーション関連としては「銀河鉄道999」(←アルバムタイトル忘れましたスミマセン)以来、17年ぶりの快挙というオリコンアルバムチャート第1位を記録したのが「NEON GENESIS EVANGELION Ⅲ」(96年5月発売)でした。そして17年ぶりの次は1年ぶりという、使徒の如く気まぐれに1位を奪取したのがこちらの「EVANGELION：DEATH」であります。97年6月と云えば所謂「春エヴァ」から「夏エヴァ」へ向けてファンの皆様が完全に"出来上がって"いらっしゃる状態でしたので物凄い勢いのセールスで、前週まで連続1位を更新していらしたSPEED様のデビューアルバムをうっかり蹴落としてしまいました(うう、ごめんよ、特にHiroちゃん)。皆様方の御支援、厚く御礼申し上げます。さて、アルバムの特徴についてまず目に着くのはジャケットであります。シンジ→レイ→アスカと来たので、次は絶対マヤちゃんだと思っていた皆様の期待を裏切ったこの青空、一部では手抜きと云われてしまいましたが、実はCGを駆使してお金と手間は存分にかけさせて戴いております。勿論、正直に申し上げまして「夏エヴァ」に向けて絵を描き下ろしている時間が無かったというのも理由の一つでは有りましたが、潔く「エヴァンゲリオンです」と書いてあるシンプルさ加減が美しく、良い結果となったのではないかと存じております。また、この青空にこそ（メーカーを含めた）アニメ村の人々の葛藤が表れているとは云えませんでしょうか。絵が見たいけど、今更アニメっぽ過ぎると何か嫌。記号で作品世界を表現出来たら面白いけど、やっぱり絵がないと寂しい…等々。でも実際に平積みされた「EVANGELION：DEATH」がCDショップの一角を占領している風景は、爽快なものが有りました。手前味噌では有りますが、税込1500円と云うお手軽価格も良かったのではないかと自負しております。実を云うと本サントラは当初、庵野総監督よりシングルで低価格で発売したいと云う打診があったのですが、"弦楽"を劇中使用サイズに切り詰めてボーナストラックも入れずに曲間を短くしても、収録時間ギリギリでこぼれてしまうために断念。もし実現していたらサントラシングルと云う不思議な商品が発売される所でした。価格だけはその名残として(?)お安くなっております。中身の方へ目を移しますと、タイトルとBGMの使用場面がシンクロするブックレットの構成(歌詞すらないので苦肉の策)、それまで英語タイトルであったのに突如日本語タイトルが付けられたBGM(総監督に因れば「飽きたから」)、ボーナストラック・ヴェルディの「怒りの日」(本編トラックより長い)、そして何よりも劇中で効果的に使用されたパッヘルベルの「カノン」の心を打つ旋律…え！、その「カノン」ですが…スミマセン、おっしゃる通りです。レコーディング時に入っていなかったはずの幽霊さんの声が入っております。この声は鷺巣氏のアレンジでは有りません。昔のアニメや特撮のBGMでしたらかなり大ざっぱに録音されていたため、咳払いだのくしゃみだのが入っている事は稀にありましたが、今回は明らかにミュージシャンの声ではなく、少女らしき方が確かに"あっ"とか云ってらっしゃいます。トラックダウン時に消去しようにもメインの楽器のトラックに被っており、却って不自然になってしまうために敢えてそのままになっております。何卒御了承下さいませ。

『EVANGELION：DEATH』

ガイナさん

じゃけんしてみよう！の巻　水玉☆螢之丞

謎の整理 弐【使徒編】

●第1の使徒、第2の使徒

使徒は、第3の使徒、第4の使徒等と、番号をつけて呼称されている。この使徒の数字も『エヴァンゲリオン』における謎のひとつである。以下、使徒の謎について、数字を中心に情報を整理してみよう。

第弐拾参話「涙」のゼーレの会議シーンで、第3の使徒サキエルから第16の使徒アルミサエルまでの、14体の使徒の名前が明らかになっている。問題なのは、ここで語られていない第1、第2の使徒と、第17以降の使徒である。

劇中でも、第1の使徒はアダムであると云われている。第七話「人の造りしもの」でリツコは「15年前に人類は、最初の使徒と呼称する人型の物体を南極で発見した」と語っており、第拾伍話「嘘と沈黙」ではミサトが「アダム、あの第1使徒がここに」と云っている。

また、ビデオ＆LD版の第弐拾四話「最後のシ者」では、ゼーレが「失われた白き月よりの使徒、その始祖たるアダム」と語り、第25話「Air」ではミサトが、アダムとリリスは同じ生命の源であり、人間はリリスから生まれたと云っている。第壱話「使徒、襲来」で、ゲンドウと冬月は第3の使徒サキエルの出現に、「15年ぶりの使徒」だと語った。

以上の情報を総合すると、15年前に南極に出現したアダムが、使徒を生んだ「生命の源」であり、そして、第1の使徒であると考える事が出来る。

すると、同じ生命の源であるリリスが、第2の使徒なのか。

ただ、第2の使徒については、本編中では一度も触れられていない。リリスが、第2の使徒だとすれば、第3の使徒サキエルの出現が15年ぶりであるのだから、リリスはセカンドインパクトと同じ年に発見されていたという事になる。

だが、ゲンドウとゼーレ、すなわち、秘密の本質に近い人物は、一度も「15年前に南極に現れたアダムが、第1の使徒である」とは云っていない事に注目したい。アダムを第1の使徒だと云っているのは、ミサトやリツコと云った、やや真実から離れたところにいる人物ばかりなのだ。一度も語られていないだけで、実は、アダムやリリスとは別に、15年前に、第1の使徒や第2の使徒が出現していたのかもしれない。

●第17の使徒

ミサトは第25話「Air」において、「人間が第18番目の使徒である」と語っている。勿論、これは一種の比喩であるのかもしれない。そして、この数はカヲルを第17番目の使徒としてカウントした場合での数字だろう。

だが、前にも触れたように、ゼーレの言葉が事実であるならば、カヲルはアダムの魂を与えられた存在である。同じ第弐拾四話でゼーレは、カヲルをネルフに送りこんでおきながら、「アダムや使徒の力は借りぬ」と語ってる。するとやはり、カヲルは使徒では無いのではないだろうか。

もし、カヲルが使徒で無かったとしたらどうなるか。第弐拾参話「涙」の、第16の使徒が倒された時点で、ゼーレは「死海文書に記されている使徒は、あとひとつ」と語っている。第弐拾四話「最後のシ者」でも、ゲンドウが「間もなく最後の使徒が現れる。それを消せば願いがかなう」と云っている。第16の使徒を倒した時点で、人類が殲滅すべき使徒が残り一つなのは間違いないようだ。もしカヲルが使徒でなかったとしたら、裏死海文書に記されていた使徒が、一体、まだどこかに生き残っている事になる。

今日の珍品

今回、紹介するのは第弐拾伍話「終わる世界」で登場した、IDカード、健康保険被保険者証、子供の頃の通知票等のミサトの素性に関する書類。通知票によれば、給食を食べるのが遅い子供だったらしい。

声優博士のちょっちチェック

小川びい

（第弐拾伍話）

●Aパート

▼Cut24　イスに座ったまま叫ぶシンジ

本作の大きな特徴である、声優陣に強迫的な程に負荷を与える展開。その極みが、この第弐拾伍話であろう。緒方恵美、三石琴乃、林原めぐみ、宮村優子と主演声優が、逼迫した舞台で、感情の振幅の大きな演技を要求されている。しかも、各人がほぼ一人芝居と云える状況である。かような製作者側からの過大な要求に、如何に応えたかが今回の聞き所と云えよう。

▼Cut126　綾波レイ、彼女の場合

自問自答する綾波。AR台本では、以下、レイ3、レイ2、レイ1と表記される三人の綾波が次々と現れ、三者三様ならぬ一人三様の様相を呈する。よく聞くと、林原はそれぞれ微妙ながら演技を変えているようだ。レイ2は比較的柔和、レイ1は他に比して冷酷、と受け取れなくもない。「もっと裏話の隅」参照。

●Bパート

▼Cut197　葛城ミサトの場合

以下の場面で、幼いミサト、現在のミサトとの対話が描かれる。続いて、Cut224で、ミサトと「ミサトの声」(AR台本の表記による)との対話が始まる。「ミサトの声」とはミサトの内面の声という事だろうか。三石はここで、幼い自分、感情的な自分、分析的で批評的な自分という三様の演技を要求されている。先の綾波の場面と同じ構造が繰り返される事になるわけだ。特に、冷静から激昂へと揺れる三石の演技の振幅が素晴らしい。余談だが、三者の自己対話という主題(モチーフ)は、どこかMAGIシステムを思わせて興味深い。

▼Cut237　指の間から恨めしそうに加持を見るミサト

先の分析的なミサトと感情的なミサトがここで一旦統合される。その三石の演技の上手さに息を呑む。

▼Cut280　継母

AR台本では、勝生真沙子の役名は継母(女医)と表記されている。第弐拾参話での女医がアスカの母親になったという事だ。EDクレジットでは継母と表記されるが、LDジャケットに掲載したCAST表では整合性を考え、女医と表記した。

▼Cut295　アスカの母

川村万梨阿の第弐拾弐話以上の強迫的な演技が素晴らしい。必聴。

（第26話）

●Aパート

▼Cut7　病院

病院内に流れる館内放送は矢島晶子によるもの。矢島は第拾壱話以来の参加である。田中英行音響演出作品には欠かせない一人。

▼Cut80　ゼーレのモノリス群

ゼーレ09「我等はヒトの形を捨ててまで！」は水野広一、ゼーレ12「これは通過儀式なのだ！」は大山高男。大山は本作には初登場。ぶろだくしょんバオバブ所属のベテラン。「超時空世紀オーガス」のリーグ、「ムカムカパラダイス」の高倉大海、「愛と勇気のピッグガール　とんでぶーりん♥」のトンラリアーノ二世など、ちょっと気のいい中年男性を演じることが多い。また、Cut109のゼーレ06、04はそれぞれ、松本保典、沢木郁也が演じている。松本、沢木とも本作には初参加である。松本はぶろだくしょんバオバブ所属。田中英行音響演出作品にはお馴染みの中堅で、「太陽の勇者ファイバード」の火鳥勇太郎といったヒーローから、「スレイヤーズ」シリーズのガウリイのような二枚目半まで演じる役柄は幅広い。沢木はアーツビジョン所属のベテランで、様々な役柄をこなす名バイプレイヤーである。

▼Cut67　ハッキングを受けるネルフ本部

冬月と内線で会話している管制官「外部との全ネット、情報回線が一方的に遮断されています」は、石田彰が演じている。Cut74のアナウンス「第4防壁、突破されました」は長嶝高士。

▼Cut82　リツコの決意

背景に流れているアナウンスは川村万梨阿によるもの。リツコのもとを訪れた男は山野井仁が演じている。

▼Cut108　第666プロテクトの作業画面

「フリーズ」と繰返す音声はMAGIのもの。演じているのは林原めぐみ。他にも、AR台本での指示はないが、背景に流れている雑音の中で、林原が演じている機械音声があるが、これもMAGIの台詞という事だろう。

▼Cut118　茂みに潜む戦自偵察隊員

一佐「始めよう。予定通りだ」は菅原淳一。菅原は、ぶろだくしょんバオバブ所属。「アイドル伝説えり子」の柿本、「ダンジ通信あげだま」の校長、「白雪姫の伝説」のグルメなどが代表作だろう。

▼Cut126　攻撃を受けるネルフ本部

オペレーター女「第8から第17までのレーダーサイト、沈黙」は川村万梨阿。

▼Cut139A　特殊部隊に襲撃されるネルフ職員

シャッター前で襲撃され、呻き声を出す隊員を演じているのは、渋谷茂。渋谷はぶろだくしょんバオバブ所属の若手声優。「超者ライディーン」のエース羽田、「星方武侠OUTLAW STAR」のジーンなど、近年活躍が目立つ有望株である。続くCut140で、その隊員に無線連絡をとろうとしている班長と眼鏡の男はそれぞれ、山野井仁と水野広一が演じている。

▼Cut145　発令所正面

流れているアナウンスは順番に、左「台ヶ岳トンネル、使用不能」が長嶝高士、右「西、5番線入路にて火災発生」が沢木郁也、中「侵入部隊は第1層に突入しました」が大山高男。また、Cut172の封鎖されるパイプスペースの場面に流れるアナウンスは矢島晶子による。さらにCut191のアナウンス右「第2グループ応答無し」が菅原淳一、左「77電算室、連絡不能」が松本保典。

▼Cut194　負傷者を引きずる女性ネルフ職員

演じているのは矢島晶子。息遣いと泣き声だけだが、矢島とわかる演技はさすがの一言。

▼Cut200　火炎放射

戦自特殊部隊の火炎放射による掃討を受けて、(画面向こうの)室内で悲鳴を上げているネルフ女は、林原めぐみが演じている。「2回目はもっとつらく」との指示がAR台本にある。痛々しげな悲鳴がお見事。

▼Cut202　発令所のオペレーター

オペレーター「第3層Bブロックに侵入者！」は渋谷茂によるもの。

▼Cut225　野戦司令部

双眼鏡で戦況を見つめる、戦自隊員達の場面。「意外と手間取るか」と呟く戦自師団長が沢木郁也。それを受けて「我々に楽な仕事はありませんよ」とぼやく戦自副長を松本保典が演じている。ほぼ同じ野戦司令部の場面がBパートCut313に出てくるが、ここで、「アカい奴は？」と問うているのは、Cut225の師団長とは別人の、戦自隊長である。演じるのは菅原淳一。それに答えて報告する情報参謀は、大山高男が演じている。BパートCut584で出てくる戦自隊員達も、その副長と隊長である。

●Bパート

▼Cut245　無表情に水槽を見おろすレイ

LDジャケットに掲載したCAST表では、綾波レイの名前を記載したが、第25話では、実は綾波レイは台詞はおろか、息遣いすらない。

▼Cut255　死屍累々のネルフ職員

死屍累々と横たわるネルフ職員を映す場面に流れる、戦自隊員の無線でのやりとり。順に、戦自隊員「第2層は完全に制圧。オクレ」が石田彰、無線左「第2発令所マギオリジナルは未だ確保出来ず。左舷下層フロアにて交戦中」が山野井仁、無線右「フィフスマルボルジエは直ちに熱滅却処置に入レ」が大山高男、無線女「エヴァパイロットは発見次第射殺。非戦闘員への無条件発砲も許可する」が矢島晶子、無線男「鋼原線、新庄線、速やかに下層へ突入」が永野広一。矢島のか弱い声で、冷徹かつ無表情に「射殺」と云われると、凄味がある。

▼Cut257　シンジを発見する戦自隊員

階段下にうずくまるシンジを発見した兵士を演じるのは、菅原淳一。

▼Cut271　戦自の無線交信

無線機をチューニングして、ミサトが傍受した戦自の無線交信。無線A「第7ケイジの山岸支隊はどうか」が沢木郁也、無線B「ムラサキの方は確保しました。ベークライトの注入も問題ありません」が山野井仁、無線C「アカい奴は射出されたもよう。目下ルートを調査中」が長嶝高士。

▼Cut309　首相官邸

首相を演じるのは沢木郁也。秘書は川村万梨阿。

▼Cut311　ジオフロント全景

N²兵器使用後、剥き出しになったネルフ本部。その背景に流れている戦自の交信。通信兵A「表層部の熱は引きました」が永野広一・通信兵B「全部隊の配置完了」が渋谷茂。

▼Cut324　エントリープラグ内のアスカ

「死ぬのはイヤ……」と呟き続けるアスカ。AR台本では、それに被せて赤ん坊の泣き声や笑い声が効果音として付けられるよう指示があるが、実際には、ここに川村万梨阿演じるアスカの母の様々な台詞が重ねられた。

▼Cut338　戦自地上部隊

地底湖から上がる十字の光を目撃した兵士たちが口々に云う台詞。兵士「こ、これは」が石田彰。隊員「やったか」が山野井仁。また、弐号機の猛反撃を受けて、Cut369で無線機に向かって「ケーブルだっ!!」と怒鳴る下士官は、長嶝高士。

▼Cut605　ミサトたちを狙う戦自隊員

シンジを連れて行くミサトを背後から狙い打つ、戦自隊員達。兵士A「逃がしたか」は渋谷茂。兵士B「目標は射殺できず」が永野広一・無線「追跡不要」が長嶝高士。

▼Cut628A　ミサトとシンジ

激昂から始まるシンジとやりとりするミサトの演技は、本作での三石の演技の集大成といえる。Cut647で、シンジを送り出した後、倒れたミサトが、加持を思い出しながら甘える場面が特に素晴らしい。AR台本にはわざわざ「三石様、何卒よろしく」との注意書きが添えてある。演出側の期待の大きさが伺い知れよう。それに三石の演技は十二分に応えたように思う。

▼Cut486　リツコとゲンドウ

ゲンドウと対峙するリツコ。山口由里子の本作での山場といえる場面。特に碇の「赤木リツコ君。本当に―」という台詞を受けての、Cut497の「ウソつき」という台詞には「山口様、何卒よろしく」との注意書きが(こちらも)添えられている。碇が「本当に―」の後、リツコに何と語ったのかはAR台本でも明らかにされておらず、そのことも併せて山口に相当な負荷が懸かったであろう事は想像に難くない。

これは「THE END OF EVANGELION」のパンフレットなど、いくつかの書物で、山口自ら語っていることだが、実際、収録の時に、「ウソつき」という台詞に迷いのあった山口は、当初、納得する演技が出来なかったのだという。ところが、本番時に、庵野監督から、碇役の立木文彦に向かって「本当に」の後に、とある台詞を云うよう指示が出され、その台詞を受けて、ようやく山口は思い切った演技をすることが出来たらしい。実際に庵野監督から指示された「本当に」の後の"下の句"が、一体如何様なものであったのか定かではないが、山口の素晴らしい演技から、聞こえないゲンドウの台詞を想像する事も出来るだろう。

▼Cut599　物凄い形相のアスカ

EVAシリーズに喰われ無残な姿を晒す弐号機。そのエントリープラグの中で「殺してやる」と呪詛の言葉を吐きつづけるアスカ。AR台本では、「カット中芝居」「ひたすら繰り返し」など、強迫的な芝居を強要されている。その負荷によく応えた宮村優子の芝居に注目したい。

がんばれミサトさん4

作／むっちりむうにぃ

こんな時ばっかり女の子に頼って!!
甘えて!!
助けてアスカ…
立ちなさい!!
ほら立って!!
助けて…ぴろぴろりん様
ぴろ…?
…ミミちゃん…それは何?
不幸を追い払う幸運ペンダント
これをつけていると ぴろぴろりん様が守ってくれるんだ…
助けて!! ぴろぴろりん様
ちょっと目を離した間に何やってんのよ
ほら しゃきしゃき歩きなさいっ
もう…
ずる
ずる
ああああああああ

えゔぁ川柳

■突然の　アングラ世界に　戸惑って■教えてよ　叫びたいのは　見てる側？■パイプ椅子　座る少年　耳ふさぎ■ミサトの死　ちゃんと映画に　リンクして■無防備な　アスカの姿に　カギをかけ■缶コーヒー　晴れてUCCの　文字が載り■ミサトさん　撃つぞ走るぞ　蹴とばすぞ■ゲンドウの　聞こえぬ言葉　気にかかり■復活の　アスカが見せる　大活劇■

編集後記

●「EVA友」も、これで13枚目。慣れというのは怖ろしいもので、こういった詰め込んだ感じのライナーの方が、今では、編集作業が楽だったりする。文字校正するのが、ちょっと大変だけど（笑）。今回の号は、今までの「EVA友」の中で編集時間の最短記録だった。てなわけで、色々あったけれど、次号がラスト。（黒）

★本ソフトおよび「友の会」への御意見、感想、あるいは投稿は
〒112-0013　東京都文京区音羽1-2-3
キングレコード（株）スターチャイルド「EVA係」まで

EVA友の会 最終号

発行／EVA友の会　編集／スタジオ雄

ごあんないマンガ

豊島ゆーさく

ともあれ今世紀最後？のアニメ大作シリーズもこれで完結です スタッフの皆様に感謝の言葉を捧げましょ――

やれやれおわった

エヴァって結局こん中に入んのかしらっジャンルとして

もっと重箱の隅

執筆●小黒祐一郎

最終話「世界の中心でアイを叫んだけもの」

●最終回のサブタイトルは、ハーラン・エリスンのSF小説「世界の中心で愛を叫んだけもの」からの引用。『トップをねらえ！』『ふしぎの海のナディア』の最終回のサブタイトルも、SF小説のタイトルから引用されている。最終回のサブタイトルを、SF小説から引用するのは庵野監督作品のお約束なのである。

●Aパートの実写のスチールで構成された部分の、ビール瓶が入れられたケースが積まれているカット。よく見ると、手前に立っている宅配便屋のマスコットキャラクターが、ペンペンである。

●本シリーズの終盤や予告編では、通常の商業アニメでは見る事の出来ない様々な技法が取り入れられている。最終話ではペーパーアニメが挿入されている。しかも、自主制作作品でお馴染みのメタモルフォーゼものである。監督の庵野秀明と、吉成曜が作画を担当。

●シンジが、ユイやゲンドウと暮らしている「有り得たかもしれない一つの世界」で、ゲンドウが読んでいる新聞に「ソ連基地と……」の見出しがある。この場面の世界だけでなく、普段の『エヴァンゲリオン』の世界も、20世紀末にソビエト社会主義共和国連邦が崩壊する事はなく、21世紀にも健在だという設定なのだ。

●「有り得たかもしれない一つの世界」で、教室の机に「碇」と「明日香」の名前で、相合い傘が書かれている。この世界ではアスカは明日香と呼ばれているようだ。

●このエピソードは「父に、ありがとう」「母に、さようなら」「そして、全ての子供達（チルドレン）に」「おめでとう」のテロップで終了する。このテロップがシンジの気持ちであり、『エヴァンゲリオン』がシンジが父親と母親への愛憎を抱く、エディプス・コンプレックス的な物語だったとするならば、「父に、ありがとう」「母に、さようなら」とは、母親を求め、父親に憎しみを感じていたシンジが、その葛藤を克服し、父と和解し、母親離れできるようになった意味と考える事が出来る。「そして、全ての子供達に」「おめでとう」は、この世は生きる価値がある素晴らしいものであり、生まれてきた全ての人々を祝福しよう……といった意味だろうか。

第26話「まごころを、君に」

●「まごころを君に」は、ダイエル・キイスのSF小説『アルジャーノンに花束を』を原作にした映画の邦題「まごころを君に」からの引用。SF小説のタイトルを直接引用しないあたりが、ちょっとヒネっている。

●第26話は庵野秀明、樋口真嗣、甚目喜一の三人が絵コンテを担当している。TVシリーズでも常に日常描写中心のエピソードを担当していた甚目喜一は今回もマンション内でのシンジとアスカのやりとり等、人物芝居中心のシーンを担当。樋口真嗣は人類補完計画関連のSF的な描写を担当。

●庵野秀明総監督は、このエピソードでは、脚本、絵コンテ、演出は勿論、他のスタッフと共同で作画監督も務めている。メカ、エフェクト中心のカットを担当した。

●ゼーレが進めていた人類補完計画と、ゲンドウが目論んでいた計画は別のものであった。最終的な結果が、ゼーレの計画通りのものであったかどうかは不明だが、この第26話では、少なくともゲンドウの計画は失敗に終わったようだ。TV版の第弐拾伍話、最終話では、数少ない描写から判断するとゲンドウの思惑通りに人類の補完が進んでいるように想われる。TV版のクライマックスはゲンドウの目論見通りに、リメイク版の第26話はゼーレの計画通りに、計画が進んだ展開なのかもしれない。

●第26話は、メインタイトルやエンディング以外は、ほぼ劇場公開版と同じ内容が収録されている。本編でほとんど唯一、劇場公開版から変更されたのがマンション内のシーン。「一人にしないで！　僕を見捨てないで、僕を殺さないで！」というシンジの悲痛なセリフに対して、劇場公開版では、アスカが「嫌」という台詞で応えているが、今回の収録しているバージョンではアスカの台詞の音声が消され、「――イヤ」という文字が画面に表示される演出となっている。

●EDテロップに、協力／昭島市立拝島保育園の項がある。これはPRODUCTION I.Gのプロデューサーである石川光久の娘さんが通っている幼稚園。第26話の砂場のシーンで背後に流れる童謡に関して、なるべく生な感じの音が欲しいという要望が庵野総監督からあり、石川プロデューサーが自ら幼稚園に行き、録音してきたものだ。

●絵コンテでは、砂場のシーンで女の子達を迎えに来る母親は、ミサトだという事になっている。シンジの中では、ミサトは母親的な（しかも、自分を見捨てるのではないかと感じさせる）ポジションにいるという事なのだろう。

●第26話でも、CGをはじめとする様々な技法が使われている。その中でも特に異色なのが、中盤のシンジの葛藤を表現したシーンでの、今までの話数のあちこちのカットのセル画を何枚も重ねて撮影しているパートと、セル画を裏表逆にして撮影しているパートであろう。まさしく『エヴァンゲリオン』ならではの実験的な手法であった。

●人々がL.C.L.と化してしまった後の世界では、海の水が赤くなっている。セカンドインパクト後の南極も、海が赤くなっていた。第拾弐話「奇跡の価値は」において、ゲンドウは、その南極について「原罪の汚れ無き、浄化された世界」と云っていたが、この言葉は、単に生命が死に絶えているという意味ではなく、「生物が誕生する前の生命のスープに戻った状態」であるという意味だったのかもしれない。

●終盤のシンジが「他者のいる世界」に戻ろうとする直前に、「生きていこうとさえ思えば、どこだって天国になるわ。だって、生きているんですもの。幸せになるチャンスはいくらでもあるわ」というユイの台詞がある。第弐拾話「心のかたち　人のかたち」でエントリープラグ内で身体を失ったシンジが、現実世界に戻ってくる直前にも、彼女のほぼ同様の台詞があった。その言葉は、これから誕生する者への祝福の言葉であり、シンジにとって現実世界で生きていく勇気を与えてくれる心の支えになるものなのだろう。

●リメイク版の第25話と第26話は、TV放映版の第弐拾伍話、最終話に映画的な見どころを盛り込み、同じテーマを深化させて語った作品である。それだけに、別の物語であるが似たシチュエーションや台詞は多い。TV放映版の最終話「世界の中心でアイを叫んだけもの」は「父に、ありがとう」「母に、さようなら」のテロップで終わる。この第26話では、劇中でシンジが、母親に対して「さようなら…母さん」という台詞を口にする。ただ、これはエディプス・コンプレックス的な意味での葛藤の克服ではないようだ。人類が生きた証のためにEVAの中に残った母親は、決して息子である自分の事だけを考えている存在ではない、つまり、母親も「他者」であると理解したゆえの訣別だったのだろう。第26話ではシンジの父親に関する感情は殆ど描かれていない。母に関しては、TV放映版とリメイク版で同じ結論に達したが、父に関してはTV放映版と、リメイク版で違う結論に至ったという事なのだろうか。

えゔぁ川柳

■紙アニメ　アマチュア時代の　匂いして■夢オチか!?　嫌な予感が　頭をかすめ■男の子　朝のテントも　仕方なし■よく喋る　レイの姿が　新鮮で■ありがとう　囲む拍手に　笑みこぼれ■青葉シゲル　どうして僕だけ　あの補完？■潔癖症　転じて男嫌いかな■実写シーン　思わず自分を　探してる■巨大レイ　羽は生え血を吹き　首落ちて■難解な　ラストにしばし　言葉なく■

副監督日記　「電話にて、さよなら」

鶴巻和哉

よくよく考えて見ると「電話」ていうのは不思議なもので、かけてきた相手が知り合いならすぐに「○○さんだ」とわかります。もちろん受話器から聞こえてくる「声」で判断できるんだけど、電話機の本来の目的を考えると必ずしも「声」を伝える必要はないわけです。これが、言葉の意味だけを電気の力で送信するマシーン（要するにモールス信号発信機＋モールス信号変換機）なら何の問題もありません。でも、いきなり先方の声色で「言葉」を伝えてくるのは変な気がします。例えば、ただ単に「おはよう」という言葉の意味だけを伝えるほうが、よほど簡単な事のように思えます。北陸訛の中年男がちょっと苛々しながらとか、20歳前の女の子がまだ眠そうにとか云うニュアンスまで乗せて伝えるのはさぞかし大変なことだろうと。科学技術が進歩してコンピュータなんかも使って「やっと声色を情報化して電気信号に乗せることが出来ました」ていうのならわかるんです。でも、「電話」はいきなりでしょ。発明されたときいきなり相手の声色で言葉を伝えてきてる。声を出してるのは、その場にあるただの機械のくせに先方の声色を真似てっ！。そう考えたら急に信用できなくなって、なんか騙されてるって思えたんです。子供の頃の話ですけど。

吉田戦車的と云うか、ディック的と云うか、そんな妄想に囚われていた頃、僕は将来、小説家になってみたいと思っていました。べつに、書きたい物語を持っていたわけでも、憧れていた作家がいたわけでもありません。文字は言葉の意味だけを伝えます。「おはよう」という文字は、中年男が書こうとコギャルが書こうと、活字になると差異がなくなります。文字で書かれている物語は、そこに書かれている以上の情報を伝えてはいないと考えていました。しかし、読者は物語を読むため文字を目で追っているとき、そのページ全体も視界に捕えているはず。文章をうまく調整して、ひらがなと漢字の密度差を利用したパターンや模様をページ上に描き出し、それを読者の意識下に刷り込めれば、文字で書かれている以外の特定のイメージを与えることが出来るのでは、なんて思いついたのです。今にして思うといかにも子供の考えなんだけど、当時は催眠術なんかにも興味があったし、結構本気だったんですよね。言葉にはちょっと魔術的な怪しさを感じてたんです。もともとはコミュニケーション以外のことのために存在したんじゃないかって。「ドラクエ」の呪文にザキ系と云うのがあって、他の呪文は神様や精霊の力を借りるためのコミュニケーション用なんだけど、このザキ系最大呪文のザラキは解説書に「相手に死が訪れる」とだけあって言葉それ自体に現実的な力がある。そんな感じ。

このように邪悪な野望を持った子供ですから、サブリミナル効果を知ったときは狂喜しまして、ある種その手法自体がサブリミナル的とも云えるリミテッドアニメーションの方法論にひかれていったんです。知ってると思うけど、本来、アニメートっていうのは「生命を与える」て意味で、止まっているはずの絵を高速（1／24秒毎）で置き換えることによって、あたかも動いているかのように錯覚させているわけです。語源は「出産」なんかと関係した魔術チックな言葉でもあるんだろうけど、テレビだって同じ原理なんだから、僕らは物心ついた頃から怪しげな錯覚boxに騙され続けてきたともいえるわけです。

結局、サブリミナル効果自体は根拠の薄い眉唾だったんだけど、最近は色彩心理学もあるし、例の赤青の点滅なんかで人間、簡単にどうにかなっちゃうくらいだから、あながち子供の思いつきでもなかったりして。

OPの総整理

第壱話から流れている『新世紀エヴァンゲリオン』のオープニングフィルムには、シリーズ途中、あるいは終盤に登場するキャラクター、メカ、場面等が数多く含まれている。それは視聴者にとっては内容の予告であり、一種の謎かけであった。オープニングの各カットの内容についてチェックしてみよう。

●カット解説

●Cut 1　絵コンテによれば暗闇に広がる光は、宇宙の始まり。赤い宇宙に現れる図形は智天使（ケルビム）のようだ。智天使は、カトリックの伝統的な信仰では二番目に位が高いとされている天使。聖書の伝承では、智天使はエデンの園を守る事と、アダムとイブが命の木に近づくのを防ぐのが役目となっている。

●Cut 2　絵コンテによれば青い画面は「原始の海　生命のスープ」。図形は、セフィロトの樹の変形である、さかさまの樹。今回収録の第26話「まごころを、君に」で、ロンギヌスの槍と一体化した初号機は、さかさまの樹のような姿となった。水面のゆらめきは、同じ映像が第拾六話「死に至る病、そして」、第弐拾話「心のかたち　人のかたち」に登場。いずれも、シンジがエントリープラグ（＝内的宇宙）から現実世界に帰還する直前であった。胎児が母の子宮の中から、光に満ちた外界を見たイメージだろうか。

●Cut 4　ここに現れる図形はセフィロトの樹。セフィロトとは、カバラの象徴的な図版で、精神界の三次元的イメージの実体を図形的に表現したもの。本編でも度々、ゲンドウの執務室の床や天井に映し出されていた。第26話では、初号機とEVAシリーズが空中に出現させた。

●Cut 17　第26話の終盤で、初号機に12枚の羽根が生える。堕天使ルシファーは、12枚の羽根を持つと云われている。

●Cut 21、23　血にまみれた初号機、電柱等のイメージは、第拾八話「命の選択を」で、初号機が3号機を倒すシーンで登場。

●Cut 29　ABSOLUTE TERROR FIELDは絶対恐怖領域の意味で、A.T.フィールドの事。

●Cut 30　この少年は、第弐拾四話「最後のシ者」に登場した渚カヲル。

●Cut 31　第3の使徒、初号機、使徒のコア、A.T.フィールド、カヲルの次がレイであるのは、レイも使徒に近しい存在であると云うことの暗示なのだろうか。

●Cut 44　ゼーレの紋章は、本編では第弐拾話に登場。

●Cut 48　若き日のゲンドウは第弐拾壱話「ネルフ、誕生」に登場。

●Cut 49　胎児のアダムは第八話「アスカ、来日」で初登場。ビデオ＆LD版の第弐拾四話ではゲンドウの掌に融合していた。

●Cut 51　これは改装された零号機・改。第拾壱話で初登場。

●Cut 67B　「SECOND IMPACT」の文字の前に、ミサトのペンダント。ミサトのペンダントとセカンドインパクトの関係は第拾弐話「奇跡の価値は」で明らかになった。

●Cut 69　光の巨人は、セカンドインパクト時に南極に現れたアダム。本編での登場は第拾弐話の冒頭。

●Cut 70　セカンドインパクト時の南極の映像は第拾弐話で登場。OPのこのカットと全く同じ映像は、第弐拾壱話で登場。

●Cut 71　数年前のレイだろうか。この映像は本編には登場していない。レイが実験施設のような場所で育てられた事を暗示しているのだろう。

●Cut 72　若き日のユイは第弐拾壱話に登場。

●Cut 76　使徒の身体を構成する物質についての解析データ。第伍話「レイ、心のむこうに」で登場。

●Cut 77B　若き日のミサト、加持、リツコも第弐拾壱話に登場。

●Cut 84　屈託なく笑うシンジは、近しい表情が最終話「世界の中心でアイを叫んだけもの」のラストに登場。TV放映時は最終話のエンドカード（番組終了を告げる映像）も、このOPのシンジが使われた。第26話「まごころを、君に」では中盤のシンジの葛藤を表現したシーンで、同じ表情が登場。

●Cut 85　謎の文字は、ビデオ＆LD版の第弐拾参話「涙」で登場。リツコが神様とEVAの関係等について話すシーンで、水槽の中のレイ達にダブるかたちで、その映像が挿入されている。裏死海文書の一部。

●オープニングカット一覧

カット	フレーム	内容
Cut 1	(901～)	暗闇に光～赤い宇宙に現れる図形。
Cut 2	(1125～)	青い画面に図形が現れて消え、水面と思われる光のゆらめき。
Cut 3	(1316～)	黒いハレーション～タイトルロゴ。
Cut 4	(1585～)	重なり合うシンジ、ミサト、レイの姿、シルエット。現れる図形。
Cut 5	(2408～)	挿入されるエントリープラグ。
Cut 6	(2425～)	エントリープラグのインテリア。
Cut 7	(2437～)	エントリープラグ内タイムカウンター。
Cut 8	(2451～)	シンジの手。
Cut 9	(2457～)	赤からグリーンになっていくモニターの表示。
Cut 10	(2466～)	エントリープラグ内のシンジ。
Cut 11	(2523～)	顔を上げるシンジ。
Cut 12	(2579～)	起きあがる初号機。
Cut 13	(2634～)	ゲンドウ。
Cut 14	(2647～)	ミサト。
Cut 15	(2661～)	リツコ。
Cut 16	(2674～)	レイ。
Cut 17	(2688～)	初号機のアクション～12枚の羽根が生える。
Cut 18	(2884～)	初号機の口が開く。
Cut 19	(2898～)	振り上げられる初号機の手。
Cut 20	(2905～)	初号機のアップ。
Cut 21	(2911～)	赤い血がついている初号機の手。
Cut 22	(2924～)	「TEST TYPE」の文字。0。
Cut 23	(2928～)	赤い血にまみれた初号機の足と電柱、標識。壊れた車。
Cut 24	(2939～)	「EVA-01」の文字。
Cut 25	(2943～)	振り向く初号機。
Cut 26	(2968～)	第3の使徒のアップ。
Cut 27	(2974～)	炎の中の初号機。
Cut 28	(2980～)	使徒のコア。
Cut 29	(2986～)	「ABSOLUTE TERROR FIELD」の文字。
Cut 30	(2994～)	少年の顔。
Cut 31	(2996～)	月を背にしたレイ。
Cut 32	(3019～)	「ANGELS」の文字。
Cut 33	(3023～)	第3新東京市全景。
Cut 34	(3034～)	「TOKYO-3」の文字。
Cut 35	(3038～)	ネルフ本部全景。
Cut 36	(3049～)	ネルフのマーク。
Cut 37	(3053～)	冬月。
Cut 37B	(3060～)	第3新東京市の地図。
Cut 38	(3064～)	日向。
Cut 39	(3071～)	青葉。
Cut 40	(3080～)	マヤ。
Cut 41	(3088～)	ネルフ本部発令所。
Cut 42	(3093～)	加持。
Cut 43	(3101～)	リツコ。
Cut 44	(3108～)	ゼーレの紋章。
Cut 45	(3111～)	不敵なゲンドウ。
Cut 46	(3118～)	キール議長。
Cut 47	(3122～)	「人類補完計画　第17次中間報告」の表紙。
Cut 48	(3124～)	若い頃のゲンドウ。
Cut 49	(3127～)	胎児のアダム。
Cut 50	(3130～)	ゲンドウの口。
Cut 51	(3135～)	頭をあげる零号機。
Cut 52	(3145～)	「PROTOTYPE EVA-00」の文字。
Cut 53	(3149～)	プログナイフを構える弐号機。
Cut 54	(3160～)	「PRODUCTION MODEL EVA-02」の文字。
Cut 55	(3165～)	エントリープラグ内のレイ。
Cut 57	(3175～)	エントリープラグ内のアスカ。
Cut 58	(3191～)	トウジ。
Cut 59	(3198～)	ケンスケ。
Cut 60	(3204～)	ヒカリ。
Cut 61	(3211～)	ビル越しの爆発。
Cut 62	(3217～)	パレットガンを撃つ初号機。
Cut 64	(3224～)	回転ジャンプして手前に跳んでくる初号機。
Cut 65	(3247～)	ゲンドウ。
Cut 66	(3258～)	泣いている幼いシンジ。
Cut 67	(3261～)	上半身裸のミサト。
Cut 67B	(3270～)	ミサトのペンダント。
Cut 68	(3272～)	「SECOND IMPACT」。
Cut 69	(3275～)	光の巨人。
Cut 70	(3285～)	セカンドインパクト時の南極の映像。
Cut 71	(3291～)	膝をかかえているレイ。
Cut 72	(3296～)	若き日のユイ。
Cut 73	(3303～)	初号機の顔。
Cut 74	(3310～)	白地に「ADAM」のテロップ。
Cut 75	(3315～)	リツコ横顔。
Cut 76	(3322～)	モニター画面。
Cut 77	(3330～)	起きあがるミサト。
Cut 77B	(3353～)	若き日のミサト、加持、リツコ。
Cut 80	(3360～)	「監督　庵野秀明」のテロップ～手を開く初号機、それに重なるシンジ。
Cut 81	(3470～)	振り向くシンジ。
Cut 82	(3498～)	シンジ横顔。
Cut 83	(3511～)	光から逃げるシンジ。
Cut 84	(3518～)	屈託なく笑うシンジ。
Cut 85	(3528～)	謎の文字。

＊カット番号後の（901～）等の数字は、LDのフレーム番号に対応している。

＊Cut 37B、Cut 67B、Cut 77Bは、絵コンテにないカットである。カット番号が不明であるため、ここでは仮にCut 37B、Cut 67B、Cut 77Bと表記する。